Online edition: ISSN 2186-0777

国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

日本語・日本学研究 vol. 10 (2020)

公募論文

≪論文≫
地域を作る実践としての保育
— 山谷における梶満里子の保育運動とその背景 —
小美濃 彰

≪研究ノート≫
海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明
— ICT時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して —
鈴木智美　清水由貴子　中村彰　渋谷博子

≪奨励論文≫
中途終了型発話文「～て。」の文法的特徴と意味についての考察 — 複文におけるテ節との対応に着目して —
張季媛

1930年代・東北における逓信省・配電設備助成政策の研究
内川隆文

安部公房『第四間氷期』論
—「記憶」と「満洲」をめぐって—
解放

≪奨励研究ノート≫
『複合動詞の構文データベース』の構築
YI Yeong-il

石田梅岩の思想と宋明心学
船戸雅也

寄稿論文

日本語・英語・中国語双方向学習者コーパスにみられるテンス・アスペクトの習得
望月圭子

The Group of the Roaring Waterfall: Researching the Narutaki gumi filmmaking collaborations(1934-1937)
Iris Haukamp

寄せ場／東アジア／被抑圧人民のシュタイ
—日雇全協結成前夜の山岡強一
友常勉

夏季セミナー2019・大学院生サマースクール報告および大学院生報告要旨

執筆者一覧
国際編集顧問一覧
編集後記

東京外国語大学 国際日本研究センター

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』要項および編集・応募規程

発行の目的：国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期：年 1 回、3 月（2010 年度より開始）
※第9号から電子版のみ発行。

編集規程：
・国際日本研究センターは『日本語・日本学研究』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。
・投稿論文について『日本語・日本学研究』は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。(本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと)
・査読投稿された研究論文については、編集委員会の責任において査読者を選定し、査読審査をおこなう。査読は、委員会が依頼した 2 名の査読者が査読要領にもとづき審査し、採否の決定をする。その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。
・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。
・その他、編集上の催促については編集委員会が適宜これを定める。

応募規程：
・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文、奨励論文（20 ページ程度、400 字× 60 枚）、海外の研究動向・研究潮流の紹介（20 ページ程度）、研究ノート、奨励研究ノート（10 ページ程度）、書評（5ページ程度） * 奨励論文および奨励研究ノートは学生による投稿を対象とする。
・原稿の書式：寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には、英語の概要（300 語程度）、英語論文には日本語の概要（800 字程度）をつける。
・投稿エントリーとエントリー締め切り：論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、「執筆申込書」に必要事項を記入し、下記編集委員会アドレスに E メールで投稿予定の旨を連絡すること。また、メールの Subject（件名）には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。

公開、複製、公衆送信に関する権利：掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

エントリー締切日：毎年 7月 31日
原稿締切日：毎年 9月 30日

【連絡先】 東京外国語大学国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 / FAX：042-330-5794
E-mail：icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

Call for papers and the information
The Journal of the International Center for Japanese Studies,
Journal for Japanese Studies

Editorial policy and guidelines of Journal for Japanese Studies

Purpose:
To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency: Starting from the fiscal year of 2010, published annually.
From volume 9, this journal will be published in electronic format only.

Policies:
・Editorial Committee: For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from three divisions of the Center.
・Articles: The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)
・Reference: Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.)
・The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center's research activities. The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Submission Requirements:
Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education（double space, approx. 20 pages,) international research trends (approx. 20 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review（approx. 5 pages.)
Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

Entry Deadline: Every 31st of July
Submission Deadline: Every 30th of September

【For further information, please contact 】
International Japan Studies Editorial Committee International Center for Japanese Studies Tokyo University of Foreign Studies

【Address】3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan Telephone and Fax: +81（0）42-330-5794
E-mail: icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

東京外国語大学　国際日本研究センター

『日本語・日本学研究』第 10 号

目　　次

≪論文≫

◆ 地域を作る実践としての保育　―山谷における梶満里子の保育運動とその背景―

小美濃彰・・・1

≪研究ノート≫

◆ 海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明

―ICT 時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して―

鈴木智美、清水由貴子、中村彰、渋谷博子・・・23

≪奨励論文≫

◆ 中途終了型発話文「～て。」の文法的特徴と意味についての考察

―複文におけるテ節との対応に着目して―

張季媛・・・49

◆ 1930 年代・東北における逓信省・配電設備助成政策の研究

内川隆文・・・67

◆ 安部公房『第四間氷期』論　―「記憶」と「満洲」をめぐって―

解放・・・87

≪奨励研究ノート≫

◆『複合動詞の構文データベース』の構築

YI Yeong-il・・・103

◆ 石田梅岩の思想と宋明心学

船戸雅也・・・115

≪寄稿論文≫

◆ 日本語・英語・中国語双方向学習者コーパスにみられるテンス・アスペクトの習得

望月圭子、申亜敏、小柳昇・・・137

◆ The Group of the Roaring Waterfall:

Researching the Narutaki gumi filmmaking collaborations(1934-1937)

Iris Haukamp・・・153

◆ 寄せ場／東アジア／被抑圧人民のシュタイ―日雇全協結成前夜の山岡強一

友常勉・・・171

夏季セミナー 20１９・大学院生サマースクール大学院生報告要旨　・・・183

執筆者一覧

国際編集顧問一覧

編集後記

地域をつくる実践としての保育

―山谷における梶満里子の保育活動とその背景―

Childcare Projects as a Means for Forging Communal Bonds:
A Study of Kaji Mariko's Childcare ativities in Sanya

小美濃　彰

This paper examines Kaji Mariko's childcare projects in Tokyo's Sanya day labor district. She was a postwar social activist famous for her efforts to help Sanya's poor and disadvantaged. This article summarizes the various social projects in which she participated and examines the relationship between her childcare activities and the formation of local communal bonds in Sanya.

Before and immediately after the Second World War, she worked as a nurse. However, in 1954, she changed professions and started to work and gained experience in child care at a foster home in Nagoya. After working there for two years, she resigned and began working to develop her own social projects for poor and disadvantaged children. She chose to focus her attention on children living in the slums of Tokyo. Unfamiliar with the city's slums, she sought a guide who could help her establish connections with poor families. Ultimately, she met a social activist, Kaji Daisuke, who had been involved, since the 1950s, in efforts to establish a cooperative organization for the city's ragpickers. With his assistance, Kaji Mariko succeeded in establishing various childcare programs for impoverished children in Tokyo's Sanya district.

Kaji Mariko began working in Sanya in the 1960s. During that period, the Tokyo government began promoting the relocation of poor families residing in Sanya's boardinghouses in order to improve their living conditions. Kaji Mariko believed, however, that efforts to truly improve the condition of poor families required more than providing them with improved housing outside of Sanya. It had to be accompanied by an effort to establish relationships of mutual cooperation between poor families upon which they could depend during times of socio-economic instability. For Kaji Mariko, her childcare was not simply a matter of caring children. As an issue that was intimately related to neighborhood life in local communities, she viewed it as a means for fostering communal bonds between economically disadvantaged households.

【キーワード】山谷、保育、地域づくり、梶満里子、梶大介
San'ya, childcare, communal bonds, Kaji Mariko, Kaji Daisuke

はじめに

東京の一大観光地、浅草から北に 15～20 分ほど歩いていくと、ドヤ街として知られる山谷にたどり着く[1]。ドヤとは「宿」を意味する俗語で、山谷には低価格で素泊まりできる宿泊施設が立ち並び、現在

[1] 現在、「山谷」という地名は通称として用いられている。かつて「山谷町」と呼ばれていたこの地域は、1966 年に住居表示制度が実施されたことで台東区の東浅草・橋場・日本堤・清川、荒川区の南千住という複数の町名に分割されて示されることになった。ただし、東京都城北福祉センター『山谷地域と城北福祉センター』(1972 年)を見ると、住居表示制度の実施後も、明治通りの泪橋交差点を中心に「簡易宿所」が密集する約 0.84 ㎢(まばらな地域も含めると約 1.7 ㎢)の地域を総称して「山谷地域」と呼んでいる。ちなみに「簡易宿所」は旅館業法において「宿泊する場所を多数人で共用する構

は海外からも多くの旅行者がここを訪れている。インバウンドのさらなる拡大が期待されるなか、南千住駅を起点に JR や東京メトロなど複数の鉄道路線を利用でき、利便性も高いこの地域への注目は不動産市場にも広がっている[2]。こうして山谷が注目を集めるに至ったのは 2002 年 FIFA ワールドカップの日韓開催がひとつの契機だとされている[3]。そこから次第に多くの旅行者を受け入れるようになっていった山谷のドヤ街だが、宿泊者数のピークは 1964 年東京オリンピックの前後にあり、その数は把握されていただけでも 1 万を超えていた[4]。それゆえ、ドヤ街としての山谷の歴史は決してここ数年のものではないのだ。

それと同時に、当時における宿泊者の多くが高度経済成長期の建設ラッシュを支えた日雇労働者であり、山谷は大阪の釜ヶ崎と横浜の寿に並ぶ「日本三大寄せ場」のひとつとして知られてきたことも重要な事実である[5]。つまり、この地域は多くの日雇労働者らを受け入れた生活空間としてのみならず、主として建設業や港湾業など波動性の高い産業に要請される日雇労働市場としても機能してきたのである。ところが、バブル経済が崩壊した 1990 年代以降の不景気で日雇労働力の需要が縮小したほか、求人の方法もスポーツ新聞の広告やインターネットを経由したものへと変わり、さらには労働者が加齢によって就労を拒否されるという状況も生じ、寄せ場で仕事を得ていた日雇労働者の間に慢性的な失業が広がった。その帰結として、日雇で収入を得ることが困難になった労働者はドヤから路上生活へ出て、また現在のドヤ宿泊者の圧倒的多数は生活保護受給者によって占められている。ビジネスや観光での利用者が増えつつある現在の状況は、こうした歴史的過程に連なる一幕なのである[6]。

また別の視角から山谷という地域の歴史を眺めてみよう。上述のとおり山谷はドヤ街および寄せ場としての道のりを歩んで現在に至るわけだが、「日雇労働者ら」という表現に含意したように、そこで生活を送っていたのは日雇労働者だけではない。1980 年 2 月に発行された『明治学院論叢』(285・286 の合併号)に「山谷児童対策の歴史(1)」という論文が掲載されている。これは明治学院大学の教員と学生、東京都城北福祉センター(現在の公益財団法人城北労働・福祉センター)の職員から構成された「山谷対策史研究会」の研究成果である。このなかで山谷児童対策の研究は、あくまで日本における児童対策史の一環として、あるいは他地域における児童の貧困問題に取り組む手がかりとして位置づけられており、「山谷地域にとっては過去の問題である」と断じられている。しかしここでは、少なくとも過去においては山谷の不就学および未就学児童の存在が大きな問題意識を集めていたことに注目したい[7]。

同会が研究の対象にしている「山谷対策」とは、1960 年頃から山谷で暴動が断続的に発生したことを

造及び設備を主とする施設」と定められており、1 ヶ月以上の期間を単位に料金をうけて宿泊場所を提供する「下宿」からも区別される。

[2] 長谷川高「『山谷地区』の意外な現在…労働者の街はどう生まれ変わったのか？」(https://gendai.ismedia.jp/articles/-/70119 閲覧日：2020 年 2 月 13 日)。

[3] 鈴木富之「東京山谷地域における宿泊施設の変容 ：外国人旅行客およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に」『地學雑誌』 120 巻 3 号(2011 年 6 月)、pp.466−485。

[4] 東京都城北福祉センター、前掲(注 1)。

[5] 寄せ場とは、労働市場として機能する特定の地域や路上を指す。寄せ場では、親会社から労働力の調達を委託された業者(手配師や人夫出しと呼ばれる)が求人者として集まり、日雇を主とする仕事の内容(時間や賃金、そして場所)を提示して労働者を募集する。求職者はその中から仕事を探し、業者の案内に従ってそれぞれの労働現場で就労する。

[6] 山谷労働者福祉会館活動委員会ほか編『はじめての山谷講座』(2017 年)。このパンフレットは、2016 年 12 月 29 日～2017 年 1 月 4 日の越年越冬闘争のなかで開かれた「はじめての山谷(入門)講座」の内容をもとに構成されている。この講座では、山谷でドヤの改築やマンションの建造などによる景観の変貌が急激に進行していることを認めながら、この地域において現在も継続している課題として日雇労働や野宿生活に関する諸問題を取り上げている。

[7] 浜野一郎「山谷児童対策の歴史(1)」『明治学院論叢』285・286 号(明治学院大学、1980 年 2 月)、pp.77−129。

うけて東京都が実施した福祉政策の総称である[8]。日雇労働者と警察、あるいはドヤの番頭や食堂の店員、はたまたヤクザとの衝突が発端となることが多かった暴動には多くの人々が参加していた。そうした暴動が繰り返される山谷という地域には、東京都だけでなく地域の有力者や様々なボランティアグループ、教育者、研究者など様々な主体が介入を開始したが、そのなかで大きな関心を集めていたのは日雇労働者というより、むしろ子どもたちであった[9]。前述の「山谷対策」もそうした傾向から外れていない。たとえば、同対策のなかで実施された都営住宅の割り当てはドヤに宿泊していた家族世帯を対象とし、子どもとその家族が山谷から次々と転出していく大きな要因となった。

このことに言及した西澤晃彦は、「山谷対策」が家族世帯とそれ以外の単身者を分離し、とりわけ後者が「隔離ないしは無視＝積極的放置」の状態に取り残されたのだと指摘している[10]。この論点は、山谷という地域が現在の状況に至るまでの歴史的過程を検討するにあたってきわめて重要なものである。すなわち、「山谷対策」がもたらした上記のような効果によってこそ、山谷が戦後日本の高度成長に不可欠な労働市場すなわち寄せ場へと純化されていったのだと理解することが可能だからである[11]。これはまた、1980 年ごろの「山谷対策史研究会」が、子どもの問題は山谷にとって過去ものだと断じた背景にもなっている。西澤も、日雇労働力として見込まれる単身者の集住地へと山谷を再編しようとする政策が「それほどスムースにいったわけではない」と断りつつ、「結果的に、この政策は、山谷から家族をなくすことに成功する」と、その効果を追認している[12]。

しかし、この過程が決してスムースに進行したのではなかった理由について、具体的な検討が試みられたことはない。当の子どもやその家族については、「山谷対策」の実施を経て地域を離れていったという結果的な事実が述べられているだけである。歴史的に実在した葛藤に対するこのような無関心は、実際にそのようなことが意図されていたのかは別として、地域の変容にたいして完全に受動的であった女性や子どもは寄せ場としての山谷において歴史を持たないとでも言わんばかりである。本稿が取り組もうとしているのは、山谷をめぐる研究史のこうした穴である。そして、そのための手がかりとして、梶満里子(1928-2001)という人物をこれから取り上げていくことにしたい。

梶満里子は「山谷対策」が実施されていった時期に重なる 1963 年から、管見のかぎりでは 1966 年まで、山谷のドヤで生活している子ども(ドヤッ子)の保育を行なっていた。その活動の様子を記したものに『粒ちゃんになりたい　山谷の子らと生きる日々』(あすなろ書房、1966 年)という本人の著作がある。保育記録をもとに構成された本書には、日付・曜日・天気はもちろん、子どもの様子や梶満里子の応対が反省的に記録されている。子どもの反応を客観的かつ正確に把握することが要請される保育記録の作成にあたって[13]、その場の様子だけでなく家族の生活状況にも注意が払われている。このような資料的価値を備えた著作を読み解き、梶満里子が実践していた山谷での保育活動に目を向けることは、前述したような本稿の課題に取り組む重要な糸口となる。

とはいえ、梶満里子についての紹介は皆無といっても過言ではないし、著作を手にとれる場所や機会

[8] 1960 年夏(7 月 26 日・8 月 1 日、3 日～6 日)に発生した暴動をうけ、東京都庁企画室で「山谷旅館街宿泊人対策協議会」が設置された。これは同年 11 月 25 日に「社会保障対策連絡会議」へと発展吸収されている。ここから東京都社会福祉審議会への諮問や地域の実態調査を経て「山谷対策」が立案および実施されていった。前掲、東京都城北福祉センター。

[9] 西澤晃彦『隠蔽された外部　都市下層のエスノグラフィー』(彩流社、1995 年)、pp.48-49。

[10] 同上。

[11] ただし、それが具体的にはいかなる状況に要請された過程であったのかを、さらに詳しく分析する必要がある。大阪の釜ヶ崎においても共通の事態が生じたが、それは暴動の発生だけでなく、1960 年代における大阪港の港湾稼働量の急増、そして大阪万博に向けた開催地建設や都市整備のための労働力需要を背景としていた。原口剛「地名なき寄せ場　都市再編とホームレス」西澤晃彦編『労働再審 4 周縁労働力の移動と編成』(大月書店、2011 年)、pp.157-200。

[12] 前掲、西澤(1995 年)、pp.66-67。

[13] 石村紀子「保育日誌の利用」日本幼稚園協会『幼児の教育』第 59 巻 11 号(1969 年)、pp.22-26。

もそう多くはない。そこで本稿では、梶満里子が保育にたずさわることになった経緯から、山谷に至るまでの保育活動の全体像を俯瞰したい。山谷での保育活動に関心を向けつつその背景を捉えることは、山谷での活動がそれ以前に積み重ねられた実践から不可分の関係にあったことを示すためにも必要である。こうした作業をふまえ、山谷の歴史における子どもの存在にあえて目を向け、そこで活動した梶満里子の実践を見つめていくことで何が浮かび上がってくるのかを検討したい。

なお、各節の記述にあたっては先述した『粒ちゃんになりたい』のほかに『愛の砂に花ひらく』(第二書房、1964 年)という、梶満里子が 1961 年から 1963 年にかけて取り組んだ伊豆諸島・新島での保育所づくりの記録も参照している。また、本稿では梶満里子が保育活動を行うにあたって不可欠な協力者であった梶大介(1923−1993)についても言及している。梶大介は終戦直後の日本社会をバタヤとして生きるなか、屑拾いという職分および担い手たるバタヤへの蔑視やその貧困状態を問題化し、1950 年代の中ごろからバタヤの協同組合設立を目標とする活動に取り組んでいた。その生活と活動を記録した著作が梶大介にもあり、本稿では『バタヤ物語 俺達だって人間だ』(第二書房、1956 年)と『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』(光文社、1957 年)を主に参照した。

1. 保育活動にいたるまでの梶満里子の半生

まず本節では、梶満里子が保育にたずさわるようになった経緯と、その後の保育活動のなかで重要な協力者になる梶大介との出会いに触れておきたい。これは、梶大介との結婚を「相対的夫婦の愛情をこえて、スラムの解放目的を頂点とした同志的な結合」[14]と表現した梶満里子の歩みを追っていくためにも重要なことである。

看護婦から保母へ

1928 年に愛知県名古屋市で生まれた梶満里子は、戦争末期の 1945 年に名古屋帝国大学医学部付属医院看護婦養成所(当時)に入所し、名古屋市街が空襲をうけたときには負傷者の救護に参加していた。その戦争体験をつづった手記では、物資不足で十分な手当ができなかった状況、死体をひきずって動かしたり、そのうえを跨いでいったりしたことを、「人間が人間を人として取り扱わなかった恐ろしさ」として振り返っている[15]。とはいえ、「愛国という美しい言葉、尊い精神」に魅せられて看護婦を選んだ梶満里子にとって、その仕事は「白衣の天使という、当時の乙女心を十分にとらえるだけの花形」であった[16]。そこから保育へと向かっていく転機が訪れるのは終戦後のことだったようだ。梶満里子はその経緯について、かなり後になる 1964 年の文章ではあるが、つぎのように述べている。

> 忠君愛国の教育で成長し、従軍看護婦を志願して日本のために死をも平然と甘受していたその当時の一途の気持も終戦と共に覆され、生きる支柱を失い、食べることのみにあくせくして数年の月日が流れ、人間とし女としてどう生きるべきかと心を外に向けたときは、すでに二十五才を過ぎていました。看護婦の仕事を惰性で続けることに堪えきれず、友人の紹介で養護施設の保母に転身し、保母の講義を受け、資格をとり、新しい保育の仕事に情熱をわきたたせました。[17]

---

[14] 梶満里子『粒ちゃんになりたい　山谷の子らと生きる日々』(あすなろ書房、1966 年)、p.4。
[15] 梶満里子「白衣の天使」草の実会第七グループ(編)『戦争と私 主婦たちの第二次世界大戦記』(草の実会第七グループ、1963 年)、p.104。
[16] 前掲、梶満里子(1964 年)、p.3。
[17] 梶満里子「新島と山谷の生活から」「月刊社会教育編集委員会」編『月刊社会教育』78 号(1964 年 5 月)、p.40。

「忠君愛国」の精神をもって務めていた看護婦から離れるきっかけとなったのは終戦、すなわち日本の敗戦であった。友人の紹介をうけて保母という職業を選択したとのことだが、このように異なる職業経験を積んでから保母へ転職することは戦後において珍しくなかった。1947 年に児童福祉法が制定されると、保育所などの児童福祉施設にならんで保母養成の制度的な整備も進み、働きながら講座を受けて資格を取得するというコースが開かれたのである[18]。ともあれ養護施設で保母としての仕事に就いた梶満里子だが、数年後には退職しており、そのきっかけが先の引用に続けて述べられている。梶満里子は、自分の担当した子どもが養護施設の外でうけている社会的な処遇のありかたに問題意識を抱いていた。

> 担当している子供たちには児童福祉法も棚の上のぼた餅であることも知りました。保育園へ行っても施設の子供だけで別クラスを編成し、年齢別に他のクラスとの混合保育を希う私に「そうすると一般のお子さんが少なくなります」と園長。「ガラスを壊した」「靴が失くなった」みんな施設の子の罪にされてしまう。未熟な一保母の言葉や力などみみずのたわごととしか経営者は受けとらない。[19]

ここで梶満里子が批判しているのは、養護施設にいることで子どもが背負わされている状況である。児童福祉法は第 2 条で「全て国民は、児童が良好な環境において生まれ、かつ、社会のあらゆる分野において、児童の年齢及び発達の程度に応じて、その意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮され、心身ともに健やかに育成されるよう努めなければならない」という義務を定めている。しかし、梶満里子が担当していた子どもは養護施設に入所しており、そのことによって保育園のクラス編成や園内でのトラブルをめぐる不利益を被っている。梶満里子は養護施設から通う子どもの分離を改めるようクラス編成の変更を求めているが、引用によれば「一般のお子さんが少なくなる」という理由で退けられている。子どもの養育をめぐる家庭の負担を軽減して労働力再生産に便益をもたらす意図が児童福祉法にあったことをふまえれば[20]、子どもの数が減るということは保育園の経営だけでなく社会全体の労働力再生産に負担をもたらす事態としても解釈できる。引用のなかで梶満里子が触れている問題をこうした文脈のなかに位置づけてみれば、児童福祉法が「棚の上のぼた餅」にすぎないということの意味も理解できよう。梶満里子が担当していた子どもはその原因のような存在と見なされており、それゆえ何らかの偶然、つまり「ぼた餅」が転がり落ちてくるような変動が起きないかぎり、問題は解決されないのである。

しかし、梶満里子が養護施設から離れたことは保育それ自体の断念を意味せず、むしろ異なるアプローチで保育に深くたずさわっていく。1956 年 6 月、梶満里子は看護婦と保母の免状、そして「スラム街の中に部屋を借りて保育室を開く」という計画を携えて東京に向かっている[21]。

梶大介との出会い

それまで住み続けていた名古屋を離れた梶満里子は、保育室の資金をつくるために臨時派遣の看護婦

---

[18] 松本なるみ「戦後における「保育者」という職業選択 元保育者の語りから」『宇都宮短期大学人間福祉大学研究紀要』7 号(2009 年)、pp.9−20。
[19] 前掲、梶満里子(1964 年 5 月)、pp.40−41。
[20] 松崎芳伸「児童政策の進路」厚生省児童局監修『児童福祉』(東洋書館、1948 年)、pp.5−50。
[21] 梶満里子『愛の砂に花ひらく』(第二書房、1964 年)、p.12。

として働いていた。しかし、保育室をつくろうと目指していたスラムと個人的に関係を結ぶことは、上野や秋葉原、日暮里や山谷といった場所を「逃げるように通り過ぎる」[22]ことが精一杯だったという梶満里子にとって容易ではなかった。そこに転機をもたらしたのが梶大介との出会いである。終戦を経て中国から日本へと引き揚げた梶大介は、バタヤとして生活を送りながら東京など各都市を転々と移動し、1950 年代の中ごろからはバタヤの協同組合設立に向けて動き出していた[23]。

梶満里子が名古屋から東京に移住したちょうどその時期、東京都中野区の仕切屋にいた梶大介が「週刊朝日」(1956 年 6 月 10 日)の投稿欄「読者と編集者」に「私はバタ屋です」と題した文章を寄せている。1956 年 5 月に労働省職業安定局失業対策部編『日雇いの歌』(労働法令協会)が出版されると、同誌の書評欄「週刊図書館」がこれを取り上げ、本書に収められた秀作を生むほどの人物がなぜ不安定な日雇労働に従事しているのかという疑問を投げかけている[24]。これに対し、日雇労働への従事を否定的にしか見ていない評者へ批判的に応答し、日雇労働者の様々な経歴や人柄を書き連ねた読者の投稿が寄せられた[25]。そこに重ねて「おそらく、これより下のない、どん底の人生であるが、ニコヨン諸氏に負けず劣らず多士済々である」[26]とバタヤの世界を紹介しようとしているのが梶大介の投稿である。

おそらく梶満里子も誌上でのこの論議を目にしていたのであろう。投稿の末尾には梶大介が当時生活していた仕切場の住所も記載されていた。雑誌で梶大介の名前を見かけたという梶満里子は、本人に手紙を書き送ってスラムの案内を依頼したのである[27]。だが、後年に梶満里子が著作『愛の砂に花ひらく』のなかで回想しているところによれば、依頼にたいする梶大介の反応は以下の通りで、梶満里子の期待にすぐさま応じたものではなかった。

私は、神にすがるような気持で、手紙をしたためた。
(どうしてもスラムで生きたい！)
このこめた願いの手紙を、どう受け取ったのか、返事はこだまより早く届いた。
私の切実な願いなど、あっさり娘特有の感傷としてバッサリ切り捨てていた。
私は重ねて手紙を書いた。
(どうしてもスラムで働かしてほしい)
今度の返事は前よりも、もっと無残にきり捨ててあった。
しゃくにさわって、私はもう一度手紙を書いて送った。
(何が何でもスラムに生きたい！)
ところが、驚いたことに、
(じゃあ結婚しよう)

---

[22] 同上、p.14。
[23] 梶大介がバタヤの協同組合設立に乗り出したのは京都・東七条での「あいあいクラブ」が初めてで、これは地元日刊紙に報じられている(「バタ屋も仲間入り　京で日本初の組合結成」『都新聞』1954 年 11 月 4 日)。しかし、この場所でバタヤを組織しようとした「あいあいクラブ」の試みには、梶大介と数名の友人が参加したのみで、バタヤの自立更生に向けた共同仕切場の設立などいくつかの目標を提示するにとどまった(梶大介『バタヤ物語』第二書房、1957 年)。屑拾いに従事するバタヤの多くは仕切屋と呼ばれる買い取り業者から、道具のほかに長屋の一角を住居として貸し与えられることが多く、拾い集めた屑をその仕切屋へと持ち込むことが原則とされていた。梶大介は、仕切屋によるバタヤの搾取を可能にしていたこのような関係に対し、バタヤの自立を掲げていたのであった。バタヤについての基礎的な社会史的研究として野中乾・星野朗『バタヤ社会の研究』(蒼海出版、1973 年)を参照されたい。
[24] 「ニコヨン文芸　労働省編『日雇いの歌』」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956 年 5 月 20 日)、p.67。
[25] 熊本浩二「『ニコヨン文芸』評に答う」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956 年 5 月 27 日)、p.136。
[26] 梶大介「私はバタ屋です」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956 年 6 月 10 日)、p.85。
[27] 前掲、梶満里子(1964 年)、p.14。

である。[28]

単身で名古屋から東京にきた梶満里子にとって、梶大介が頼ることのできる唯一の存在であったのか、拒否を受けても 3 度にわたって依頼を繰り返している。そこで梶大介から送られてきた 3 度目の返信に記されていたのが、結婚という突然の提案であった。これに対して梶大介本人のもとを訪ねることにした梶満里子は、対面の場で以下のような言葉を受けたという。

> あんたは、スラムの子どもたちに何とかしてあげたい、という。そんなあんたに、スラムの子どもたちはどんな反応を示すと思うかね。彼らは敏感なんだ。きっと、あんたは逃げ出さざるをえなくなるだろう。そして、あんな子どもたちはしょうがないというに違いない。これはお互いに不幸だから、中途半端な気持ちならやめておいたほうがいい。もし、どうしてもやりたいなら、一切を捨てて仲間入りすることだ。おれが結婚しようといったのは、そのためだ。甘い感傷じゃ、とてもバタヤの女房になれっこないからね。[29]

梶満里子に対して梶大介が示していたのは、「何とかしてあげたい」という慈善的な態度への不信と拒絶である。そこには、保育室を開くという計画が挫折するだろうという推断すらこめられている。しかし、「神にすがるような気持ちで、手紙をしたためた」という当時の梶満里子にとって「一切を捨てて仲間入りする」結婚という条件は、そのとき梶大介との間に残された唯一の可能性だった。梶満里子は梶大介との結婚を選び、「相対的夫婦の愛情をこえて、スラムの解放目的を頂点とした同志的な結合」とこれを表現したのであった。ただし、いうまでもなく梶満里子の目標は「バタヤの女房」になることでなく、梶大介と関係を結んだその先にある。スラム街に保育室を開くという計画に向かって歩みだした梶満里子の足取りを、続けて追ってみたい。

2. 保育と屑拾いの接合

「自然保育」という実践

1956 年 8 月 1 日、東京都の練馬区内にあった仕切場に住んでいた梶大介のもとに梶満里子も移り住み、その翌日には保育に必要な中古のオルガンや折り紙などが買い揃えられている。とはいえ、このときに保育室が確保されていたわけではなく、まずは空き地や児童公園を利用した「自然保育」が実践された。これは、公園や寺社の境内など広い場所にオルガンや絵本などを大八車で運びこんで梶満里子が周辺の子どもたちを保育し、梶大介はその間に屑を拾ってまわるという方法である[30]。屋外での保育活動は「青空保育」と呼ばれており、戦災によって幼稚園や保育園といった施設を多く失った東京では戦後しばらく、しばしば寺社の境内や河原などが保育に活用されていた[31]。梶大介が提案した「自然保育」の特徴は、「金はなくとも、どんなに貧しくとも、たとえ社会の蔑視の下に生きるバタヤでも、やる気さえあるなら少しでもこの世に何らかプラスして行けるという事を、実証したかった」[32]という言葉にも表されているように、あえて屑拾いと保育活動とを結びつけて実践したことにあった。「自然保育」の様

[28] 同上、pp.14−15。
[29] 同上。
[30] 梶大介『バタヤ物語　俺達だって人間だ』(第二書房、1957 年)、p.164。
[31] 塩沢美代子・島田とみ子『ひとり暮らしの戦後史　戦中世代の婦人たち』(岩波書店、1975 年)、p.126。
[32] 「青空保育拝見　保母さんが毎週巡回」『朝日新聞』(1966 年 7 月 17 日、東京、朝刊)。

子は『毎日新聞』紙上でも紹介されており[33]、梶大介はこの実践を「子供を中心にした、バタヤと一般社会との交流」[34]と捉えていた。

この「自然保育」のモチーフは、屑拾いのなかで集めた紙や鉛筆をつかって紙芝居をつくり、それを出会った子どもたちに披露してきた梶大介の実践であり[35]、梶満里子も「教えたり導いてやろうなんて思ったら間違いだよ。むしろ、子どもたちに遊んでもらうと思わなきゃ。そしたら、子どもはどんどんついてくる」という梶大介の言葉を受けとめ、「保母としてのテクニックが、テクニックだけで終わったら何にもならない。やはり、心である。子どもの純真な心をどう受け止めるかが、かんじんなのだ」と自分自身に言い聞かせていた[36]。とはいえ、バタヤとして生活しながら子どもとの関わりを持ってきた梶大介の習慣のなかに、ただ梶満里子の実践を埋め込むことは不適切であろう。ここでは、単に梶大介の実践を梶満里子が引き継いだと理解するのでなく、保母としての実務経験を持つ梶満里子が保育を実践したことによって生みだされた活動の広がりへの洞察が必要である。この点に留意しながら、「自然保育」以降の展開をさらにたどってみたい。

東都資源回収労働者組合と一粒会

1956 年の夏ごろにはじまった「自然保育」は、冬が近づくにつれて屋内の保育場所を確保する必要に迫られていた。そこで出された梶大介からの提案が、バタヤがそれぞれ生活している仕切場を離れて集まり、共同仕切場を運営しながら収益を保育室の設立にあてるという方法であった。バタヤが既存の仕切場から自立して組合を結成するという試みは梶大介にとって初めてのことではなく[37]、ここでは保育室を開くという梶満里子の目標を共有しながらバタヤの組合設立が企図されていた。計画では共同仕切場のほかに住宅の建設や健康保険の獲得などが目指され、バタヤが集住していた都内の各地区(豊島区要町、足立区西新井、浅草・東本願寺、国鉄秋葉原駅ガード下)をまわって参加の呼びかけをおこない、1956 年 11 月には「東都資源回収労働者組合」の結成式が持たれている[38]。しかし、実現に向けた具体的な計画を備えていなかったこの試みは用地の確保に失敗し、梶大介によれば既存の仕切屋からの妨害を受けて挫折にいたっている[39]。

だが一方で、梶大介は翌年、東都資源回収労働者組合結成までの生活を記した『バタヤ物語　俺達だって人間だ』(第二書房、1957 年)を出版しており、同書は『朝日新聞』の読書欄で短いながらも書評をうけるなど広範な反響を生み出した[40]。同じ時期の『毎日新聞』では、梶大介と梶満里子によるラジオ

[33] 「近所のバタヤ部落の子供たちに自作の紙芝居を見せたり童話を聞かせ、また大八車に紙芝居や児童向の本などを積んで仕事にでかけ、行く先々で暇をみては付近の子供たちに紙芝居を見せるなど子供たちから『オジチャン』『オバチャン』としたわれているバタヤさん夫婦がいる」(「新妻も大八車で紙芝居」『毎日新聞』(1956 年 8 月 14 日、東京、朝刊))。
[34] 前掲、梶大介(1957 年)、p.83。
[35] 同上、pp.74−86。
[36] 前掲、梶満里子(1964 年)、p.22。
[37] 注 23 参照。
[38] 組合結成の様子は大手新聞各社によっても報じられている。「目ざす『バタヤ組合』梶さん夫婦が“どん底救済運動”」『毎日新聞』(1956 年 10 月 22 日、東京、朝刊)。「バタヤさん労組結成」『朝日新聞』(1956 年 11 月 11 日、東京、朝刊)。「バタヤさんの労組」『読売新聞』(1956 年 11 月 11 日、東京、朝刊)。
[39] 前掲、梶大介(1957 年)、pp.168−211。同『粒ちゃんの灯　妻と子と大八車の記』(光文社、1959 年)、pp.85−112 にも記述がある。ちなみに、梶大介が目指したバタヤの組織化が期待されたように進まなかった要因は、組合の結成にあたって掲げられた計画だけに求められるべきではない。注 23 で触れた京都・東七条や隣接している東九条、そして「東都資源回収労働者組合」への参加が呼びかけられたいくつかの地区について、バタヤの集住地となった歴史的な過程を検討する必要がある。戦後からバタヤとなり、様々な場所を流動していた梶大介の呼びかけが思うように反応を得られなかった理由は、それぞれの地域社会におけるバタヤのありようを捉えなければ明らかにできない。
[40] 「われわれも人間だ…」『朝日新聞』(1957 年 5 月 23 日、東京、朝刊)。

番組の出演まで決定されていたことがわかる[41]。共同仕切場と保育室を目標にした組合の設立は挫折したものの、『バタヤ物語』の出版はそうした行き詰まりを突き抜けるためのきわめて重要な成果となった。

同書の出版からおよそ半年後の 1957 年 10 月、梶大介と梶満里子は東京都調布市の多摩川沿いに位置する土地を借り、さらにカマボコ兵舎 40 坪分と建築資材としてのハードボード 500 坪分という支援を受け、共同仕切場と保育室を開くという目標を実現したのである[42]。そして、この場所で梶大介と梶満里子を中心に結成されたバタヤの組合は「一粒会」と名づけられた[43]。立地の悪さに屑物価格の下落が覆いかぶさり、ここでも期待通りにバタヤの参加を得たわけではなかったのだが[44]、『毎日新聞』が報じているところによれば、梶満里子が「一粒学校」として開いた保育所には日々50 人もの子どもたちが集まっていたようである[45]。

それにしても、東都資源回収労働者の挫折から『バタヤ物語』の出版を経て一粒会の結成に至る、目まぐるしいほどの展開はどのような経緯に裏づけられていたのだろうか。梶大介が『バタヤ物語』に続けて 2 年後に上梓した『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』(光文社、1959 年)のなかに、以下のような手がかりが残されている[46]。

> 私たちが、現在地、正確に言えば、東京都下調布市下布田二七八七番地の三千坪の土地を踏んまえるに至ったのは、けっして、金銭ではなかった。
>
> たった一つ、どん底に生きる願いを持っていたからだ。それにしても、人間の縁というものは微妙である。
>
> ニッポン放送の“歌声は消えず”という番組の録音で知り合った藤巻さんが、都庁詰めの内外タイムス記者の水田さんを紹介してくれ、その水田さんの仲立ちで、元朝日新聞にいた由井さんと知り合い、由井さんの協力で、調布の古い社会事業家、塩沢正一郎氏から、昔、林間学校をやっていた所を借り受けることになったのである。[47]

梶大介の説明にしたがえば、調布の土地を梶大介と梶満里子に貸し与えたのは、ニッポン放送の番組収録関係者から複数の仲介を経て紹介された塩沢正一郎という社会事業家であった。このような関係を結

---

41 「『バタヤ物語』—おいらだって人間だ—という題の本が、最近第二書房から出版された。これは下谷のバタヤ部落に住む梶大介さんという人の書いたもの。／ところがこの梶さん夫妻を中心にした放送が、十四日(ラジオ東京)後 3・25「あなたの回わりの物語」と十五日(ニッポン放送後)11・0「日本の表情」と期せずして二つの放送局から放送される。ラジオ東京の方は二回にわたるセミ・ドキュメンタリー・ドラマという構成、ニッポン放送の方は録音構成、両方にこの夫妻の声が扱われる」(「夢は貧しい子らに 『バタヤ物語』2 局から放送」『毎日新聞』(1957 年 5 月 13 日、東京、朝刊))。

42 梶大介の説明によれば、カマボコ兵舎は「東京中日新聞社の企画部長水上氏の斡旋で、青山のミカ洋裁店主藤原美智子さんと、その支配人伊東忠二郎氏の好意であり」、ハードボードは「与志本林業常務由井氏の善意によるものだった」(前掲、梶大介(1959 年)、p.120)。これらの支援者については詳細をたどることができないが、梶大介と梶満里子にたいする幅広い支援網が形成されていたことが推測される。

43 永井萌二「どん底三千キロ バタ屋旅日記」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1958 年 12 月 28 日)、pp.84-87。

44 1950 年代半ばから日本経済は高度成長期に突入するが、神武景気に続いた鍋底景気において資源回収業は大きな経済的打撃を被った。好況期に増加した鉄屑・非鉄金属など原材料の輸入は不況期の在庫過多へとつながり、国内における屑の買い取り価格を下落させた。製紙産業においても成長期の設備投資が不況を経て紙屑価格の下落へと転じ、「各家庭のゴミ箱は紙屑であふれる始末」であった。東京都資源回収事業協同組合『東資協二十年史』(1970 年)、pp.130-156。

45 「『一粒の麦』どこへ」『毎日新聞』(1959 年 5 月 12 日、東京、朝刊)。

46 『粒ちゃんの灯』は 1954 年に光文社が創刊した新書シリーズ「カッパ・ブックス」の一冊として出版された。新書として岩波新書に続く「カッパ・ブックス」の出版業界における位置づけについては、新海均『カッパ・ブックスの時代』(河出書房新社、2013 年)を参照。また、カッパ・ブックスは 1950 年代の大衆消費文化を象徴するもののひとつとして言及されることもある(鳥羽耕史『1950 年代 「記録」の時代』河出書房新社、2010 年)。

47 前掲、梶大介(1959 年)、p.117。

ぶことができたのは「たった一つ、どん底に生きる願いを持っていたからだ」と梶大介は述べているが、ここでは可能な限り具体的な考察を試みてみよう。まず、『バタヤ物語』の執筆が大きな役割を果たしたことは間違いない。梶大介は前述した「週刊朝日」への投稿「私はバタ屋です」のなかで「近年ニコヨン芸術が評価されはじめたが、本当に生の悲しさを知った、どん底生活者たちがうたい上げるもののなかにこそ、真実があると思う」[48]と述べており、『バタヤ物語』の「あとがき」では「その頃、須田寅夫さんの『ニコヨン物語』が現れて、大変な人気を集めていた。私は大いに刺激されて、思い切って、第二書房に手紙を出した」[49]とも書いている。それゆえ、梶大介の執筆活動が当時の生活記録の流行を見込んだ戦略的なものであったと捉えることもできる[50]。

しかし、共同仕切場や保育室を開く土地と資材の支援を集めることができた理由については、もう少し詳しく考えることができそうである。ここで、梶大介と梶満里子に土地を貸し与えたとされている塩沢正一郎がどのような人物であったのかを少し詳しく見てみよう。

梶大介は塩沢正一郎について、「すでに六十七歳、第一線からは引退して、晴耕雨読の生活をされている人格者であるが、かつて、日本社会事業連盟の事務局長として活躍」[51]した人物だと説明している。塩沢の名前は『社会福祉人名資料事典』にも見ることができ、1917 年に東京府下谷区で設立された「知徳会託児所」で主任を務めていたと記録されている[52]。ほかの資料からは「東京私設社会事業連盟」(1929 年結成)や「全日本私設社会事業連盟」(1931 年結成)にも参加していたことも確認できる[53]。さらに、下谷区で保育事業を運営していた知徳会と調布との関係を示す直接の証拠ではないが、その手がかりとして東京市の公立・私立の保育事業の協力団体として組織された「東京児童指導者会」による「夏季転住事業」を挙げることができる。1929 年夏に開始されたこの事業は、東京市内それぞれの保育事業が児童に一週間ずつのキャンプ生活を経験させるというもので、その実施場所は調布近辺の多摩川畔であった[54]。限られた資料からはかろうじて、「昔、林間学校をやっていた」という調布の土地と塩沢正一郎との関係が「夏季転住事業」を媒介にしていたという可能性を取り出すことができる。

では、子どもを対象に社会事業をおこなっていた塩沢正一郎が梶大介と梶満里子に土地を貸与するという、その判断の根拠はどこにあったのだろうか。前述のとおり、他にもカマボコ兵舎など資材が提供されており、そこに梶大介の著作活動や梶満里子を含めたラジオ出演などが影響していたことを推測するのは容易だろう。しかしながら、『バタヤ物語』の内容からしても、決して成功を積み重ねてきたと言えない活動が広範な支援を引き出せたのはなぜか。おそらく、これを実践面において根拠づけていたのが梶満里子だったのではないだろうか。東都資源回収労働者組合から一粒会に至る方向づけをおこなっていたのはたしかに梶大介であったが、支援の根拠はバタヤの組合が設立される可能性よりも、むしろ梶満里子が着実に保育の実践を積み重ねてきたことあるのではないだろうか。梶大介が述べているよう

---

48 前掲、梶大介(1956 年)、p.85。

49 前掲、梶大介(1957 年)、p.213。

50 第二書房から 1956 年に出版された須田寅夫の『ニコヨン物語　笑と涙で綴った日雇の手記』は、飯田橋職業安定所の失業対策事業に登録していた著者の生活記録である。同年には、日活がこれを原作とした映画を制作しており(監督・井上梅次)、須田はさらに姉妹編の『天下の為さん』も続けて上梓している。梶大介はこうした人気に着目して、出版社の第二書房に自信の生活記録の出版を依頼したのである。

51 同上。

52 知徳会の事業内容は以下の通り。「大正六年三月設立、初め単に知徳会と称し大正五年四月以来義務教育を受けられない学令児童及び小学生の為に、毎日曜日にお話会及び夜学会を開催したが、六年正月から保育事業を開始した。大正七年末、九十七名、保育料一日三銭、毎月二回医師を招いて児童の健康状態を検し、又毎月一回母の会を開いた。同年度収支各八三六円」(日本図書センター『社会福祉人名資料事典』2003 年、p.8)。

53 「『全日本私設社会事業連盟』大阪で創立準備委員会」『大阪毎日新聞』(1931 年 4 月 17 日)。塩沢正一郎・鶴見欣次郎「東京私設聯盟より」平野義一編『私設社会事業　丸山鶴吉先生古稀記念集』(東亜援護協会、1953 年)、pp.248-250。

54 調布市史編集委員会編『調布市史 下巻』(1997 年)、pp.595-597。

に金銭を通じて得られたものではないにせよ、「どん底に生きる願い」が報われたということだけではあまりに茫漠としている。ここではむしろ、これまでにたどった経緯を踏まえ、梶満里子が梶大介との協力関係を結んで育活動を実践してきたことを一粒会の結成、すなわち共同仕切場と保育室が実現された現実的な根拠として位置づけるのが説得的であろう。

こうして一粒会の活動は、屑拾いと保育という 2 つの軸が接合されることによって支えられることになった。さらに、梶満里子の保育活動は一粒会での「一粒学校」にとどまらず、一粒会として同時代の労働運動に加わろうとした梶大介の志向にも影響されながら、さらなる展開を遂げていくことになる。その展開の具体的な内容を次節で示すことにするが、ここでも先取りして端的に触れておこう。一粒会はその後、調布の共同仕切場を経済的な土台にしながら保育の場を伊豆諸島・新島へと広げる。当時の新島は防衛庁によるミサイル試射場建設をめぐる住民闘争が繰り広げられていたのだが、なぜここで保育活動がおこなわれたのだろうか。次節では、この新島での活動に焦点を絞ることにしたい。

3. 新島基地反対闘争における保育所づくり

一粒会と新島基地反対闘争

一粒会は伊豆諸島・新島で 1961 年～1963 年にかけて梶満里子を中心とした保育所づくりに取り組んでいる。当時の新島は防衛庁のミサイル試射場の受け入れをめぐる激しい住民闘争の最中にあった。まずは、そうした状況下にあった新島と一粒会が関係を結ぶことになった経緯をたどってみたい。このことについて詳しく記された資料があるわけではないのだが、ひとつの手がかりとして秋山健二郎・森秀人・山下竹史編『現代日本の底辺 第 1 巻 最下層の人びと』(三一書房、1960 年)による一粒会への言及を参照してみる[55]。

> 同会は、現在のところ人員も少ないが、東京本部ではすでに関係会社との契約で、オート三輪による回収を実施しており、組織強化の点でも全国各地のバタヤに呼びかけて、労組との提携を促している。“平和と民主主義を守る東京共闘会議”にも小さいながら常任団体として“一粒”名をつらねているのも、労働者階級共通の問題として、バタヤの組織化を推進しなければならないとする現れにほかならない。[56]

一粒会における「東京本部」や「全国各地のバタヤ」などをめぐる組織的な構成や状態については不明である。ただし、ここで重要なのは、一粒会が労働者階級としてバタヤを組織化しようとしていた点である。この著者によれば「平和と民主主義を守る東京共闘会議」への参加がそのような志向性を現わしているのだという。この「東京共闘会議」は、1958 年の警職法改悪反対闘争において東京地方労働組合評議会(東京地評)を中心に形成された共闘会議を母体とし、様々な市民団体の参加を得て 1959 年に改組されたものである。これに呼応して都内 21 区と三多摩地区に「地区共闘会議」がつくられ、さらにその小単位として形成された「地域共闘会議」は無数にのぼったとされている[57]。梶大介の晩年における回想をめくってみると、一粒会に参加していた者のなかには「折柄のエネルギー革命で炭坑を離職してき

---

[55]『現代日本の底辺』は 4 巻にわたるルポルタージュで、編者を中心とするグループが全国各地の貧困の実態を現地での生活と取材に基づいて記録したものである。この調査活動を契機に結成されたのが「底辺の会」であり、機関誌として「月刊ていへん」を発行したほか、底辺の会編『ドヤ 山谷を中心に』(三一書房、1961 年)を出版している。

[56] 秋山健二郎・森秀人・山下竹史編『現代日本の底辺』第一巻「最下層の人びと」(三一書房、1960 年)、p.201。

[57] 竹内基浩『「六〇年安保」を労働者はいかに闘ったか』(社会評論社、2010 年)、pp.66-69。

たものもボツボツ見えはじめ、それなりに労働運動を経験しており、私たちの組合も遅ればせながら東京地区の『平和と民主主義を守る共闘会議』に参加して行った」[58]とあり、一粒会が「東京共闘会議」に参加していたことは事実であろう。

その一方、新島では 1957 年 7 月、防衛庁によるミサイル試射場建設の内定が発端となり、受け入れの賛否をめぐる地域闘争が新島の住民間にとどまらず繰り広げられていた。新島での闘争は当時の平和運動において岸信介内閣成立以降の軍事化の潮流に対抗するものとして注目を集めていたのである。1957 年 12 月には東京地評が反対派として調査団を派遣し、翌年 2 月には現地で「新島ミサイル試射場設置反対同盟」が結成されている[59]。また、1961 年には「東京共闘会議」が 4 次にわたって反対派オルグ団を新島へ派遣しており、梶大介と梶満里子もこのオルグ団に同行して新島へと渡っていた[60]。新島との関係はこのように、一粒会がまず労働運動との接点を求めながら反戦運動に加わっていくなかで取り結ばれたのである。では、そのなかでなぜ一粒会は保育所づくりに取り組むことを選択したのだろうか。そして、それはミサイル試射場建設をめぐる地域闘争の最中にあった新島においてどのように進められていったのだろうか。

闘争の中の保育所づくり

はじめに一粒会として新島に向かったのは、1961 年 1 月 21 日に「東京共闘会議」のオルグ団に参加した梶大介であった[61]。1957 年にミサイル試射場設置の動きが発覚して以来の対立を続けてきた当時の新島では、その後、1961 年 3 月 13 日に村議会が建設予定地に通じる道路建設の予算を議決し、3 月 23 日には工事が着工されている。2 月 20 日には防衛庁、自民党、社会党の三者が「政治休戦」を協議し、賛成派と反対派にそれぞれ加勢していた右翼とオルグ団の引き揚げも決定されていた[62]。しかし梶大介は、現地の反対同盟や残留したオルグ団の一部や学生が継続していた闘争への参加を選択している。新島に渡ってから数か月後に書かれた手記のなかで、梶大介はその理由を以下のように書いている。

> 新島で一番欲しいのは闘うための金であることは間違いないが、それと共に、子どもの施設だった。／即ち、保育所の必要性がすごく高いのである。一家ことごとくが働かねば食べていけない状態だから、子供は、いけないことだが、足手まといになり勝ちである。まして、重要な段階における動員態勢に欠くべからざる新島の反対戦力が、オンバア会(反対派婦人会)等女性が主力であってみれば、その必要は絶対性を帯びてくる。[63]

闘争資金にならんで「子どもの施設」が必要だという梶大介の考えは、たしかに新島における闘争の実情に即したものであった。というのも、当時の新島では村営の採石場や東京都の失業対策事業のなかで反対派の労働者への圧迫が強まっており、収入を得るためにミサイル試射場建設予定地への道路工事に出ている村民もいた。そのなかで、収入を得ようとする男性に代わって女性が政治的発言をおこなう傾

---

[58] 梶大介『生ききらなければ真実は見えてこない わがどん底歎異抄』(樹心社、1986 年)、p.145。
[59] 前掲、竹内(2010 年)、pp.50−51。
[60] なお、新島にはミサイル試射場の受け入れを支援する団体も多く向かっていた。梶満里子は、はじめて新島にわたる船の中で「反対派オルグ団の赤旗を右翼の一団がもぎとったのだ。怒声、罵声が乱れ飛び、人波が揺れた」(前掲、梶満里子(1964 年)、pp.33−34)という様子を書き留めている。
[61] 梶大介「ミサイルの嵐の中の保育園づくり」『まなぶ』(労働大学出版センター、1961 年 5 月)、pp.8−9。
[62] 広野広『新島・アリの反乱』(現代評論社、1970 年）所収の「ミサイル道路工事がはじまった」(pp.49−63)および巻末の「新島闘争略年譜」(pp.345−350)を参照。
[63] 前掲、梶大介(1961 年)、p.9。

向ができあがっていた[64]。反対闘争において婦人会が主力となっているのはそのためであった。

ここから一粒会は、新島での活動を反対闘争の支援だけでなく、ミサイル試射場をめぐる対立のもとにおかれた子どもたちへと開いたのである。梶満里子によると、新島行きを説得する梶大介は「おとなたちは主義や利益で争っているんだからいいとして、そのあらしの中に放り出されている子どもたちがかわいそうだ」とも語っていた[65]。こうして取り組まれることになった新島での保育所づくりは、反対派の村民から空き家を借りうけていたとはいえ、保育所そのものは反対闘争から一定の距離を保ち、過程が賛成派か反対派に関係なく子どもを迎え入れていた。梶満里子が新島での活動を記録した『愛の砂に花ひらく』のなかで、「家では早くから行かしているけれど、賛成も反対もなく、ほんとにいいとこだ」[66]という賛成派の母親の言葉を記している点に当時の保育所のあり方が示されている。すなわち、保育所づくりを単にミサイル試射場をめぐる反対闘争の一環としてのみ位置づけるのは適切でない。

一粒会の保育所づくりでは、梶大介が調布の共同仕切場を拠点に資金を工面しつつ、梶満里子が中心となって現地での活動を進めていた。梶満里子は 1961 年 2 月から翌年の夏ごろまで新島に滞在し、保育所の整備から入所の呼びかけ、子どもたちの保育など多くの役割を果たしていた。この活動を経済的に支えていた調布の共同仕切場では、多大な負荷をうけてバタヤが次々に離れていくという問題を生んだが、現地では梶満里子が 2 名の保母を育成して保育活動を引き継いでいる。さらに、運営は保育所に関わっていた母親らによって結成された「新島保育園母の会」に任せて、梶満里子は新島を離れている。その後、村内の長栄寺が独自に保育園を設置・経営することを公表し、「母の会」の保育所は交渉を経て長栄寺に移転することを決定した[67]。結果として梶満里子がたずさわった新島村の保育所は、1963 年 6 月に長栄寺が設立した保育園へ統合されたのだが、その活動の意義は保育所が存続したかどうかとは別のところにもある。

一粒会が新島における活動の目標を反対闘争だけでなく村内の子どもたちへと広げたことは前述のとおりで、保育所づくりを中心的に担った梶満里子は、ミサイル試射場をめぐる村内の対立が地域の将来に及ぼす影響を以下のように案じていた。

> ま二つに割れた対立のシコリは、賛成派が勝っても反対派が、勝っても、いつまでも残るだろう。そのシコリを解きほぐす役目を、この小さな子どもたちが背負わされていると思うと、いじらしくなってくる。
>
> 何も知らないままに背負わされたその十字架を少しでも軽くしてやりたい。[68]

引用のとおり、梶満里子がここで具体的な将来像を提示しているわけではない。しかし、保育所づくりが反対闘争や仕事に向かっていく親に代わって子どもを預かることだけを目的にしているのではなく、与えられた状況のなかで生きる子どもと地域の将来を見すえて取り組まれるものだということを、梶満里子の言葉は鮮明に表している。「何も知らないままに背負わされたその十字架を少しでも軽くしてやりたい」という希望は、保育をつうじて地域の状況を変革しようとする意志でもある。新島につくられた保育所が長栄寺のもとに統合される以前、「新島保育園母の会」は安定的な運営を求めて「へき地保育

[64] 前掲、広野(1970)、pp.49−63。
[65] 前掲、梶満里子(1964 年)、p.39。
[66] 同上、pp.108−109。
[67] 同上、pp.238−254。
[68] 同上、p.188。

所」認可に向けた行政との交渉を進めていた[69]。たとえミサイル試射場設置に対する反対闘争からして保育所づくりが周辺的な取り組みであったとしても、賛成と反対に分断された村内に地域づくりの新たな芽を生んだ意義を一蹴すべきではない。

長栄寺による保育所の設立計画に対して梶満里子らは当初、以下のような意見を抱いていた。

> 私たちの腹はきまっていた。それは、私たちが新島に保育園をつくろうと決心したときから、すでに決まっていたことであるが、保育園をだれの私物化することなく、島のお母さんたちが中心となって運営に当たる名実ともに島全体のものにするということなのだ。
>
> そうしてこそ、新島に保育園をつくるということの真の意義がある。どんな小さなことでも、自分たちの力でやったのだという喜びと誇りが、ただ離島という宿命に堪えるということだけを強いられて、自身と勇気を見失っていた島人に、その自信と勇気を取り戻させて、新しい島づくりを推進して行くところの原動力となるべき保育園なのである。[70]

「母の会」は、このように述べていた梶満里子や梶大介から自立して長栄寺への保育所移転を選択したのだが、梶満里子は「母の会」による運営を見つめて「もうこれなら、お母さんたちにまかしてだいじょうぶという確信が持てた」といい、長栄寺に開かれた村立保育園に 80 名以上の児童が登園しているという保母からの報告をうけ、「私たちのまいた種は小さかったが、りっぱな花を咲かせてくれました」とも述べている[71]。このように、新島で一粒会が取り組んだ活動の意義は地域づくりに関与する実践として保育をおこなった点にあり、梶満里子も、そうして子どもたちを主体として地域をつくる可能性を保育という実践のなかに見出していったのではないだろうか。

「新島保育園母の会」と 2 人の保母に保育所の運営を任せた梶満里子は、1962 年夏に新島を離れている。そして新島での活動を記録した『愛の砂に花ひらく』に 1964 年 6 月 10 日付で添えられた「あとがき」は次の文章によって締めくくられている。この梶満里子の言葉を受け、ここまで述べてきた様々な経緯や実践の積み重ねを経て実践された、山谷における保育活動の検討へと進んでいくことにしたい。

> 最後に、私たちはいま、山谷のドヤ街のどまん中に立って、そこに住む人びととその子どもたちの幸福を願い、相変わらず無力の悲哀をかこちながらも、元気に働かせてもらっています。
>
> 山谷は、私たちのホームグラウンドです。そのドヤ街の厳しい現実の中でも、子どもたちの無邪気さは決してそこなわれてはいません。
>
> そして、その子らの明るい歌声が必ず山谷に新しいあすを呼びよせることを信じています。そこに私たちの小さな歴史がくりひろげられて行くのです。きょうもあすも……。[72]

4. 山谷ドヤ街における保育

あさひ食堂事件とさんや同人

1962 年 11 月 23 日、のちに「あさひ食堂事件」と呼ばれる日雇労働者らの暴動が山谷で起きた。およ

---

[69] 同上、p.247。
[70] 同上、pp.234−235。
[71] 同上、pp.251−254。
[72] 同上、p.254。

そ 2000 人による暴動の鎮圧には最終的に約 1600 名の機動隊が出動したとされ[73]、『朝日新聞』は暴動の発端を次のように報じている。

> 「あさひ食堂」＝帰山仁之助社長＝で酔っていたとび職若林豊(二一)がまわらないシタで女店員に何かを注文した。よく聞きとれないので、女店員が聞き返したところ若林が茶ワンの茶をぶっかけほかの店員と若林が店の前で口論、そしてケンカとなった。
>
> 店員と若林は、間もなく道ひとつへだてたマンモス交番につれて行かれたが、ケンカを見ていた通行人が仲間を集めて同食堂の前に集まり「仲間をなぐったやつにあやまらせろ」と口々にののしりながら店内に侵入、乱暴がはじまったという。[74]

事の発端は、山谷を縦断する大通り(吉野通り)に面した飲食店「あさひ食堂」で起きた、店員と客との喧嘩であった。しかし、事態は喧嘩の当事者が食堂正面の交番へと連行された後に急変している。喧嘩の様子を周囲で見ていた群衆は店員の謝罪を要求し、ここからはじまった食堂への攻撃が暴動へと発展したとされている。山谷で起きた暴動の多くは地域内の交番を攻撃の対象としていたが、1962 年 11 月 23 日のものは攻撃された食堂名から「あさひ食堂事件」と呼ばれている。この食堂を経営していた帰山仁之助は『朝日新聞』の取材に応じて次のように述べている。

> 私自身保護司をしており、浅草簡易旅館組合長〔現・城北旅館組合：引用者〕も兼ね、山谷の人びとの気持ちはよく分かっているつもりだ。うらみを受ける覚えもないし、どうしてこんなことになったか分からない。もののはずみだろうが、親や兄弟のいうことさえ聞けないすさんだ孤独な人びとの集まりなのだから、こういった集団暴力が起きない方が不思議なのかもしれない。[75]

これにしたがえば、喧嘩の当事者が食堂店員であったとはいえ、食堂が破壊される理由の心当たりは帰山のうちにない。にもかかわらず実際に起きた暴動の原因として与えられた説明が、引用の後半部分である。暴動が起きた理由を自身から完全に切り離し、ドヤ街で生活している日雇労働者らの人格に還元しようとする、この帰山の言明に反応したのが梶大介であった。『朝日新聞』の投書欄に「山谷騒動への反省」という意見を寄せた梶大介は、これを「食堂主人が、山谷旅館組合長として、実際に住民のお陰で生活していながら、逆に世話をしてやっているのだというごうまんな考え」[76]と批判している。ここで指摘されているように、帰山仁之助は「あさひ食堂」経営者だけでなく、山谷におけるドヤ経営者から構成された同業組合「城北旅館組合」で組合長を務めてもいた。ドヤ街で生活している日雇労働者と、そのデズラ(日当)からドヤ代や食費といった形で収入を得ているドヤや食堂の経営者との間にある緊張関係は帰山の想像を超えていたのだろう。

暴動を生起させる日雇労働者らの論理を「自己防衛の連帯感」と表現した梶大介は、これを「決してヤジ馬根性ではない。宗教も、政治も、自分たちを救ってくれないという不信感から生まれる手段なのである」と支持し[77]、暴動に関連して逮捕・起訴された日雇労働者の裁判支援活動にも参加している。

---

[73] 今川勲『現代棄民考　「山谷」はいかにして形成されたか』(田畑書店、1983 年)、pp.206−207。
[74] 「山谷で住民騒ぐ　食堂に投石、乱暴　山谷騒動」『朝日新聞』(1962 年 11 月 24 日、東京、朝刊)。
[75] 同上。
[76] 梶大介「山谷騒動への反省」『朝日新聞』(1962 年 11 月 28 日、東京、朝刊)。
[77] 同上。

「あさひ食堂事件」をめぐって 22 名が起訴され、有罪判決をうけた 21 名のうち 3 名が控訴し、残りの 1 名は私選弁護士をつけたことで分離裁判を受けていた。これらの裁判を支援するために日本共産党が中心になって「山谷裁判対策協議会」(山対協)を組織しており、ここに梶大介が参加していたのである。

山谷での活動を開始した梶大介は、ドヤ街の住人による山対協への参加が「全日本自由労働組合台東支部」と「台東生活と健康を守る会」という、それぞれ失業対策事業に登録している日雇労働者と生活保護受給者から構成された組織によって占められているのをみて、新しく「さんや同人」というグループを 1964 年 4 月に結成している。ここで目指されていたのは、「山谷の主力となる〈立ちんぼ労働者〉」、すなわち路上の寄せ場で手配師から日々の仕事を得ている日雇労働者を主体にした運動体をつくることであった[78]。「反乱時には見事なほど連帯を遂げるのに、平常時にはそっぽを向いてしまう」[79]という山谷の日雇労働者を中心にした社会運動の構築を試みたのが「さんや同人」であり、機関誌「月刊さんや」は創刊号で「おれたちはもっと自信を持っていい／おれたちのエネルギーをもっと爆発させろ！／“さんや”はそのための雑記帖だ／なんでもかんでもぶちまけろ！」[80]と呼びかけているように、そのためのプラットフォームとなっていた。そしてもちろん、「さんや同人」には梶大介と共に調布から山谷へと移住していた梶満里子も参加しており、この場所で取り組まれていたのがドヤで暮らしている子どもの保育活動であった。

山谷における児童対策：家族世帯の「脱出」

当時、山谷のドヤ街では子どもを連れた家族が少なからず生活しており、この地域に暮らしている子どもを支援しようとする団体も多かった。たとえば、「長欠児童生徒援護会」(黄十字会)は教育紙芝居運動に取り組んでいた松永健哉を中心に結成され、国会議員の池田勇人、大平正芳が会長と副会長を務める全国組織であり、山谷では長欠児童への学習指導を行なうほか、未就学児童の戸籍作成や住民登録を補助するなど就学支援に取り組んでいた。ほかに、帰山仁之助らが代表をつとめていた「小さいバラ子供会」は週末の旅行といった校外学習を実施しており、黄十字会で活動していた益田政良が独立して学生ボランティアとともに開いた「山谷地区学習会」もあった[81]。

また、「山谷対策」を進めていた東京都は、未就学・長欠児童の学習支援施設として 1964 年 4 月に「ひなぎく教室」を設置し、これは翌年 11 月に「城北学園」と改称されている。しかしながら「城北学園」は学校としての認定を受けておらず、同校の生徒が受け取った卒業証書には「台東区立蓬莱中学校」と記載されていた。1970 年 9 月に「城北学園」が「台東区立台英小・中学校」へと改組されたことでその問題は解決されるが、本稿「はじめに」のなかで触れたとおり、山谷における子どもの数は 1960 年代から減少を続けていった。「台東区立台英小・中学校」も 1976 年 3 月に卒業生を送り出したのち閉鎖されている[82]。

そのように子どもの数を減少させた大きな要因として、山谷の簡易宿所に宿泊している家族世帯へ優先的に都営住宅が割り当てられたことが挙げられる。これは「山谷対策」の一環として実施されたもの

[78] 梶大介『山谷戦後史を生きて』上巻(績文堂、1977 年)、pp.70−79。
[79] 同上、p.73。
[80] 同上、p.96。
[81] 前掲、今川勲(1983 年)、pp.228−231。小林正泰「簡易宿泊所地域における長欠対策学級の実践 東京・山谷地区の事例を中心に」『青少年教育フォーラム 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』6 号(国立オリンピック記念青少年総合センター、2006 年 3 月)。山谷問題研究会『最下層の系譜』上巻(1976 年 2 月)。
[82] 杉本譲治「山谷にともされた教育の灯」東京都立教育研究所編『教育じほう』428 号(東京都新教育研究会、1983 年 9 月)、pp.80−82。

だが、その意図は山谷から家族世帯を「脱出」させることにあったとされている[83]。実際、山谷の子どもに向けられた関心のなかで特に注目を集めていた未就学・不就学児童の問題については、就学に向けた支援を東京都やボランティア団体が繰り返しても、「可能性の存する限り、問題の根本的解決とはならない。結局、可能性の解消を目途としなければならない」[84]とされていた。ここで問題とされていたのは山谷に生活する子どもが学校に通えていないということより、むしろ山谷に子どもが住んでいるという現実そのものであった。そうした文脈のなかで家族世帯による山谷からの「脱出」が必要と見られていたのであり、「山谷対策」が実行されたのである。

しかし、西澤晃彦が触れているように、この政策はそれほどスムースに遂行されたわけではない。山谷における梶満里子の保育活動が「山谷対策」に抵抗したわけではないが、これと時期を同じくして取り組まれていたドヤッ子の保育は、「脱出」をめぐって実際に生じていた矛盾や葛藤の一端を示している。家族世帯を山谷から「脱出」させることは、子どもや家族をめぐって生じていた問題を無かったことにしても、それを解いたことにはできない。次にみる梶満里子の保育活動は、山谷においてドヤッ子とその家族の生活を支えつつ、まさにそのような問題を解こうと試みる実践であったと見ることができるのではないだろうか。

梶満里子の青空保育

梶大介と梶満里子は、山谷の玉姫公園に近いアパートで 2 つの 3 畳間を借りていた[85]。アパートには世帯道具のほかにオルガンをはじめとする保育道具を運びこんで自宅兼保育室にし、天気がいい日には玉姫公園を活用して青空保育をおこなっていた。その保育活動における日々の様子を記録した『粒ちゃんになりたい』では、ドヤで生活している子どもや家族の状況を垣間見ることができる。そのすべてをここで取りあげることはできないが、なかでも多くの字数を割いて記録されているヨシ君(5 歳)一家について見てみよう[86]。

ヨシ君は 3 人兄弟だが、弟のモリちゃんが急性肺炎で入院し、母親が看病につきっきり、末っ子はまだ赤ん坊で「ドヤのおばさん」に 1 日 200 円で子守をしてもらっている。医療保護で入院費用を支払っていても、生活費を得るために父親は働き詰めになっている。そこに残されているのがヨシ君で、ある日は午前 7 時から梶満里子のもとへやってきて、昼食と夕食の時もアパートで過ごしている。仕事を終えた父親が家族のいる病院へ連れていこうと迎えに来ても、ヨシ君が出かけることを嫌がることもある。ヨシ君をめぐるこうした状況を見つめていた梶満里子は、以下のように、夜間も子どもを受け入れ可能な保育体制を構想している。

> 保育所の有用論、そして不足の声があちこちからあがっているが、放置された子どもたちが日本のいたるところにいっぱいいる。山谷のような生活条件の悪い地域には、夜間保育所がどうしても必要になってくる。期待される人間像も結構であるが、そうした人間になれるような環境づくりを怠っていて、そうなりなさいとは、大臣がたも、虫がよすぎるというものである。なにかつごうの悪いときにいつでも泊めてあげる保育所—二十四時間の保育—たいへんだろうがその必要性をしみ

[83] 前掲、浜野(1980 年)、pp.78-84。
[84] 東京都山谷福祉センター『山谷地域の簡易宿泊所に宿泊する就学児童の実態とその対策』1963 年 3 月、p.39。
[85] 前掲、梶満里子(1966 年)、p.18。
[86] 同上、pp.203-208。

じみ感じ、小さくてもよいから自分たちでつくりたいと、切実な願いが胸の中にきしむ。[87]

ヨシ君一家の末っ子は「ドヤのおばさん」に 200 円で子守をしてもらっているが、ヨシ君は家族から離れて朝早くから夜遅くまで過ごさざるを得ない。そこで必要とされるのが夜間保育所、あるいは 24 時間いつでも子どもを受け入れることのできる保育体制である。むしろ、そのように子どもを受け入れる場が無いのであれば、ヨシ君一家の生活が山谷以外の地域に移ったところで改善される保証もない。しかも、梶満里子の保育だけでなく、有料ではあるが宿泊しているドヤが幼児の世話を受け入れていることにも注意しなければならない。理念的には 1 日から数週間の短期的な宿泊施設として想定されているドヤだが、ドヤと宿泊者との具体的な関係のなかに家族生活の存立を可能にする条件が含まれている場合も実際にはあるのだ。

梶満里子は、都営住宅への入居に当選した家族の足跡も『粒ちゃんになりたい』のなかに記している。ドヤに宿泊していた家族世帯が転居するにあたって、その費用が社会福祉協議会から世帯厚生資金として貸与されることになっていたのだが、申請の手続きに梶満里子が付き添い、場合によっては梶大介が保証人を引き受けるといった支援をおこなっていた[88]。そうしたなかで関係を持っていた家族のなかには、都営住宅からふたたび山谷のドヤ街にもどってくる家族もあった。

「おばさん、オレ知ってるかい」
澄んだ瞳のその男の子は、にっこりとしてわたしの顔をうかがった。
「よく知っているわよ。ススム君でしょう」
「そうだ、あたったよ」
「ススム君は、たしか西新井の住宅に引越したのでしょう。きょうはあそびにきたの」
「前にいた旅館にかえってきたんだよ。父ちゃんが帳場をやっているんだ」
ススム君たち一家は昨年都営住宅に当選して、他の百九十三世帯の人たちと山谷から転出したのだったが、多分仕事のつごうで山谷へ逆もどりしたのであろう。アッコちゃんたち一家もこのとき転居したけれど、山谷以外では、お母さんがいくら働いても三人の子どもを育てることはできず、けっきょく、山谷へ舞いもどって、元の仕事のおでん屋台で働いているということも聞いている。[89]

山谷における梶満里子の保育活動は、このような実情をふまえることで、その意味をつかむことができる。先述のとおり東京都は家族世帯を山谷から「脱出」させることによって、未就学や長欠といった児童問題が発生する可能性を取り除こうとしていた。ところが、都営住宅に当選した家族が山谷のドヤにもどってくることもあったように、都営住宅への入居を推進するという施策で問題が解決されていったとは言い難い。梶満里子の保育活動は、都営住宅への入居を希望する家族世帯を支援しつつ、その一方、山谷で生活することを必要にしている子どもやその家族のために何ができるか、そして保育を通じて地域のありようをどう変えていけるのかという課題を含んでいた。『愛の砂に花ひらく』に梶満里子が記した、山谷の「子らの明るい歌声が必ず山谷に新しいあすを呼びよせる」という信念は、新島での経験をふまえてそのような変革が可能であるという希望でもあったろう。

また、『粒ちゃんになりたい』という著作のタイトルは、山谷の外からやってきた梶満里子と梶大介と

[87] 同上、pp.207-208。
[88] 同上、pp.126-133。
[89] 同上、pp.208-209。

の間の一人娘・粒ちゃんを見たドヤッ子のルリちゃんが発した言葉である。おなじく「あとがき」のなかで、梶満里子がこの言葉を反芻している。

> ルリちゃんがもう「粒ちゃんになりたい」などといわずに、「ルリ子はやっぱりルリ子でよかった」と、ルリちゃんが胸を張って高らかにいえる日がくるまでは、愚痴り、泣きわめきんがらも、スラムの中に耐えて生きて行くことでしょう。それ以外にわたしの生きる道はありません。[90]

これは梶満里子の決意でもあったが、「山谷裁判対策協議会」にも参加していた同時代の評論家・神崎清によると、「子どもを通して、地域の母親の組織化をねらっていた」保育活動は「多少のシンパができても、個人の負担には、あまりにも荷が重すぎて、永続きしなかった」[91]という。しかし、「山谷対策」によって家族世帯の地域外への転出が進むなか、あえて子どもと家族に密着した保育にこだわっていた梶満里子の実践をここで切り捨てるべきではない。新島での保育所づくりがそうであったように、山谷のドヤ街における保育活動も、地域のありかたに向き合うことと密接不可分のものであった。梶満里子が取り組んでいたのは、この意味で、まさに地域をつくる実践としての保育であったといえよう。それゆえ、これをドヤッ子が完全に過去の問題とされた寄せ場をめぐる歴史の奥底に埋め込んだままにしておくわけにいかないのである。

おわりに

本稿では、梶満里子が梶大介と「自然保育」に取り組み、伊豆諸島・新島での保育所づくりを経て山谷での青空保育にいたるまでの道のりをたどってきた。この作業のなかで浮かびあがってきたのは、梶満里子が社会変革の手段として保育に取り組んでいたのでなく—この点で、バタヤと一般社会との交流という目的の中に子どもを位置づけた梶大介とは異なる—、子どもやその家族に向きあうことで地域のあり方を見つめ、朧気ながらもそこに変革の可能性を感じとっていたことである。このように地域をつくる実践として見いだされた保育のあり方を、ほかの場所で取り組まれた保育活動と照らし合わせてみることもできる。1970 年代の横浜・寿町には「寿共同保育」という運動があった[92]。山谷では梶満里子が中心となって保育活動を担っていたのに対し、この運動はドヤ街の住人による「共同保育」として取り組まれていた。この「共同保育」が持つ意味を、参加者のひとりは以下のように述べている。

> 私達の運動は、一面では、地域づくりであった。子ども達は地域で育つ、とたてた時、地域はまさに内容的に地域でなければならなかったし、崩壊を阻止し、作りだすことであった。従って、「共同保育」の対象は子供に限らず、私自身も含めた大人であり、老人であり病者であり、「障害」者であり、要するに全ての人々が地域の中で共に生きていくことであった。[93]

寿町における「共同保育」こそ、地域をつくる実践そのものであった。それは単に地域の子どもをあずかるのではなく、子どもたちが生活し育っていく場としての地域を「作りだす」ためのものであった。それゆえ「共同保育」では子どもが運動の対象とされるだけでなく、「全ての人々が地域の中で共に生き

[90] 同上、p.216。
[91] 神崎清『山谷ドヤ街　一万人の東京無宿』(時事通信社、1973 年)、p.248。
[92] 寿共同保育『寿共同保育　寿ドヤ街での 9 年間』(1982 年)。
[93] 同上、p.30。

ていくこと」が目標となる。「内容的に地域でならなかった」とされているように、地域とはただ地図上で指し示すことのできるものでなく、すべての人々が互いに取り結ぶ具体的な関係性を含んだものとして捉えられている。

ここからさらに展開して被差別部落における保育の実践を参照してみてもいいだろう。具体的な例として、東京・足立区の保育室「なかま」がある[94]。「なかま」は部落解放同盟足立支部員が集団入居した団地のなかで 1974 年に創設されており、家内工業者が多い足立支部の親同士で布団やおもちゃを持ち寄ったことがきっかけになっている。支部員の子どもは次第に減少していったが、「地域や学校でのことなど、日本社会で抱えるさまざまな悩みごとを話し合える場所」としての保育室に在日朝鮮人の住民が加わることもあり、「こうした『なかま』とのつながりが、部落の親たちと、在日朝鮮人の親たち同士のつきあい」[95]を生んでいた。「なかま」はさらに、足立区行政が 1982 年に下した同和対策事業(啓発活動を除く)と同和対策集会所の廃止に対する地域共闘のなかで、地域内外に広がる反差別のネットワークをとり結ぶハブとして機能してもいた。

以上のように、保育とは決して子どもを預かるだけのものではない。実践のありようによって、子どもたちだけでなくその家族、そして地域の人々との間で多様な結びつきを生みながら地域づくりを展開させていく可能性が保育にはある。保育は子どもを預けたい大人たちのためにあるのではない。梶満里子の言葉を借りるならば、子どもが「新しいあすを呼びよせる」のである。そのような視点にたって保育運動の歴史をさらに紐解いていくことが、これからの実践を考えていくためにも必要なのではないだろうか。

小美濃 彰(おみの あきら、Akira OMINO)
東京外国語大学大学院 博士後期課程

参考文献

(単行本)
秋山健二郎・森秀人・山下竹史編『現代日本の底辺　第 1 巻「最下層の人びと」』三一書房、1960 年
石村紀子「保育日誌の利用」日本幼稚園協会『幼児の教育』第 59 巻 11 号、1969 年
今川勲『現代棄民考 「山谷」はいかにして形成されたか』田畑書店、1983 年
梶大介『バタヤ物語 俺達だって人間だ』第二書房、1957 年
――『粒ちゃんの灯 妻と子と大八車の記』光文社、1959 年
――『山谷戦後史を生きて』、上巻、績文堂、1977 年
――『生ききらなければ真実は見えてこない わがどん底歎異抄』樹心社、1986 年
梶満里子「白衣の天使」、草の実会第七グループ編『戦争と私 主婦たちの第二次世界大戦記』草の実会第七グループ、1963 年、pp.103−104
――『愛の砂に花ひらく』第二書房、1964 年
――『粒ちゃんになりたい 山谷の子らと生きる日々』あすなろ書房、1966 年
神崎清『山谷ドヤ街 一万人の東京無宿』時事通信社、1973 年
寿共同保育『寿共同保育 寿ドヤ街での 9 年間』、1982 年

[94] 友常勉「反差別のネットワークを　東京・足立区の保育室「なかま」とバザー」『部落解放』397 号(解放出版社、1995 年 11 月)、pp.62−79。
[95] 同上、p.78。

小林正泰「簡易宿泊所地域における長欠対策学級の実践 東京・山谷地区の事例を中心に」『青少年教育フォーラム 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』6 号、2006 年 3 月、pp.33-44
山谷労働者福祉会館活動委員会・2016-17 山谷越年越冬闘争実行委員会・山谷争議団／反失業闘争実行委員会・はじめての山谷講座編集委員会編『はじめての山谷講座』2017 年
塩沢正一郎・鶴見欣次郎「東京私設聯盟より」平野義一編『私設社会事業 丸山鶴吉先生古稀記念集』東亜援護協会、1953 年、pp.248-250
塩沢美代子・島田とみ子『ひとり暮らしの戦後史 戦中世代の婦人たち』岩波書店、1975 年
新海均『カッパ・ブックスの時代』河出書房新社、2013 年
鈴木富之「東京山谷地域における宿泊施設の変容 外国人旅行客およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に」『地學雑誌』 120 巻 3 号、2011 年 6 月、pp. 466-485
竹内基浩『「六〇年安保」を労働者はいかに闘ったか』社会評論社、2010 年
調布市史編集委員会編『調布市史 下巻』、1997 年
東京都山谷福祉センター『山谷地域の簡易宿泊所に宿泊する就学児童の実態とその対策』、1963 年
東京都資源回収事業協同組合『東資協二十年史』、1970 年
東京都城北福祉センター『山谷地域と城北福祉センター』、1972 年
鳥羽耕史『1950 年代 「記録」の時代』河出書房新社、2010 年
友常勉「反差別のネットワークを 東京・足立区の保育室「なかま」とバザー」『部落解放』397 号、解放出版社、1995 年 11 月、pp.62-79
西澤晃彦『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』彩流社、1995 年
西澤晃彦編『労働再審 4 周縁労働力の移動と編成』大月書店、2011 年
日本図書センター『社会福祉人名資料事典』、2003 年
野中乾・星野朗『バタヤ社会の研究』蒼海出版、1973 年
浜野一郎「山谷児童対策の歴史(1)」『明治学院論叢』285・286 号、1980 年 2 月、pp.77-129
広野広『新島・アリの反乱』現代評論社、1970 年
松崎芳伸「児童政策の進路」、厚生省児童局監修『児童福祉』東洋書館、1948 年、pp.5-50
松本なるみ「戦後における「保育者」という職業選択　元保育者の語りから」、『宇都宮短期大学人間福祉大学研究紀要』7 号、2009 年、pp.9-20

(雑誌記事)
「ニコヨン文芸　労働省編『日雇いの歌』」、『週刊朝日』朝日新聞出版、1956 年 5 月 20 日、p.67
梶大介「ミサイルの嵐の中の保育園づくり」、『まなぶ』労働大学出版センター、1961 年 5 月、pp.8-9
――「私はバタ屋です」『週刊朝日』(朝日新聞出版、1956 年 6 月 10 日)、pp.84-85
梶満里子「新島と山谷の生活から」、「月刊社会教育編集委員会」編『月刊社会教育』78 号、1964 年 5 月、pp.40-44
熊本浩二「『ニコヨン文芸』評に答う」『週刊朝日』朝日新聞出版、1956 年 5 月 27 日、p.136
杉本譲治「山谷にともされた教育の灯」東京都立教育研究所編『教育じほう』428 号、東京都新教育研究会、1983 年 9 月、pp.80-82
永井萌二「どん底三千キロ バタ屋旅日記」、『週刊朝日』朝日新聞出版、1958 年 12 月 28 日、pp.84-87

(新聞記事)
「『全日本私設社会事業連盟』大阪で創立準備委員会」『大阪毎日新聞』、1931 年 4 月 17 日
「バタ屋も仲間入り 京で日本初の組合結成」『都新聞』、1954 年 11 月 4 日
「新妻も大八車で紙芝居」『毎日新聞』、東京朝刊、1956 年 8 月 14 日
「目ざす『バタヤ組合』 梶さん夫婦が“どん底救済運動”」『毎日新聞』、東京朝刊、1956 年 10 月 22 日
「バタヤさん労組結成」『朝日新聞』、東京朝刊、1956 年 11 月 11 日
「バタヤさんの労組」『読売新聞』、東京朝刊、1956 年 11 月 11 日
「夢は貧しい子らに 『バタヤ物語』2 局から放送」『毎日新聞』、東京朝刊、1957 年 5 月 13 日
「われわれも人間だ…」『朝日新聞』、東京朝刊、1957 年 5 月 23 日
「『一粒の麦』どこへ」『毎日新聞』、東京朝刊、1959 年 5 月 12 日
「山谷で住民騒ぐ 食堂に投石、乱暴 山谷騒動」『朝日新聞』、東京朝刊、1962 年 11 月 24 日
「山谷騒動への反省」、梶大介、『朝日新聞』、東京朝刊、1962 年 11 月 28 日
「青空保育拝見 保母さんが毎週巡回」『朝日新聞』、東京朝刊、1966 年 7 月 17 日

(インターネット)
長谷川高「『山谷地区』の意外な現在…労働者の街はどう生まれ変わったのか？」(https://gendai.ismedia.jp/articles/-/70119 最終閲覧日：2020 年 2 月 13 日)

海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明
―ICT 時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して―

What Kinds of Learning Tools Japanese Language Learners in the Overseas Universities Are Using: To Improve Teachers' Instructional Design Literacy in Highly Developed ICT Environments

鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子

This article investigates what kind of learning tools Japanese learners in the overseas universities in six countries/regions (the UK, the Netherlands, Serbia, Thailand, Hong Kong and Egypt). The investigation reveals that learners actively use various types of apps and websites and that the frequently used functions of these apps are divided into three types, i.e., "dictionary," "translation," and "learning."

Four popular dictionary apps (Jsho, Takoboto, imiwa?, and Japanese) are critically evaluated concerning their contents and usability. They are free, downloadable apps that have useful functions. However, as dictionaries for Japanese language learners, the quality of information and example sentences given there are sometimes problematic, and users need to be careful when they use them.

Japanese language teachers are naturally expected to regularly update information, using various learning tools themselves, but they also need to improve their ability for course planning, incorporating activities that are truly worth doing in the classroom setting, with due consideration to how language learners use such tools. Learners are also expected to become skillful tool users and improve their autonomous learning literacy.

【キーワード】学習ツール、アプリ、ウェブサイト、教育設計リテラシー、自律学習リテラシー
Learning tools, Apps, Websites, Instructional design literacy, Autonomous learning literacy

1. 研究の目的とその背景

本研究の目的は、海外の大学で日本語を学ぶ学習者が今どのような学習ツールを使用しているのか、その使用状況の実態について調査を行い、高度に情報化が進む現代社会において、日本語教師はどのような点に留意して教育の設計を行っていけばよいか、その調査結果を留学生教育をはじめとした日本語教育の現場へと還元していくことである。

現在、日本語教育をとりまく環境は、急速な ICT（情報通信技術）の発達にともない、新たな時代を迎えているとも言える。日本語教育史の観点から見れば、いわゆる戦後日本の高度成長期に始まり、およそ 1990 年代頃まで、国際的な交流の活発化と日本経済の飛躍的な発展にともなって、世界各地で日本語学習者数が増加を見せてきた時代があった。その後、日本のアニメや漫画などポップカルチャーの人気が高まるとともに、日本語学習に対する興味のきっかけについてもこれらの日本文化を挙げる学習者が増えてきた。さらに、現在の若い世代の学習者たちは、その多くがいわゆる「デジタルネイティブ」

（digital native）[1]と言われる世代であり、ごく日常的にインターネットを基盤としたツール使用環境に身を置き、関連する機器やソフトを抵抗なく自由に活用している。このような環境と行動様式とはその日本語学習のあり方にも変化を与えていると考えられる。

特に 2000 年代に入ってからは、スマートフォンと、各種アプリ[2]の普及、また広い意味で日本語学習に資する様々なウェブサイトの開発・普及が急速に進み、学習者は世界中どこにいても、インターネットに自由に接続できる環境さえあれば、いつでも、手軽に、日本語に触れ、知りたいことについて検索し、比較的簡単に情報を得ることができるようになっている。ウェブ上では、双方向の情報交換と交流を可能とする SNS（Social networking service）[3]の発達も著しい。

一方、このような状況の中で、日本語教師と ICT との関わりはどうだろうか。若手の教師であれば、種々のツールやアプリを使いこなし、新しい学習者世代と比較的近い感覚を持っている教師もあるだろう。また、主として日本国外で教えている日本語を母語としない教師であれば、自らも日本語を学んで身につけてきた経験があることから、様々な学習ツールの活用については学習者の視点に立って考えることができると思われる。しかし、例えば日本語を母語とし、ICT がまだ学習環境に大きな影響を与えていない時代に自らの学習・教育活動を進めてきた教師などは、意識的に目を向けなければ、学習者をとりまく今日的な状況の変化をとらえにくい可能性がある。教師が学習者および学習者の置かれている状況を理解し、自らの教育活動をより良いものにしていくためには、まず現状についての情報・認識を広く共有する必要があるのではないかと思われる。

これらのことから、本研究では、世界の日本語学習者たちが今、どんな学習ツールを、どのぐらい使用しているのか、その実態を詳細に調査し、特によく使われている辞書アプリについては実際にその使い方を検討する。そして、それらの結果を日本語教育に携わる主として教師たちと共有し、教師の教育設計リテラシーの向上につなげていきたいと考える。

本稿では、ある 1 つの教育コースの全体をデザインし、組み立てることを「教育設計」（instructional design）と考え、その教育コースの中で教師が具体的に 1 つ 1 つの授業を組み立てることを「授業設計」（class design）と呼ぶことにする。現場の教師には、まず、日々の授業を的確に組み立てていくための「授業設計リテラシー」の向上が求められることとは言うまでもない。しかし、ICT 時代における日本語教育を考えるにあたっては、教師にはさらに、学習者の自律学習を支援する役割を含め、教育の全体を考える「教育設計」の目を養っていくことが必要となるだろう。

一方、学習者には、豊富なツールが入手可能な時代だからこそ、自身の学習にとって何が必要なのかを考え、必要に応じて種々のツールを適切に使い、自らの学習を自律的かつ効果的に進めていく力、即ち「自律学習リテラシー」を高めていくことが求められる。教師には、それを的確にサポートするアドバイザーとしての役割も求められることとなるだろう。教師は、ICT 時代だからこそ、個々の授業において意味を持つ活動とは何かを考え、さらに学習者がツール使用と同時にその自律学習を的確に進めていけるように、教育の全体を見渡し、それをデザインする「教育設計リテラシー」を高めることが必要

[1] 初等・中等教育の段階からコンピュータおよびインターネット等に日常的に触れてきた世代のこと。

[2] 「アプリケーション ソフトウェア」の略で、コンピュータやスマートフォンの OS（operating system）上にインストールして使用される各種ソフトウェアのことである。現在、特にスマートフォン上で作動する各種アプリケーションについては短縮した「アプリ」（app）という呼称が一般的となっていると思われるため、以下、本稿では「アプリ」と表記することとする。

[3] 会員として登録することで、写真や動画を投稿・共有したり、共通の趣味・興味を持つ仲間のコミュニティを見つけて参加したり、会員同士メッセージのやりとりを行ったりできる。多くのユーザーに利用されている SNS として、「Facebook」、「Twitter」、「Instagram」などが知られている。

になると思われる。

2. 先行研究の検討

学習者の学習ツールの使用状況についてアンケート調査に基づき考察したものとしては、日本国内の大学で学ぶ留学生を対象に主として辞書の使用について調査を行った鈴木（2012）をはじめ、日本語学校で学ぶ学習者の学習ツール使用について調査を行った渋谷・清水（2017）、予備教育課程における国費学部留学生、および日本の大学で学ぶ留学生を対象として学習ツールの使用状況全般について調査を行った鈴木他（2018, 2019a）などがある。また、ツールの使用過程に焦点を当ててその実態を詳細に調査・報告したものとしては、中級・中上級学習者が辞書等のツールを用いてどのように的確な表現を探し出すのかを調査した鈴木（2016）や、中国語を母語とする上級レベルの留学生の電子辞書の使用実態を見た田中（2015）、的確なコロケーション情報を得るためのウェブツールの有効性を検証した寺嶋（2016）などが見られる。また、伊藤他（2016）は、海外で日本語を学ぶ学習者のインターネット利用について調査を行い、学習者が日本語学習サイトに期待するものについて報告している。さらに、ムハンマド アル-ハキム（2019）は、マレーシアの日本語学習者を対象に、辞書アプリの使用について詳細に調査し、辞書アプリは課題の正答率において電子辞書に劣るものではないという興味深い結果を導き出している。

一方、調査を行うにとどまらず、学習者のツール使用をより良いものとすることを目指したものとして、アンケート調査に基づき辞書使用のスキルアップのポイントの抽出を試みた鈴木（2013）のほか、中上級レベルの学習者を対象に文章表現時の辞書の使用について行ったワークショップ（鈴木・髙野 2015）や、初中級～中級レベルの学習者に焦点を当てて同様に辞書を含めた各種ツールの使用について行われたワークショップ（鈴木 2017）もある。また、日本語学習者がよく使用する「jisho」[4]という日英翻訳辞書サイトの開発・管理者を講師に招き、学習者および教師を対象に、その内容を理解し効果的な使い方を学ぶワークショップも行われている[5]。

教師を対象とした調査には、日本国内の日本語学校の教師を対象に、ツールの使用を含め、教室外における学習支援の方法について調査を行った渋谷・清水（2016, 2017）があり、学習者をとりまく環境の変化に気づきつつも、それに十分に対応しきれていない教師の姿が浮かび上がっている。また、日本語教師や日本語教師養成講座受講生、日本語教育を専攻する大学院生など、広く日本語教育に関わる人を対象に、学習者の学習ツール使用の実態についての情報を共有し、それを教育に生かしていくことを目的として行われたワークショップとして、鈴木他（2019b）も報告されている。ほかにも、日本語学校教育研究大会における分科会ワークショップ[6]、および日本語教育に関する研究会[7]など、現場の日本語教師の視点に立って、ICT 時代における教育設計のあり方を検討する機会が複数設定されてきている。

また、より研究的側面に力を入れたものとしては、當作監修・李編（2019）では、オンラインテスト

[4] 「jisho」（https://jisho.org）

[5] 2018 年（平成 30 年）6 月 5 日に「日本語学習者のための人気の辞書サイト『jisho』の作成者に聞こう！」とのタイトルで同サイトの開発・管理者の Kim Ahlström 氏を講師に招き、サイトを実際に使ってみるワークショップが東京外国語大学留学生日本語教育センターを会場として行われている。ワークショップの主催者は本研究グループである。

[6] 2018 年（平成 30 年）8 月 8 日に、ワークショップ「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」（日本語教育振興協会主催平成 30 年度日本語学校教育研究大会分科会Ｖ、渋谷博子・清水由貴子・鈴木智美担当）が国立オリンピック記念青少年総合センターにて行われている。

[7] 2019 年（令和元年）7 月 18 日に、東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門「多様化する日本語教育」第 3 回研究会が、浦由実氏（アン・ランゲージ・スクール成増校）を講師に「ICT 時代における教師の授業設計を考える―日本語教育の現場の実践から」をテーマとして本研究グループ共催により行われている。

やウェブ教材など様々なツールの研究開発やそれらのツールを用いた実践研究が取り上げられており、日本語教育分野における ICT 活用の促進のためにも、実証的研究を積み上げ、その効果を明らかにしていくことの必要性が述べられている。

これらの研究・報告等を見ると、日本語学習者のツール使用の実態については、日本国内の留学生や、海外のある特定の地域の学習者を対象に行われた調査はあるものの、海外の複数地域における日本語学習者を対象とした調査はまだ行われていないことがわかる。本研究では、海外の複数の地域において日本語を学ぶ学習者を対象としてツール使用についての調査を行い、その結果の共有を図るとともに、そこから、教師が教育コースの中で実際に授業を組み立てていく際にどのような点に留意すべきかを導き出し、さらに教育全体の設計を行うにあたってどのような視点を持つべきかを考える。

3. 調査の概要

本研究における調査は、日本国外の大学で日本語を学ぶ学習者を対象として、無記名式のオンラインアンケート方式で行った。オンラインアンケートは、東京外国語大学留学生日本語教育センターおよび総合情報コラボレーションセンターの共同開発による日本語学習のための e ラーニング教材サイト「JPLANG」[8]を通じて行われた。

調査協力を依頼した大学は、東京外国語大学の国際学術交流・学生交流等の協定校の中から、地域的なバランスを考えて選定した [9]。なお、調査協力を得ることのできた計 6 校において、調査協力者（アンケート回答者）の人数は必ずしも同一ではない。各大学の日本語コースに在籍する学生数に差があることや、任意の調査参加という位置付けで協力を依頼したものであるため、学期スケジュール等との兼ね合いなどもあり、参加者人数にはばらつきが生じているためである。

以下の表 1 に、調査の実施時期、協力校および国・地域、回答者人数を示す。回答者は各大学で日本語を学ぶ 1 年生から 4 年生までであり、日本語のレベルでは、初級から中級レベルを中心として、上級レベルまでが含まれる [10]。調査はそれぞれ 1〜4 日間の日程を組んで行われた。

表 1　調査の概要（協力校、人数）

実施時期	協力校	国・地域	回答者人数
2017 年 11 月	リーズ大学	英国	23 名
2017 年 11 月	ベオグラード大学	セルビア	132 名
2018 年 2 月	タマサート大学	タイ	92 名
2018 年 3 月	ライデン大学	オランダ	35 名
2018 年 5 月	香港大学	中国（香港）	80 名
2018 年 6 月	カイロ大学	エジプト	25 名
			計　387 名

回答者のプロフィールを見ると、387 名中、日本への留学経験は「ない」との回答が 300 名と多数を

[8] 「JPLANG」（https://jplang.tufs.ac.jp）は、学習管理システム（LMS）における「課題」の出題・提出機能を利用することで、オンラインアンケート調査の実施が可能である。

[9] 先方大学関係者への協力依頼と日程調整、本研究グループからの調査者派遣等の調整を含む。なお、6 校のうち 4 校には本研究グループのメンバーが説明・実施担当として出向き、残り 2 校では日程の都合上、先方の協力校の先生に依頼して、調査を実施した。

[10] 学年進行と日本語レベルは大まかには一致し、学年が上がるにつれて日本語レベルも高くなるが、既習者や留学経験者などの場合は学年と日本語レベルとは必ずしもそのように一致しない。

占め、短期・長期を含めて日本に留学した経験があるという回答は 77 名、回答なしが 10 であった。日本語能力試験は、半数以上の 210 名が未受験だが、約 4 割にあたる 162 名は受験したことがあり、合格レベルは N5 から N1 までにわたる。受験の有無について回答なしは 15 であった。

アンケートの質問内容は、国内の留学生を対象として行った調査（鈴木他 2018, 2019a）と同様のものとなっている。アンケートの構成を下記の図 1 に示す[11]。

調査対象とした学習ツールは、電子辞書[12]、スマートフォン等のアプリ、および各種ウェブサイトである。動画視聴や SNS 利用なども広い意味で学習ツールを用いた活動と考え、調査の対象とした。アプリやウェブサイトについてはよく使う具体的なツール名をそれぞれ最大 3 つまで挙げてもらい、その使用頻度、使用目的、利便性等について問うている。

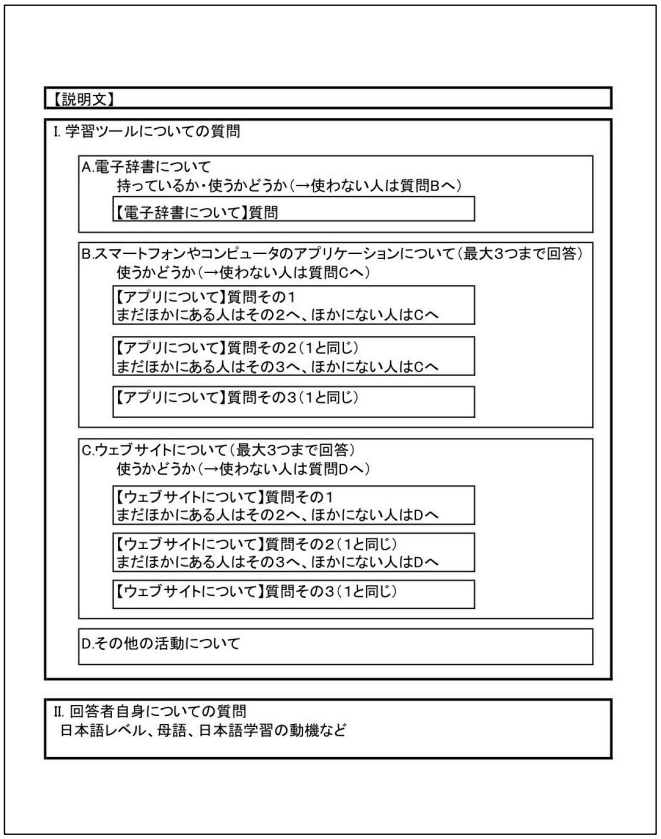


図 1　オンラインアンケートの全体構造

アンケート調査における主な質問項目は以下の表 2 の通りである[13]。実際は各質問項目には英訳が並記されている。質問項目数は、A（電子辞書）について 8 項目、B（アプリ）について 8 項目、C（ウェブサイト）について 7 項目、D（その他の活動）2 項目、計 25 項目である[14]。該当する回答がない場合（そのツールを使わない場合など）は、適宜次の質問に進む形式となっている。多くは多肢選択式の質問だが、一部補足的に記述回答を求める質問が含まれる。

[11] 鈴木他（2018, 2019a）で同様の図を示している。
[12] 例えばカシオ（CASIO）社などが製造・販売を行っている、いわゆる辞書専用機のことである。
[13] 鈴木他（2019a）で示したものを再掲する。
[14] B（アプリ）および C（ウェブサイト）における、複数のツールに関する同一質問を重複して数えない数である。また選択式の質問において「その他」等の回答を選んだ場合には、その詳細を問う下位質問が付随するが、これも数えない数である。

表 2　学習ツールアンケート：質問項目一覧（日本語のみ）

A.電子辞書について	
1	自分の電子辞書を持っていますか。
2	どこの（何社製の）電子辞書ですか。
3	どうやってその電子辞書を選びましたか。
4	日本語を勉強する時、電子辞書を使いますか。
5	電子辞書の中の辞書では、どの辞書をよく使いますか。（英和・和英辞典など）
6	電子辞書を使って、どんなことをしますか。
7	あなたが使っている電子辞書について、良い点を教えてください。
8	あなたが使っている電子辞書について、不便な点があったら教えてください。
B.スマートフォンやコンピュータのアプリケーション（あるいはプログラム）について	
	日本語を勉強する時、スマートフォンやコンピュータのアプリケーションを使いますか。【使う場合、以下の質問に回答。アプリの名前は 1～3 つまで順に挙げることができる】
1	あなたがよく使うアプリケーションの名前を書いてください。
2	そのアプリケーションをダウンロードできるサイトがあったら、その URL（http（s）で始まるアドレス）を、以下にコピー&ペーストしてください。
3	そのアプリケーションを、どの機器でよく使っていますか。（スマートフォン、タブレットなど）
4	そのアプリケーションを、どのぐらいよく使っていますか。
5	そのアプリケーションを使って、どんなことをしますか。
6	そのアプリケーションについて、良い点を教えてください。
7	そのアプリケーションについて、不便な点を教えてください。
C.ウェブサイトについて	
	日本語を勉強する時、ウェブサイトを使いますか。【使う場合、以下の質問に回答。ウェブサイトの名前は 1～3 つまで順に挙げることができる】
1	あなたがよく使うウェブサイトの名前を書いてください。
2	そのウェブサイトの URL（http（s）で始まるアドレス）を、以下にコピー&ペーストしてください。
3	そのウェブサイトを、どのぐらいよく使っていますか。
4	そのウェブサイトを使って、どんなことをしますか。
5	そのウェブサイトについて、良い点を教えてください。
6	そのウェブサイトについて、不便な点を教えてください。
D.その他の活動について	
1	日本語を使って、ふだん、どのようなことをしていますか。（新聞や雑誌を読む、まんがを読んだりアニメを見たりする、日本人の友だちや知り合いと日本語で話すなど）
2	学校の勉強以外で、ほかに日本語を使ってしている活動があったら、教えてください。

4. 調査結果

以下、4.1 節ではツール別に、4.2 節では地域別に調査の結果を報告する[15]。

4.1 ツール別結果

ここでは、調査項目として挙げたツールの種類別に、「電子辞書」「アプリ」「ウェブサイト」「その他の活動」の順に結果を報告する。

4.1.1 電子辞書

電子辞書についてわかったことは、現在その所有者・使用者は多くないということである。今回の調査では、電子辞書を「持っている」という回答が 73、「持っていない」という回答は 295 であり、所有者は全体の 2 割未満であった。回答なしも 19 あったが、その中には「電子辞書」というものがそもそもどのようなものかわからず、回答を保留したと思われるものも含まれる[16]。鈴木他（2019a）では、日本国内の大学（東京外国語大学）で学ぶ留学生を対象に調査した結果、電子辞書の所有者は回答者 139 名のうちの約 3 割[17]という結果であり、鈴木（2012）の調査当時に留学生 117 名のうち約 7 割が電子辞書をよく使うという回答であったことと比べると、10 年に満たない間に電子辞書の使用者がかなり少数派になったことがわかるとしている。今回の調査でも電子辞書の所有者は少なかった。

地域的に見ると、所有者が比較的多かったのはタマサート大学（タイ）とライデン大学（オランダ）で、それぞれ 92 名のうち 27 名（約 3 割）、35 名のうち 26 名（7 割以上）となっている。ライデン大学では、電子辞書を使って日本語を学んできた経験を持つ若手の教員が、日本語を学ぶ学生たちに電子辞書の使い方について教授する機会が設けられているとのことであった。電子辞書については適切なガイダンスを行うことで、その有用性に対する理解が深まり、所有率も高くなる可能性があることがうかがえる。

日本語を勉強する時に電子辞書を使うかという問いに対しては、所有者 73 名のうち「時々使う」が 27 回答と最も多く、「よく使う」17[18]、「非常によく使う」6 と続き、所有者の 7 割近くは「時々」を含めこれを使用している。一方、「あまり使わない」16、「まったく使わない」7 という回答も見られ、所有していてもあまり使わないという学習者も 3 割程度いることがわかる。上記のライデン大学では、26 名のうち半数以上の 14 名については「非常によく使う」あるいは「よく使う」と回答している。

また、電子辞書の使用者も、この後に続く設問の「アプリ」や「ウェブサイト」を使わないわけではなく、電子辞書所有者 73 名のうち、スマートフォン等のアプリについて「非常によく使う」との回答が 48、「よく使う」との回答が 9 となっており、その 8 割近くはアプリもよく使っている。ウェブサイトについても「非常によく使う」24、「よく使う」14 で、電子辞書所有者の約半数はウェブサイトをよく使うという回答である。

電子辞書の中でよく使われている辞書（複数選択可）は「和英辞典」が 44 回答と最も多く、次いで

[15] 調査結果の概略については、第 12 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（2018 年（平成 30 年）12 月 8 日、於香港理工大学）にて「世界の日本語学習者は今どのような学習ツールを使っているか―ICT 時代の日本語教育の鍵をツール使用状況から考える―」というタイトルで本研究グループが研究発表を行っている。

[16]「電子辞書」がどのようなものか知らないことから、この問いにつまずく回答者が複数の大学で見られた。オンラインアンケートには電子辞書のイラストも載せていたため、所有者であればこの問いは理解できたと思われる。したがって、回答のなかった 19 名はおそらく電子辞書を所有・使用していないものと思われる。

[17] 国籍で見ると中国の留学生がその半数近くを占め、日本語レベルで見るとその大半は上級以上の学習者であったということである。

[18] 以下、回答選択肢の後に記すこのような数値は、その回答数を示すものである。

「英和辞典」31、「漢字辞典」18、「国語辞典」17 と続く。電子辞書を使ってどんなことをしているかという問い（複数選択可）では、「日本語の言葉の意味を調べる」が 45 回答と最も多く、「日本語の言葉の使い方を調べる」38、「自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる」36、「漢字の書き方や読み方を調べる」31 が続く。少なかった回答は「日本の社会や文化、歴史などについて調べる」5、「言葉を登録し、自分の語彙リストを作る」7 などであり、百科事典的な機能や学習機能はあまり活用されていない。

電子辞書の良い点（複数選択可）としては、「操作がしやすい」35、「説明がわかりやすい」31、「便利な機能がある」31、「いろいろな種類の辞書が入っていて、情報が豊富だ」30、「辞書の日本語の例文が多い」30 などである。「便利な機能」としては「手書き入力」12 と「ジャンプ機能」7 が挙げられている。「横断検索」および「検索履歴」の機能[19]を挙げた回答者もある。

一方、不便な点（複数選択可）としては、「例文が少ない」21 が最も多く、次いで「書き言葉なのか、話し言葉なのかがわからない」17 が続く。「その他」の 12 回答の中には、「漢字の筆順がわからない」「古語については英語訳がない」「すべて日本語なので、読めない言葉がある」「日本語と自分の母語[20]との対訳辞書がない」などが挙げられている。日本語学習者を対象とする辞書には、日本語母語話者を対象にする場合とはまた異なった視点からのきめ細かい記述が求められるが、その点の不足を挙げるもの、また、以下に述べるアプリとは異なり、読めない言葉に簡単にふりがなを表示するなどの機能は追加できないなど、機器としての限界に起因する点も見られる。

全体的な傾向として、電子辞書のユーザーは減少傾向にあることは否定できないと思われるが、書籍として出版され定評を得た辞書の電子版を搭載していることなど、掲載情報についての一定の信頼性が担保できることなどは、電子辞書の「辞書」としての強みであると考えられる。ただし、日本製の電子辞書は、中学・高校生を含む日本語母語話者を対象に、その英語等の外国語学習に役立つコンテンツを充実させたものが主力となっており[21]、必ずしも日本語学習者を念頭においた構成・仕様になっているわけではない。次の 4.1.2～4.1.3 節でアプリおよびウェブサイトについての調査結果を述べるが、日本語学習者のニーズに合致するような様々な機能を持った辞書サイトあるいは辞書アプリ・学習アプリが容易にアクセスあるいは入手・活用することが可能になっている今、日本語学習者の電子辞書離れについては、今後の経過を確認する必要があるかもしれない。

4.1.2　アプリ

次に、アプリ[22]の使用状況についての結果を見る。「日本語を勉強する時、スマートフォンやコンピュータのアプリケーションを使いますか」という質問に対し、「非常によく使う」が 211 回答と多く、5 割以上を占めている。そのほか「よく使う」73、「時々使う」35、「あまり使わない」36、「まったく使わない」19、回答なしは 13 であった。「時々使う」までを含めると、アプリを使うという回答は全体の 8 割以上を占めている。アプリを「まったく使わない」と回答した 19 名のうち 7 名はウェブサイトを「非常

[19] 検索履歴を見ることで、正確に思い出せない語についても再度調べ直すことができるということである。
[20] オランダ語母語話者のコメントで、電子辞書の中では日英辞書を使用しており、時に英語-オランダ語の書籍タイプの辞書が別に必要になるとしている。
[21] 外国語学習のための辞書・問題集などのほか、各種国語辞典、漢字辞典、歴史・地理などの社会科の用語集、ビジネス用語や法律用語などの専門用語、百科事典や医学事典など、機種により様々なコンテンツ（辞書）が用意されている。
[22] 「アプリ」には、辞書アプリ、学習アプリのほか、漢字にふりがなをつけるなどある特定の機能を持つものなどがあり、ウェブブラウザ上で訳を表示してくれるアドオンプログラム（ソフトウェアに新しい機能を追加するプログラム）などもここに含める。

によく使う」と回答しており、1 名は電子辞書およびウェブサイトをいずれも「非常によく使う」としている。これら 8 名は「ウェブ（および電子辞書）使用派」と言えるだろう[23]。

よく使うアプリについては、回答者の 8 割以上を占める 325 名が何らかのアプリ名を挙げて回答している。2 つのアプリを挙げた回答者はそのうち 129 名、3 つのアプリを挙げた回答者はそのうちさらに 36 名あり、延べ 460 以上のアプリ名が挙がった。これらのアプリのダウンロード先（複数選択可）は、約 300 がスマートフォン（Android 端末）で、スマートフォン（iPhone 端末）が約 140、コンピュータ・ノートパソコン（Windows OS）が約 100 と続く。挙げられたアプリは異なり数で全約 70 種に上った。そのうち、5 名以上が挙げているアプリ計 23 種を、回答者数の多い順に以下の表 3 に示す。アプリ名の横に「＊」を付したもの（2、4、5、7 位の辞書アプリ）は、日英・英日対訳辞書アプリの中でその使用者数が多く、今回の調査で 5 つ以上の国・地域で名前が挙がった辞書アプリである。これらの辞書アプリについては、第 5 節でその内容や使い方を実際に検討してみる。

表 3　よく使われているアプリ名（回答数 5 以上）

順位	アプリ名	アプリのタイプ	回答数
1	Japanese Thai Dictionary	辞書アプリ（日本語–タイ語）	65
2	Jsho–Japanese Dictionary ＊	辞書アプリ（日英・英日）	42
3	Google Translate	翻訳アプリ（多言語対応）	31
4	imiwa? ＊	辞書アプリ（日英・英日）	29
5	Takoboto: Japanese Dictionary ＊	辞書アプリ（日英・英日）	27
6	Obenkyo	日本語学習アプリ（文字・語彙等）	25
7	Japanese ＊	辞書アプリ（日英・英日）	18
8	Anki	学習アプリ（フラッシュカード形式）	15
9	J-Doradic	辞書アプリ（日タイ・タイ日）	13
9	Shirabe Jisho	辞書アプリ（日英・英日）	13
10	Memrise–語学学習アプリ	語学学習アプリ	11
10	Japanese English Dictionary	辞書アプリ（日英・英日）	11
11	Kanji Study	日本語漢字学習アプリ	10
11	MOJi 辞書–日语实用词典	辞書アプリ（日本語–中国語）	10
11	JED–Japanese Dictionary	辞書アプリ（日英・英日）	10
12	了解 日本語アラビア語辞典	辞書アプリ（日本語–アラビア語）	9
12	Akebi Japanese Dictionary	辞書アプリ（日英・英日）	9

[23] アプリを「まったく使わない」とした 19 名のうち 4 名はウェブサイトも「まったく使わない」とし、うち 2 名は電子辞書も所有しておらず、ほか 2 名は電子辞書は所有しているが「よく使う」とは回答していない。即ちこの 4 名はアプリもウェブサイトも電子辞書も使用していないという回答だが（うち 1 名はアンケート後半の「日本語を使ってふだんどんな活動をしているか」にも無回答となっている）、このような回答者は全 387 名においては例外的に少数である。国で見るとセルビアの学習者が 1 名、香港の学習者が 3 名で、学年で見ると 1 年生（2 名）と 2 年生（1 名）であり、1 名は学年について回答なしとなっている。1 名は回答がなかったが、ほか 3 名は留学経験はなく、いずれも日本語能力試験も受験していないとの回答のため、日本語レベルがまだ初級あるいはそれに準じる段階であるため、ツール使用の必要性を感じていないことがいずれのツールも不使用と回答している理由ではないかと考えられる。ただし、初級レベルであればツールを使用しないということではなく、鈴木他（2019b）では、インタビューを行った 2 名の留学生が、いずれも初歩の段階から英語による日本文化の紹介サイトや漢字学習サイトを活用し、初級レベルの学習でも学習アプリや辞書アプリ、辞書サイトなどを使用していたということが報告されている。

13	rikaikun	ウェブブラウザのアドオンプログラム（読み方・意味表示）	8
13	AnkiDroid Flashcards	学習アプリ（フラッシュカード形式）	8
13	Kanji Recognizer	漢字辞書・学習アプリ（手書き認識）	8
14	Duolingo	外国語学習アプリ（多言語対応、ゲーム形式）	7
14	Quizlet クイズレット	学習アプリ（フラッシュカード形式）	7
15	沪江小 D 词典-英日韩多语种查词助手	辞書アプリ（中国語、英語、日本語、韓国語等）	6

タイ語、アラビア語、中国語など、特定の言語を対象とした辞書アプリが挙がっているのは、今回調査を行った大学における学習者の母語が反映したものとなっている。そのほか、日英対訳辞書アプリや、翻訳アプリ、漢字検索・学習アプリ、フラッシュカード形式の学習アプリ[24]、ウェブ上のテキストをなぞると自動的に漢字の読み方や言葉の意味が表示されるアドオンプログラム[25]などが挙がっている。これらのアプリの種類を見てみると、日本語学習者の学習をサポートするアプリとして、その役割は、大きく「辞書」「翻訳」「学習」という 3 つのものがよく使われているということがわかる。また、「漢字」は、そのいずれとも関わってくる 1 つの重要な学習要素となっている。

アプリを使ってどんなことをするか、全 24 項目（複数選択可）のうち回答数の多かった上位 5 つは、「日本語の言葉の意味を調べる」357、「漢字の読み方を調べる」327、「自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる」325、「漢字の書き方や、漢字の筆順（線を書く順番）を調べる」230、「日本語の言葉の使い方を調べる」205 であった。そのほか、「漢字や、漢字の部首（漢字の部分）の意味を調べる」189、「１つの漢字から、その漢字を使った言葉にどんなものがあるかを調べる」158、「ある日本語の言葉と似ている意味の日本語の言葉（類義語）をさがす」156、「自分で漢字を組み合わせて、その言葉が日本語にあるかどうかを調べる」120、「日本語のコロケーション（どんな言葉とどんな言葉を、よくいっしょに使うか）を調べる」120、「漢字をおぼえる練習をする」116、「自分の母語や英語で文・文章を書いて日本語に翻訳する」109、「日本語の言葉の発音やアクセントを聞く」99、「言葉をおぼえる練習をする」98 が続く。逆に、使用目的として回答が少なかったものには、「聴解の練習をする」24、「会話や短い表現の練習をする」30、「読解の練習をする」39 がある。

さらに、よく使うアプリの良い点については、全 11 の選択肢（複数選択可）の中で「操作がしやすい」396 が最多で、そのほか「説明がわかりやすい」294、「母語（あるいは英語など）の言葉の日本語の訳がすぐわかる」232 が多く、次に「入っている情報が多い」149、「楽しい、おもしろい」148、「日本語の例文が多い」147 がこれに続く。不便な点については、8 つの選択肢のうち上位 3 つは、「例文が少ない」182、「自分の母語の訳がない」141、「調べたい言葉が入っていない」113 であった。「不便な点はない」との回答も 99 見られた。

また、アプリの良い点として「便利な機能がある」（123 回答）としたものには、具体的にどのような機能か自由記述を求めているが、様々な機能について 100 以上のコメントが見られた。上記の多肢選択

[24] 表 3 の順位 8 の「Anki」（学習アプリ）は PC（コンピュータ）にインストールするタイプで、順位 13 の「AnkiDroid Flashcards」は、同じアプリのスマートフォン端末（Android OS）対応版である。両者を合わせると、このアプリをよく使うとの回答は計 23 となり、順位 6（回答数 25）の「Obenkyo」（日本語の文字・語彙に特化した学習アプリ）と同じぐらいよく使われていることがわかる。

[25] 順位 13 の「rikaikun」は、ウェブブラウザ「Google Chrome」にこのような機能を付加するものである。

式の質問では答えきれなかったと思われる学習者独自のこだわりや評価のポイントなどが具体的に記されているものが多い。そのうち、アプリならではの特徴的な機能を評価するものとしては、「わからない漢字の写真をスマートフォンで撮れば、その読み方を示してくれる」、「日本語の文章の写真を撮れば、訳を示してくれる」[26]や、「文をそのままコピー&ペーストすれば、アプリの文解析機能がそれぞれの語に訳を付けて一度に示してくれる」[27]などのコメントが挙げられている。音声面でも「音声読み上げ機能や音声翻訳機能がある」、「話し手の話すスピードを調節して聞くことができる」、「発音をチェックしてくれる」などの点が評価されており、また、「インターネットに接続していなくてもオフラインで使える」[28]ことや、「スマートフォンに入っているので、かばんを開けて電子辞書を取り出すというような手間がかからない」のように、アプリへのアクセスや取り扱いに関する利便性を評価するコメントも見られた。オーソドックスな辞書等の機能としては、「語の活用についての情報がある」「ある特定の漢字を含む語のリストを表示することができる」「語のお気に入りリスト登録ができる」などが見られ、また、漢字の検索方法として、複数の回答者が「手書き入力」ができることの便利さを指摘する一方、漢字をその構成要素である「部首」から検索できる点を便利な機能として評価する回答者も同様に複数見られた。

そして、便利な機能としてのコメントが最も多く見られたのは、アプリの学習ツールとしての機能に関するものである。「語彙を覚えるために SRS（spaced repetition system）を使っている」[29]など、背景となる学習理論に対する評価コメントや、「毎日練習ができ、自分の上達のプロセスがアプリによってたどれる」「学習のリマインダー機能がある」[30]など、アプリの学習管理機能を評価するもの、「他のユーザーが作成した文法・語彙練習カードを共有できる」、「ゲーム感覚で語を覚えることができる」、「自分のニーズに合ったテストを自分で作ることができる」、「漢字は常用漢字と JLPT レベルで分けられており、意味がわかればよいのか、読み方や書き方を覚えたいのか、目的によって練習のしかたを変えることができる」、「1 日 5～10 分の練習を積み重ねることで計 2,000 字の漢字が学習できる。漢字は JLPT レベルでも学年別漢字配当順[31]でも分類できる」などのコメントが見られた。

これらのコメントを見ると、アプリの使用者がそのアプリの特性をよくつかみ、それぞれの学習に有効に役立てている様子がうかがえる。現在多種多様なアプリが開発・公開されており、学習者は自身のニーズに合ったアプリを取捨選択し、それを活用することで、工夫しながら学習を継続することができるようになっている。これはまさに ICT 時代の恩恵と言える側面であり、学習者が自律的に学習を進め

[26] 対象となるテキストをカメラで撮影し、漢字の読み方や翻訳を表示することができるというのは、順位 3 の「Google Translate」（翻訳アプリ）の機能として指摘されている。また、表 3 の回答者数上位のアプリには入っていないが、「Yomiwa」（回答数 3）（正式名称は「Yomiwa Jp Dictionary 英和辞典と OCR-カメラか手書きで英訳アプリ」）も、テキスト上の読めない漢字語彙にスマートフォンのカメラをかざすと、スマートフォン上にその読み方や意味などの説明がポップアップウィンドウで表示されるということで、便利な機能として指摘されている。

[27] 順位 4 の「imiwa?」（辞書アプリ）について指摘されたものである。

[28] スマートフォンなどの機器にダウンロードした後、使用時にはインターネットにアクセスするタイプのアプリもあり、それとの比較で「オフライン」で使用できることを便利だとしたものと思われる。

[29] 「間隔反復学習」のことで、フラッシュカードを用いて語彙を学習する際、間違えた語のカードはより高頻度に表示され、正答した語のカードの表示頻度は低くなり、効率的に学習できるというシステムである。表 3 の順位 8 の「Anki」、順位 13 の「AnkiDroid Flashcards」、順位 14 の「Quizlet」にこの方式が用いられている。また、回答者数上位のアプリには入っていないが、「WaniKani」（日本語の漢字と語彙を対象とした学習アプリ：回答数 3）についても同様の機能が便利な機能として指摘されている。「WaniKani」にはウェブサイト版もある。

[30] 学習アプリ「Anki」および「Memrise」についてのコメントである。設定した学習メニューなどを達成していない場合などに、アプリにより何らかの「学習リマインダー」の通知がなされるという機能のことを指すと思われる。

[31] 文部科学省の「学習指導要領」によって示される初等教育（第一学年～第六学年）における学年別学習漢字の一覧である。

ていくにあたって、アプリはその学習をサポートする役割を果たしていると言えるのではないかと思われる。

4.1.3　ウェブサイト

次に、ウェブサイトについて同様の調査を行った。「日本語を勉強する時、ウェブサイトを使いますか」との質問に対し、「非常によく使う」113、「よく使う」103、「時々使う」61、「あまり使わない」51、「まったく使わない」29 という結果となった。アプリについては「非常によく使う」との回答が全体の 5 割以上（211 回答）を占めていたのと比べると、ウェブサイトを「非常によく使う」としているのは全体の約 3 割である。ただし、「時々使う」までを含めると、ウェブサイト使用者は全体の約 7 割となり、アプリ使用者が全体の 8 割以上であったのと同様に、使用者はやはり多数を占める。「まったく使わない」と回答した 29 名のうち、18 名についてはアプリを「非常によく使う」、同じく 3 名は「よく使う」と回答しており、この 21 名はアプリ使用派と思われる。

よく使うサイトについては、全体の 7 割以上に当たる 289 名が具体的なサイト名を挙げており、2 つのサイトを挙げた回答者もそのうち 138 名、3 つのサイトを挙げた回答者はそのうちさらに 45 名で、延べ 460 以上、68 種のサイト名が挙がった。5 名以上が挙げているサイト計 13 種は、下記の表 4 の通りである。

表 4　よく使われているサイト名（回答数 5 以上）

順位	サイト名	サイトのタイプ	回答数
1	jisho	日英辞書サイト	104
2	Google Translate	多言語翻訳サイト	88
3	You Tube	動画共有サイト	38
4	JPLANG	e ラーニング教材サイト	32
5	goo 辞書	総合的辞書サイト	24
6	Google	ウェブ検索サイト	23
7	Weblio 辞書： 辞典・百科事典の検索サービス	総合的辞書サイト	20
8	英和辞典・和英辞典−Weblio 辞書	英和・和英辞書サイト	19
9	NEWS WEB EASY	やさしい日本語によるニュースサイト	7
10	NINJAL−LWP for BCCWJ	語の共起関係などが調べられるサイト	6
10	コトバンク	辞書・百科事典検索サイト	6
10	Tangorin Japanese Dictionary	日英辞書サイト	6
10	英辞郎 on the WEB（アルク）	英和・和英辞書サイト	6

5 名以上が挙げたアプリは計 23 種見られたが（4.1.2 節の表 3）、ウェブサイトでは 5 名以上が挙げたものは上記のように計 13 種であり、よく使われるサイトがより集中している様子が見てとれる。上位 2 つの「jisho」（日英対訳の総合的辞書サイト）および「Google Translate」（多言語対応翻訳サイト）[32]は、

[32]「Google Translate」（https://translate.google.com）

日本の大学で学ぶ留学生を対象に行った調査（鈴木他 2019a）においても上位 2 つに挙がっていたもので、学習者の間で定番・人気のサイトとなっていることがうかがえる[33]。「Weblio 辞書」は、表 4 の 7 位に見られる総合的な検索サイトの中に、8 位の英和・和英辞典が含まれる構成になっているため、両者を合わせれば計 39 名がこのサイトを挙げていることになり、3 位の「You Tube」（動画共有サイト）とほぼ同じぐらいの利用者数である。e ラーニング教材サイト「JPLANG」（東京外国語大学開発）が 4 位に入っているのは、調査実施時、ベオグラード大学（セルビア）でこの e ラーニング教材が準拠する日本語教科書が採用されており、補助教材としてこのサイトの利用者が多くなっていたことによる。

そのウェブサイトを使ってどんなことをするか、全 25 項目（複数選択可）のうち回答数の最も多かったのは、「日本語の言葉の意味を調べる」329 である。「自分の母語や英語の言葉に対する日本語の訳を調べる」278、「日本語の言葉の使い方を調べる」263 が続き、いわゆる辞書ツールとしてそれらのウェブサイトが用いられていることがわかる。そのほか、「漢字の書き方や読み方を調べる」199、「ある日本語の言葉と似ている意味の日本語の言葉（類義語）をさがす」182、「自分の母語や英語で文・文章を書いて、日本語に翻訳する」153、「日本語のコロケーション（どんな言葉とどんな言葉をよくいっしょに使うか）を調べる」146、「漢字や、漢字の部首（漢字の部分）の意味を調べる」140 が続き、漢字辞書としての役割のほかに、類義語、コロケーション等の検索を含めた辞書機能、および翻訳機能が用いられている。また、ウェブならではの機能として「使いたい日本語の表現がどれぐらい多く使われているかを調べる」135 のように、広く実際の使用例を検索する機能も使われている。逆に、回答が少なかったものは「漢字を登録し、自分の漢字リストを作る」19、「言葉を登録し、自分の語彙リストを作る」31 で、いわゆるフラッシュカードや単語帳方式の学習機能は、ウェブサイトではなくアプリのほうが得意とする分野であると思われる。ただし、ウェブでは、発音練習、聴解・読解練習、文法ドリル、会話練習、日本語能力試験対策練習などを行うという回答が、いずれも一定数（それぞれ 50 回答前後）見られた[34]。

よく使うウェブサイトの良い点については、全 15 の選択肢（複数選択可）の中で、アプリと同様に「操作がしやすい」351 が最多であった。そのほか「説明がわかりやすい」308、「入っている情報が多い」213、「日本語の例文が多い」208、「母語（あるいは英語など）の言葉の日本語の訳がすぐわかる」204、「説明がくわしい」203 など、内容面についての評価が続く。不便な点については、全 8 の選択肢の中で「不便な点はない」が 141 と最多であった。ほかには「文・文章の翻訳が正しくないことがある」112、「言葉の訳が正しくないことがある」111 となっている。ウェブサイトはアプリと比較すると、よく使われるサイトがより集中しており、「不便な点はない」と感じるからこそ使われているという結果になっていると思われる。

また、「便利な機能がある」とした 65 回答のうち、どのような機能が便利か回答しているものについ

[33]「jisho」は日英対訳の総合的辞書サイトで、英語を母語あるいは第二言語として理解する学習者にとって使いやすいサイトであると言えるだろう。今回の調査で「jisho」をよく使うサイトとして挙げた 104 名の内訳は、セルビア（ベオグラード大学）49 名、オランダ（ライデン大学）30 名、英国（リーズ大学）14 名、香港（香港大学）6 名、タイ（タマサート大学）5 名、エジプト（カイロ大学）は 0 名で、このうち、母語あるいは母語と同じぐらい自由に使える言語として「英語」を挙げていない回答者は 10 名のみであった。

[34]「JPLANG」（e ラーニング教材サイト）が文法、発音、会話、読解、聴解などの練習に総合的に使用されているほか、文法、発音、会話、読解、日本語能力試験対策など種々の練習に、「日本語の森」（You Tube 内に開設されている日本語学習チャンネル、自由に視聴可能）や、「JapanesePod101」（ユーザー登録制の日本語学習サイト、https://www.japanesepod101.com/）、また読解・聴解に「NEWS WEB EASY」(やさしい日本語によるニュースサイト、https://www3.nhk.or.jp/news/easy/)、文法や日本語能力試験対策に「文プロ」（ユーザー登録制の文法学習サイト、使用したいコンテンツの範囲および使用期間によっては有料、https:// bunpro.jp）や「JLPT Resources」（語彙・漢字リストや文法項目の解説などを掲載しているサイト、http://www. tanos.co.uk/jlpt/）などが挙がっている。

て、回答者数上位 2 つの「jisho」および「Google Translate」に関するコメントに焦点を当てて見てみる。

まず「jisho」は、広い意味で日英対訳の辞書サイトであるが、検索対象とした日本語表現について、かなり多くの言語的情報を得ることのできるサイトである [35]。その検索機能については、「検索バーにローマ字で入力しても適切な漢字・かなに変換して検索してくれる」「検索オプションを工夫することで、自分が探そうとしている特定の表現を絞り込むことができる」「人名、地名、機関名、商品名などのタグで検索ができる」「動詞をそのまま入力しても、もとの辞書形および入力した語がどのように活用された形なのかを表示してくれる」などの評価が見られる。また、辞書の機能としても「ある語が使われる文脈が豊富に表示される」と評価されている。漢字に関するコメントも多く、「手書き入力もでき、部首からも漢字を検索できる」「漢字の筆順が（アニメーションでも）確認できる」「1 つの漢字のすべての読み方と、その漢字を使った多くの語が示される」「漢字のいろいろな使い方が示されるだけでなく、その漢字を含む熟語も表示される」などが見られる。

「Google Translate」については、「すぐに翻訳できる」「速くて便利である」「簡単に使える」「文単位、文章単位で翻訳できる」「翻訳が正確でないことが多いが、手早く翻訳したい時はよく使う」など、その翻訳機能の速さ・手軽さを評価するコメントが多い。さらに、「発音・音声が聞ける」のほか、「類義表現も同時に示される」とし、類義表現を見ることによってある語句の意味を確認したり、比較しながらより的確な訳を選んだりすることができるという点も評価されている。

回答者数 1 位の「jisho」については、アイディアと技術を持った個人が無償で開発・管理を行っているサイトであるが、今回上位に挙がったそのほかのサイトは、いずれも比較的大手の出版社や新聞社、放送局などのメディア、あるいは IT 企業や大学などの機関が母体となって作成・管理されているサイトであった。同じく学習に資するツールであっても、アプリは、基本的にプログラマーが個人の単位で開発することが可能で、それをアプリ市場に出品・公開することも開発者個人の活動として位置付けられるという性格を持つと思われる。一方、ウェブサイトの場合には、企業や機関が母体となって管理・運営されるようなウェブサイトもあれば、個人が構築・運営しているウェブサイトもあるということが言えるだろう。

4.1.4　その他活動

日本語を使ってふだんどのような活動をしているかについて、12 の選択肢（複数選択可）のうち最も回答の多かったものは、「日本語の歌を聞いたり、歌ったりする」（300 回答）で、7 割以上の回答者がこれを選んでいる。次に「日本語のテレビ番組や映画、いろいろな動画を見る」285、「日本語のまんがを読んだり、アニメを見たりする」272 と続き、日本のポップカルチャーに関連した活動が上位を占めている。「SNS を使って、記事を読んだり、コメントしたり、メッセージを送ったり、日本語で会話をしたりする」160、「日本語でゲームをする」154、「日本人の友だちや知り合いと日本語で話す」153 がこれに続く。

「その他」の回答の中には、「日本人と日本語でメールのやりとりをする」「ラジオで NHK ニュースを聞く」「日本人に英語を教える時、簡単な日本語で説明する」「ボランティアとして高校で日本語（文字、簡単な文法）を教えている」などが見られた。興味深い活動としては、「日本語を学んでいる友人と日本

[35] 鈴木他（2019b）で報告されているワークショップでは、この「jisho」サイトの開発・管理者をゲストに招き、話を聞いている。シンプルで使いやすいユーザーインターフェースを持ち、種々のオープンデータを活用することで豊富な情報量を持つサイトとなっていることが報告されている。

の音楽バンドのファンサイトを作り、曲の歌詞や、バンドのインタビューやブログ記事を訳している」という回答が見られた。村上（2018）では、「SNS で外国語をマスターしよう」という極めて現代的なメソッドについて述べられているが、これなどは、まさにその方法が実践されている例と言えるだろう。

4.2　地域別結果

ここでは、調査を行った地域別の視点から特徴的な点を記述する。

4.2.1　欧州地域（英国、オランダ、セルビア）

英国の特徴として、アプリ、ウェブサイトとも 1 人当たりの回答数が多く[36]、同時に、1 名のみが回答したアプリやウェブサイトも多いという点が挙げられる。このことから、学習者はそれぞれが気に入ったツールを複数使っている状況であると推測される。アプリの上位には、辞書アプリ「imiwa?」、多言語翻訳アプリ「Google Translate」、語学学習アプリ「Memrise」[37]の 3 つが挙がったが、特定のアプリへの偏りは特に見られない。一方、ウェブサイトでは、回答者の半数以上が日英辞書サイト「jisho」を挙げており、よく使われるサイトは、これに集中している様子が見られた。また、ウェブサイトの 4 位に挙げられた英和・和英辞書サイト「英辞郎 on the WEB」は、今回調査を行った地域の中では英国での回答数が顕著であった[38]。なお、多言語翻訳サイト「Google Translate」および動画共有サイト「YouTube」は、ほかの地域と同様、回答数が多かった。

オランダでは、ウェブサイトに特徴が見られ、回答者の 85%が「jisho」を挙げていることから、これが定番ウェブサイトとなっていると言ってよいだろう。また、「jisho」より回答数は大きく減少するが、3 位に挙げられたのは漢字学習サイト「Kanji alive」[39]で、これはオランダでのみ回答が見られたサイトである。一方、アプリの上位はフラッシュカード形式の学習アプリ「Anki」と、読み方・意味を表示するアプリ「rikaikun」[40]の 2 つであった。特に、「rikaikun」は、ほかの地域での回答数が少なく、オランダに特徴的に見られた[41]。

セルビアでは、アプリの上位は辞書アプリの「Jsho」、日本語学習アプリ「Obenkyo」、辞書アプリ「Takoboto」の 3 つであったが、特定のアプリへの偏りは特に見られない。ただし、「Obenkyo」と「Takoboto」は、ほかの地域での回答数は少なく、セルビアで顕著に見られたものである[42]。ウェブサイトは、ほかの欧州地域と同じく最も回答数が多かったのは「jisho」であったが、これのみに偏ってはいないという点で、英国・オランダとは異なっている。「jisho」より回答数は減るものの、3 位には e ラーニング教材サイト「JPLANG」が挙がっており、これはセルビアでのみ回答があった点で特徴的である[43]。

欧州地域の 3 つの結果をまとめると、ウェブサイトでは、日英辞書サイト「jisho」[44]や多言語翻訳サ

---

[36] それぞれの地域で、挙げられたアプリあるいはウェブサイトの延べ数をその地域の回答者の人数で割ると、英国は 1 人当たり 2.09 のウェブサイトが挙げられており、今回調査を行った 6 つの地域の中で最多であった。アプリは 1 人当たり 1.52 で、タイの 1.59 に次ぐ多さであった。なお、1 人当たりの回答数が最も少なかったのは、ウェブサイトはエジプトの 0.68、アプリは香港の 0.7 であった。

[37] 「Memrise」にはウェブサイト版もあるが、回答数が多かったのはアプリ版である。

[38] よく使うサイトとしてこれを挙げた 6 名の回答者のうち、5 名が英国の回答者である。

[39] 「Kanji alive」(https://kanjialive.com/)

[40] 4.1.2 節表 3 の順位 13 のアプリ。注 25 参照。

[41] よく使うアプリとしてこれを挙げた 8 名の回答者のうち、6 名がオランダの回答者である。

[42] よく使うアプリとして「Obenkyo」を挙げた 25 名の回答者のうち 21 名が、また「Takoboto」は 27 名の回答者のうち 18 名がセルビアの回答者である。

[43] 4.1.3 節を参照。

[44] 「jisho」にはアプリ版もあるが、回答数が多かったのは 3 地域ともウェブサイト版である。

イト「Google Translate」のように、3 地域で共通の人気のウェブサイトがあり、かつ、その地域でのみよく使われているものもあるということである。一方、アプリは、3 地域とも特定のアプリに回答が偏ることはなく、上位に挙がるアプリも地域ごとに異なっていた。また、よく使用するアプリ・ウェブサイトとして、辞書ツールや翻訳ツールが多く挙げられるという傾向は、欧州地域のみならず、今回調査した 6 つの地域に共通している。これに対し、語学学習や漢字学習のためのアプリや e ラーニング教材サイトも比較的多く挙げられているという傾向は、後述するアジア・中東地域と異なる点である。

4.2.2　アジア・中東地域（香港、タイ、エジプト）

香港では、アプリは「MOJi 辞書–日语实用词典」、「沪江小 D 词典–英日韩多语种查词助手」、「Japanese English Dictionary」という辞書アプリが回答数の上位を占めている。日中辞書、日英辞書の双方が挙げられている点は香港の特徴と言える。一方、ウェブサイトは「Google Translate」が最も回答数が多い[45]。このほかの特徴として、香港では、1 人当たりの挙げられたアプリの回答数が 0.7 で、今回調査を行った 6 つの地域の中では最も少ないという点が挙げられる。また、漢字学習に特化したツールが挙がっていないのも特徴の一つである。香港では中国語と英語が公用語とされているため、日本語学習における漢字学習の困難度は比較的低いのではないかと考えられる。

タイは、アプリでは「Japanese Thai Dictionary」という日本語とタイ語の辞書アプリが最も回答数が多く、約半数がこれを挙げていた。ウェブサイトは「Google Translate」と総合的辞書サイト「goo 辞書」[46]が比較的多いが、特定のウェブサイトへの偏りは見られない。このほか、タイの特徴としては、1 名のみが回答したアプリおよびウェブサイトは極めて少ないという点がある。言い換えれば、回答者の多くが同じアプリやウェブサイトを挙げているということである。回答者が同一の大学・コースで学んでいることを考えると、学習者同士でツールの情報を共有し、大多数の人が同じツールを使用するという傾向があるのではないかと推測される。

エジプトは、他の地域と比べ、挙げられたアプリ・ウェブサイトの種類が 6 つの地域の中で最も少なく、特に特徴と言えるものが見られない。その中でも、アプリでは「了解　日本語アラビア語辞典」という日本語とアラビア語との辞書アプリ[47]が最上位に挙げられており、ウェブサイトは「Google Translate」と「You Tube」が上位に挙げられている。

アジア・中東地域の結果を見ると、3 つの地域で共通しているのは、日本語とそれぞれの母語との対訳辞書アプリ、および多言語翻訳サイトの「Google Translate」が最も回答数が多いということである。また、中国語を公用語の 1 つとする香港では、漢字学習に関するツールの使用が見られなかった。回答者には 1 年生から 4 年生までが含まれるが、少なくともこの学習段階においては、日本語学習の際に漢字学習ツールがなくても特に困らないということが推測される。

5.　学習者によく使用されている辞書アプリの検討

ここでは、学習者によく使われているスマートフォンの辞書アプリを取り上げ、具体的にその内容を検討してみる。

45　「Google Translate」にはアプリ版もあるが、回答数が多かったのはウェブサイト版である。

46　「goo 辞書」（https://dictionary.goo.ne.jp/）

47　「了解　日本語アラビア語辞典」にはウェブサイト版もあるが、回答数が多かったのはアプリ版である。

5.1　対象とする辞書アプリとその方法

検討対象とする辞書アプリは、Android OS 対応の「Jsho−Japanese Dictionary」と「Takoboto: Japanese Dictionary」、また iOS 対応の「imiwa?」、そして双方の OS に対応している「Japanese」の 4 つである。日本語と、国際語としての汎用性を持つと思われる英語との対訳辞書アプリの中で、今回の調査で回答数の多かった上位 4 つのものである（4.1.2 節の表 3 でアプリ名の横に「＊」を付している）。

ムハンマド アル−ハキム（2019）では、無料ダウンロードの可能な辞書アプリとして、Android OS 対応のアプリに「Takoboto」「Jsho」「Akebi」「Yomiwa」があり、iOS 対応のアプリには「Shirabe Jisho」と「imiwa?」があるとし、それぞれの開発者、開発年、対応言語、漢字検索方法を比較している[48]。今回の調査でも、「Akebi Japanese Dictionary」は 9、「Yomiwa」は 3、「Shirabe Jisho」は 13 の回答数を得ているが、調査を行った 6 つの国・地域のうち、5 つ以上で使用回答のあった上位 4 つの辞書アプリに検討対象を絞った。

ここでは、知らない言葉の意味を調べるだけではなく、学習者が日本語を使って表現する際、即ち日本語を産出（アウトプット）する際に、これらのアプリを使うとどのように言葉を探し出すことができるかを確認してみたい。鈴木（2016）を参考に、下記の表 5 のように文の空欄（下線）部分に適当な表現を入れるタスクをアプリを使って行ってみる。

表 5　辞書アプリの使い方を見るための文完成タスク

① 留学中に日本語がずいぶん上手になった。日本人の友だちもできたし、日本の社会についてもいろいろ学ぶことができた。留学の目的は、十分に＿＿＿＿＿＿と思う。 ② 私たちの国は、今後、日本との関係をいっそう＿＿＿＿＿＿いきたいと思っている。 （=もっと関係したいという意味）

（鈴木 2016 を参考に作成）

上記タスクを行う際、鈴木（2016, 2017）で挙げられている以下のような検索の工夫（1）～（6）が可能かどうかを検証してみる。結果として、それぞれのアプリを使用する際には、学習者もそれぞれの特徴を把握した上で使用する必要があることがわかった。

（1）英語から検索する：英語の言葉を入力して適当な日本語訳を探す
（2）日本語から検索する：日本語で適当と思われる表現を入力し、例文や英語訳で確認する（類義表現からの検索を含む）
（3）英和・和英辞典で相互に検索して確認する
（4）動詞述語を見つけるために、補語の名詞から検索する
（5）動詞述語を見つけるために、補語の名詞に格助詞を加えて検索する
（6）動詞述語を見つけるために、補語と動詞を組み合わせて調べる

5.2　4 種の辞書アプリの検討

5.2.1　「Jsho−Japanese Dicitonary」

[48] Android OS および iOS の双方に対応している「Japanese」については言及されていない。

Android OS 対応の無料辞書アプリである[49]。「Google Play ストア」[50]の情報によると、アプリの公開は 2013 年で、提供元は「Richard L」（richard.onevis@gmail.com）とされている。オフラインで操作可能な日本語・英語の対訳辞書で、「シンプルで軽量、かつ高速」であることを目指しているとのことである。2019 年 9 月現在の累計ダウンロード数は 50 万回以上となっており、ユーザーから 6,000 件以上のレビューが投稿されており、5 段階評価で「4.7」を得ている。

この辞書アプリは簡単な語の意味のチェックはできるため、日本語でわからない言葉があった時に、手軽にその意味を英語訳で確認することのできるアプリと言えるだろう。その語を構成要素として含む複合語や派生語、また句単位の表現も表示されること、および構成要素の漢字についての情報を個々に確認できるという点が、このアプリの特徴となっているようである。しかし、表示されるそれらの語や句には、現代語として高頻度で用いられるとは思われない、一般性が高いとは言えない語も多く[51]、また、例文の表示がない[52]ために、コロケーションや文脈を確認することができず[53]、日本語で表現しようとする際には、求める情報を得ることは難しい。

まず、タスク①「留学の目的は、十分に_____と思う。」を見てみる。仮に日本語の候補となる表現があったとし、「達成」と入力してみると、「達成」のほか「達成度」「達成感」「達成可能」「達成のレベル」という項目が表示される。「達成」には「achievement」の訳が付されている。各項目について得られる情報は 2 種類のみで、「Conjugation」には「達成する」「達成すれば」「達成される」などの活用形が表示される。「Kanji Details」を見ると、この語の構成要素である「達」「成」という漢字それぞれの読みおよび意味（英語訳）が表示される。ここからさらに「達_」「_達」や「成_」「_成」というような語構成を持つ漢語を表示させることができるが、同一のデータベース内の項目を拾ってきて表示させる方式のため、得られる情報は上記と同様である。「達成する」と入力した場合は「達成」と「為る」（する）の 2 項目が表示される。

「目的」を入力すると、同様に「目的」のほか「目的地」「目的語」「目的論」「目的要素」「目的言語」「目的意識」「目的を貫く」「目的に敵う」「目的のためには手段を選ばない」が表示される。助詞を含め「目的を」を検索対象とすると、「目的を貫く」という 1 つの表現しか表示されない。英訳は「to accomplish (attain) one's object」である。「目的」を補語とする表現はほかにも多くあると考えられるが[54]、そのほかの表現は表示されない。「目的を達成する」と句単位で検索すると、「目的」「達成」「為る（する）」の 3 語の情報が別個に表示され、それらについての情報は上記と同じである。

英語で「achieve」と入力すると「アチーブ」「為す」「成す」「遂げる」「果たす」などの日本語訳が表示され、各語に「to build up」「to form」「to accomplish」「to carry out」などの英訳が付されている。個々

---

[49] ここでは、2019 年 9 月現在の最新版のバージョン 2.14.7 を検討する。

[50] Android OS 対応のアプリ等がダウンロードできるウェブサイトである。Android OS のスマートフォン端末にはあらかじめ同名のアプリが搭載されており、そのアプリを通じて多様なアプリのダウンロードが可能である。

[51] このアプリをよく使用するという回答者の中にも、「"common word"が初めに表示されるわけではない」という点を不便だとするコメントが見られる。

[52] ムハンマド アルーハキム（2019）では、「Jsho」は初期段階で例文表示が整備されておらず、例文を表示するためには別途ダウンロードが必要であるとされているが、「Google Play ストア」における「Jsho」のページにはその旨の説明は見られず、例文を表示させる方法は不明である。このアプリをよく使用すると回答した 42 名の中で、3 名がその不便な点として「例文の表示がない」ことを挙げている。

[53] このアプリをよく使用するという回答者の中にも、「使用文脈や似ている言葉の違いの説明が不十分」という点を不便な点とするコメントが見られる。

[54] 例えば「NINJAL-LWP for BCCWJ」（http://nlb.ninjal.ac.jp、国立国語研究所の「書き言葉均衡コーパス」を対象に、語と語の共起関係を探ることができるサイト）で「目的」を検索すると、「目的が」「目的を」「目的と」「目的に」など、種々の助詞との結びつきごとに「目的を達成する」「目的を持つ」「目的とする」「目的に応じる」などのコロケーション情報が出現頻度とともに表示される。

の項目についての情報は、上に述べたように「Conjugation」と「Kanji Details」のみであるため、それぞれの語をどのように使用すればよいのかについての情報は得られない。

タスク②「日本との関係をいっそう_____いきたい」について、例えば「strengthen」を検索してみると、「強化」「厳に」「延ばす」「伸ばす」「強める」「固める」のほかに、接辞「引っ」なども表示される。「引っ」の説明に「goes before a verb to strengthen its meaning or to add emphasis」とあり、この説明文中の strengthen がハイライトされている。英語の「to strengthen」の意味に対応する日本語の動詞表現を探すことと、語義説明の中に「strengthen」という語が含まれている項目を網羅的に拾ってくるということは、検索の目的とレベルが異なるものと思われるが、両者が同時に行われる方式となっている。

5.2.2 「Takoboto: Japanese Dictionary」

Android OS 対応の無料辞書アプリである[55]。Google Play ストアの情報によると、アプリの公開は 2014 年で、提供元は「Takoboto」（info@takoboto.jp）とされている。オフラインで使用可能な日本語・英語辞書で、約 17 万項目が含まれている。2019 年 9 月現在の累計ダウンロード数は 10 万回以上となっており、ユーザーからのレビューは 6,000 件以上投稿されており、5 段階評価で「4.9」という高い評価を得ている。

この辞書アプリは、日本語学習者を使用対象者として意識した情報を提示している点も見られるが、表示される例文は特に日本語学習を念頭においた編集等は経たものではないことを理解して使用する必要がある。「Takoboto」ウェブ版（http://takoboto.jp）によると、このアプリで表示される例文は「Tatoeba」プロジェクト（https://tatoeba.org/eng/）による例文翻訳データベースを利用しているということである[56]。「Tatoeba」プロジェクトとは、様々な言語の例文と、その任意の言語への翻訳を収集していくデータベースプロジェクトで、誰でも項目を追加することができ、言語使用の実態を例文によって示し、あらゆる言語による翻訳文をネットワーク状に結びつけていこうとされるものである。クリエイティブ・コモンズ・ライセンスでは「CC BY」を表示しており、著作権者の表示を行えば、データベースは自由に利用してよいものとなっている。このデータベースは、極めて現代的なコンセプトに基づく興味深い参加型共同プロジェクトであるが、これを辞書アプリの例文表示に利用するにあたっては、その目的やアプリ作成のコンセプトなどを明確にしておく必要があるのではないかと思われる。

実際に、タスク①「留学の目的は、十分に_____と思う。」を例に、日本語の候補として「達成」を入力してみる。このアプリでは入力のどの単位でも入力予測機能が働き、「た」と入力した時点で「多」「田」「他」などが、また「たっ」と入力した時点で「立つ」「達成」「達する」「たっぷり」などが候補として表示される。「達成」という項目を見ると、得られる情報は 3 種で、「WORD」では読み方と意味（英訳）および品詞情報、「KANJI」では構成要素の漢字「達」と「成」のそれぞれの読み方と意味（英訳）、画数、学年別学習漢字と JLPT のレベルが示され、漢字の筆順が 1 画ずつマス目の中に示されたイラストも表示される。「PHRASES」では、例文とその英訳が表示される。ただし、上述の例文データベースをもとに具体的にどのように例文を表示するシステムをとっているのかはわかりにくい。「達成」

[55] 「Takoboto」には WindowsOS 向けの PC 版アプリのほか、ウェブサイト版のオンライン辞書も公開されているが、ここでは、2019 年 9 月現在スマートフォンの Android OS でダウンロード可能なアプリバージョン 1.4.1 を検討する。

[56] 辞書アプリ「Takoboto」の例文は、ほかに「Tanaka Corpus」にも依拠しているとのことだが、このコーパスは「Tatoeba」プロジェクトの例文データベースの中に組み込まれているとのことである。「Tanaka Corpus」とは、Tanaka Yasuhiro 氏により 2001 年に公開された日英対訳例文コーパスである。（「Tanaka Corpus」http://www.edrdg.org/wiki/index.php/Tanaka_Corpus、2019 年 9 月 9 日閲覧）。

については「アンは望んでいた目標を達成した。」という 1 例のみがまず表示され、「Show more phrases」をタップするとさらに多くの例文が英訳とともに表示されるが、コロケーションの重要度や、例文の簡潔さなど、何らかの規則的な表示順序があるようには見られない[57]。

「目的」と入力した場合も、結果は同様である[58]。また「目的を」と入力すると「目的を貫く」のみが表示され、「目的を」という補語をとることのできる種々の動詞とのコロケーション情報は表示されない。同様にタスク②「日本との関係をいっそう_____いきたい」について、「関係を」と入力すると「関係を持つ」のみが表示される。「目的を貫く」や「関係を持つ」という句単位の表現には、例文の表示はないようである。また、動詞とその補語を組み合わせた「目的を達成する」という単位の検索には対応しておらず、「目的」「を」「達成」「する」というように分解した候補が表示される。

英語から「achieve」と入力すると「果たす」「遂げる」「勝ち得る」「アチーブ」「実をあげる」「遣り通す」などの日本語が表示される。「果たす」という項目には、「WORD」「KANJI」「PHRASES」のほかに「FORMS」という情報がある。ここには、辞書形、ない形、た形、て形、意志形、命令形、条件形などの形式情報が、いずれもその否定形も含めて示される。「strengthen」を検索すると、「強化」「強める」「固める」「確かなものにする」など多くの項目が表示されるが、その例文はやはり語学コースなどで学習を積み上げていく学習者を想定した場合には、典型的な例文とは言えないものが多い[59]。

このアプリは、使用者の側に、多量のいわば「生の」例文の中から、的確な情報を読み取るスキルが求められるだろう。

5.2.3 「imiwa?」

iOS 対応の無料辞書アプリ[60]で、オフラインでも使用可能である。「App Store」[61]のユーザーレビューによると、2019 年 9 月現在、5 段階評価で 4.7 を得ている。このアプリのサポートサイト[62]によると、「imiwa?」は「JMDict」（日本語–複数言語対応辞書）プロジェクト[63]のデータベースファイルを利用しているとのことである。

寺嶋・板井（2019）は、使用頻度の高いスマートフォンアプリの中から「imiwa?」と「Google Translate」を比較し、日本語能力試験 N2、N3 レベルの動詞から無作為に 100 語を選んで調べた結果、その英訳が適切かどうかという観点から、「imiwa?」の方が「Google Translate」よりも学習者に勧められるが、その

---

57 「野心は抱くに値するが、容易に達成され得ない。」「目的を達成するために、我々は協力したよ。」などのほか、「彼女は目標を達成した。」「彼女は目的を達成するために努力した。」「彼女はついに目的を達成した」「彼らはとうとう目的を達成した」など類似した例文が次々に表示される。

58 表示される例文には「全てを捨ててこのレストランをやる目的はひとつだけでした。」「余暇は目的のための手段と考えられている。」「目的は必ずしも手段を正当化しない」など、読む対象としては内容や文脈に興味深いものも多いが、日本語学習者が自身で文章を書こうとする際に、必ずしも直接かつ簡潔に参考となる情報が得られる例文表示とはなっていない。

59 「フロントローラーのスラスト角は 2 度、多分レース時にはもう少し角度を強める予定です。」「財界では、法案提出断念に反発を強めているそうだ。」「霊長類の毛づくろいは集団の結合を強める。」「これは、あの殺人的な公爵に復讐しようという彼の願いを強めただけだ。」などである。

60 ここでは、2019 年 9 月現在の最新版のバージョン 4.1.2 を検討する。

61 アップル社が運営する iPhone、iPod touch、iPad 向けアプリのダウンロードサービスである。iPhone、iPod touch、iPad では「App Store」のアイコンから、その他アップル社のパソコンからはアプリケーション「iTunes」を使ってアクセスできる。各種アプリを検索し、ダウンロードとインストールができる。

62 「IMIWA? Japanese dictionary for iOS」（http://www.imiwaapp.com）

63 「JMDict」プロジェクトとは、オーストラリア・モナシュ大学の情報テクノロジー学部コンピュータ科学＆ソフトウエア工学学科内における Electronic Dictionary Research and Development Group によって立ち上げられたプロジェクトである。誰もが自由に使える日英辞書をコンピュータ上で処理可能なフォーマットで作成することを目標とした Jim Breen 氏の「EDICT」プロジェクトに基づくものとされる。

例文には問題があるということを指摘している[64]。

このアプリの特徴としては、まず日英・英日辞典であるだけでなく、一部は仏、独、西、露、伊語にも対応していることが挙げられる。例文[65]にはそれらの多言語訳が表示される。また、「Analyser」という機能があり、例えばウェブ上のニュースサイトの記事などの日本語の文章をコピーすると、「imiwa?」が自動的に形態素解析を行い、漢字にふりがなが振られ、各語に多言語訳が表示される。漢字辞典の機能もあり、書き順、日本語能力試験の級別対応リスト、学年別学習漢字の漢字リストなども含まれている。

このように多機能を有したアプリではあるが、ただし、その精度については問題がある。例えば「梅」という語に「梅の花は今週が見所です。」という例文が見られ、「見頃」とあるべき所を「見所」と誤った語が使われている[66]。また、動詞「なおす」には、「僕たちのタスクは壁を治す。」のように日本語として文法的・語彙的に不自然[67]であるだけでなく、漢字表記も的確さを欠く[68]例文が見られる。例文中の漢字に誤ったふりがなが振られているものも見られる[69]。漢字についても、例えば「なみだ」という語を検索すると、常用漢字の「涙」だけではく、その異体字の「泪」「涕」も同列に挙げられており、現代語では通常使われない異体字を単に併記するだけでは学習者に混乱を生じさせる。

「Analyser」機能については、アンケート調査回答者からもこのアプリの便利な機能として指摘されており[70]、特に初級〜中級の学習者にとっては役立つ機能と思われる。同期しているコンピュータ上で任意の文章をコピーすると、「imiwa?」の「Analyser」がスマートフォン上で解析してくれるため、コンピュータのモニター上でウェブなどの記事を読みながら、わからない部分は手元のスマートフォンで確認するという使い方ができる。ただし、日本語の文全体の英訳が表示されるわけではなく、文中の各語に多言語の訳語が表示されるのみであり、上に述べたように基本的な漢字のふりがなに誤りが見られることもあるので学習者は注意が必要である。

このように問題点もあるが、例えば、書籍タイプの辞書ではまだ取り上げられない新語・俗語が見出し項目として取り上げられているのは、現代の日本社会における生きた日本語表現について知りたいと思う学習者にとって便利であろう[71]。

実際にタスク①「留学の目的は、十分に_____と思う。」を例に「達成」を検索してみると、「1 exact match」として「達成、たっ成」が表示され、加えて「4 additional results」として「達成度」「達成可能」

---

[64] 寺嶋・板井（2019）は、例文の問題点として、文脈がわかりにくい、文が長すぎる、専門的すぎる、不自然なコロケーションとなっている、文法的な誤りがある、漢字の読み方の誤りで意味が成立しない、見出し語と例文が合わないという7点を指摘している。

[65] 例文は5.2.2節で取り上げた辞書アプリ「Takoboto」と同様に、「Tanaka Corpus」（注56参照）及び「Tatoeba」（多言語例文プロジェクト）（5.2.2節参照）のものが使われている。

[66] この例文の英訳は「The plum blossoms are at their best this week.」となっており、明らかに「見頃」が意図された文である。また、「梅」という語自体には「Japanese apricot」と的確な英訳が付されているが、例文の英訳では「plum」と別の植物名が当てられている。一方、「見頃」という語を検索すると「梅の花は今週が見頃です。」という正しい例文が見られ、使用者には混乱のもととなる。

[67] この例文の英訳は「Our task is to rebuild the wall.」とあり、日本語にするとすれば「私たちの仕事は壁を立て直すことだ。」となる。

[68] 「直す」とあるべきものが「治す」となっている。

[69] 例えば「中身」という語の例文「いくら器だけを日本一にしても、中身が三流やったら［以下略］」では、「器」に「うつわ」ではなく「き」と、また「計算の上では間違いない。」という文の「上」には「うえ」ではなく「じょう」とふりがなが振られている。

[70] 4.1.2節注27参照。

[71] 例えば、「ツイッターで話題になっている」という意味の「バズる」が「to go viral」、2017年の流行語大賞にもなった「インスタ映え」が「looking attractive on Instagram」、「人生の最後に向けて準備をすること」を意味する「終活」が「making preparations for one’s death」と訳されている。

「達成のレベル」「達成感」という項目が表示される。「達成」は普通名詞で、「する」と結びついてサ変動詞として使われることも示される。例文には「目標を達成した」「目的を達成するために」「目指すことを達成させようと」といった学習者にとってコロケーションのヒントとなるものが挙がっている。「KANJI DECOMPOSITION」では、構成要素の「達」と「成」という 2 つの漢字についての読みと意味についての簡単な表示があり、タップしてそれぞれの項目を見ると、「達」「成」いずれも N3 レベルの漢字で、学年別漢字配当順[72]の第四学年に学習する漢字であること、書き順、画数、部首、意味、熟語の情報が調べられる。

タスク②「日本との関係をいっそう_____いきたい」について、「関係」を調べると 49 の例文が挙がっている。その中で、「関係」が他動詞の目的語となっている例文にはどんな動詞が使われているかを調べると「維持する」「修復する」「作る」「確立する」が見られた。英語「strengthen」と入力すると「5 exact matches」として、「強める」「固める、堅める」「伸ばす、延ばす」「確かなものにする。確かな物にする」「厳にする」が表示され、「19 additional results」の中に「強化」「関係強化」なども見られるが、雑多な例文が並んでいるため、その中から学習者が適切な情報を得るためには慣れが必要になろう。また、「imiwa?」で使われている例文は 5.2.2 節「Takoboto : Japanese Dictionary」と同じく「Tatoeba」プロジェクトからのものであり、その例文に対する批評はそのまま「imiwa?」の例文にも当てはまる。

5.2.4 「Japanese」

Android OS および iOS 双方に対応の無料の辞書アプリである。「App Store」によると、アプリの公開は 2009 年で、提供元は「Mark Gänsicke」とされている。オフラインで操作可能な日本語・英語の辞書機能に加え、語彙リストを他の人と共有できるフラッシュカードなどの学習ツールが付いている点が特徴である。2019 年 9 月現在、5 段階評価で「4.6」を得ている。なお、「Google play」では 5 段階評価で「4.1」となっており、累計ダウンロード数は約 10 万回とのことである。ここでは、iOS 対応版を例に検討する[73]。

日本語学習者向けの機能としては、文字の手書き認識、辞書形以外を入力しても検索できる活用検索、テキストを貼り付けると各語に英訳が表示されるテキストリーダー[74]、テキストの音声が聞ける読み上げ機能などが付いている。また、自分が作成した語彙リストやメモ、検索履歴などを利用して学習したことを整理したり、「imiwa?」など他のアプリからデータをインポートできる機能もある。辞書については、175,000 以上の項目と 58,000 の例文から高速で検索できるとされている。ただし、単語および例文の出典については明記されていない。

タスク①「留学の目的は、十分に_____と思う。」を例に、「達成」と入力すると、次の 7 種類[75]の情報が得られる。「ALTERNATIVE」では「たっ成」という異表記[76]、「TRANSLATION」では「achievement, attainment, accomplishment, realization」という英訳、「KANJI IN THIS WORD」では「達」と「成」のそれぞれの英訳が表示され、各漢字をタップすると、訓読み、音読み、画数、筆順などの情報が見られる。「EXAMPLES」は 3 つの例文とそれぞれの英訳が表示される。その下の「More」という表示をタップす

---

[72] 注 31 参照。
[73] 2019 年 9 月現在の最新版のバージョン 4.5 を検討する。
[74] ただし、精度には問題がある。例えば、「人間」を「じんかん」と読んで、「the world」という英訳を付けるといったミスが見つかる。
[75] 入力した語句によっては表示されない情報もある。
[76] 「達成」の異表記として「たっ成」を表示することはそれほど役に立たないかもしれないが、「表す/表わす」や「コミュニケーション／コミュニケイション」など、送り仮名や外来語の表記に揺れがある場合には役に立つ情報である。

ると、他の例文を見ることができる[77]。「COMMON COMPOUNDS」では「達成のレベル」という表現のみが表示され、タップすると、その英訳と「達成/の/レベル」に分割された各語の英訳が表示される。「CONJUNCTION」では「達成する」の接続形式、「SEE ALSO」では JLPT のレベルが表示される。続いて、「目的を」と入力すると、「目的を貫く」のみが候補として挙がり、タップすると、英訳と「目的/を/貫く」の各語の英訳および接続形式が表示される。タスク①の正解となる「目的を達成する」という句単位では英訳は表示されず、「目的/乎[78]/達成する」のように分割され、各語に英訳が表示されるのみである。「achieve」と入力すると、「果たす、遂げる、勝ち得る」など 80 以上の日本語訳の候補が表示される。選択肢があまりに多いため、適切な語を選ぶことは学習者にとって容易ではないだろう。

タスク②「日本との関係をいっそう_____いきたいと思っている。」を例に、「強化」と入力すると、「strengthening, intensifying, reinforcement, enhancement, solidification」という英訳、「強」と「化」の漢字情報、3 つの例文とその英訳、「強化する」の接続形式、JLPT のレベルが表示される。続いて、「関係を」と入力すると、「関係を持つ」のみが候補として挙がり、タップすると、「関係/を/持つ」の各語の英訳、接続形式が表示される。「strengthen」と入力すると、「強める、固める、確かなものにする」など 25 の候補が表示される。「強化」も候補に挙がっているが、表示順は 14 番目と遅い。

6. 日本語教育の現場におけるツール使用：教師と学習者

以上、本研究では、日本国外の 6 つの地域の大学における日本語学習者を対象に、その学習ツールの使用状況について調査を行った結果について見るとともに、使用回答数の多かった辞書アプリ 4 種を取り上げ、その内容について実際に検討を行った。調査の結果からは、どの大学の学習者においても、各種アプリやウェブサイトが積極的にツールとして用いられている現状が明らかになった。学習者が日常的に使用するツールの豊富さを見ただけでも、日本語教育は、ICT 環境の急速な発達とともに、今、新しい時代に入っていることが確実に見てとれるだろう。一方、使用回答数の多かった、いわゆる学習者に人気のあるいくつかの辞書アプリを実際に見てみると、学習用辞書という観点に立てば、表示される項目の情報内容の精度や提示される例文の質には不足点も見られ、使用する側がその特徴をよくとらえた上で、情報を適切に取捨選択しながら使用するスキルが求められることがわかった。

では、このような環境の中で、教師はまず日本語教育の現場、即ち教室においてどのような点に留意して教育を行っていけばよいだろうか。教師にとって必要なのは、各種ツールがこのように豊富に使用されている状況をまず前提として受けとめることであるが、ただし、そこから得られるのは、単純に「だから教師も授業ではツールを積極的に“使おう”」ということではない。もちろん、種々のツールを興味をもって実際に使ってみることで、それらのツールの特徴を把握しておくことなどは、教師それぞれが各自のペースで積極的に取り入れていくとよいことは言うまでもない。インターネットを基盤としたいわゆる ICT のリテラシーを高めることは、基本的な姿勢として必要であり、学習者によく利用されている学習アプリを、自身の外国語学習に使ってみることなどもその 1 つの方法であると思われる。実際に学習者から情報を得ることもできるし、教師同士で情報交換と情報共有の場を継続して持つことも必要

[77] 「この計画は達成不可能だ。」「その目標は達成不可能だ。」など、非常に似通った例文が次々と出てくる。これらの例文がどのような順序で表示されるのかは不明である。

[78] 「目的を」の後に「持つ」「果たす」といった「貫く」以外を入力すると、「を」が「乎」と表示され、「乎」をタップすると「question mark」という英訳が表示される。おそらく、この辞書に登録されていない語の組み合わせを入力すると、語句全体の意味が表示されないことに加え、各語に分割された場合に助詞の「を」が「乎」と表示されるというバグがあると考えられる。

であろう。

しかしながら、教育全体を１つの学びのプロセスとして見て個々の授業をとらえるならば、そこではむしろ単純に「ツールの時代だから、教室でもツールを使おう」ということではなく、「ツールの時代だから、教室でこそできることを考えよう」ということが重要になるのではないかと思われる。ICT 時代における授業設計リテラシーの向上とは、単純にデジタル化を進めるということでもなく[79]、逆に ICT 化の流れとは逆に旧来の手法を保持するということでもなく、ICT 時代だからこそ教室で行う価値のある学びの活動とは何かを再考し、実行する力を高めることなのだと言えるのではないだろうか[80]。

一方、学習者においても、様々なツールが豊富に手に入る時代であるからこそ、それを学習に的確に生かしていくためには、自身が上手なツールユーザーとなり、自律的な学習の姿勢を持つことが必要となる。それぞれのツールの長所およびその不足点などをよく把握し、目的に応じて種類や機能を使い分ける力も求められる。学習者同士で情報交換を行うことで、別のツールについての情報を得たり、あるいは同じツールであっても、異なる使い方ができることなどを知ることもできる。また、より広くその学習を考えれば、自身の学習をモニターし、自分の力を伸ばすために必要なものが何かを見つけ、弱点の克服あるいは得意な学習をより究めていくことにつながる行動を、種々のツールの活用という形を通してとれることが必要であろう[81]。学習アプリを使って語彙や漢字の学習を継続的に続けていくことなどもその１つであるし、また、例えばインターネットを検索して自分に適したいわゆる「インターネットスクール」[82]などを見つけ、教室外の環境を積極的に利用して学習を継続するということなども、ツールを学習に上手に生かした例と言えるだろう。このように、学習者自身も、ツールを使いながら、各自の「自律学習リテラシー」を高めていくことが求められる時代であると言える。

学習者にとってツールは、単に今目の前にある課題を終わらせるというようなことのためだけにあるのではなく、自身の学習に対するモチベーションを維持し、学習の継続に役立たせるという意義を持つものとして位置付けることができる。教師は、学習者が学習を進めるにあたってその自律性を高めていくことができるよう、的確なアドバイザーとしての役割を果たすことが求められることになるだろう。そして、以上のような授業設計リテラシーの向上、および学習者の自律学習リテラシーの向上とその支援とを総合的に結びつけるものとして、教師の教育設計リテラシーの向上が必要になると思われる。

時代が変化すると、日本語教育をとりまく状況も変化し、教師が考えるべきこと、また研究すべき課題も変化していく。学習者は、今後、自身で自身の学習をデザインする、いわば「自己学習設計」の力を高めていくことになり、教師の「教育設計」とは、学習者のこのような「自己学習設計」を視野に入れたものとなっていくのではないだろうか。学習者におけるツールの使用の現状を踏まえた上で、今後さらに、時代にふさわしい教授法の開発や習得研究などが推進されていくことが必要になると思われる。

---

[79] もちろんスピーチやプレゼンテーションの様子を動画で撮影し、フィードバックに用いたり、メールソフトを使って実際にメールの文章の書き方を実践的に学ぶなど、ツールの使用が教室活動に役立つ例は多くある。

[80] 注 8 で触れた研究会（「多様化する日本語教育」第 3 回研究会「ICT 時代における教師の授業設計を考える−日本語教育の現場の実践から」）でも、講師の浦由実氏は「学習者の自習方法の変化」と「人が伸ばすべき能力についてのとらえ方の変化」という 2 点をふまえ、学習者が主役になる能動的な授業や、対話を軸にした授業を行うようにしていると述べている。

[81] 本研究グループでは、2019 年 1 月～2 月に、初級～上級レベルの日本語学習者（留学生）6 名を対象に、自身の日本語学習の歴史をツール使用の観点から振り返ってもらうインタビュー調査を行っている（中村他 印刷中）。6 名はいずれも自らインタビュー調査への協力を申し出てくれたもので、自身の学習をよくモニターし、弱点を見つけ、その克服のために工夫を行いながら学習を進めている姿勢が共通して見られた。

[82] インターネット上で教育サービスが提供される学校のこと。開講されている講義の配信・視聴や、課題の提出、講師への質問などもすべてインターネットを通して行われる。

鈴木智美（すずきともみ）SUZUKI Tomomi 東京外国語大学
清水由貴子（しみずゆきこ）SHIMIZU Yukiko 聖心女子大学
中村彰（なかむらあきら）NAKAMURA Akira 東京外国語大学
渋谷博子（しぶやひろこ）SHIBUYA Hiroko クリエイティブ日本語学校

■本研究は以下の助成を受けて行われたものである。
日本学術振興会学術研究助成金平成 29 年度～31 年度基盤研究(C)「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」（課題番号：17K02842、研究代表者：鈴木智美、研究分担者：中村彰、清水由貴子、渋谷博子、藤村知子）

■本研究の実施にあたっては、下記の方々に大きな協力をいただいた。記して感謝いたします。
＜アンケート実施（実施順）＞
森本一樹先生（英国・リーズ大学）
ディヴナ・グルマッツ先生、正木みゆ先生（セルビア・ベオグラード大学）
吉岡慶子先生（オランダ・ライデン大学）
萬美保先生、小玉博昭先生（香港・香港大学）
タサニー・メーターピスィット先生（タイ・タマサート大学）
森田誠亮先生（エジプト・カイロ大学）
＜オンラインアンケート作成および実施＞
森田寿香氏（東京外国語大学留学生日本語教育センターIT 補佐：2018 年 3 月まで）
藤村知子氏（東京外国語大学国際日本学研究院教授、e ラーニング教材「JPLANG」共同開発者）
＜データ集計＞
泉大輔氏（東京外国語大学大学院博士後期課程国際日本専攻）

引用文献

伊藤英明・石井容子・武田素子・山下悠貴乃（2016）「日本語学習者のネット利用状況と学習サイトへの期待―海外 11 拠点の調査結果から―」『国際交流基金日本語教育紀要』第 12 号 pp.97-104
渋谷博子・清水由貴子（2016）「教室外学習支援の方法を探る―教師対象アンケートから見えてくるもの―」『日本語教育方法研究会誌』Vol.23 No.1 pp.30-31
渋谷博子・清水由貴子（2017）「日本語学習者および教師への学習ツールに関する調査―デジタル時代の教師の役割とは―」『日本語教育研究』63 号 pp.34-49
鈴木智美（2012）「留学生の辞書使用についての実態調査―東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 38 号 pp.1-16
鈴木智美（2013）「日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント―留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄の SCAT による質的分析を通して―」『東京外国語大学論集』第 86 号 pp.131-158
鈴木智美（2016）「日本語学習者は辞書からどのように言葉を探すのか―中級・中上級日本語学習者 7 名の辞書使用についての調査事例報告から―」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第 6 号 pp.1-23
鈴木智美（2017）「2016 年度夏学期『辞書を使おう』ワークショップ実践報告―初中級～中級レベルの日本語学習者の辞書ツール使用を考えるために―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 43 号 pp.177-190
鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子（2018）「予備教育課程の国費学部留学生の学習ツ

ール使用状況―2016～2017 年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 44 号 pp.195-217

鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子（2019a）「東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況―2016～2017 年度実施のアンケート調査の結果と分析―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 45 号 pp.221-238

鈴木智美・髙野愛子（2015）「中上級日本語学習者の辞書使用―作文時の辞書使用の詳細調査と文章表現のための辞書使用スキルアップを目指すワークショップ実践報― 」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 41 号 pp.137-156

鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子（2019b）「ICT 時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか―日本語教師を対象としたワークショップ実施報告―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 45 号 pp.239-255

田中信之（2015）「文章産出過程における辞書使用―中国人学習者の場合―」『日本語教育』162 号 pp.113-128

寺嶋弘道（2016）「日本語学習者のコロケーションの選択とその考察―DIC 法と DIC-LP 法の比較から―」『日本語教育』163 号 pp.79-94

寺嶋弘道・板井芳江（2019）「スマートフォン辞書アプリについての一考察」『日本語教育方法研究会誌』Vol.25 No.2 pp.66-67

當作靖彦（監修）李在鎬（編）（2019）『ICT×日本語教育―情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房

中村彰・鈴木智美・渋谷博子（印刷中）「日本語学習者の学習ツール使用の変遷をその学習歴から探る―初級から超級までの 6 名の留学生へのインタビュー調査に基づいて―」『東京外国語大学 国際日本学研究』プレ創刊号 pp.172-182

ムハンマド アル-ハキム ビン ナジルディン（2019）「日本語教育における辞書アプリ使用の有効性について―マレーシア政府派遣留学生を対象として―」東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程国際日本専攻日本語教育リカレントコース修士学位論文（未公刊）

村上吉文（2018）『SNS で外国語をマスターする《冒険家メソッド》』ココ出版

中途終了型発話文「～て。」の文法的特徴と意味についての考察
―複文におけるテ節との対応に着目して―

Grammatical Characteristics and Meanings of "~*te.*" Suspended Clauses: Correspondence with -*te* Subordinate Clauses

張 季媛

This paper analyzes the grammatical characteristics and meanings of "~*te.*" suspended clauses and mainly focuses on the correspondence with the -*te* subordinate clauses. The results of this study indicate that not all -*te* subordinate clauses can be used as "~*te.*" suspended clauses. First, from the correspondence between the degree of subordination and the -*te* subordinate clauses, "~*te.*" suspended clauses corresponding to any of the -*te* subordinate clauses A, B, and C can be observed. However, there is a considerable difference in the likelihood of the appearance of correspondence among the three classes. That is to say, "~*te.*" suspended clauses corresponding to the -*te* subordinate clause B are reported on significantly more occasions than the other two classes are. In addition, a substantial amount of volition particles of "~*te.*" suspended clauses has been found.

From a semantic perspective, the meanings of the "~*te.*" suspended clauses are thought to be based on the basic function of -*te* subordinate clauses. However, after examining the details of this correspondence, it was observed that the -*te* subordinate clause, which expresses a semantic relation of temporal sequence, cannot be used as a "~*te.*" suspended clause.

In addition, a substantial amount of the meaning of "explanation of circumstances," as indicated in previous studies, appears to be associated with two grammatical characteristics of "~*te.*" suspended clauses. The first is the amount of "~*te.*" suspended clauses that correspond to the -*te* subordinate clause B. The second is the amount of the volition particles of "~*te.*" suspended clauses. Further, these two grammatical characteristics of "~*te.*" suspended clauses appear to support the findings of previous studies on the grammatical aspect that the meaning of "explanation of circumstances" in "~*te.*" suspended clauses corresponds with the meaning of "cause or reason" in -*te* subordinate clauses.

【キーワード】中途終了型発話文「～て。」、テ節、従属節の従属度、述語的部分、意志性
"~*te.*" suspended clauses, -*te* subordinate clauses, the degree of subordination, particles, volition

1. 研究の目的と研究の対象

本稿の目的は、中途終了型発話文「～て。」を研究対象とし、その文法的特徴と意味を確認した上で、複文におけるテ節との対応関係を考察することを通し、複文で現れる全てのテ節が中途終了型発話文「～て。」として現れ得るかどうかを明らかにすることである。中途終了型発話文には、述部が省略されるタイプ（「お名前は。」など）と主節が省略されるタイプ（「本を読むのが好きだし。」など）の 2 種類がある（宇佐美 1995）とされる。後者のタイプは、形式上、主節が現れず、接続助詞で終わるものである。本稿の考察対象とする中途終了型発話文（以下「中途文」とする）「～て。」は、主節が現

れず、接続助詞「て」で終わるものであり、後者のタイプの 1 つである。なお、本稿では、「まだ慣れてなくてね。」のように「て」の後ろに終助詞が付されるものも考察範囲に含める。以下、本稿では、中途文「～て。」の述語的部分に下線を付して示す。

先行研究では、例えば、中途文「～けど。」、中途文「～から。」などに関する考察は多く行われているのに対し、同じく多く使われている中途文「～て。」に関する先行研究は、管見の限り、白川（2009）しか挙げられない。白川（2009）では、テ形節による「言いさし文」（本稿における中途文「～て。」）には「事情の説明」と「感嘆」の 2 つの意味があると指摘している。また、大堀（2002）では、構文的意味の検討に当たり、「テ接続」（本稿におけるテ節）が「中断節化」したもの（本稿における中途文「～て。」）が例として挙げられている。それについて、「テ接続は時間上の継起、理由、様態などの幅広い解釈を許すが、ある種の感嘆あるいは予想以上の出来事という意味が構文によって付与されている」（大堀 2002：130）とし、この「感嘆」という意味は、中途文という構文によって新しく付与される意味であるとしている。

上述したように、限られた研究の中で、中途文「～て。」の意味に関する記述は見られるが、そもそも複文で現れる全てのテ節が中途文「～て。」として現れ得るのか、もしそうでなければ、中途文として成り立つテ節には、どのような文法的特徴、或いは意味的特徴があるのかについてはまだわかっていない。テ節には、状態・様子、継起、並列、原因など、幅広い意味があると考えられる。その中では、例えば、「野菜を洗って、鍋に入れた。」のような時間的継起を表すテ節は、主節が現れないなら、意味不明なものになると考えられる。このように、複文で現れるテ節のうち、中途文「～て。」として現れにくいと考えられるものもあると思われる。また、南（1974）は、複文の従属節の従属度については、その従属節を A、B、C という 3 つの類に分けている。複文におけるテ節については、南（1974）では、その A、B、C 類のいずれとしてもあり得るとされる。一方、テ節の A、B、C 類の全てのものが、中途文「～て。」として現れ得るのか、中途文「～て。」とテ節の従属度との対応関係はどうであろうか、などについては明らかにされていない。また、本稿の考察データを観察したところ、「今日はちょっと先約があって。」、「ここに落ちて。」、「店長、大変だろうなと思って。」、「好きだって言われて。」、「荷物が重くて。」などのように、中途文「～て。」の述語的部分には、「ある」、「落ちる」、「思う」、「言われる」、「重い」などのような無意志性の性質を持つものが多く使用されていることがわかった。これらのことから、本稿では、複文におけるテ節の従属度との対応関係、及び述語的部分の意志性という 2 つの観点から、中途文「～て。」の文法的特徴を明らかにする。

さらに、白川（2009）は、「事情の説明」という意味は、複文におけるテ節の「原因・理由」を表す用法に準拠して説明できる（白川 2009：177）としている。しかし、「事情の説明」という意味とテ節のほかの意味との関係、及び「感嘆」という意味とテ節の意味との関係については述べていない。従って、中途文「～て。」とテ節の意味上の対応関係の全体像を明らかにする必要があると思われる。さらに、それらの意味上の特徴が文法上の特徴とどのように関連づけられるのかについても、考察する必要があると思われる。

2. 先行研究の検討

2.1 複文におけるテ節に関する研究

先行研究では、テ節に関する記述は数多くあり、国立国語研究所（1951）、南（1974、1993）、仁田（1997）、寺村（2006）、長辻（2012）、吉田（2012）、益岡（2013、2014）、日本語記述文法研究会（2017）

などが挙げられる。複文におけるテ節の意味に関する記述については、それぞれの先行研究において使われる用語が多少異なるところがあるが、基本的に、テ節には、①状態・様子、②継起、③並列、④原因・理由という 4 つの意味があると整理できる。

2.1.1 複文におけるテ節の従属度に関する研究

南（1974）は、従属句における述語的部分の要素と述語的部分以外の要素の現れ方に基づき、接続表現を A、B、C という 3 つの類に分けている。A 類の従属度が最も高く、C 類の従属度が最も低いとされる。B 類の従属度は A 類と C 類の中間レベルである。テ節は、A、B、C いずれの類にも現れ得るとし、それぞれの類において異なる意味を表すとされる。

まず、形式上から見ると、テ節の述語的部分において、A 類では、「丁寧の形」及び「打消しの形」は現れ得ない（南 1974：128−129）。B 類と C 類のテ節については、述語的部分に現れ得る要素に違いはなく、述語的部分以外の要素によって分別される。主として、提示のことば（「は」など）、及び「おそらく」、「たぶん」、「まさか」などの陳述副詞というような要素が、C 類には存在可能であるが、B 類のテ節のほうには、現れ得ない（南 1974：128−129）。

張（2018）では、南（1974）の従属句の分類基準に基づき、各接続助詞を用いた中途文の出現状況を観察し、中途文という形式として現れ得る接続助詞は、ほぼ南（1974）の分類による B 類か C 類のいずれかであるという傾向が見られる（張 2018：15−16）としている。しかし、接続助詞を用いた中途文の全体像については考察されているが、それぞれの接続助詞を用いた中途文について個別に記述はされていない。本稿の考察データを観察したところ、中途文として成り立つことができるテ節については、B 類か C 類のいずれかのものであると記述するだけではまとめることができないということがわかった。例えば、中途文「～て。」には、「どうしたんですか？ぼんやりして。」（テレビドラマ『結婚しない』第 9 回）のように、文法上、A 類のテ節と考えられる[1]ものも見られた。従って、文法上、中途文「～て。」の述語的部分の構成要素の現れ方を観察することを通し、複文におけるテ節の従属度との対応関係を明らかにする必要がある。

次に、意味の面から見ると、南（1974）では、A 類のテ節は、状態・様子を表すもの（「椅子にかけて食事をする。」（南 1974：121））としている。B 類のテ節には、①継起的または並列的な動作・状態を表すもの（「窓をパタンと閉めて、出て行ってしまった。」（南 1974：123））と、②原因・理由を表すもの（「風邪をひいて、休みました。」（南 1974：122））という 2 種類のものがあるとされる。C 類のものについては、「たぶん A 社は今秋新機種を発表する予定でありまして、B 社も当然なんらかの対抗策をとるものと思われます。」（南 1974：124）という例が挙げられているが、その意味については明確に記述されていない。

意味の面から観察すると、複文で使用されるテ節のうち、中途文「～て。」として現れにくいものも見られるのではないだろうか。例えば、上記の「窓をパタンと閉めて、出て行ってしまった。」という継起的または並列的な動作・状態を表す B 類のものについては、「窓を閉める」と「出て行った」という 2 つの動作が、この順に並んで表現しなければ、「継起的」という時間的前後関係自体を表すことは難しいと考えられる。その「継起的な動作・状態」という意味を実現するには、従属節と主節がセッ

[1] この場合、「ぼんやりして」が丁寧の形（「*ぼんやりしまして」）、及び打消しの形（「*ぼんやりしなくて」）としてあり得ないため、南（1974）の形式上の分類基準によると、A 類のものと対応すると考えられる。

トで連続して使用するのが必須であるのではないかと思われる。従って、複文で現れる全てのテ節が中途文「～て。」として使えるかどうかを明らかにするには、意味の面からも、テ節との対応関係を考察する必要がある。

2.1.2 複文におけるテ節の意志性に関する研究

先行研究では、複文におけるテ節の意志性については、時間の流れに沿って事態が生起する際、2 つの事態が意志的な動きであれば、継起を表すと解釈されるのに対し、従属節または主節のどちらか、或いは両方が無意志的な動きである場合、原因・理由を表す（日本語記述文法研究会 2017 : 279−285）と指摘されている。このように、複文におけるテ節の意志性が、その意味と関連している。

一方、本稿の考察データにおいて、中途文「～て。」の述語的部分を観察すると、「小さいけど、噴水があって。」（テレビドラマ『結婚しない』第 1 回）、「お母さんに怒られて。」（テレビドラマ『ディア・シスター』第 10 回）、「最近、肩凝りがひどくて。」（テレビドラマ『日本人の知らない日本語』第 7 回）などのように、「ある」、「怒られる」、「ひどい」などのような無意志性を持つ述語が多いという傾向が見られた。従って、中途文「～て。」の述語的部分に着目し、意志性という側面から、中途文「～て。」の文法的特徴及びその意味との対応関係を考察する必要があると考えられる。

2.2 中途文「～て。」に関する研究

先行研究では、中途文「～て。」には、①事情の説明、②感嘆の 2 つの意味があるとし、感嘆という意味は、陳謝、感謝、非難、感嘆（未分化）[2]の 4 つに分けられる（白川 2009 : 152−153）とされている。以下の例（1）と例（2）が、それぞれ事情の説明、及び陳謝を表すものである。

（1）A : あの子を家に入れるって！？
B : **んー浅山久央くんのご両親は海外を飛び回ってる音楽家で連絡がとれなくって。**彼は一人暮らしだしケガが治るまではせめてーね
A : でもあの子ヘンなのよ
（喜多尚江「イチゴとメロンとオバケ」p.88　白川（2009 : 146）（13））

（2）響子 : **あ、あのその節はお騒がせしまして……**
近所の奥さん : いーのよ　いーのよ！！
（高橋留美子『めぞん一刻⑴』p.199　白川（2009 : 149）（19））

例（1）は、B が浅山久央を家に置くことに対して A が難色を示したことを受け、B が「だから、自分がそのようなことをしたのは、仕方がないことだったのだ」と事情を説明して、自分の行為の正当性を主張しようとしたと解釈される（白川 2009 : 146）とされる。

例（2）は、母語話者ならば、これが、陳謝を意図して発話されたものであることを即時に理解する

[2] 白川（2009）では、「感嘆」という意味の下位分類には、「陳謝」、「感謝」、「非難」のように、比較的分化しているものもあれば、話者自身がその感情の種類に分け入ってまで明示的に表現していないものもある（白川 2009 : 148）としている。後者のものについては、「感嘆」という用語が最適かどうかわからないが、少なくとも「感嘆」とでも言うしかないくらいに、感情の表現が未分化である（白川 2009 : 148）としている。本稿において、この種類のものを「感嘆（未分化）」と表記することとする。

ことができるとし、日本語において陳謝という言語行動を遂行する際に好んで用いられる文型である（白川 2009：149）とされる。この例（2）は、「その節はお騒がせしまして、申し訳ありませんでした。」という意味と解釈できるだろう。

また、第 1 節においても述べた通り、先行研究では、中途文「～て。」の持つ「事情の説明」という意味は、複文におけるテ節の「原因・理由」という用法に準拠して説明できる（白川 2009：177）とされる。先行研究では、それについて詳しく論じていないが、本稿では、5.2.3 節において記述する。一方、中途文「～て。」の持つ「感嘆」という意味も、同じくテ節の「原因・理由」という意味とも対応するのではないかと思われる。例えば、上記の例（2）では、上述した通り、中途文「あのその節はお騒がせしまして。」は、確かに「陳謝」の意味を表している。ただし、話し手が「その節はお騒がせしました」ということを理由として挙げており、この理由で自分が「申し訳ない」という陳謝の気持ちを持つようになったと解釈できるだろう。また、中途文「～て。」の持つ「事情の説明」及び「感嘆」という 2 つの意味と、テ節の持つほかの意味との対応関係についてもまだわかっていない。中途文「～て。」と複文におけるテ節との意味上の対応関係の全体像を明らかにする必要があると思われる。

さらに、上述した通り、中途文「～て。」の「事情の説明」及び「感嘆」という 2 つの意味のいずれもテ節の「原因・理由」という意味と対応すると考えられる点については、さかのぼって考えてみると、テ節の「関係づける」という基本的機能によるのではないかと思われる。この中途文「～て。」と複文におけるテ節との関係については、5.2 節において詳しく記述する。

以上の先行研究の検討を踏まえ、解決すべき課題として以下の 2 つが設定される。

① 複文で現れる全てのテ節が中途文「～て。」として現れ得るのか。テ節の従属度との対応関係、及びその述語的部分の意志性という 2 つの観点から、中途文「～て。」としてあり得るテ節の文法的特徴を見る。

② 複文におけるテ節との対応に着目してみると、先行研究において指摘されている「事情の説明」、及び「感嘆」という 2 つの中途文「～て。」の意味が、複文におけるテ節の「関係づける」という基本的機能に基づいて生じるものではないかと考えられる。この中途文「～て。」とテ節との意味上の対応関係の全体像はどうであろうか。また、中途文「～て。」の持つ意味が、①において明らかにするその文法的特徴とどのように関連づけられているのか。

3. 研究方法

本稿では、データ収集の対象として、『日本人の知らない日本語』（2010 年放送、全 12 話）、『結婚しない』（2012 年放送、全 11 話）、『あぽやん～走る国際空港』（2013 年放送、全 10 話）、『ディア・シスター』（2014 年放送、全 10 話）という 4 本の現代日本のテレビドラマを用いた [3]。

中途文「～て。」を抽出するに当たり、以下の 3 つのものは本稿の分析の対象外とすることとした。

① 補助用言に連なるもの

[3] 本稿のデータ収集に当たり、①文字化、②コーディング、③接続助詞を用いた文の抽出、④中途文の弁別という 4 つの手順（張 2018：6-7）に基づき、接続助詞を用いた中途文を抽出した。また、データの処理において、a.文脈上、主節が現れているもの、b.複合辞など定着した形のもの、c.繰り返すもの、d.話者の自己意志でなく、他力で中断されたものという 4 つのもの（張 2018：7-10）を分析対象外としてデータから外した。このプロセスを経て収集したデータから、本稿の考察対象とする接続助詞「て」を用いた中途文「～て。」を抽出することとした。

先行研究では、「『お願い、帰って。』のような命令的な用法については、とりあえず除外しておく」（白川 2009：142）と記述されており、本稿においても、「～てくださる」、「～てみる」、「～ている」などのような補助用言に連なるものは考察対象外とする。

② 慣用的用法としているもの

「～について」、「～において」、「～に関して」などの慣用的用法も分析対象外とする。

③ 引用として解釈できるもの

「堀之内さんから電話かかってきて、先輩のこと見とけって。」（テレビドラマ『あぽやん～走る国際空港』第 2 回）のように、「って」というような引用の用法として解釈できるものは、本稿の分析の対象として扱わない。

抽出したデータから以上の 3 つのものを手作業で外した結果、299 例の中途文「～て。」が得られた。本稿では、この 299 例の中途文「～て。」をもとに、考察していく。

4. 中途文「～て。」の文法的特徴に関する考察

4.1 中途文「～て。」とテ節の従属度との対応関係

本節では、中途文「～て。」の文法上の構成要素の現れ方を観察することにより、複文におけるテ節の従属度（南 1974）との対応関係を考察した。具体的には、文法上、中途文「～て。」に現れ得る要素を観察し、その構成要素の現れ方が複文におけるテ節の A、B、C のどの類と対応するのかを確認した。確認した結果、中途文「～て。」には、複文におけるテ節の 3 つの類のいずれのものとも対応するものも見られるが、B 類と対応するものが極めて多いという傾向が見られた。

その対応関係を判断するには、2.1.1 節において記述した基準（南 1974）に基づくこととする。まず、「丁寧の形」、及び「打消しの形」が述語的部分に現れ得ないものは、A 類のものとして扱うこととした。例えば、「どうしたの、変な顔して。」（テレビドラマ『日本人の知らない日本語』第 2 回）という例では、その述語部分である「～顔して」が、この場合、丁寧の形（「*～顔しまして」）、及び打消しの形（「*～顔しなくて」）となると、不自然であると考えられるため、このようなものは A 類のものとして扱うこととした。次に、提示のことば（「は」など）、及び「おそらく」、「たぶん」、「まさか」などのような要素は A 類や B 類に存在不可能であるため、これらの要素が現れ得るものは、C 類と判定する。例えば、本稿の考察データでは、「もしかして、そのうち、その庭、春子さんちの庭になったりして。」（テレビドラマ『結婚しない』第 9 回）という例が見られる。この例において、「そのうち、その庭（は）、春子さんちの庭になったりして。」のように、提示のことば「は」を入れても不自然ではない。また、ここには、「もしかして」という陳述副詞も見られるため、このようなものは C 類のものとして扱うこととする。

上述した手順で観察した結果、299 例のうち、B 類と対応するものが 294 例と、全体の 9 割以上（98.33%）を占め、極めて多いという傾向が見られることがわかった。そのほかの A 類と C 類に対応するものは少なく、それぞれ 3 例（1.00%）と 2 例（0.67%）である。このように、中途文「～て。」と、テ節の従属度との対応関係については、A、B、C 類のいずれの類とも対応するものが現れ得るが、その出現傾向にかなりの差が見られることがわかった。

ただし、意味の面から考察すると、中途文「～て。」として現れにくいと考えられるものもあることがわかった。なお、中途文「～て。」の意味については、第 5 節において記述する。

4.2 中途文「～て。」の述語的部分の意志性に関する考察

本節では、中途文「～て。」の述語的部分の意志性という側面から、その文法的特徴を考察した。その結果、中途文「～て。」の述語的部分において、無意志性を持つものが極めて多いということがわかった。一方、意志性の述語を持つものについては、その中途文「～て。」全体を観察すると、そこに意志性が見られないものも見られた。

4.2.1 無意志性の述語を持つ中途文「～て。」

中途文「～て。」の述語的部分において、299 例のうち、無意志性の性質を持つものは、273 例と、全体の 9 割以上（91.30%）を占め、極めて多いということがわかった。その述語的部分には、以下の表 1 に示す 11 種類のものが見られた。

表 1　中途文「～て。」に現れる無意志性の性質を持つ述語の種類

無意志性の述語の種類	例
①基本的に無意志動詞と見なせるもの	「あって」「落ちて」「消えて」
②心的作用を表す動詞	「思って」「気づいて」「困って」
③条件付きの無意志動詞	「なって」「～から聞いて」
④可能動詞	「会えて」
⑤「～れる／られる」をとる受け身的な意味を持つもの	「言われて」「遊ばれて」「追われて」
⑥「～てしまう」「～てやがる」などの形をとるもの	「起こってしまって」「勝手にエアコンつかいやがって」
⑦「～てくれる」をとるもの	「気に入ってくれて」「言ってくれて」「一緒にいてくれて」
⑧「～ていて」の形をしているもの	「マンション買おうって言ってて」「時間に追われてて」
⑨形容詞／名詞述語	「虚しくて」「重くて」「忙しくて」「バツイチでして」
⑩形容詞／名詞述語の否定形	「～なくて」「～じゃなくて」
⑪意志動詞が無意志的に用いられるもの	「この間のお礼も兼ねて」「こんな遅くまで振り回して」

①「基本的に無意志動詞と見なせるもの」については、「ある」、「落ちる」、「消える」などのように、もともと無意志動詞のものである。②の「思って」、「気づいて」、「困って」などの述語的部分は、心的作用を表す動詞が使用されている。先行研究では、心的作用を表す動詞の大半は無意志動詞に分類され、知覚を表す動詞もほぼ無意志動詞になるとしている。「思う」は心的作用を表す動詞の代表格のような語であり、人間が「思う」という作用自体を制御することはできず、「思う」という作用を意志によって停止したり、発動したりはできず、無意志動詞である（杉本 1997：39）とされる。従って、この心的作用を表す動詞から成る述語も無意志性のものと考えられる。③の「条件付きの無意志動詞」については、例えば、「なる」という動詞は、意志動詞と無意志動詞のどちらとしても使えるものである。だが、本稿の考察データでは、「不安になって」、「お世話になって」のように用いられており、無意志性の述語と考えられる。また、「聞く」という動詞についても、本稿の考察データでは、「～から聞いて」のように用いられており、話し手が意図的に誰かに何かを聞くのではなく、非意図的に、或いは偶然に情報を得たと理解できるため、無意志性の述語と考えられる。④可能動詞と⑤受け身の形

をとる表現も話し手の意志によって制御できるものではないため、無意志性の性質を持つ述語であると考えられる。⑥の「しまって／ちゃって」や「やがって」などの表現は、形容詞のテ形で言い終わる場合と同じように、感情の起因を示している（三枝 2006：25）とされる。「～てしまう」については、「完了」と「後悔・残念」という 2 つの用法があるが、本稿の考察データでは、「起こってしまって」のように、取返しのつかないことをしてしまったという「後悔・残念」として使われており、これは話し手の意志によって決められるものではないため、無意志性の述語であると考えられる。

⑦「～てくれる」をとるものについては、「～てもらう／いただく」は「もらおう」「もらうつもり」「もらいたい」「もらわせる」などの意志を伴う語形が用いられる動詞であるのに対して、「～てくれる／くださる」は聞き手への働きかけがない無意志性動詞であり、意志・志向形である「くれよう」や願望を表す「くれたい」などの語形では用いられない動詞である（原田 2007：123）としている。従って、この「～てくれる」の形をとるものが、無意志性の述語であると考えられる。⑧「～ていて」の形をしているものについては、「マンション買おうって言ってて」、「時間に追われてて」のように、「マンションを買おうと言っている」という状態、「時間に追われている」という状態を描写している。これらは、状態性の述語であると考えられるため、本稿では、無意志性のものとして扱うこととする。⑨と⑩の形容詞・名詞述語、及びそれらの否定形のものは、全て無意志性の述語であると考えられる。

最後に、⑪意志動詞が無意志的に用いられるものについては、例えば、「兼ねる」、「振り回す」は意志動詞であるが、本稿の考察データでは、「この間のお礼も兼ねて」、「こんな遅くまで振り回して」のように用いられており、それぞれ「この間のお礼も兼ねて、ごちそうするよ。」、「こんな遅くまで振り回してしまって、申し訳ない。」と理解できるだろう。これらは全て無意志的に用いられていると考えられる。

4.2.2 意志性の述語を持つ中途文「～て。」

本稿の調査では、299 例のうち、意志性の性質を持つものは 26 例（8.70%）であり、無意志性の述語を持つ中途文「～て。」と比べれば、かなり少数である。しかし、この少数のものの中にも、意志性の述語が使われているが、中途文「～て。」全体として観察すると、そこに意志性が見られないものも観察された。

この中では、「また、うまいこと<u>言って</u>。」「また、そんな強がり<u>言って</u>。」「人の旦那に手え<u>出して</u>。」などのように、行為を行う主体が話し手ではなく、相手、或いは話題にある第三者である場合に使われているものが見られる。このようなものは、意志性の述語が使われているが、中途文「～て。」全体に着目して観察すると、話し手が何らかの事態や事柄について描写したり、叙述したりしているものと捉えられるのではないだろうか。これらのものは、その意志性を持つ述語によって意図的に何かを行ったことを表すのではなく、中途文「～て。」により、何らかのことを物語るように述べているものと思われる。例えば、以下の例（3）のようなものである。

（3）千春：大丈夫ですか？
春子：うん。そっちは？ちゃんと頑張ってきた？
千春：ええ、春子さんに負けないように。春子さんも頑張りましたね。
春子：うん、先生が頑張ったんだけどね。
千春：**また、そんな強がり<u>言って</u>。**

春子：でも、千春がいてくれて、千春に出会えて、ホントによかった。
千春：私の方が春子さんに出会えてよかったです。
春子：ありがとう。

（テレビドラマ『結婚しない』第 11 回）

例（3）は、話し手の千春が、相手の春子が手術を受けた後に、お見合いに来た時の会話である。話し手の「春子さんも頑張りましたね。」という話に対し、相手の春子が「うん、先生が頑張ったんだけどね。」と強がって返答をした。手術を受けたばかりなのに、このような平気なふりをしている春子の姿に対し、話し手の千春が、中途文「また、そんな強がり言って。」により、相手の「強がって言っている」という姿を描写していると思われる。このように、動作を行う主体が話し手ではない中途文「～て。」は、意志性の述語が使われているが、意図的な動作というより、描写・叙述の性質がより強く、そこに意志性が見られないのではないかと思われる。

5. 中途文「～て。」の意味に関する考察

5.1 中途文「～て。」とテ節との対応関係の全体像

本節では、まず、抽出された 299 例の中途文「～て。」の意味を確認した。本稿では、意味の記述に当たり、白川（2009）において指摘されている①事情の説明、及び②感嘆（「陳謝」、「感謝」、「非難」、「感嘆（未分化）」）という分類に基づき、行うこととする。確認した結果を以下の表 2 に整理した。

表 2　中途文「～て。」の各意味の出現状況

意味	用例数	割合
事情の説明	267	89.30%
非難	11	3.68%
感嘆（未分化）	10	3.34%
陳謝	9	3.01%
感謝	2	0.67%
総計	299	100.00%

また、本節では、第 4 節の考察結果、及び表 2 を基に、中途文「～て。」と、テ節の従属度との対応関係、その述語的部分の意志性との対応関係、及びテ節との意味上の対応関係の全体像を以下の表 3 に整理した。

まず、複文におけるテ節の従属度の A、B、C 類を軸にし、それぞれの類において、その述語的部分の意志性と意味を先行研究（2.1.1 節、及び 2.1.2 節）に基づき、表 3 の左側の「複文におけるテ節」の部分に整理した。なお、C 類のテ節の意味については、先行研究において記述されていないが、本稿では、「並列的な節や文の接続」と扱い、5.2.4 節において記述する。また、C 類のテ節の述語的部分の意志性についても、先行研究において記述されていない。本稿においても、複文におけるテ節のデータを収集しておらず、明確にその意志性を把握することができないため、「不明」として扱うこととする。次に、4.1 節の考察結果に基づき、テ節の従属度と対応する中途文「～て。」の用例数を表 3 の右側の「中途文『～て。』」の部分に入れた。テ節の従属度と対応する各類の中途文「～て。」の述語的部分の意志性についても、4.2 節の考察結果に基づき、表 3 の右から 3 番目の列にまとめた。最後に、確認した中途文「～て。」の意味については、各類において、意志性と無意志性の述語的部分とそれぞ

れ対応する形で、表 3 に整理した。テ節及び中途文「～て。」の各類に合わせた例もそれぞれ表に入れた。

表 3　中途文「～て。」と複文におけるテ節との対応関係の全体像

<table>
<tr><th colspan="4">複文におけるテ節</th><th colspan="4">中途文「～て。」</th></tr>
<tr><th>従属度</th><th>意志性</th><th>意味</th><th>例</th><th>従属度（文法上の構成要素の現れ方に基づき、対応するものの用例数）</th><th>意志性</th><th>意味</th><th>例</th></tr>
<tr><td>A</td><td>意志性
無意志性</td><td>状態・様子</td><td>椅子にかけて食事をする。
（南1974：122）</td><td>3例</td><td>無意志性
（3例）</td><td>感嘆（未分化）
（3例）</td><td>どうしたの、変な顔して。
（テレビドラマ『日本人の知らない日本語』第2回）</td></tr>
<tr><td>B</td><td>意志性</td><td>継起的または並列的な動作・状態</td><td>窓をパタンと閉めて、出て行ってしまった。
（南1974：122-123）</td><td colspan="4">対応するものなし</td></tr>
<tr><td rowspan="6">B</td><td rowspan="6">意志性
無意志性</td><td rowspan="6">原因・理由</td><td rowspan="6">風邪をひいて、休みました。
（南1974：122）</td><td rowspan="6">294例</td><td rowspan="4">意志性
（25例）</td><td>感嘆（未分化）
（2例）</td><td rowspan="6">①助かった。ひとりじゃとても運べなくて。
（高橋留美子『めぞん一刻1』.p.177　白川（2009：145（12））の一部）
②あ、あのその節はお騒がせしまして……
（高橋留美子『めぞん一刻1』p.199　白川（2009：149（19））の一部）</td></tr>
<tr><td>非難（2例）</td></tr>
<tr><td>陳謝（2例）</td></tr>
<tr><td>事情の説明（19例）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">無意志性
（269例）</td><td>感謝（2例）</td></tr>
<tr><td>感嘆（未分化）
（5例）</td></tr>
<tr><td>陳謝（7例）</td></tr>
<tr><td>非難（8例）</td></tr>
<tr><td>事情の説明（247例）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">C</td><td rowspan="2">不明</td><td rowspan="2">並列的な節や文の接続
（先行研究において記述なし）</td><td rowspan="2">たぶんA社は今秋新機種を発表する予定でありまして、B社も当然なんらかの対抗策をとるものと思われます。
（南1974：124）</td><td rowspan="2">2例</td><td>意志性
（1例）</td><td>非難（1例）</td><td>①人の旦那に手えだして。
（テレビドラマ『あぽやん～走る国際空港』第5回）</td></tr>
<tr><td>無意志性
（1例）</td><td>事情の説明（1例）</td><td>②もしかして、そのうち、その庭、春子さんちの庭になったりして。
（テレビドラマ『結婚しない』第9回）</td></tr>
</table>

この表 3 に基づき、中途文「～て。」とテ節の意味上の対応関係を 5.2 節において記述し、中途文「～て。」の意味とその文法的特徴との関わりを 5.3 節において記述する。

5.2 中途文「～て。」とテ節の意味上の対応関係に関する考察

2.2 節において述べた通り、複文におけるテ節との対応関係に着目してみると、中途文「～て。」の

持つ意味は、テ節の「関係づける」という基本的機能に基づいて生じるのではないかと考えられる。白川（2009）では、「事情の説明」を表す中途文「～て。」は、従属節（本稿における中途文「～て。」）の内容事態と関係づけるべき事態が、言語的・非言語的文脈上に存在するとしている。それに対して、「感嘆」を表す中途文「～て。」は、従属節（同上）を提示することによって話者の評価的態度を表出し、文脈に依存せずに出てくる意味のように見えるが、言語外の常識に支えられて意味解釈が可能になる表現である（白川 2009：160−161）としている。即ち、いずれの意味を持つ中途文「～て。」であっても、中途文「～て。」によって表された事態を、文脈上の内容事態、或いは言語外の常識など、何らかのことと関係づけることによってその意味を実現していると考えられる。この「関係づける」という機能は、テ節から引き継いだものなのではないだろうか。なぜならば、テ形接続（本稿における「テ節」）はそれが表す事態と主節の事態とを積極的に関係づけるという機能を持つもの（益岡 2013：167−169）とされるからである。テ節は、それ自体が持つ意味が希薄であり、その意味の解釈は、前後の事態や文脈に依存する（日本語記述文法研究会 2017：280）とされる。中途文「～て。」の持つ意味は、複文におけるテ節の持つこの「関係づける」という基本的機能に基づいて生じるものではないかと考えられる。さらに言うと、複文におけるテ節が関係づけるのは主節であるのに対して、主節の現れない中途文「～て。」において「～て」が関係づけるのは前後の文脈、或いは文脈外の常識などであり、その関係づける範囲が、複文におけるテ節よりも広いのではないかと思われる。

ただし、表 3 において示している通り、複文におけるテ節との対応関係の詳細を観察すると、中途文「～て。」として現れにくいと考えられるものもあることがわかった。以下、それぞれの対応関係について詳しく記述する。

5.2.1 「状態・様子」を表すテ節と対応する中途文「～て。」

複文におけるテ節の A 類と対応する中途文「～て。」は 3 例しか見られず、3 例全てが、白川（2009）において指摘されている「感嘆（未分化）」という意味を表すものである。ここでの「感嘆（未分化）」という意味は、2.2 節においても述べた通り、「陳謝」、「感謝」、「非難」と異なり、はっきりした感情を表していないと考えられるものである。白川（2009）はこのことについて、話し手は、中途文「～て。」で描写されたことの生起自体に強く感ずるところがあって発話しているのだが、その感情を分析することはせずに、ただ感じ入っている状態にいることを表現しており、その感情の種類に分け入ってまで明示的に表現していない（白川 2009：148）としている。この 3 例はいずれも、A 類のテ節の意味を引き継ぎ、状態・様子を表す意味を持つものと思われる。それと同時に、話し手が、相手の状況を描写することによって、相手の様子はいつもと違うと感じたことを表していると思われる。例えば、以下の例（4）のようなものである。

（4）真理子：どうしたんですか？<u>ぼんやりして</u>。
　　千　春：えっ？
　　森　田：何か、あったんですか？
　　千　春：ううん、何でもない。
　　真理子：千春さん？
　　千　春：あっ、ほら、もう開店時間。

（テレビドラマ『結婚しない』第 9 回）

例（4）は、旅行会社で働く千春が、開店前に店長に呼ばれ、契約の更新ができないということを知らされた後、その件について何も知らない同僚たちとの会話である。話し手の真理子が、お昼を食べた後に職場に戻ってきて、同僚の千春がぼんやりしている様子を見かけ、「どうしたんですか？ぼんやりして。」を通し、千春に状況を尋ねている。話し手が、相手の千春の様子を描写していると同時に、相手の様子はいつもと違うと感じたことを表していると思われる。

また、本稿の抽出した残りの 2 例は、「どうした？改まって。」（テレビドラマ『結婚しない』第 9 回）と「どうしたの、変な顔して。」（テレビドラマ『日本人の知らない日本語』第 2 回）というものである。A 類のテ節と対応する中途文「～て。」については、3 例しか見られなかったが、この 3 例にはいずれも「どうしたんですか／どうした／どうしたの」というような相手に理由や状況をたずねる表現が現れていることが観察された。

5.2.2 「継起的または並列的な動作・状態」を表すテ節と対応する中途文「～て。」

表 3 に示している通り、「継起的または並列的な動作・状態」を表すテ節と対応する例は見られず、これに対応する中途文「～て。」は意味的に考えにくいと思われる。

まず、「継起的動作・状態」を表すテ節は、テ節によって接続する従属節と主節の関係は、時間的前後関係にある。このような性質を持つテ節は、その主節が従属節の後に続き、連続して表現されなければ、その「時間的前後関係」を表す「継起的」という意味自体を表すことは難しいと考えられるため、主節の現れない中途文「～て。」は意味的に考えにくいと思われる。

次に、「並列的な動作・状態」を表すテ節は、テ節によって接続する従属節と主節が並列という関係を実現するには、2 つの節が並んで存在することが必須であると考えられるため、主節がなければ、当然並列という意味自体を表すことは難しいと思われる。従って、この類と対応する中途文「～て。」の存在も意味的には考えにくいと思われる。

5.2.3 「原因・理由」を表すテ節と対応する中途文「～て。」

この意味を表すテ節に対応する中途文「～て。」は計 292 例あり、最も多い。2.2 節において述べた通り、白川（2009）は、「事情の説明」を表す中途文「～て。」は、「原因・理由」を表す複文におけるテ節と関連づけられているとしている。ただし、本稿の考察データを観察した結果、この「原因・理由」を表すテ節と関連づけられるのは、「事情の説明」という意味だけでなく、白川（2009）において指摘されている全ての意味ではないかということがわかった。表 3 において示している通り、①事情の説明（266 例）、②陳謝（9 例）、③感謝（2 例）、④非難（10 例）、⑤感嘆（未分化）（7 例）という 5 つの意味を表す中途文「～て。」は、いずれも「原因・理由」を表すテ節と対応していると思われる。

まず、「事情の説明」を表す中途文「～て。」と「原因・理由」を表すテ節との関係づけについて記述する。例えば、以下の例（5）のようなものである。

（5）森尾：すいません、騒がしくて。
古賀：楽しいご家族だね。
森尾：ホントにそう思ってます？
古賀：もちろん。うちの家族とは…ちょっとケンカしちゃったからね。
森尾：ケンカ？

古賀：**海外移住なんて、やめた方がいいって言われちゃって。**
森尾：反対されてるんだ。
古賀：うん…まあ、家族の気持ちも分かるんだけどね。私も少し前までは、30 過ぎて夢を追いかけるなんて無理って諦めてたから。
森尾：じゃあ…どうしてバンクーバーに行こうと思ったんですか？
（テレビドラマ『あぽやん～走る国際空港』第 6 回）

例（5）は、同じく空港で働く森尾と古賀が、森尾の実家の経営している飲食店で食事をしながら、話をしている場面である。例（5）は、相手の森尾の「ケンカ？」という疑問を受け、話し手の古賀が、中途文「海外移住なんて、やめた方がいいって言われちゃって。」により、「海外移住を家族に反対されている」と相手の森尾に事情を説明している。この例（5）では、話し手の古賀が、「家族から海外移住のことに反対されている」ということを理由として挙げており、「この理由で家族とケンカしたのだ」と相手の森尾に事情を説明していると考えられる。このように、「事情の説明」を表す中途文「～て。」は、「原因・理由」を表すテ節と対応していると考えられるであろう。

次に、「感嘆」を表す中途文「～て。」と「原因・理由」を表すテ節との関係づけについて記述する。以下の例（6）は、「感嘆」の下位分類のうち、「陳謝」を表すものである。

（6）工藤：すみません、ここのバイトなんですけど。
春子：ああ、いつまで来てもらえるか、決めなきゃね。パリには、いつ、たつの？
工藤：再来週です。
春子：じゃあ、準備とか、色々あるだろうから、来週いっぱいかな？
工藤：すみません、バタバタと。**結局、こんなに押し迫ってしまって。**
春子：ううん、大きな決断だもん。
（テレビドラマ『結婚しない』第 9 回）

例（6）は、話し手の工藤がバイト先で、いつまでやれるかということを店長の春子に伝える場面の会話である。話し手の工藤は、「バイトを辞めることを伝えるのがぎりぎりになってしまった」ということから、「色々迷惑をかけて申し訳ない」と思っている。話し手の工藤が、中途文「結局、こんなに押し迫ってしまって。」により、自分の「申し訳ない」という「陳謝」の気持ちを表していると思われる。この例（6）の中途文「～て。」は、「すみません、バタバタと。」という文脈上の事態、及び「普通、バイトや仕事などを辞める時、早めに言っておいたほうがいい」という言語外の常識などと関係づけ、確かに「陳謝」の意味を表している。ただし、テ節の意味との対応に着目して観察すると、この例（6）のような「陳謝」を表すものも「事情の説明」という意味と同じく、テ節の持つ「原因・理由」という意味に準拠して説明できるのではないかと思われる。上に述べた通り、中途文「結局、こんなに押し迫ってしまって。」によって表される「伝えるのがぎりぎりとなり、こんなに押し迫ってしまった」という事態が、話し手に「陳謝」という感情をもたらした原因であると考えられるであろう。このように、中途文「～て。」の持つ「陳謝」という意味も、複文におけるテ節の持つ「原因・理由」という意味とも対応していると思われる。白川（2009）において指摘されている「感謝」、「非難」、「感嘆（未分化）」というほかの 3 つの意味を表す中途文「～て。」のいずれも、同じく「原因・理由」を

表すテ節と対応することが観察された。

5.2.4　C 類のテ節と対応する中途文「～て。」

2.1.1 節において述べた通り、先行研究では、この C 類の複文におけるテ節については、「たぶん A 社は今秋新機種を発表する予定でありまして、B 社も当然なんらかの対抗策をとるものと思われます。」（南 1974 : 124）という例だけが挙げられており、その意味については記述されていない。本稿では、南（1974）において挙げられている例に即して、C 類のテ節の意味を見てみる。この C 類のテ節は、「状態・様子」や「原因・理由」などのような具体的な意味を持っておらず、「並列的な節や文の接続」と扱うしかないと思われる。「関係づける」というテ節の基本的機能が働き、2 つの独立した発話の並列を行っていると考えられる。

一方、この C 類と対応する中途文「～て。」は、本稿では、2 例のみ抽出した。白川（2009）において指摘されている中途文「～て。」の意味に基づいて判断した結果、「事情の説明」を表すものと、「非難」を表すものが 1 例ずつ見られることがわかった。この 2 例の中途文「～て。」の意味は、いずれも C 類のテ節の「関係づけて接続する」という意味を引き継いで生じるものであると考えられる。この抽出した 2 例の中途文「～て。」は、それぞれ、文脈上の事態と関係づけ、「事情の説明」という意味（例（7））、及び言語外の常識と関係づけ、「非難」という意味（例（8））を表しているのではないかと思われる。

（7）千春：ポインセチアの花束って、誰かにプレゼントですか？
春子：プレゼントっていうか…麻衣ちゃんの大学の教授がね、実家の庭をデザインしてほしいって言ってくれて。そのお礼というか、まあ、季節だしね。
千春：ふーん、ガーデンデザインまた始めることにしたんですか？
春子：まあ、小さいところからね。仕事として、成り立つかどうかまだ分からないけど。
千春：その人にあげるはずだったポインセチアが何でここに？
春子：ああ、それが会えなくて。
千春：あら、急用でもできましたかね？
春子：だと思う。連絡なかったから、分からないけど。
千春：えっ？もしかして、今まで、待ってたんですか？
春子：うん、まあ。何か事情があったんだと思うけどね。
千春：珍しいですね。何でもきっぱりさっぱりの春子さんが、そんなに気にするなんて。
春子：そう？
千春：**もしかして、そのうち、その庭、春子さんちの庭になったりして。**
春子：やだ、何、言ってんの？

（テレビドラマ『結婚しない』第 9 回）

例（7）は、話し手の千春が、夜遅く帰ってきた相手の春子に、事情を尋ねる会話である。約束通りに会うべき教授が現れず、相手の春子が夜遅くまで待っていたことについて、話し手の千春が、「珍しいですね。何でもきっぱりさっぱりの春子さんが、そんなに気にするなんて。」と相手の春子のことを不思議に思うことを表明した。それに対し、相手の春子が、「そう？」と聞き、千春の話の意味につい

て、説明を求めている。この春子の疑問を受け、話し手の千春が、中途文「もしかして、そのうち、その庭、春子さんちの庭になったりして。」により、相手の春子の珍しい行動と関係づけ、「そのうち、その庭、春子さんうちの庭になるんじゃないんですか？」という自分の予測を冗談気味に言い、自分の考えを相手の春子に説明している。このように、例（7）の中途文「～て。」も、テ節の「関係づける」という基本的機能を引き継ぎ、文脈上に見られる相手の春子の不思議な行動などと関係づけて表現したものであると思われる。

（8）妻：人の旦那に手え出して。
夫：おい、やめてくれ、頼む！
妻：こっそり海外旅行なんか、私となんか、熱海でさえ文句言うくせに。もう、許せない！
（テレビドラマ『あぽやん～走る国際空港』第 5 回）

例（8）は、妻が空港で、浮気相手と海外旅行に行こうとしている夫を捕まえ、夫と夫の浮気相手を責めている場面である。妻が、中途文「人の旦那に手え出して。」により、「不倫は倫理道徳から外れることである」という言語外の常識と関係づけ、「あんたは、不倫して、人の旦那に手を出すことをするなんて、絶対許さない！」と夫の浮気相手を責めており、話し手の相手に対する「非難」という感情を表している。この例（8）では、「夫はこっそりと愛人と海外旅行なんかして、自分とは熱海でさえ文句を言う」という文脈上の事態とも関係づけ、話し手が、「夫と夫の浮気相手のことを絶対許さない」という怒りの感情を持っていると考えられるであろう。従って、この例（8）の中途文「～て。」の「非難」という意味も、テ節の「関係づける」という基本的機能を引き継いで生じるものであると思われる。

5.3 中途文「～て。」の意味とその文法的特徴との関わりに関する考察

本節では、中途文「～て。」の意味と第 4 節において明らかにした中途文「～て。」の 2 つの文法的特徴との関わりについて記述する。5.1 節における表 2 に示した通り、本稿において抽出した 299 例の中途文「～て。」のうち、「事情の説明」を表すものが 267 例と、全体の 9 割近く（89.30%）を占め、極めて多いということがわかった。先行研究でも、「量的には、5 つの用法の中で『事情の説明』の用法の用例が一番多く見つかる」（白川 2009 : 145）としている。このことは、①従属度が B 類であるテ節と対応するものが最も多い、②述語的部分において、無意志性の性質を持つものが最も多いという中途文「～て。」の 2 つの文法的特徴と関連づけられていると思われる。

まず、テ節の従属度との対応関係という側面から、中途文「～て。」の意味との関わりを記述する。4.1 節において記述した通り、299 例のうち、B 類のテ節と対応する中途文「～て。」が 294 例と、全体の 98.33%を占め、極めて高い割合であるということがわかった。先行研究では、階層的性格をとらえるに当たり、B 類は「判断段階」[4]である（南 1993）とされる。この「判断段階」の特徴としては、各種の認定作用が行われることである（南 1993 : 243−244）とされる。その認定作用の中身としては、肯定／否定、個別／一般、確定／未定、実現／非実現といった対立の問題の選択、空間的、時間的な

[4] 南（1993）では、文の構造を階層的性格のものとしてとらえるに当たり、「描叙段階」（A 類）、「判断段階」（B 類）、「提出段階」（C 類）、「表出段階」（D 類）という 4 つの段階からなると仮定している。

面についての限定、認定の根拠（また情報源）、認定の前提となる条件（順接／逆接）、原因・理由、認定の仕方（断定、推定）の選択、内容や表現の仕方についての評価を含んだ表現などがある（南 1993：243）。これら B 類の認定作用、特に「原因・理由」という認定作用が行われるということによって、「事情の説明」を表す中途文「～て。」と B 類のテ節との対応関係が裏付けられるのではないかと考えられる。また、南（1993）では、同じく「原因・理由」を表すが、B 類のテ節と C 類のカラ節は、階層的性格が異なるとされている。C 類[5]のカラ節は、描叙段階、判断段階の処理を経た内容を主張する根拠を積極的に示すという主観的な性格を持つのに対し、B 類のテ節は、原因・理由となるものごとそのものをあげるという性格を持つ（南 1993：236）としている。白川（2009）は中途文「～て。」の「事情の説明」の意味については、「事情を説明すべき事実」の存在を前提としており、結果としての事実のみに着目している（白川 2009：155）とされる。ここでは、中途文「～て。」の「結果としての事実のみに着目している」という特徴は、B 類のテ節の「原因・理由となるものごとそのものをあげる」という性格と関連しているのではないかと思われる。

次に、述語的部分の無意志性のものが多いという文法的特徴から、その「事情の説明」という意味との関わりについて記述する。4.2 節において、中途文「～て。」の述語的部分において、無意志性の性質を持つものが 273 例と、9 割以上（91.30%）を占め、極めて多いということがわかった。テ節の持つ「原因・理由」という意味が、「から」や「ので」などが表す「原因・理由」と異なり、従属節と主節の因果関係が非意図的に引き起こされることを表し、そのような結果が起こるのはやむを得ないことだという場合に用いられる（日本語記述文法研究会 2017：285）とされている。上述したように、中途文「～て。」の持つ「結果としての事実のみに着目している」という「事情の説明」の特徴も、テ節の「非意図的に引き起こされる因果関係」という意味的特徴と関連しているのではないかと思われる。

最後に、白川（2009）において指摘されている「『事情の説明』という意味が、テ節の『原因・理由』という意味に準拠して説明できる」という主張を上述した中途文「～て。」の 2 つの文法的特徴により、文法的側面から論述する。「原因・理由」を表すテ節には、①B 類のものであること、②無意志的動きが、従属節または主節のどちらか、或いは両方には必ずあることという 2 つの文法的特徴があると考えられる。それと対応し、本稿で考察した結果、中途文「～て。」においても、①文法上、テ節の B 類と対応するものが極めて多い、②無意志性の述語的部分を持つものが極めて多いという 2 つの類似した文法的特徴があるということがわかった。このように、「事情の説明」を表す中途文「～て。」と、「原因・理由」を表すテ節とが、類似した文法的特徴を持つことが見られ、白川（2009）の意味に関する主張と対応しているのではないかと思われる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、中途文「～て。」を研究対象とし、複文におけるテ節との対応関係に着目して、その文法的特徴と意味を考察することを通し、複文で現れるテ節のうち、中途文「～て。」として現れにくいと考えられるものもあることを明らかにした。文法上、まず、複文におけるテ節との対応関係を観察し

[5] 南（1993）では、C 類を「提出段階」としている。この段階の特徴については、描叙（A 類）、判断（B 類）の両段階の処理を経てきた内容に対する、なんらかの主体の態度に関する情報の処理である。これについて、①表現の内容に対する、(なんらかの主体の)かかわり方（意向構造）、②さらにその内容を提示すること（提示構造）という 2 種類のものが示されている（南 1993：244−245）としている。

た結果、中途文「～て。」が、テ節のA、B、C類のいずれの類とも対応するものも見られるが、それぞれの類と対応するものの出現傾向にはかなりの差があり、B類と対応するものが極めて多いという傾向が見られることがわかった。次に、中途文「～て。」の述語的部分の意志性を観察した結果、その述語的部分において、無意志性の性質を持つものが極めて多く、意志性の述語を持つものについては、中途文「～て。」全体を観察すると、そこに意志性が見られないものもあるということがわかった。

一方、複文におけるテ節との意味上の対応関係から見れば、中途文「～て。」の持つ意味は、テ節の「関係づける」という基本的機能に基づいて生じるものであると考えられる。また、その「関係づける」範囲は、前後の文脈、或いは文脈外の常識などであり、複文におけるテ節よりも広いのではないかと思われる。ただし、中途文「～て。」とテ節の意味上の対応関係の詳細を観察すると、B類のうち、「継起的または並列的な動作・状態」を表すテ節と対応する中途文「～て。」は見られず、この意味を表すテ節と対応する中途文「～て。」が意味的に考えにくいためと思われる。

また、先行研究において指摘されている「事情の説明」という意味が極めて多く現れるということは、中途文「～て。」の2つの文法的特徴、即ち、①従属度がB類であるテ節と対応するものが多い、②述語的部分において、無意志性の性質を持つものが多いということと関連づけられていると思われる。さらに、本稿において明らかにした2つの文法的特徴は、文法的側面において、先行研究において指摘された「『事情の説明』という意味が、テ節の『原因・理由』という意味に準拠して説明できる」という意味に関する主張と対応しているのではないかと思われる。

本稿では、中途文「～て。」を対象として考察した。しかし、全ての接続助詞を用いた中途文を対象とする場合はどうであろうかがまだわからない。中途文「～て。」と同じく、同じ接続助詞を用いた中途文と複文の従属節が、意味上の関連性があるということが言えるのか。また、それぞれの中途文の文法的特徴とその意味が、全て中途文「～て。」のように、関連性が見られるのか。さらに、接続助詞を用いた中途文と複文の従属節との対応関係を考察することを通し、各中途文の成立の条件を見出せるのか。これらのことが、接続助詞を用いた中途文の全体について言えることなのかどうかを、今後、明らかにしていきたい。

謝辞　本稿の修正に当たり、査読者より非常に有益なコメントを頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

張 季媛（チョウ キエン、Jiyuan Zhang）
東京外国大学大学院 博士後期課程

参考文献

宇佐美 まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662、昭和女子大学近代文化研究所、pp.27-42
大堀 壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会
国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
三枝 令子（2006）「話し言葉における『テ形』」『一橋大学留学生センター紀要』9、pp.15-26
白川 博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
杉本 和之（1997）「意志動詞と無意志動詞の研究：その2」『愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学』29（2）、pp.33-47

張 季媛（2018）「接続助詞を用いた中途終了型発話文の出現状況と文法的特徴」『日本語・日本学研究』8、東京外国語大学国際日本研究センター、pp.1−21
寺村 秀夫（2006）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅲ巻』くろしお出版
長辻 幸（2012）「シテ形接続と連用中止形接続：語用論的相違の要因をめぐって」『ことばを見つめて：内田聖二教授退職記念論文集』英宝社 pp.335-345
仁田義雄（1997）「シテ形接続をめぐって」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版 pp.87−126
日本語記述文法研究会（編）（2017）『現代日本語文法 6 複文』くろしお出版
原田 登美（2007）「日本語会話データベース（上村コーパス）に見る日本語会話における＜授受表現＞の使用実態とポライトネス・ストラテジー」『言語と文化』11 甲南大学国際言語文化センター、pp.117−138
益岡 隆志（2013）『日本語構文意味論』くろしお出版
益岡 隆志（2014）「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」『日本語複文の研究』ひつじ書房 pp.521−542
南 不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
南 不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
吉田 妙子（2012）『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房

用例出典

『日本人の知らない日本語』（2010）読売テレビ
『結婚しない』（2012）フジテレビ
『あぽやん～走る国際空港』（2013）TBS
『ディア・シスター』（2014）フジテレビ

1930 年代・東北における逓信省・配電設備助成政策の研究

A Study of Promoting Policy of Ministry of Communication on Distribution Line in Tohoku Region in 1930's Japan

内川 隆文

This paper aims to study on the Promoting Policy of Ministry of Communication on Distribution Line in Tohoku Region in 1930`s Japan. The distribution line had played an important role to electrify rural areas. But electric power company often charged the villages for extending the distribution line, which cost a great deal. So in the 1920s, rural electrification had not progressed much.

But after 1930`s agricultural Depression, the situation had been changed. Especially, in the Tohoku region, the peasants and villages were hugely damaged by the cold climate. So, the Ministry of Communication and Ministry of Agricultural and Forest had executed the promoting policy on Distribution Line in Tohoku Region from 1935 to 1938. The objective of this policy was to extend the distribution line to the co-operative factories(*KyodoSagyojyo*).

This policy was origin of Rural electrification policies in Japan. Not only that, it had become a trigger for the changing of the policy in the Ministry of Communication. In 1920s Japanese electric policy had put emphasis on the private company. But after Promoting Policy on Distribution line, the Ministry of Communication had started to intervene in the electric business.

This transition of the electric policy was also the result of the changing in personal. For example, Owada Teiji, who was the Reform Bureaucrat had assumed the director of the electric office in the Ministry of Communication. He was one of the bureaucrat who wanted to promoted electric nationalization. Because he thought that rural electrification could have been promoted well by the national electric power company. Not only that, Mori Hide who was the technician had begun to play an important role in promoting a policy of distribution line and Rural electrification.

In conclusion, the Promoting Policy on Distribution Line was the first rural electrification of prewar Japan. Not only that, it had been watershed in the policy of the Ministry of Communication.

【キーワード】農村電化、逓信省、東北振興政策
Rural Electrification, The Ministry of Communications, The Development Plan of Tohoku Region

0. はじめに

0.1. 本稿の課題

1936 年以降、逓信省は農村への電力普及―農村電化 [1]―を電力国家管理(以降、国管)の根拠の 1 つと

[1] 農村電化・農事電化・農業電化など言葉の用い方は論者によって異なる。それらの定義は曖昧で重なる部分もあるが、大別すると①主に農作業に必要な動力や照明の電化を重視する狭義の意味と②これに止まらず家庭生活や娯楽に至るまで可能な限り電化の範囲を広げるべきであるとする広義の意味に分けることができる。山崎延吉などの農政家は前者を取る傾向がある一方、電力経営者・技術者は農村での電力需要を喚起し、電力料金の低下を図ろうとした為に後者を取る傾向がある。

した。その理由として同省は民営電力会社の営利性が農村電化の阻害要因であることを指摘した。このような逓信省の批判と国管による事業接収の危機に直面した民営電力会社は、1936 年 9 月に東邦電力が設置した新興産業部を嚆矢として農村電化に力を入れることになる。その際、各社が利用したのが 1935 年 6 月成立の逓信省・配電設備助成政策であった。同政策は民営電力会社が農村で配電設備を建設する際にその費用の最大 7 割を国庫から助成することを骨子とした。

本稿では電力行政が民営から国営中心へと移行 [2]する中、配電設備助成政策がそこにどのような歴史的位置を占めたかを考察する。次に渋沢元治や森秀などの技術者が配電設備助成政策の実施に当たったことで如何にしてその政治的発言力を増大させたかを考察する。この電力業への国家統制の強化を背景とする技術者の台頭については、管見の限りこれまでの先行研究では触れられてこなかった。

配電設備助成政策は最終的には逓信省の官僚や技術者が期待した成果を成し遂げることができなかったが、戦時の電力行政に与えた影響は多大であった。しかもその影響は戦後にまで継続し、たとえば同政策が掲げた農村電化という課題は未完のプロジェクトとして戦後にも引き継がれたのである [3]。

0.2. 先行研究

研究史をたどると戦前・戦時日本の電力史については豊富な蓄積が存在し、その代表としては橘川氏や梅本氏、嶋氏、中瀬氏らの研究 [4]を挙げることができる。これらの研究は主に電力の大消費地帯である京浜・中京・京阪神など都市部を対象にしているが、農村での電気事業に関する研究は少数にとどまる。北陸および東北地方の農村で発生した電灯値下げ運動については白木沢氏や芳井氏らの研究 [5]が挙げられ、個別の農村や地方の公益電気事業の研究については西野氏の研究 [6]が挙げられる。筆者はこれらの諸研究から多くの重要な示唆を得ているが、その対象が概ね個別具体的な地域の電気事業や政治動向であるのに対し、本稿では農村電化と逓信省の全体的な政策の関係性を対象としている点で相違がある。筆者と同様の問題意識に立った先行研究は管見の限り存在しないが、これに関連して堀真清氏は重要な分析 [7]を行なっている。たとえば 1936 年以降、逓信省出身の革新官僚・大和田悌二や奥村喜和男が

[2] 戦前の日本電気事業は 1883 年に東京電灯株式会社が設立して以来、主に民営事業会社によって経営された。この方向性は 1931 年 4 月に改正電気事業法が成立して以降も変わることはなかったが、戦時下の 1938 年 3 月に電力国家管理法外 3 法案が第 73 回帝国議会にて成立したことで国営中心の電気事業体制に変貌した。具体的には 5 大電力をはじめとする民営電力会社の所有はそのままに経営権が国家に移され(「民有国営」)、日本発送電株式会社とその監督官庁・電気庁が成立した。

[3] 農村電化における大きな課題の 1 つは未点灯部落の解消であった。この目的は戦後の 1952 年 12 月、議員提案により制定された「農山漁村電気導入促進法」の中に継承された。西野寿章(2017)「戦後の岩手県における山村地域の電化過程についての覚え書き(千葉貢教授退職記念号)」高崎経済大学地域政策学会編『地域政策研究』19(4)、196 頁。

[4] 梅本哲世(2004)「改正電気事業法への道―『臨時電気事業調査会特別委員会議事録』の分析」大阪市立大学経営学会『経営研究』55(2)。同(2004)『戦前日本資本主義と電力』八朔社。橘川武郎(1982)「電力連盟と電気委員会；電力業におけるカルテルと公益規制」社会経済史学会編『社会経済史学』48(4)。同(1982)『日本電力業の発展と松永安左エ門』名古屋大学出版会。同(2004)『日本電力業発展のダイナミズム』名古屋大学出版会。嶋理人(2012)「1931 年改正電気事業法体制の特徴と変質――京成電気軌道の東京電灯千葉区域譲受問題をめぐって」政治経済学・経済史委員会『歴史と経済』 55(1)。中瀬哲史(2004)『日本電気事業経営史:9 電力体制の時代』日本経済評論社。

[5] 白木沢涼子(1994)「昭和初期の電気料値下げ運動」歴史学研究会編『歴史学研究』(660)、青木書店。芳井研一(2004)「電気料問題と地域社会」新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト佐渡・越後の文化交流史研究編『佐渡・越後文化交流史研究』(4)。

[6] 西野寿章(1988)「国家管理以前における電気事業の性格と地域との対応；中部地方を事例として」人文地理学会『人文地理』40(6)。同(2013)「戦前における地域組合電気事業の計画と挫折――秋田県横手地方を事例として」高崎経済大学経済学会編集『高崎大学論集』55(3)。

[7] 堀真清(1978)「電力国家管理の思想と政策」早稲田社会科学研究所ファシズム研究部会編『日本のファシズムIII――崩

電力国家管理による農村電化の徹底を主張したことについて、堀氏はその実際の政策効果について疑問を呈した。同氏は理由として既に実施されていた農村電化政策、すなわち配電設備助成政策は「東北で示されたごとく封建遺制的な権力に屈したり、些細なことから「対立しがち」な農民大衆が、その施設利用につき協同精神を十分発揮し、あるいはその管理に人を得るなどの条件に恵まれないでは決して有効となりえないこと」[8]を挙げている。それゆえ同氏は配電設備に対する「助成程度では焼石に水の施策」[9]であったと結論している。筆者は配電設備助成政策が失敗に終わったという堀氏の指摘に同意する。しかしながら同氏は同政策が 1920 年代以来の農村電化の延長線上にあったことや、そもそもなぜ農村電化が電力国家管理をめぐる議論のなかで眼目とされたかを十分に論じていないと思われる。

配電設備の建設は採算が取れないため戦間期以来、民営電力会社にとって手の出しづらい事業であったが、1935 年以降逓信省から助成を得たことでようやく各社は建設に邁進した。それは堀氏が指摘するように不完全な結末に終わったとはいえ、それまでの民営中心の電力行政が変化する契機となり、さらには技術者の政治的台頭を支える重要な条件となったのである。

0.3. 本稿の構成

以下では本稿の構成および分析の流れを説明する。第 1 章では 1920 年代から 1934 年にかけての戦間期を中心とした農村電化をめぐる言説と実態を考察する。この時期において農政家や電力会社の経営者・技術者らの議論のなかで農村電化の目指す方向性とその問題点が徐々に明らかになっていった。1930 年代初頭に至るまで農村電化は基本的に民間の中で展開したが、1930 年に世界恐慌の余波で農業恐慌が発生すると五十子巻三など農林官僚が積極的な発言をするようになる。この傾向は 1932 年 9 月 27 日に農林省に経済更生部が設置されたことを機に展開する経済更生運動のなかで一層顕著となった。

第 2 章では 1934 年 12 月に設立された東北振興調査会の議論を基に作成された逓信省の配電設備助成政策の成立過程とその内容を検討する。同政策は逓信省電気局技術課長の出身であり、当時東京帝国大学工学部長であった技術者・渋沢元治の提案に基づくものだった。助成政策の対象は当初東北 6 県に限定されたが、翌 1936 年以降は全国の農村に拡大した。つまり東北農村は「振興」の名の下に電力技術の演習場として用いられたのである [10]。

また、第 2 章ではそれまで逓信省電気局長を務めた清水順治が主導した民営中心の電力行政が東北振興政策を境に見直されたことにも着目する。具体的には 1931 年 4 月成立の改正電気事業法の大原則である供給区域独占制や自家用発電の抑制の緩和が、農村電化の文脈において検討された経緯を考察する。この見直しは清水の辞職後に新電気局長の座に着いた革新官僚・大和田悌二によって本格化する。

続く第 3 章では電力技術者である森秀が 1936 年以降の国管論争下で展開した配電設備助成についてどのように捉えたかを明らかにする。また、国管に反対した民営電力会社の多くが配電設備への助成を

壊期の研究』早稲田大学出版部、154−156 頁。

[8] 同上、155 頁。

[9] 同上。

[10] 災害後、「救済」をタテマエに東北を新技術導入の演習場にしようとする政府の姿勢は今日においても変わりはない。1930 年代東北の「救済」は当時の最新技術である電力により齎されると宣伝されたが、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災後、政府は津波と原発事故の被害を受けた福島県浜通り町にドローン(無人機)やロボットのテストフィールドを建設する「福島・イノベーションコースト構想」を計画している。これは 1940 年代から 1980 年代にかけて軍事用プルトニウムが精製されたことで汚染され、1980 年代から除染が開始された米ワシントン州ハンフォード・サイトの復興計画に範をとっているとされている。経済産業省(2014)『福島・国際研究産業都市(イノベーション・コースト)構想研究会報告書』、3 頁。<https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/140825/140825_01o.pdf>（最終アクセス日：2019 年 9 月 30 日）

利用して農村電化に乗り出した理由とその意味についても検討する。最後に配電助成政策が失敗した理由について考察する。

1. 農村電化・前史（1920～1934）

1.1. 1920 年代における電化の「二重構造」と農村電化論の台頭

日露戦役と第 1 次大戦を経たことで鉱業、建設業、通信、運輸業、公益事業などの生産性が著しく上昇したことに伴い、工業製品価格は下落した。他方、これを上回る勢いで農産物価格は急落したのだが、理由としては①新品種の導入や改良・耕地整理に基づく「明治農法」の普及が大正半ばまでに一段落したことで生産性が停滞したこと、②1918 年の米騒動以降、朝鮮米が本土に流入したことで米価が下落したことが挙げられる [11]。この工業と農業の間における生産性と所得の不均等は 1920 年代に入ると急速に拡大し、「二重構造」と呼ばれる経済構造が現出した。これによって深刻な政治・経済的影響を受けたのは(地域差はあれども)農村であった [12]。要因としては①第 1 次大戦に端を発する好景気による農村から都市への大量の労働力の移動 [13] 、②1920 年代の農業および土地生産性の停滞 [14]、さらに③従来農村において副業とされた在来産業が 1920 年代に入ると工業化されたことで都市に奪われた [15]ことが挙げられる。これら農工間格差を拡大した要因の中でもっとも重要な③は 1920 年代以降、工場で使用される動力が次々と蒸気力から電力へと転換 [16]したことでさらに促進された。この転換の背景には水力発電による電力の過剰供給と電力会社間の過当競争「電力戦」による電気料金の低下、さらには小型かつ低廉な国産電動機の普及があった。その影響は大工場よりむしろ中小工場において一層顕著であった [17]。なぜなら小型化による能率の低下がさほど大きくなく、しかも制御が容易な電動機のメリットは中小工場において最も良く発揮されたからである [18]。

しかし戦間期の農村では都市ほど動力や照明の電化が進展することはなかった。理由としては①農村の電力需要はそもそも少なく、密度も希薄であるため電気料金が割高であり、②電力会社が未点灯部落に配電設備を建設する際に寄付金を農村側に求めたこと、また③電動機よりも高額であるが配電線がない場所でも使用できる石油発動機(石発)が先行して普及しており、さらに④逓信省が地方僻村による自家用発電の建設を抑制していたことが挙げられる。この内、①から③までの理由は主に経済的理由であるのに対し、④は政策的理由であると言えよう。戦間期の逓信省電気局は民営を中心に発展する電力業

---

[11] 中村隆英、尾高煌之助編(1989)『日本経済史 6 二重構造』岩波書店、146−151 頁。

[12] 1920 年代は労働者階級の都市への集中と食の洋風化は蔬菜、果樹、畜産の消費を促進し、商業的農業が拡大する条件となった。この状況に最も対応したのが近畿地方で、1920 年代を通じて水田や畜産など農業の多面化に成功した一方、東北地方は稲作に圧倒的に依存する構造が変わらなかった。このことは農業における資本主義化・機械化が進展した近畿地方に対し、多数の自小作農と少数の地主層を抱える東北地方という二極分化に繋がった。こうした「東北型農業」の在り方は天災や恐慌に対する脆弱性を形成し、それは 1934 年夏の東北大凶作によって一気に露呈したのである。森武磨(1983)「農業構造」『1920 年代の日本資本主義』東京大学出版会、228−231 頁。一戸富士雄(2018)『国家に翻弄された戦時体制下の東北振興政策:軍需品生産基地化への変貌』文理閣、26−39 頁。

[13] 武田晴人(2019)『日本経済史』岩波書店、217 頁。

[14] 明治以来、日本農村の経済は米と繭によって支えられていた。しかしながら 1920 年代に入ると米を中心とする農業生産の増加傾向が鈍化し、繭の生産も主要輸出国であるアメリカで人絹の生産が増加したことで農村の収入は不安定化し、主穀の生産に偏った東北地方において状況は一層深刻であった。武田晴人(2019)、前掲書、219 頁。

[15] 高橋亀吉(1926)『明治大正農村経済の変遷』東洋経済新報社出版部、103−120 頁。

[16] 南亮進(1976)『動力革命と技術進歩―戦前期製造業の分析』東洋経済新報社、190−217 頁。

[17] 中村隆英、尾高煌之助編(1989)、前掲書、41−43 頁。

[18] 南亮進(1976)、前掲書、201−202 頁。

の在り方を支持しており、それは農村電化を妨げる要因の 1 つとなった [19]。これは 1936 年以降、大和田悌二や奥村喜和男などの革新官僚が電力国家管理を推進する動機を形成したのである。

このように現実の成果は芳しくなかった戦間期の農村電化であるが、その問題意識が広く共有され、議論が始まったのはこの時期からであった。1923 年 6 月には「都市偏重主義の極めて不合理なるを体験し国民生活殊に農村政策の改善に資する為」[20]、貴族院議員内田嘉吉、東邦電力の松永安左エ門らの提唱の下に農事電化協会が設立された。同協会は 1924 年 1 月に機関誌『農事電化協会報』を発刊したものの、同年 9 月にこれを廃刊して翌 1925 年に『新農村』と題する月刊誌を発刊した。然しながら同誌も 9 月号第 6 巻を最後に廃刊となり、1927 年 5 月にはその後継誌として『農事電化』が発刊された。

農事関係者や電気事業者、または機械製造業者は農事電化協会に参画するなど共に農村電化に取り組んだが、当然その利害や論理を異にしており、電力需給をめぐっては時に供給者と需要者として対立した。それゆえ農村電化論の方向性はその主体によって 2 つに大別することができ、1 つは農村・農業の論理に基づく電化の要求である。代表的な人物は「思想や政策のトップ・メーカーではないが、頻繁に農村を講演行脚し、地方農村の実情をつぶさに見聞していた」[21]農政家・山崎延吉が挙げられる。山崎は狭い耕地面積を耕す日本の農業において必然的に生ずる「暇は悪魔」[22]であり、その非生産性を問題視した。これを克服するためには米と繭の外に畜産、加工、林業、園芸や養鶏といった農業の多角化が不可欠であると主張した。この過程で直面するのは資本と労力との欠乏であるが、前者は信用組合によって、後者は動力の利用によって解決されるとした。山崎は牛馬や石発など各種動力が既に農村で実用化されていることを紹介した上で、「大勢は動力の電化であり、農業の電化こそ新農業である」[23]と結論した。さらに山崎は「石炭の運命が定まり、石油は望少しと云ふ我國に於ては、黒炭に頼むことは出来ぬのであつて見れば、将来は何んと云つても電気を利用する外道はない」[24]と当時勃興していた水力発電に望みを託した。しかしながら、この目的が達成される為に山崎は「今少し電気の使用料が廉くならねばならぬ」[25]とし、「電気会社は数でこなして暴利を貪る観念を廃」[26]する必要があると釘を指すことを忘れなかった。

2 つ目は電力会社による農村電化の要求であり、それは水力発電による過剰電力の消化先を農村に求

[19] 戦間期の逓信省電力行政下における農村電化の実態を推察する上で興味深いのが森水力電気会社の供給区域である大分県南山田村の事例である。同社は同村に対する点灯を行わなかったため、逓信省は 1925 年 1 月に桐木産業組合による自家用電気共同施設の建設を認可した。しかしながら組合区域内の住民は森水力による電力の供給を認めるよう逓信省および県に対して猛烈な反対運動を展開した。これを受けた逓信省は電気事業取締規則第五十条に基づき、森水力に対して同村への速やかな電力供給を命令した。しかしながら依然として森水力は同村の需要者に対して不当の工事費負担を請求するなどして容易に供給せず、そのため村民は同社の供給区域許可取消と隣接する九州水力電気会社の区域への編入を陳情した。こうしたことから分かるように、東京、名古屋、大阪といった大都市では電力需要の獲得をめぐる競争が激化した一方、地方の山村僻地では電力会社が供給権を得ているにも関わらず事業を行わないケースが非常に多かった。「電気業法中改正要点自家用発電禁止か : 各寒村僻地に行はるゝ其弊害に耐えずして」『国民新聞』1926 年 7 月 29 日付。

[20] 農事電化協会編(1940)『本邦に於ける農事電化発達史：農事電化協会十五周年記念出版』307 頁。

[21] 野本京子(1999)「山崎延吉の農村振興策」『戦前期ペザンティズムの系譜―農本主義の再検討』日本経済評論社、42 頁。山崎は農村の「伝統的共同精神」を重視する一方、同時に農村電化や食生活の改善といった農民の日常生活の改善を重視した。同(1999)、59 頁。

[22] 山崎延吉(1925)「所謂新農業の経営」農事電化協会編『新農村 1(1)』、42 頁。

[23] 同上、45 頁。

[24] 同上。

[25] 同上。

[26] 同上。

めようとした各社の利害と結びついていた[27]。大戦ブームが終わる 1920 年以降、電力各社は農村で使用される化学肥料の製造(電気化学工業)、或いは灌漑ポンプや籾摺機に使用される電動機への電力供給を行った。なかには「農村に於ける一切の労力を電化せんとの目標に邁進しつゝある事業者」[28]まで現れる始末だったが、これらの取り組みが農業生産を根本的に変化させることはなかった[29]。その理由は、電力会社のなかで「農業生産が企業者利潤を追求するがごとく理解されているとおり、農業をあまくみている点」[30]にあった。とはいえ 1920 年にはわずか 700 台であった 5 馬力以上の電動機が 1927 年には 12000 台に達したことからわかるように、電力会社の経営努力は決して無意味でなかったことが推察される[31]。しかし既設配電線から遠隔の地にある農山漁村の電化については、電力会社が非採算性を理由に工事費や寄付金、現物供与、労務提供など各種の負担を要求したことで、戦間期は一向になかった[32]。このことは 1930 年代に入ると農村電化の阻害要因として政府・電力会社・農業関係者から認識されるようになったのである。

1.2. 1930 年代前半の農村電化論―農林官僚・五十子巻三と東邦電力・森右作を中心に―

1920 年代における農村電化の提唱者は主に電力会社や農業関係者であった。しかしながら世界恐慌の余波として 1930 年以降、昭和農業恐慌が発生したことで官僚や政治家が積極的に農村電化について発言をするようになる。

変化はまず農林省内から起きた。1932 年 7 月に同省は「農山漁村経済更生計画樹立方針」を発表し、9 月には経済更生部を、さらに分化規定によって総務、産業組合、金融、副業の 4 課を設置した[33]。これを基点として農村内部からの自力更生を促す経済更生運動が開始し、その主導者は後藤文夫農相や更生部の初代局長である小平権一など政治家および官僚であった。同運動は全国町村の 40%に相当する「指定村」に助成金を与え、それぞれの事情に即した経済計画を樹立・実行させる形式を採用した[34]。

これらの取り組みを実践する場として同省が着目したのが共同作業場であった。同施設は 1932 年 10 月成立の「農山漁村共同作業場奨励規則」によって 1935 年末までに全国 19600 箇所に設置された。共同作業場の経営主体は任意申合組合が最も多く 9100 箇所、次いで農事実行組合経営が 3700 箇所、産業組合経営が 3300 箇所であり、その他は町村や農会等により経営された[35]。共同作業場はそれまで各農家の間で移動して利用された動力農具を特定の場所で集中的に運用することを目的とし、主に脱穀や籾摺、選別調整、精米、製粉などの農事作業、あるいはホームスパン、木工、蔬菜や果実の缶詰といった副業や工業の共同化を行った。敷地の選定に際しては各農家間の中央に位置し、交通や運輸が便利であること、平坦で乾燥した土地であり、さらに付近に配電線があることが望ましいとされた[36]。その編成はある地方の産業を基礎として 1 つの「ブロック」を形成し、各「ブロック」ごとに 1 個の中心工場(中

[27] 電力会社が 1920 年代以降、熱心に農村電化に取り組んだ理由の 1 つには昼間のオフピーク時における余剰電力を消化する目的があった。栗原東洋編(1964)『現代日本産業発達史 3 電力』交詢社出版局、191-195 頁。
[28] 山内彦次郎(1931)「農村電化に対する勧誘従業員の訓練に就て」電気経済時論社編『電気経済時論 3(12)』616-617 頁。
[29] 僻地未点灯解消記念会編(1967)『へき地未点灯解消のあゆみ: 僻地未点灯解消記念誌』15 頁。
[30] 同上。
[31] 栗原東洋編(1964)前掲書、195 頁。
[32] 僻地未点灯解消記念会編(1967)、前掲書、15 頁。
[33] 「農林水産省百年史」編纂委員会編(1980)『農林水産百年史』中巻、222-223 頁。
[34] 岡田知弘(1982)「経済更生運動と農村経済の再編―時局匡救事業と農村開発」京都大学経済学会編『経済論叢』129(6)、46 頁。
[35] 斎藤金一(1939)『実用電気工学叢書』第 2 巻、オーム社、78 頁。
[36] 同上、79 頁。

央工場或は中枢工場とも呼ばれた)が置かれ、さらにその周辺に数個または数十個の附属工場が配置されるというものだった [37]。1920 年代において農村電化に特に興味を示さなかった農林省であるが [38]、1930 年代以降これに力を入れるようになるのは共同作業場で用いられる動力の充実を急務としたからである。

農林省の政策は産業組合をはじめとする農村側の利害に基づいたものであり、従ってその言説も山崎延吉をはじめとする農業関係者の主張に近かった。1933 年 5 月に経済更生部副業課長に着任して以来、経済更生運動の中心で活躍した農林官僚・五十子巻三の言説はその典型と言えるだろう。五十子は明治維新以後、自給品の生産が農家から都市工業者に移ったことが農村疲弊の原因であり [39]、 それにより工業の都市への集中が必然的に齎されたと述べた [40]。 しかしながら、電動機の普及によって都市から農村への工業の分散が可能になったことで上記の事情が一変したことを次のように述べた。

> 「第一八世紀に於ける蒸気力の発明は産業革命の導火線となり、従来の手工業的生産を大規模なる工場生産化するに至つた、而して蒸気力を有利に利用するが為には、其の動力発生の原料たる石炭の供給に最も適当なる地点に工業を集中せしめ、且蒸気汽罐室の周囲に工場を集中せしむることを必要とするもので従つて工業の発達は必然的に集中的傾向を取つたのである。然るに、近年電動力其の他可動性動力の普及発達の結果、今や工業生産が蒸気力にのみ依存する時代は過ぎた。而して、之等可動性動力の農村普及こそ都市工業の農村分散に技術的可能性を附与するものである」[41] (傍点は引用者)

この五十子の言説は、蒸気機関が人間という鉄粉を引き寄せる磁石であるなら電動機は人口を広く地図上にばら撒く扇風機である [42]と規定した同時代のアメリカの経済学者・スチュアート・チェイスの分析を想起させる。つまり五十子は第 1 次大戦後における「電力時代」[43]の産業変革を的確に把握しており、それ故に農村への電力普及と工業の分散が不可避の趨勢であると認識していたのである。次の引用ではこのような五十子の認識が端的に表れていると言えるだろう。

> 「電動力の農村普及は工業の農村化を可能ならしむる最も根本的な要因の一つであるから農村工業の発達を期せんとするならば先づ以て電力の徹底的普及を図らなければならない。〔中略〕成程現在に於ては一般に農山漁村電気利用密度は都市に比して著しく希薄であるから、従つて電力工事費、電力費等も勢ひ割高たらざるを得ないのであるが、又一部分は電力費、工事費など割高なるが為に逆に電力の普及が後れると云ふ因果関係も考へ得るから、電気事業者側に於ても一時の不利益は偲んでも今後の電力普及、需要増加に依る利益を獲得すると云ふことも考へる必要があるであら

---

[37] 神谷兼三郎(1937)「東北地方に於ける共同作業所状況」農事電化協会編『農事電化.11(9)』2 頁。

[38] 栗原東洋編(1964)、前掲書、195 頁。

[39] 五十子巻三(1934a)「農村工業と電力の農村普及に就て」ワット社編『ワット』7(9)、15-17 頁。

[40] 同上、16 頁。

[41] 同上。

[42] “The steam engine is a magnet drawing human iron filings.The electric motor is a fan blowing population broadly over the map.” Stuart Chase,[1933] *The Promise of Power*,John Day Co,p9. 馬場敬治(1936)『技術と社会.第 1 巻』日本経済評論社、334 頁。

[43] W.N.Polakov,[1933]*The Power Age; it's Quest and Challenge*,Civici,Friede. 藤林敬三(1934)「電力時代の諸相:W.N.Polakov;The Power Age,its Quest and Challenge,N.Y.1933 の紹介」慶應義塾理財学会『三田学会雑誌』28(8)。

う」[44]

五十子を始めとする農林官僚は電力会社が配電線の高額な建設費を電気料金に上乗せしていることが農村電化の不振の原因であると認識した。批判の矛先は農村での自家用発電の建設を抑制する逓信省の政策に対しても向けられており、「自分の村内にある自然力を利用し廉い動力を供給せしめんとするのに種々面倒な手数がかゝり、容易に実行できないなんてあまりにも農村を虐げたやり方である」[45]と憤慨した。

しかしながらこれに対する反論が電力会社から『農事電化』誌上に掲載された。5 大電力[46]の 1 つである東邦電力の理事であった森右作[47]は農村電化の「最も重要な論点は、何れの企業形態による方が農事用として、低廉良質な電気を豊富に供給出来るかの問題にある」[48]と規定した。その上で「今日大口電力として民間電気事業者が大量の電気を灌漑排水用に供給してゐるのは、季節的に大量の余剰電力を安価に供給してゐるためであつて、殆んど原価或ひは原価以下で供給する極めて低廉なる電気だからである」[49]と述べた。森によればこれを可能にしているのは大規模発電所による電力供給を行う民営電力会社の「大発電主義」[50]であった。さらに農村の電力料金は割高であるとした五十子を名指しで批判し、需要の密度が希薄な地域においても電力会社は「或程度の犠牲を忍んで割安に定めてある」[51]と反論した。これはその後に五十子が「相当の犠牲を払ひ密度希薄な農山漁村に於ても都市と余り著しい差のないやうな料金をとり〔中略〕割安な農村用小型電力料金内規を設けてゐる事業者も尠くないとの事である」と批判のトーンを弱めたことから分かるように、当時一定の説得力があったことが推察される。

1.3. 1930 年代前半の逓信省の農村電化に対する消極的態度とその理由

以上見たように 1930 年の昭和農業恐慌以後、農村電化論をめぐる言説空間に農林省が加わったことで新たな局面を迎えた。1920 年代では主に民間レベルで議論された農村電化は 1930 年代以降、政府による政策課題として検討されたのである。

注目すべきは、この時期に政府として積極的に農村電化論を展開したのが農村の利害をバックとする農林省であり、電気事業の監督官庁であるはずの逓信省でなかったことである。その理由は、当時の電気局長である清水順治が 1931 年 4 月に改正電気事業法が成立して以来、民営電力会社を中心とする電力行政を推進していたことにある。1934 年 2 月 19 日に開催された第 7 回電気委員会の席上、清水は「我国の電気事業が、発送電部分に就ては固より、配電部分に就ても民営を主とする自然の発達に依つて」[52]

---

[44] 五十子巻三(1934a)「農村工業と電力の農村普及に就て」ワット社編『ワット』7(9)、17 頁。

[45] 五十子巻三(1934b)「副業と農村工業(二、完)」帝国農会編『帝国農会報』24(6)、82 頁。

[46] 1920 年代から 1930 年代にかけて日本電力市場を独占した電力卸売・小売電力会社の総称。東京電灯・東邦電力・大同電力・日本電力・宇治川電気は電力売買契約や市場分割協定を結ぶことで京浜・中京・京阪神といった電力消費地帯で独占体を形成した。

[47] 1924 年、東邦電力に入社し本店営業部で 1 年在勤の後、名古屋支店に就任し電灯課長として活躍した。その後森は 1929 年 8 月から 11 月にかけて渡米し、同国の 15 大都市を中心とした電気料金制の調査を行った。その著書『電気事業研究』は当時官民の電力関係者の間で好評を博し、逓信省でも参考書として用いられた。 馬場守次(1926)『名古屋新百人物終篇』珊々社、35-36 頁。森右作(1923)『電気事業研究』オーム社。

[48] 森右作(1934a)「大配電網時代に於て電気事業の公営化は農事電化に適せず」農事電化協会編『農事電化』8(1)、4 頁。

[49] 同上、5 頁。

[50] 同上。

[51] 森右作(1934b)「『副業と農村工業』の筆者五十子に対ふ」農事電化協会編『農事電化』8(7)。

[52] 逓信省電気局編(1934)『電気委員会(第七回)議事録』、8 頁。

発達した経緯に鑑み、「府県営事業は望ましき企業形態とは言へない」[53]との考えを示した。この発言からわかるように、当時の逓信省は民営企業の自主性を尊重する態度であり、農村への電力普及についても各社の経営判断に任せていたのである。

農村電化に対する逓信省の対応とそれに対する農林省の不満は 1930 年から 1934 年にかけてしばらく平行線を辿った。しかしながら 1934 年夏の東北大凶作と翌 1935 年から開始される東北振興政策を経たことで逓農両省の関係に変化が生じ、以後は農村電化をめぐって協調路線を歩むようになるのである。

2. 東北振興時代（1935～1936 年）

2.1. 1930 年の昭和農業恐慌と東北農村の危機

日本の農産物価格は 1926 年頃から下降傾向にあったが、世界大恐慌の余波によって 1930 年の春繭相場が前年比の 47%に暴落したことで農業恐慌が始まった [54]。これに続いて同年夏には野菜の価格が暴落し、さらにこの年は大豊作だったことから米価も暴落もした [55]。この 1930 年に始まる農業恐慌に加え、東北農村は 1931 年の凶作と 1934 年夏の冷害による大凶作によって壊滅的な打撃を被り、飯米欠乏や欠食児童の増大、娘の身売りや離村といった種々の社会問題が発生した。その背景には、多数の小作農と少数の大地主により構成される土地制度や商業化と多角化が立ち遅れた農業形態など、当時の東北が有する社会経済史的問題があった。つまり東北農村の危機は海嘯や冷害といった天災のみによって生じたわけではなかったのである。農業恐慌と東北大凶作が発生した 1930 年代前半に「これまで比較的少なかった東北地方の小作争議は、この時期に増加し、一気に全国の中で小作争議の激化地帯と化していった」[56]。

2.2. 電力を中心とする東北振興調査会の議論

こうした危機からの脱却を図るべく、東北 6 各県の知事や県会議長、各種団体が政府(岡田内閣)に対して調査機関の設置を要請したことが契機となり、1934 年 12 月に東北振興調査会が発足した。岡田知弘氏によれば同調査会の審議過程は大きく①「応急的対策」期(1935 年 1 月 10 日～2 月 28 日)と②「暫定的対策」期(1935 年 2 月 28 日～1935 年 8 月 16 日)、さらに③「恒久的対策」期(1935 年 8 月 16 日～1938 年 4 月 1 日)の 3 つに時期区分される [57]。本稿が対象とする配電設備助成政策は、応急対策として①の時期に成立し、内地初の国営卸売電力会社・東北振興電力株式会社(以降、振電)は②の時期に設立された。なお③は帝国議会を中心とする国管をめぐる論争の展開と成立、および配電設備助成政策の実施と廃止の時期とも重なっている。

東北振興調査会が 1934 年末に開催されて以降、それまで農村電化に消極的であった逓信省は態度を変化させた。配電設備助成政策や振電など国家が直接介入する統制は従来の逓信省電力政策の主流ではなかったが、東北振興調査会という同省の「外部」を経て初めて成立したのである [58]。

---

[53] 電気委員会でのこの発言の 1 週間後の 1934 年 2 月 26 日に清水は全国の地方長官宛に「府県営電気事業は事業統制上適当ならざる場合多きが故に濫に之を容認すべからざる旨」の通牒を発し、正式に公営電気事業の抑制方針を伝えた。「公共団体の電気事業経営に関する件」電業時代社編(1934)『電気委員会議事要覧』昭和 9 年版、155 頁。

[54] 日本農業発達史調査会編(1978)『日本農業発達史』第 8 巻、11 頁。

[55] 同上、12-13 頁。

[56] 一戸富士雄(2018)、前掲書、35 頁。

[57] 岡田知弘(1985)「東北振興事業の構想と展開」青木書店編『歴史学研究』537 号、20-21 頁。なお、③の「恒久的対策」期は 1938 年 4 月 1 日に東北振興調査会官制が廃止されたことで終了した。

[58] 通商産業省編(1979)『商工政策史 第 24 巻 電気・ガス事業』商工政策史刊行会、142 頁。中瀬哲史(1992)「電気委員会

東北振興調査会における電力政策をめぐる本格的な議論は 1935 年 2 月 27 日開催の第 2 回農村工業問題小委員会において渋沢が行った以下の説明から始まった。

> 「東北地方に共同作業所が四千あるとのことなるも、それには電力を要する所も沢山あると思ふが一般に農村へ電力の行き渡らない原因は配電線がかゝるからである、今は大体配電費の半額を農村、組合で負担し、半額は会社で出すといふやうにやつてゞる。此の電線費の農村負担の分即ち半額を政府で補給する。〔中略〕次に電力卸売会社を設けて政府の指定するものにも少し安く潤沢に電力を供給することを考へる」[59] (傍点は引用者)

管見の限り、これは政府機関が参画する公式の場で配電設備への助成が発表された最初期の言説である。だが恐らくこれは渋沢の完全な独自案ではなく、すでに民営電力会社を中心に設立された社団法人・電気協会の陳情を念頭に置いたものと思われる。上記の渋沢の発言から 2 週間遡る同月 13 日、電気協会は「電気事業助成に関する陳情」[60]のなかで国営卸売電力会社の設立を求め、翌々日の 15 日には「共同作業所用電力工事費助成に関する陳情書」のなかで配電設備への助成を東北振興調査会に訴えている。

> 「〔中略〕今般の共同作業所は農村電化の魁とも云ふべく電気事業者としては相当の犠牲を払ひ其の電化実現に努力せんとせるも其の施設場所は主として農山漁村僻陬の地にして之を電化するには長距離の配電線路を必要とし此の負担を電気事業者或は需用者に求むることは実に困難の問題なり〔中略〕依りて此の際東北振興調査会に於かれては凶作応急対策として共同作業所電化に必要なる配電線路及同附属工費全額を国庫補助せらるる様何分の御配慮を切望する次第であります」[61] (傍点は引用者)

1936 年 6 月以降、逓信省が実施する電力国家管理に対して電気協会は強力に反対するのだが、ここではむしろ民間側から電力業への国家的介入を希望しており、興味深い言説であるといえる[62]。

つまり渋沢の卸売電力会社･振電と配電助成政策樹立の訴えは、この電気協会東北支部からの「陳情」を好機としてなされたものだったといえる。しかしながらその後の 2 月 28 日に開かれた第 2 回特別委員会では、有馬頼寧委員長から卸売電力会社は「相当多数の資本を要」することからその設立は「他日の懸案」とされ、より実現性の高い配電助成を含む農村工業化政策の実施が優先されることとなった[63]。

と東北振興電力株式会社―戦前「電力国家管理」への道程(2)」大阪市立大学大学院経済・経営学研究会編『大阪市大論集』第 68 号、40 頁。なお中瀬氏は「それまで電気委員会で共有された公益事業としての電気事業の理念からは“例外”“革新的”」であった振電は「現状を維持する電気委員会の議論の内部からではとても生まれてくるものではなく、外部である東北振興調査会だからこそ生み出したものだった」と結論している。

[59] 「第二回農村工業問題小委員会議事録」(1935 年 2 月 27 日付) 東北振興調査会第二特別委員会編(1935)『農村工業問題小委員会議事録』委 792。原文は旧字体・カタカナ表記であったが、引用においては新字体・ひらがな表記に改めた。以降も同じ。

[60] 小林久治(1935a)「電気事業助成に関する陳情」。この中で小林は大規模発電と長距離送電を擁する卸売電力会社の設立には巨額の資本が必要なことから「〔中略〕到底民間営利会社の処期する処にあらず、宜しく国家自ら之が事業管理の陣頭に起ちて政府自ら出資をな」すことを陳情している。

[61] 小林久治(1935b)「共同作業所用電力工事費助成に関する陳情書」。

[62] 他の例としては電力国営化反対の急先鋒に立っていた東邦電力社長・松永安左エ門が、国管論争が激しく展開していた 1936 年 7 月、配電助成政策が「本問題の本質に鑑み極めて妥当」と高く評価した言説を挙げることができる。松永安左エ門(1936)「電気事業と農事電化」工政会編『工政』(194)、49 頁。

[63] 「第二特別委員会(農村工業問題に関する件)概況」(1935 年 2 月 28 日付) 東北振興調査会編(1935)『東北振興調査会議要

その後、同年 5 月 22 日に発表された「東北振興計画要綱」において卸売電力の設立は再度容認されるものの、結局この時の遅れが原因で振電は翌 1936 年 5 月に第 69 回帝国議会で審議され、同年 10 月に設立された。一方、配電設備への助成政策はそれより約 1 年半早く 1935 年 3 月に第 67 回帝国議会を通過し、成立した。しかしながらその助成額は大蔵省によって当初予定されていた予算の 3 分の 1 である総額 7 万 2801 円に削減された [64]。スタートから芳しくなった配電設備への助成政策だが、兎も角も日本最初の農村電化政策がここに実現したのである。1935 年度は東北への助成が中心とされたが、1936 年度以降はその対象は全国の農村に拡大された。

2.3. 配電設備助成政策の形成

東北における配電設備助成政策は、逓信省の地方局の 1 つである仙台逓信局を中心に実施された。1935 年 6 月、同局局長の三宅秔一の名で東北 6 県の知事と各電気事業者に対し「東北地方農村工業共同作業場に対する配電設備助成に関する件」と題した通牒が発せられた。

「一、工事費寄付金負担を必要とする農村工事共同施設配電設備に対し助成するものなること

二、前項の共同施設は成るべく村又は大字若は之に準ずる区域を単位とする地域居住民多数の相当長期に亙り引続き利用する施設なること

三、農林省に於て其の施設を助成する中枢的共同作業場及之に付随する共同作業場に対し一箇所当り配電工事決算額の七割を助成すること、但し予算額に余裕あるときは他の農村工業共同作業場にも及ぼすものとす

四、本助成金は昭和十年度内に其の交付方を指令せられたる者に限り之を交付するものなること」[65]

当時、東北農村に存在した共同作業場の設立経緯は各施設に相違があり、農林省や内務省、あるいは三井・三菱による義援金により設立されたものが混在していた [66]。その中から逓信省は、農林省からの助成で設置された共同作業場を優先的に配電設備建設の補助対象とした。つまり同政策は逓農両省が連携した政策であり、前述した 1920 年代における両省の希薄な関係に照らし合わせると協調路線に大きく舵を切ったことがわかる。この変化は東北振興調査会での審議を経て始めて実現したのであり、1920 年代以来続いた民営中心の逓信省電力行政にも重大な影響を与えたのである。

三宅が配電設備助成の通牒を送った同月 11 日、農林省は閣議で従来の逓信省・電力行政に対し以下の修正を要求した。

「一、配給区域独占の緩和

一、自家用発電に関する認可申請の簡易化」[67]

録一』委 778。

[64]「建設補助費一挙 3 分の 1 に削減」農事電化協会編(1934)『農事電化』9(4)、68 頁。

[65] 仙台逓信局長「東北地方農村工業共同作業場に対する配電設備助成に関する件」電気新報社編(1938)『電気年報』昭和 11 年版、243-244 頁。

[66] 鎌形勲(1956)『東北農村風土記』東洋経済新報社、256-261 頁。

[67] 「農林省農事電化の具体案を講ず」電気新報社編(1938)『電気年報』昭和 11 年版、99 頁。

これら 2 つは 1920 年代から継続し、1931 年 4 月成立の改正電気事業法で確立した民営中心の逓信省電力行政の根幹であった。すなわち区域独占制は電力会社間の競争を制限し、自家用発電抑制方針は需要家に買電を促すことで電力各社の経営安定化に寄与した。これらが功を奏したことで電気料金は 1930 年代前半に下げ止まる一方で電灯料金は上げ止まり、電気総合単価も安定的に推移したのである[68]。しかしながらこれが原因で産業組合など農村の電力需要家は安い電力を買えず、自家用発電によって自ら生産することも抑制されたため不利益を被った[69]。農林省が逓信省に要求した電力行政の修正はこのような農村の不満を背景にしていたのである。

このように 1935 年の逓信省の配電助成政策の実施は、区域独占制や自家用発電抑制方針といった逓信省の全体的政策が修正を迫られる端緒となった。これは 1939 年 4 月成立の国管を待たずして民営中心の逓信省電力政策がすでに動揺していたことを意味した。この流れは清水が 1936 年 3 月に電気局長を依願退職し、反・民営的な電気事業観を有する大和田悌二がその後任として就任したことで一気に加速したのである。

2.4. 第 69 回帝国議会における配電助成政策をめぐる議論

大和田は名古屋逓信局長を務めた 1935 年に中部地方を代表する地方電力会社間の係争を調停し、失敗したことで民営を中心とする電力行政に疑念を抱くようになった人物であった。大和田は、かねてから電力国営論に関心を持っていた当時の逓信大臣・頼母木桂吉の後押しにより、清水の後任として 1936 年 3 月 23 日に逓信省電気局長に就任した。その初仕事となるのが振電の会社法案が議論された第 69 回帝国議会であった。議論は振電の設立のみならず既に実施されていた配電設備助成政策にも及んだ。なお、振電のほかに衆貴両院の予算委員会で逓信省は配電設備の建設費助成費として 10 万余円、さらに農村での電気施設の建設を行う指導員派遣の経費として 2 万 2000 余円、計 12 万 2000 余円の助成を計上している。

1936 年 5 月 12 日に開かれた第 1 回東北興業株式会社法案外一件委員会に政府委員として参加した大和田は、福島県選出の民政党系議員・林平馬から次のような質問を受けた。

> 「私が聞いた例に依りますと、或る村で一年に電灯量を大体二万円位は会社に支払はなければならぬ、所が其村に小さい発電所を拵へてやれば五千円位で済む、して見ると、一万五千円は会社に儲けられる、其人達の言葉を聞くと、資本家に農村が搾取されて居るのだと云ふことであります、洵に最もだと思ひます、所が小さなものは許さないと云ふことである、而して一村でなくて一部落です、十戸二十戸位な部落でほんの少しばかりの山間を流れる水を用ひれば容易に発電所が出来て部落の需要を充すことが出来るのがありますが、それが或る会社の配電区域内にある為に、其処の部落なり村民の人々が小さな資本を集めて造ると云ふやうなことでは断じて許さない、さうすれば大変逓信省の方ではやかましいと云ふので、承知しながら、非常に高いものを会社、即ち資本家に搾取されて居る、今日の政治は資本主義の政治で、どうも貧乏人は搾取の対象物になって居るなんと云ふやうに考へるのも無理からぬ話だと思ふのであります」[70]（傍点は引用者）

---

[68] 橘川武郎(2004)、前掲書、155 頁。

[69] 産業組合による自家用発電建設は 1923 年から 1929 年頃までの過剰電力が発生した時期にピークに達した。その背景には配電線を延長する際の工事費が過重であったことから産業組合の多くが買電よりも自家用発電を経済的に選択したことが理由とされている。僻地未点灯解消記念会編(1967)、前掲書、16 頁。

[70] 『第六十九回帝国議会衆議院 東北興業株式会社法案外一件委員会議録(速記)』第一回、1936 年 5 月 12 日付、26 頁。

以上の林の不満は 1920 年代以来、区域独占と共に農村電化の阻害要因と見做された自家用発電の抑制政策に対するものであり、農林省が逓信省に求めた電力行政の修正と同様の趣旨であった。これを受けて大和田は以下のように回答した。

「是は会社の代弁では決してありませぬから御諒承願ひますが、会社と云ふものは営利会社でありますから、非常な設備を致しまして、其設備に対して電灯が 2 つか 3 つしか下らん と云ふやうな時には、是はどうしても高く取らねば引合はぬ、そこで斯う云ふ状態が重りますと、東京の如きは大変高い、是は已むを得ぬのでありますが、已むを得ぬで政府は済ます訳には行きませぬので、昨年から予算を、甚だ少しでありますが、要求致しまして、此区域を持ちながら、而も負担金を取らぬと配電の出来ないやうな地方に対しては、少しではありますが、配電助成金と云ふものを政府から出しまして、其会社の配電の約七割を補助いたします、詰り三割は会社の方で負担して、後七割は政府で補助する」[71]（傍点は引用者）

さらに大和田は 5 月 14 日の衆議院予算委員会で従来の民営中心的な方向とは異なる行政を行うことを宣言した。

「農村電気の利用と云ふことが、私共と致しましては非常に重要なことと考へまして、此処に出して居ります予算は〔中略〕2 つの方面になるのであります、1 つは配電の助成と云ふことであります、是は御案内の如く、僻村に対して電気を普及せしむると云ふことは、非常な困難を営利会社としては感じます、其為に彼の東北 6 県の中の或る 15 の僻村を取りまして、建設費などを調べて見ますと、他所の普通の全国平均に比べましても、300 円乃至 400 円も高く附くと云ふやうな工合になって居るものでございますから、僻村に電気を普及せしむると云ふことは容易でございませぬ、そこで何とかして此僻村にも電気を普及させたいと云ふ、其困難を除去することは、まあ配電設備を会社に対して容易に為し得るやうに考へれば宜いと云ふことに着眼致しまして、会社が配電設備に非常な金が掛かるから、需要者から負担金を沢山取らなければならぬと云ふ事情にあります場合に、其配電費の 7 割と云ふものを補助を致しまして、さうして結局 3 割で出来るやうな形にしたい〔中略〕然しながら是は独り東北のみに限りませぬ、是は昨年からやって居りますが、本年は少し予算を殖しまして、全国的に約 40 位な共同作業場を狙ひまして、助成を致したいと云ふことにいたして居るのであります、それが 1 つと、もう 1 つは昨日も問題になりましたが、小さな水力地点を発見して、経済的に開発をするならば、而も非営利的にやるならば、非常に安く電気が使へるに拘らず、逓信省が電気区域と云ふものの独占を認めるが故に、どうしても高い電気を買はなければならなくなって居ると云ふ、不合理なことになっております、斯う云ふ非難は確に御尤なことであると思って居ります」[72]（傍点は引用者）

電気局長・大和田は、農林省や林平馬議員から批判された区域独占制と自家用発電抑制の弊害を率直

[71] 同上、27 頁。

[72]『第六十九回帝国議会衆議院 予算委員第六分科(逓信省及鉄道省所管）会議録(速記)』第二回、1936 年 5 月 14 日付、6−7 頁。

に認めた。さらに「僻村に対して電気を普及せしむると云ふことは、非常な困難」が伴うと「営利会社」である電力会社の限界を指摘した。だからこそ大和田は配電設備助成政策の意義を訴え、その対象を東北から全国の農村に拡大するとした。加えて、従来抑制されていた自家用発電建設を解禁・促進するため、逓信省から全国の農村に「電気指導員」を派遣することを決定した。

以上の大和田の言説から分かるように、配電設備助成政策は農村電化の先駆的政策であると共に、電気指導員の派遣などの政策を促す契機となった。つまり 1931 年 4 月成立の改正電気事業法は 1939 年 4 月に成立した電力国家管理によって終焉するが、実際はその 3 年前から既に重要な曲がり角に差し掛かっていたのである。このことから、筆者は民営中心の逓信省電力行政は通説で言われているように、1939 年 4 月を境に断絶[73]したのではなく、1935 年以降の東北振興政策を経て次第に変遷したと見るのが妥当であると考える。そしてこの変遷の中心にあったのが配電設備助成政策をはじめとする農村電化政策であった。

3. 国家管理論争下の農村電化論―森秀の言説を中心に（1936～1941 年）

1936 年 5 月 12 日、振電の会社法案は第 69 回帝国議会に上程されてから両院各 4 日という短い期間で可決された[74]。このことは振電と配電設備助成政策が民営電力会社から反対されず、むしろ歓迎されたことが背景にあった。

しかしながらこれ以降、電力業をめぐる官民の融和的な関係は一気に敵対的関係へと転ずる。それは 1936 年 6 月 10 日に内閣調査局が「電力国策の結論」を発表し、そのなかで電力国家管理が公然と訴えられたことによって始まった[75]。同年 7 月 3 日には逓信省から「電力国策要綱」と「電力国策要綱説明書」が発表され、10 月に入ると初期の電力国家管理案である「電力国家管理要綱」（頼母木案）が発表された。この後、1937 年 1 月 23 日に広田内閣が総辞職したことで一旦国管は頓挫し、次の林銑十郎内閣では国管案が撤回されたため振り出しに戻るなど紆余曲折を経たが、最終的には 1938 年 1 月 25 日、第 73 回帝国議会に電力国家管理案が上程され、両院協議会を経た上で同年 3 月 26 日に成立した[76]。

以下では官民の論争期において配電設備助成政策をはじめとする様々な電力政策をリードした逓信省の技術官僚・森秀の役割に注目する。

3.1. 逓信省技術官僚・森秀の電気事業観

1936 年 3 月に逓信省電気局長に就任した革新官僚・大和田悌二は、前任者である清水順治が主導した民営中心の電力政策を終わらせ、国営中心(すなわち国管体制）に切り替えた意味で「転轍者」の役割を果たしたと言えよう。しかしながら大和田は京都大学の法科出身であり、逓信省でのキャリアも管船局から出発した為に電力技術者による支援を不可欠とした。その役割を担ったのが 1930 年代以降の戦前・戦時の電力行政で活躍して技監にまで登りつめた逓信省の技術官僚・森秀であった。森は 1917 年に東京帝国大学電気科を卒業後、逓信省に入省した。その後台湾総督府交通局で技師を務めた後、電力管理準備局技師および第 1 電気課長を歴任した。1939 年 4 月には国管成立により新設された電気庁の第 2 部

[73] たとえば電力業をめぐる２つの体制の断絶を強調する橘川武郎氏によれば、改正電気事業法の崩壊後に続く国管体制は「国家主義的イデオロギーや全体主義的イデオロギーの台頭という、経済外的要因」により誕生したと述べている。橘川(2004)、前掲書、162 頁。

[74] 東北振興電力編(1942)『東北振興電力株式会社社史』14 頁。

[75] 逓信省電気庁編(1942)『電力国家管理の顛末』11-14 頁。

[76] 同上、354 頁。

長に就任する[77]。大和田は逓信省事務次官に就任後、当時逓信大臣であった村田省蔵と反目して辞職したが、森秀は技術者として逓信省に留まり終戦まで戦時日本の電力行政を主導した。

森は 1930 年代に入ると電力技術に関する啓蒙や普及のため講演や著作の出版を行い、1932 年には処女作『電気一夕話』[78]を出版した。1936 年以降、帝国議会や各種の研究会で技術者の見地から電力行政に関する言説を展開することで大和田悌二を側面からサポートした。

3.2. 農村電化をめぐる森秀の言説

森が配電設備助成政策について公式に発言するのは同政策実施から 2 ヶ年目に突入した 1936 年であった。同年、農事電化協会が主催した「農用機器動力座談会」席上で森はそれまで農事電化について「逓信省としては一般的に我々技術関係の者が研究するといふやうな状態になつて居りませぬでした」[79] と発言した。この発言は配電助成政策を契機として森をはじめとする逓信省内の技術官僚が台頭したことを物語っていると言えよう。

さらに森はそれまでの逓信省電力政策の根幹であった供給区域独占制が農村電化の阻害要因となっていることを次のように述べた。

> 「それから供給区域の関係でありますが、是は先程も御話がありまして、どうも電気事業法に依つて定められて居る供給区域の境界の厳重なることが農村に電気を普及させる上に於て相当邪魔になつて居る点もある、是も認めます」[80]

森は技術者の観点から配電設備助成政策をはじめとする農村電化を推進したが、改正電気事業法に基づく従来の電力行政についても大和田と同様に批判的であった。翌 1937 年、森は農村電化について次のように述べた。

> 「都市と農村とでは供給設備に於て顕著な懸隔を示し、之を自然の成行に委せて置けば、農村は電気を十分に利用することが永久に望まれぬ立場に置かれる。〔中略〕故に農村に於て電気を十分利用しようとするならば、その事だけを掌る特殊の団体を設け以て其の事業の永続を図り、之に其の仕事を担当せしめる〔中略〕此の様式は従来我国で行はれてゐた電気未普及部落に対する共同自家用電気施設又は電気利用組合と類似の点もあるが、積極的意味に於て大いに異なつてをる。前者は中央特殊機関が之を統率して所用資金の斡旋等もする必要がある。米国の農村電化局(REA)は最も進歩した一例である」[81] (傍点は引用者)

大和田の前任者である清水順治が、「民営を主とする自然の発達」[82]に基づいた日本の電気事業の在り方を尊重したことは既に触れた。森も清水同様に従来の電気事業が「自然の成行」に任せて発展したことを認めるが、それによって農村電化が「永久に望まれぬ」ことを問題視したのである。さらに森は農

---

[77] 日本図書センター編(1989)「森秀」『昭和人名辞典』第 1 巻(東京編)、1003 頁。
[78] 森秀(1932)『電気一夕話』工政会出版部。
[79] 森秀(1936)「逓信省と農事電化に就て」農事電化協会編『農事電化』10(8)、26 頁。
[80] 同上、35 頁。
[81] 森秀(1937a)「電気事業の指向」電気新報社編『転換期電気事業の展望』、19−20 頁。
[82] 逓信省電気局編(1934)、前掲書、8 頁。

村に存在した電気組合などの既存の機関では農村電化の推進体として不十分であり、アメリカの REA(Rural Electrification Administration)に類似した「特殊な団体」の創設が将来必要であると指摘した[83]。

しかしながら当時の状況のなかで森が農村電化の主体として最も適切であるとしたのが配電助成の対象とされた共同作業場であった。

> 「〔中略〕我が国に於ける農村電化は共同作業場を中心として行く以外に飛躍の途がないと信じてゐる。それにはまづ共同作業場の拡充を通して農村工業の通俗化を図るべきで逓信省としては共同作業場奨励のため農林省とも協力配電設備に対し積極的に援助をしてゐる」[84]

さらに森は電力の需要を増やすことで利用率を向上させ、農村での配電設備建設の経済化を促進することが不可欠であると主張した。その一環として森は電力の需要を喚起するために「何にの楽しみもない山間僻地の人が僅かに受けられる文明の恩恵」[85]としてラジオの共同聴取に着目している。

3.3. 民営電力会社の反応

このように森が主導した配電設備助成政策は当時の民営電力各社からも歓迎された。とくに 1936 年 9 月に 5 大電力の 1 つである東邦電力が新興産業部を設立すると電力各社はこれに続き次々と農村電化事業を推進するための特設機関を設置している[86]。その動機について東邦電力の社長である松永安左エ門は次のように述べている。

> 「電気事業者は最早電気の売買に終始し若しくは需要の開拓にのみ腐心専念すべきでなく、其の公益事業たるの本質に鑑み利潤の一部を割き、以ては之を有効に駆使し今少し国家社会に直接貢献する奉仕事業を営み以て民衆に酬ゆるに非れば真の使命を達成するものとは云ひ難し」[87]

これは帝国議会で審議されていた国管を意識したものであり、企業形態の変革に依らずとも民営電力会社による農村電化が可能であることを示した。

3.4.「睡眠作業場」の発生と配電設備助成の打ち切り

このように官民の様々な思惑のなかで実施された配電設備助成政策と共同作業場の設置奨励であるが、それにより戦間期以来の課題であった農村電化はどのように進展したのであろうか。結論から言えば共同作業場への配電設備助成は失敗の歴史であった。

原因の 1 つは、当初逓農両省が企図した共同作業場における電動機の集中的運用が農村の実態に適さ

---

[83] 民営電力会社に委せた「自然の成行」によっては農村電化は為し得ず、その為に REA に倣った「特殊機関」の設置を求めた森秀の主張は、農林省総務局所属の久谷福次郎によって「御意見が妥当でなく、又折角乗り気になつて居る」電力会社に不満を与えることから「多少の異議がある」と批判されている。久谷福次郎「森秀氏の御説を読んで」農事電化協会編(1938)『農事電化』12(1)、60 頁。

[84] 森秀(1937c)「共同作業場を中心に！」農事電化協会編『農事電化』11(11)、70−71 頁。

[85] 森秀(1937b)「電気行政と農村電化」農事電化協会編『農事電化』11(8)、37 頁。

[86] 東邦電力以外の電力各社による農村電化事業としては東京電灯前橋支店開発係、日本海電気産業振興係、京都電灯産業相談所、宇治川電気電化指導班、広島電気農村電化特設機関などが存在した。農事電化協会編(1940)『農事電化発達史：農事電化協会十五周年記念出版』、264 頁。

[87] 松永安左エ門による新興産業部設置の説明。東邦電力史編纂委員会編(1962)『東邦電力史』、406 頁。

なかったことが挙げられる。農村における電動機の普及率が高い新潟県においてそれは特に顕著であった。同県では小型電動機の個人使用が横行し、資力に余裕のある者の中には自ら使用する一方で賃貸するなど半営業的な行動に出ることもあった[88]。

原因の 2 つ目は、政府からの助成があったとはいえ建設に伴う経済的限界が完全に解消されなかったことにある。既設の配電線路から近く、建設が比較的容易な地点が最初期に助成対象として選ばれると、後には山深い遠隔地の供給区域が残された。こうした地域で配電設備を建設することはたとえ助成を得たとしても採算上不利となるため電力会社からの助成の申請が滞ったのである[89]。

原因の 3 つ目は、当時の農村の動力の主流であった石発が電動機の普及を妨げたことが挙げられる。石発は①固定されず、任意の場所で使用可能であり、②移動が容易であり、③さらに運転休止中は一切の燃料などの諸費用が発生しない点で、電動機に比べて有利であった。配電助成の最初の対象地であった東北でも石発が先行して普及しており、全国的にも同様であった。農村における石発の使用台数は太平洋戦争の勃発により燃料事情が逼迫したことが原因で 1942 年頃をピークに低下した。それでも電動機は専ら食料増産に直結する部門での使用に限られたこともあり、その使用台数が石発を抜くことはなかった[90]。

こうした事情により、当初の期待とはほど遠い実績であったため、助成金の予算は 1938 年度以降、前年度の半額に削減された。逓信省の各地方局への予算の割り当ては仙台逓信局(7 万 2801 円)、東京逓信局(3672 円)、大阪逓信局(3672 円)、広島逓信局(3754 円)、熊本逓信局(3213 円)、札幌逓信局(459 円)の順であった。この減額の背景には 1937 年 7 月 7 日勃発の日中戦争があった。それまで可能であった余剰予算の繰越も禁止され、年度末迄に交付されない助成金は大蔵省に返上することが決定された。こうした予算の逼迫もその後の配電設備助成政策の成果に影響を与えたのである[91]。

以上の理由により助成金が手厚く交付された東北地方でさえ農村共同作業場の電化施設の効果は上がらず、中には「睡眠作業場」[92] と揶揄されるほど不活発な施設すら存在した。そのため仙台逓信局は電気料金の改訂により共同作業場の採算性を高めることで解決しようとしたが、結局 1938 年度を最後に配電助成政策の予算は打ち切られたのである。

4. むすび

1920 年代以来、議論された農村電化論は後進資本主義国である日本の都市と農村間の格差(二重構造)を電力技術によって解決しようとする試みに他ならなかった。当該期は動力が蒸気力から電力へと転換した時代でもあり、これを応用することで工業の都市集中を農村への分散に転じる技術的可能性が形成された時代でもあった。具体的には水力発電による電力の過剰供給と料金の低下、そして小型で低廉な国産電動機の普及が農村電化論に有力な根拠を与えた。

この客観的変化に最初に着目したのが農業関係者や電力会社の経営者であった。彼らは 1923 年 6 月、

---

88 「農村電化に履違ひ 県方針に逆行の結果」農事電化協会編(1938)『農事電化』12(1)、72-73 頁。

89 「前途なほ遠い農村電化の普及」農事電化協会編(1938)『農事電化』12(4)、89-90 頁。

90 僻地未点灯解消記念会編(1967)、前掲書、19 頁。

91 「尚本来は過年度の予算も交付先を決定した場合は翌年度にこれを繰越交付することが出来たが、支那事変の予算編成に於て大蔵省では当該年度の余剰予算はこれを翌年度に繰越すことを許さない方針であり、従つて逓信省の配電線助成金も各逓信局に於て年度末迄に交付せざる場合は余剰を大蔵省に返上することになつたので各逓信局では右助成金交付の申請を督促し本年度内に全額を交付する方針を決定した」「配電線助成金明年度半減」農事電化協会編(1937)『農事電化』11(11)、81-82 頁。

92 「共作場電力料金に仙逓局再検討か」農事電化協会編(1939)『農事電化』13(9)、95 頁。

『新農村』や『農事電化』といった機関誌を発行する農事電化協会を結成した。両者は同協会で協力するものの、電力供給者と需要家として時に対立した。

次に農村電化に着目したのが産業組合を通じた農村政策を実施する農林省であった。同省は 1930 年代前半、経済更生運動や共同作業場の奨励を通じた農村合理化を推進していた。この過程で農林省は高額な配電設備が農村電化の阻害要因であると認識した。その背景には供給区域独占制や自家用発電の抑制といった逓信省の政策があった。これに五十子巻三ら農林官僚は不満を募らせていたが、当時の逓信省は民営中心の電力行政を志向していたためこの問題に積極的に介入する動機はなかった。

この逓農両省の関係は 1935 年以降の東北振興政策を期に変化し、これにより国営卸売電力会社である振電と配電設備助成政策が成立した。この案の創始者は農事電化協会の会員であり、かねてから農村電化に関心を持った逓信省出身の技術者・渋沢元治であった。振電は東北振興調査会内で有馬頼寧から反対を受けたため実施が翌 1936 年に持ち越されたが、配電設備助成政策は予算が小規模であり実施効果も期待されたことから 1935 年の第 67 回帝国議会を通過し、成立した。同政策は逓農両省が連携した政策であり、農林省が所管する共同作業場に引かれる配電設備の建設に最大 7 割の助成を逓信省が公布することを骨子とした。しかしながらその実施期間はわずか 4 年間であり、打ち切られた原因としては農村における動力の個別使用の実態や石発との競合、そして 1937 年 7 月に勃発した日中戦争による財政全体の逼迫があった。

助成政策は共同作業場を通じた農村電化という当初の目的を十分に果たせなかった一方、少なくとも電力をめぐる全体的な状況に以下 4 点の影響を与えた。1 つは区域独占制や自家用発電抑制といった従来の逓信省の政策が見直される契機を作ったことである。2 つ目は同政策に関わることで渋沢元治や森秀といった技術官僚が政治的発言力を増大させたことである。3 つ目は東邦電力などの各社が助成を得て配電設備を建設し、国管を進めていた革新官僚に対抗したことである。4 つ目は農村の電動機の取付個数の絶対数の増大に寄与し、幾つかの未点灯部落では電灯が灯るなど「意図せざる効果」を残したことである。たとえば 1939 年における共同作業場設置の電動機の馬力数は 1936 年比で 19.9%増大し、使用電力量も 50%増加している。また、共同作業場の助成のための配電線路により計 9 箇村に電灯が灯り、1935 年から 1938 年にかけての全助成期間で約 5000 戸が点灯したと言われている[93]。

配電設備助成政策をめぐる一連の過程は電力技術へのアクセスや支配を巡る駆け引き、ないしは農村電化をめぐるポリティクスであった。1920 年代では農業関係者や電力会社の間で言説が展開し、1930 年代以降は逓農両省の官僚がこれに合流した。さらには渋沢や森秀といった技術者が参画したことで農村電化をめぐるポリティクスは複雑な様相を呈した。

1920 年代から 1930 年代前半にかけては電力会社の経営者がリードしたが、1935 年の東北振興政策以降は大和田ら革新官僚が次第に力を伸ばした。しかしながら革新官僚は電力技術の専門家ではない以上電力行政を民営から国営へと転換する「転轍者」の役割しか果たし得なかった。その「遺産」である日本発送電株式会社と電気庁を引き継いで戦時日本の電力行政をリードしたのが森秀をはじめとする技術者であった。配電設備助成政策はこれら一連の政治過程における媒介的役割を果たしたと言えるのではないだろうか。

内川隆文(うちかわ たかふみ、Takafumi UCHIKAWA)
東京外国語大学大学院 博士後期課程

[93] 森秀(1947)『農業電化の実態』コロナ社、93 頁。

【参考文献・資料】

内川隆文(2016)「「民有国営」を巡る経済論争の研究：向井鹿松と小島精一を中心に」東京外国語大学国際日本研究センター編『日本語・日本学研究』(6)。

梅本哲世(2000)『戦前日本資本主義と電力』八朔社。

梅本哲世(2004)「改正電気事業法への道―『臨時電気事業調査会特別委員会議事要録』の分析」大阪市立大学経営学会編『経営研究』55(2)。

橘川武郎(1995)『日本電力業の発展と松永安左エ門』名古屋大学出版会。

橘川武郎(2004)『日本電力業発展のダイナミズム』名古屋大学出版会。

栗原東洋編(1964)『現代日本産業発達史 3 電力』交詢社出版局。

白木沢涼子(1994)「昭和初期の電気料値下げ運動」青木書店編『歴史学研究』(660)。

嶋理人(2012)「1931 年改正電気事業法体制の特徴と変質：京成電気軌道の東京電灯千葉区域成就問題をめぐって」政治経済学・経済史学会編『歴史と経済』55(1)。

通商産業省編(1979)『商工政策史 第 24 巻 電気・ガス事業』商工政策史刊行会。

逓信省電気局編(1934)『電気委員会(第七回）議事録』。

電気新報社(1938)『電気年報(昭和 11 年版）』電気新報社。

電力政策研究会編(1965)『電気事業法制史』電力新報社。

中瀬哲史(2005)『日本電気事業経営史 9 電力体制の時代』日本経済評論社。

中村隆英,尾高煌之助編(1989)『日本経済史 6 二重構造』岩波書店。

西野寿章(1988)「国家管理以前における電気事業の性格と地域との対応;中部地方を事例として」人文地理学会編『人文地理』40(6)。

西野寿章(2013)「戦前における地域組合電気事業の計画と挫折―秋田県横手地方を事例として」高崎経済大学経済学会編『高崎大学論集』55(3)。

日本図書センター編(1989)『昭和人名辞典』第 1 巻(東京編)。

橋川文三「革新官僚」神島二郎編(1965)『現代日本思想大系 10 権力の思想』筑摩書房。

橋本寿朗(2004)『戦間期の産業発展と産業組織Ⅱ 重工業化と独占』東京大学出版会。

秦郁彦編(2002)『日本近代人物履歴辞典』東京大学出版会。

古川隆久(1990)「革新官僚の思想と行動」公益財団法人 史学会編『史学雑誌』99(4)。

堀真清(1978)「電力国家管理の思想と政策」早稲田大学社会科学研究所ファシズム研究部会編『日本のファシズムⅢ ―崩壊期の研究』早稲田大学出版部。

松島春海(1975)「日本発送電株式会社の成立過程―戦時電力統制と日本発送電株式会社法の成立」埼玉大学経済研究室編『社会科学論集』(35)。

松島春海(1976)「戦時経済体制の成立過程と産業政策―電力統制政策の展開を中心として」安藤良雄編『日本経済政策史論 下』東京大学出版会。

森秀(1932)『電気一夕話』工政会出版部。

森秀(1936)「逓信省と農事電化に就て」農事電化協会編『農事電化』10(8)。

森秀(1937a)「電気事業の指向」電気新報社編『転換期電気事業の展望』。

森秀(1937b)「電気行政と農村電化」農事電化協会編(1937)『農事電化』11(8)。

森秀(1937c)「共同作業場を中心に！」農事電化協会編(1937)『農事電化』11(11)。

森秀(1947)『農業電化の実態』コロナ社。

三谷太一郎(1995)『日本政党政治の形成―原敬の政治指導の展開』増補版 東京大学出版会。
芳井研一(2004)「電気料問題と地域社会」新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト佐渡・越後の文化交流史研究編『佐渡・越後文化交流史研究』(4)。
吉田啓(1938)『電力管理案の側面史』交通経済社。
若月剛史「一二九〇年代における逓信省の変容―科学的管理法を中心に」東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室(2007)『東京大学日本史学研究室紀要』(11)。

安部公房『第四間氷期』論―「記憶」と「満洲」をめぐって―

The Memory and Manchuria in Abe Kōbō's novel *Inter Ice Age 4*

解 放

Abe Kōbō (1924-1993) is one of the representative Second Generation of Postwar Writers of Japan. His *The Woman in the Dunes* has been recognized worldwide. Abe was born in 1924; he spent his adolescence in Manchuria and returned to Japan in October 1946. At present, Abe is widely known as an avant-garde writer based on his series of "Tales of Transformation," which were published in the 1950s.

This study focuses on the analysis of Abe's representative avant-garde novel/ science fiction novel *Inter Ice Age 4*, which serialized from 1958 to 1959. The future-predicting computer in the work reflects Abe's opinions on the Cold War and his concern for the Japanese Communist Party at the same time. In addition, rather than predicting the future, the computer reconstructs the memories of the past, and the memory that the computer reproduces reflects Abe's experience in colonized Manchuria.

The water-oxygenating humans' child in *Inter Ice Age 4* is similar to corpses that Abe Kōbō saw in Manchuria. The seabed where water-oxygenating humans live is also called an artificial colony and is similar to the formation process of Manchukuo. Thus, the image of water-oxygenating humans depicted in *Inter Ice Age 4* comes from Abe's experience in colonized Manchuria.

This study aims to clarify the relationship between the surreal settings such as a future-predicting computer or water-oxygenating humans in *Inter Ice Age 4* and Abe's memory and explores the suggestiveness of Abe Kōbō's experience in colonized Manchuria that is hidden in the text.

【キーワード】安部公房、『第四間氷期』、記憶、満洲、歴史
Abe Kōbō, *Inter Ice Age 4*, Memory, Manchuria, History

はじめに

安部公房(1924−1993)は生誕後まもなく、日本の植民地である満洲に渡り、終戦までの長い期間を満洲で暮らしてきた。1948 年に東京帝国大学の医学部を卒業したものの、彼は医学関係の道を放棄して、文学を志したのである。

現在、安部公房は前衛文学の担い手として認識されている。ただし、安部はその文学創作の当初から前衛的だったのではない。むしろ、彼はリルケの影響で、実存主義を作品において追求してきたのだ。例えば『終りし道の標べに』(1948 年)や『名もなき夜のために』(1948 年)などの小説が代表的である。また、安部の 40 年代の作品群を一覧すると、『牧草』(1948 年)や『鴉沼』(1948 年)などのような、リアリズム小説も多く出版していることがわかる。このような一連の作品を経た後に、安部は「変形」や「変身」といったテーマを作品で扱いはじめ、その作風が初めて前衛に転換したのである。

安部公房の作風が前衛的なものに転換していく過程において、長編小説『第四間氷期』は特筆すべき作品だと言える。なぜならば、本作は安部が初めて書いた「SF 小説」であり、評論家の奥野健男が「日

本における最初の本格的長篇 SF である」[1]と評しているほどの重要な作品であったからである。しかし、本作に関する研究は、『砂の女』や『他人の顔』に関する研究と比較すると明らかに少ない。

本論文では、安部公房の SF 小説の代表作である『第四間氷期』を研究対象に、テクストに描かれている「予言機械」と「水棲人間」といった科学的・未来的な存在に焦点を当て、このような科学的・未来的な存在と、安部の過去の「記憶」との関連性を考察する。また、こうした検討を通して、『第四間氷期』のテクストに反映されている安部の植民地・満洲での実体験の意味合いを明らかにしたい。

1。SF 小説としての『第四間氷期』

『第四間氷期』は、『世界』1958 年 7 月号から 59 年 3 月号まで連載された安部公房の長編小説である。まず、本作の梗概を簡単に紹介する。

ソ連は「予言機械」の「モスクワ 1 号」と「モスクワ 2 号」を続けて開発し、天気や経済発展などを正確に予言した上で、「未来は共産主義の世の中」になるという最終予言を行なった。日本の技術研究所の勝見博士は、ソ連に触発されて日本版の「予言機械」である「KEIGI−1」を開発した。勝見博士は或る一般人の男性を予言対象にして予言しようとしたが、男は殺されてしまった。勝見は犯人を捜すために「予言機械」を利用して、男の生前の「記憶」を見ることに成功したが、犯人はわからないままであった。しかし、「予言機械」を利用して調査しているうちに、勝見の妻は、謎の組織に騙されて堕胎させられた。この組織とは「水棲人間」を養育する組織であった。後に、自分の子供が「水棲人間」として成長することを知った勝見は、胎児を殺そうとしたが、未来の勝見博士に阻止され、最終的には、現在の勝見博士は未来の勝見博士に雇われた殺し屋に殺されて、物語は終わる。

注目すべきは、本作が発表された時点では、「SF」というジャンルがまだ日本の文壇において確立されていなかった点である。奥野は『第四間氷期』が発表された時代の状況を次のように述べている。

> この頃、日本ではまだ SF というジャンルははっきり意識されていなかった。今日の観点から歴史的に遡れば、それ以前にも SF 的作品をいくつも発見し、拾うことが可能であろう。しかしそれは飽くまでも SF 的作品であり、作者がはっきり SF として、意識して書いた作品ではない。[2]

引用にあるように、『第四間氷期』が発表された 1950 年代後半には、日本での「SF」の定義はまだ確立されておらず、作家も自身が創作している作品が「SF」とは認識せずに執筆していることが多い。「SF」とは「Science Fiction」の略称で、科学的な空想に基づくフィクションのことを指し示す。日本において、「SF」は科学小説や空想科学小説とも呼ばれている[3]。定義に示されている通り、「SF」で重要視されているのは「サイエンス」と「フィクション」の二つの側面である。

安部は『第四間氷期』の執筆以前の作品において、既に科学技術や未来といったテーマを彼の作品で言及している。例えば、食糧危機を乗り越えようとして、羊の腸を人間に移植することで「草食人間」を作り出した話を描いた『盲腸』(1955 年)や、人間が 80 万年後にタイムスリップすることを描いた『鉛の卵』(1957 年)などが代表的である。しかし、科学技術や未来を一つの作品で統括的に描いたのは、『第

[1] 奥野健男「解説　安部公房―その人と作品」『世界 SF 全集』第二十七巻、早川書房、1971 年 5 月、p.483。
[2] 同上。
[3] 石川喬司『SF の時代―日本 SF の胎動と展望』奇想天外社、1977 年 11 月、p.9。

四間氷期』が最初だと思われる。奥野健男の「日本における最初の本格的長篇 SF 小説」という評価も『第四間氷期』のこの特徴を指し示しているだろう。

当時の批評家が本作を「本格的」「SF 小説」と認識しているのは、おそらく『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」や「予言機械」など現実では考えられない設定が科学や空想に結びつくところから生じると考えられる。しかし、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」と「予言機械」には、科学的・空想的側面の他に、現実的な意味合いも含まれていると思われる。次節では、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」と「予言機械」の現実的な意味合いを考察する。

2。「予言」と「記憶」

『第四間氷期』には未来を予言できる「予言機械」が描かれている。作品で名を挙げられている「予言機械」とは、ソ連開発の「モスクワ 1 号」、「モスクワ 2 号」、日本開発の「KEIGI−1」のことである。作品に登場する「予言機械」は、ソ連が「モスクワ 1 号」を最初に開発したことによって、世界的話題となる。日本もソ連の「モスクワ 1 号」に触発されて、自身の「予言機械」の開発を加速させるようになる。しかし、「KEIGI−1」という「予言機械」が完成すると同時に、ソ連は「モスクワ 1 号」から進化した「モスクワ 2 号」を開発した。

天気や経済を中心に予言してきた「モスクワ 1 号」と異なり、「モスクワ 2 号」は政治的事件を専ら予言してきたため、アメリカから批判を浴びた。アメリカの政治的圧力はソ連に向けられているのと同時に、日本にも向けられている。勝見が「友邦アメリカの、この強硬な態度が、私たちの仕事に影響をおよぼさぬはずがない」[4]と述べているように、日本の「予言機械」「KEIGI−1」は、アメリカの影響を受けているために、その予言は政治とは無関係なことに限定されるようになったのだ。こうした経緯で、日本の「予言機械」の開発者勝見と頼木は、政治とは無関係の「個人の未来」を予言することに決める。

しかし、彼らが無差別に選択したはずの予言対象である「男」が突然殺されることによって事態は急転し、勝見と頼木は結局特殊な「サンプル」を選択した結果となってしまう。最終的に、勝見と頼木は、自分たちにかけられた殺人容疑を晴らすため、「男」の死体で「予言機械」を初めて本格的に試すことを強いられる。言い換えれば、これによって、日本の「予言機械」「KEIGI−1」が初めて本格的に稼動するならば、その予言対象として選択したのは、未来に生きることのない、つまりは未来を予言する可能性すらない死体であった、ということである。

この日本の「予言機械」が、未来の出来事の予測ではなく、過去の記憶を再現していることに重心を置いている点は注目すべきである。例えば、日本の「予言機械」「KEIGI−1」が本格的に始動した際、機械に掛けられた対象の「男」は既に死んでいるため、機械が予言しているのは未来のことではなく、死体となった「男」の過去の記憶である。つまり、「男」の死体に接続された「予言機械」が読み込んでいるものは、彼の脳細胞と神経であり、この「予言機械」は土田進という実在した「男」を、方程式の形式で機械に再現させたものなのだ。しかし、再現には成功したと言っても、機械から得られたものとは、彼が殺される直前の場面と、殺害されるまでの供述であり、「男」の記憶と回想といった過去のものに限定される。そもそも、「男」は既に死んでいるため、それ以降の未来を予言することは不可能である。その上で、勝見と頼木が生きている「女」を「予言機械」に掛けたにもかかわらず、彼女の未来を予言することにも失敗した点に着目する。

[4] 安部公房「第四間氷期」『安部公房全集 9』新潮社、1998 年 4 月、p.17。

「やはり、何かにおびえているのかな？」

「さあ……ただ自分の影におびえているだけかもしれないし、あるいは、真犯人をかばおうとしているのかもしれない。もちろん、実際に強迫をうけている場合だってありうるわけだ。」

[…]

「もちろん、話としてだけですよ。三週間以内だって、胎児だって、なにかの特殊な隠語かもしれませんし……まあ、とにかく、女を機械にかけてみましょう、それが先決です。」

[…]

「じっとしていたって、いずれ嫌疑の手はのびてきますよ。[…] 面白いですよ、ああいう女の未来を占ってみるのも……」[5](下線筆者、以下同様)

引用部は、勝見と頼木が生きている「女」を「予言機械」に掛ける直前の描写である。彼らは「女の未来を占ってみる」と語っているが、実際二人が知ろうとしている内容とは、「何かにおびえている」、「真犯人をかばおうとしている」や「強迫をうけている」といった既に過ぎ去った殺人事件の真相に、「女」が如何にして関わっているかなどのことである。つまり、この場面においても登場人物が「予言機械」を通して知り得るものとは、未来のものではなく、過去のものに限られていることが示唆されている。また、「女」は、神経細胞が読み取れなくなるほどのダメージを、自殺するために服用した薬によって与えられるため、結局二人が考えている「女」の「未来を占ってみる」という計画自体は失敗に終わるのである。

さらに、勝見博士が「予言機械」を利用して妻の中絶事件を調査しようとした時には、「妻を予言機械にかけて、その記憶をほり出してやることだ」[6]と言われているように、勝見が「予言機械」を通して把握しようとしていることは、やはり妻の未来ではなく、彼女の「記憶」である。本来、予言とは、ソ連の「予言機械」が機能しているように、天気予報や国家経済の見通しなどの未知の事象に関する予測である。しかし、日本の「予言機械」は、ソ連のものとは異なり、未来の予測に焦点をあてているのではなく、記憶という過去に発生した出来事を再生産することに力点を置いているのだ。テクストに描かれている日本の「予言機械」の特徴からして、「KEIGI-1」は豆の成長の分析など、未来の予言はできるものの、その主な機能とは、過去の記憶の再現にある、ということが言えるだろう。こうした設定は、日本の「予言機械」の操作原理と深く関わっていると思われる。

やがて機械の装備は充分だと思われたので、あとはもっぱら訓練と教育に専念することにした。[…] しかし機械は自分で出てまわることは出来ないから、われわれ人間が手足になって歩きまわり、データを集めてきてやらなければならない。

[…]

機械は、無限の消化力をもっている。食べさせてやると、適当に自分で消化して、すっかりどこかに貯えてしまうのだ。そのうちどこかの《系》が飽和してくると、飽和したところから、その合図があるはずだ。するとその部分は、もう自分でプログラムを設計する力をもっていることになる。[7]

[5] 同上、pp.54-55。
[6] 同上、p.113。
[7] 同上、p.16。

引用に書かれているように、日本の「予言機械」は、過去にあった記憶、すなわちデータを分析し、収集されたデータをもとに、未来の可能性を予測する機械である。この原理は、勝見博士と頼木が「予言機械」を「さっそく棚から例のスクラップをおろし、ばらばらにして、機械に分かり易いように、整理する仕事にかかった。スクラップの中身を、予言機におぼえさせてやろうというわけだ」[8]と操作するところから見てもわかる。作品に描かれている「予言機械」の工作内容とは、過去の記憶を最大限に積み上げ、この過去の記憶を分析することによって、未来の可能性を映像化することである。「予言機械」の原理からわかるように、未来とは、未知のものではなく、過去の記憶を推測することによって、把握できるものとして呈示されている。『第四間氷期』では、未来よりも、過去の記憶が優先され、未来の出来事とは、過去の記憶によって導き出されたある種の結論なのだ。

このように『第四間氷期』における「予言機械」が、未来の予言に力点を置くのではなく、過去の記憶の再現に力を入れていることは留意しなければならない。「記憶」がこれほど強調されていることを考慮すれば、この「記憶」という言葉について、単にテクスト自体の研究では、その意味合いの全貌を知ることは不可能ではないかと思われるからだ。筆者は、「予言機械」における記憶の再現が、作家としての安部公房の過去の「記憶」と結び付く可能性について考察してみたい。まず、次の二つの引用に着目してみる。

> ある一人の個人の未来を予測するということも、頭で考えていたあいだは、いかにもすばらしい試みのように思われていたのだが、こうして実際にその実験材料になるかもしれない人間を目のあたり見てしまうと、本当にそれほど意味のあることかどうか、疑わしくなってしまうのだ。[9]

> 「そう、資格さ……医者だって、むやみと人体実験を許されているというわけじゃない。下手すると、君、こいつは生体解剖なみだよ。」[10]

上記の二つの引用は、勝見と頼木が「予言機械」に掛ける対象を探す場面での描写である。下線部に注目すると、二人は予言の対象を「実験材料」と称し、さらに、予言自体を「人体実験」や「生体解剖」と比喩的に語っている。勝見博士は「人体実験」や「生体解剖」といったグロテスクなイメージを孕む言葉で述べているが、実際の「予言機械」の稼働場面はまさにその言葉通り、すなわち、グロテスクに進行するのだ。例えば、殺された男性の死体を「予言機械」にかける場面は次のように描かれている。

> 屍体は、特殊なガスと一緒に大きなガラス箱に密閉され、分析員はこれを、マジック・ハンドで遠隔操作するわけだ。山本博士が、箱のそばに立って説明してくれた。[…] 箱の左側から放射線が出されており、右側の壁にはそれをうけた屍体の解剖学的地図が現れている。[…] 頭にかぶっている、毛髪がわりに銅線が束になって生えた金属製の厚い帽子は、切りとった頭蓋骨のかわりで、直接脳に接して計器の役割をはたすのだそうである。[…] いよいよ分析がはじまった。[…] マジック・ハンドが動きだした。同時に数本の針が、体の各部にささり、[…] それに応じて箱の中の屍体が、まるで生きているように自由な運動をしはじめるのだ。[…] つづいて内臓の分析があり、それ

[8] 同上、pp.23−24。
[9] 同上、pp.28。
[10] 同上、pp.31−32。

がすむと、いよいよ脳波の分析にうつった。マジック・ハンドの針が増され、七、八本が顔面に集中する。耳や目などの、感覚器を刺戟するのだ。さらに耳にはレシーバーが、目には大型の双眼鏡のような器具が降りてきて、音や映像を送りこみはじめる。[11]

「同時に数本の針が、体の各部にささり」や「屍体が、まるで生きているように自由な運動をしはじめる」といった描写は、「男」の死体を分析する時のグロテスクな雰囲気を醸し出している。下線部の「屍体の解剖学的地図が現れている」に示されているように、この分析自体が「人体実験」や「生体解剖」を意識して描かれている。また、分析が中央保険病院の医者である山本博士の指導下で行われていることも、この死体分析が現実の「人体実験」と「生体解剖」を想起させる。

周知のように、「人体実験」と「生体解剖」が否定的に評価されるようになったのは、ナチスドイツによる「人体実験」と「生体解剖」が世に知られたからである。次節で改めて詳しく論じるが、本作には、母親を強制的に中絶させ、胎盤を取り出して「水棲人間」に改造するというプロットが描かれている。テクストにあるこの中絶に関する描写は、ナチスドイツが実施したユダヤ人女性の不妊実験などのような「生殖実験」を指し示している可能性を孕んでいる。ただし、安部公房の場合、「人体実験」と「生体解剖」が描かれた際、そこにはナチスドイツが行ったものとは別のモデルがあったのではないかと思われる。本作品において、「人体実験」と「生体解剖」が示唆的に描かれていた原因の一つに、安部が満洲で経歴した「人体実験」などの影響があったからではないかと考えられるからだ。終戦間際の満洲での生活状況を安部は次のように記述している。

満州は、意外に平穏だったし、いっこうに戦争が終わる気配もない。[…] 当時父は開業していたので、その手伝いをしたりした。[…] その冬、発疹チブスの大流行があり、診療にまわった父は、感染して死亡。[12]

引用にあるように、安部は東京帝国大学で医学を専門とする前に、既に医者である父・安部浅吉の仕事を手伝うことを通して、病気に罹った人体、もしくは死体に触れた可能性があった[13]。留意しなければならないのは、安部浅吉が当時勤務していた満洲医科大学では、「生体解剖」といった医学実験が行われていたことである。帝国政府が戦争中に実施した医学実験を研究してきた末永恵子は満洲医科大学で行われた実験について、次のようにまとめている。

以上のことから、満州医科大学の研究の特徴は、まず当時の国策であった満蒙開拓に関連する保険衛生の研究を精力的に進め、満州国の医療行政にも多くの教官が参加していたこと、第二に中国東北部に特有の地方病の研究に力を入れていたこと、第三に解剖教室において学会の風潮を背景に人類学的比較研究が行われ、特に中国人を対象としていたことが挙げられる。解剖学教室の業績中

[11] 同上、pp.42-43。
[12] 谷真介『安部公房評伝年譜』新泉社、2002 年 7 月、pp.17-18。
[13] 木村陽子は安部が満洲で死者と接触している可能性について、「実際の安部公房は、敗戦前後から日本に引揚げるまでの多くの時を医師、またはそれに準じた立場で過ごし、想像を絶する数の人間の死に関与していたのである」(「死者との同化からマルクス的幽霊へ」『安部公房 メディアの越境者』森話社、2013 年 12 月、pp.70-71)と述べている。

には、人道上許されない研究があった。おそらく日本国内では不可能で、日本の支配下にあった「満州国」においては可能な生体解剖による脳研究である。[14]

末永氏の調査にあるように、満洲医科大学で行われてきた「脳研究」は、中国人を実験対象とした「生体解剖」によって成し遂げられている。本来、こうした「生体解剖」は極秘に進行させるために、医科大学外部の人間が知ることはほぼ不可能である。しかし、安部浅吉が「助教授の資格で母校に栄養学教室を持っていた」[15]ことから、この医科大学の秘密を知らないとは考え難い。また、安部浅吉のような内部の関係者のみならず、ここでの「生体解剖」は当時の非関係者にも漏れていたのである[16]。「生体解剖」が外部の人間にも知られていることを考慮すれば、医科大学の助教授を父としている安部公房が、この満洲医科大学で行われてきた「脳」に関する「生体解剖」を知っていたとしても不思議なことではないだろう。

注目すべきは、『第四間氷期』で描かれている「脳波の分析」とは、「男」の死後間もなく、「神経だけは死んでからも、三日ぐらいは生かしておける」[17]という状態下で行われた実験である。興味深いことに、作品に描かれている実験対象の状態は、偶然にも満洲医科大学で行われた「脳研究」の「生体解剖」における実験対象の状態と共通している。

生体解剖は,脳の組織学研究のために行われたと推測されるが,その時制作されたと見られる脳の切片のプレパラートが中国医科大学答案館に現存している。[…] そのプレパラートを自ら顕微鏡で観察した生理学者刈田啓史郎は,死後きわめて短時間のうちにホルマリン固定された脳切片であることを確認している。[18]

ここで言われているように、満洲医科大学の「脳研究」では、実験対象が「死後きわめて短時間のうちに」、その脳を解剖して切片のプレパラートを作っていたのである。この研究で使われている実験対象の状態は、上記の『第四間氷期』に登場する「男」の「脳波の分析」において、頼木が語っている死後三日以内という実験対象の状態と似ている。つまり、実験対象が死後ただちに解剖される点において、作品と現実は一致しているのだ。

また、安部公房自身は解剖が苦手だった上に、そのような授業にもほぼ出席していない点から推測すれば、ここで描かれている「生体解剖」とは、おそらく彼自身の医学経験を下敷きにはしていないと思われる[19]。にもかかわらず、『第四間氷期』に描かれている「男」の「脳波の分析」が、かつて満洲医科大学で行われた脳の研究と酷似していることは、「予言機械」の予言過程が示唆する「人体実験」や「生体解剖」には、安部の満洲での記憶、とりわけ、満洲医科大学で行われた「生体解剖」と関わる記憶が下敷きの一つとなっている、ということが言えるのではないだろうか。

---

[14] 末永恵子「旧満州医科大学の歴史―医学研究・医療活動・教育―」『戦争・731 と大学・医科大学』文理閣、2016 年 8 月、p.219。
[15] 安部ねり『安部公房伝』新潮社、2011 年 3 月、p.29。
[16] 前掲、末永恵子(2016 年)、p.216。
[17] 前掲、安部公房(1998 年)、p.38。
[18] 末永恵子「15 年戦争期の大学における医学研究――旧満州医科大学を事例として」『日本の科学』第 43 号、2008 年 2 月、p.19。
[19] 前掲、安部ねり(2011 年)、p.47。

『第四間氷期』では、「予言機械」の他に、「水棲人間」という現実世界では存在しない生物が描かれている。次節では、この「水棲人間」の意味合いと作者の満洲での経歴との関連性を考察したい。

3。「水棲人間」と「満洲」

『第四間氷期』には「水棲人間」という非常に印象深い生物が描かれている。「水棲人間」は、哺乳類の人間が鰓を持って、水の中で生きるという現実には考えられない奇妙な生物である。「予言機械」によれば、未来では海面が上昇することによって、陸が消滅してしまうことになる。しかし、水棲哺乳類は、外部の環境の変化に適応するために自発的に進化した生物ではなく、予言を見た人間が、こうした環境に適応するために、人間の胚胎を科学的に改造したことによって生まれた生物である。つまり、「水棲人間」とは、人間が進化論的に進化した生物ではなく、人間によって作り出された「人造生物」と言えるだろう[20]。ただし、この「水棲人間」は、二代目から繁殖できるようになったため、一代目の「水棲人間」のみが「人造生物」であることも指摘しなければならない。

この「水棲人間」は安部の想像によって作られた空想の生物である。しかし、「水棲人間」という生物の発想は本作以前から既に構想されている。例えば、1955 年 4 月に出版された『盲腸』には、羊の腸を人間に移植することによって、藁を消化できるようになる「草食人間」が描かれている。ここでの「草食人間」は、食糧危機を克服するために、人間の手によって技術的に改造された新しい生物である。『第四間氷期』に描かれている、大陸の沈没に対応するために人間の胚胎を科学的に改造したことによって生まれた「水棲人間」は、その創造の目的と過程において、『盲腸』の「草食人間」と相似している。また、1953 年 3 月に刊行された『R62 号の発明』には、ロボットに改造された人間である「人造人間」が描かれ、この「人造人間」も、人間が人間の肉体を改造する点において、「草食人間」や「水棲人間」と共通している。こうした人間の科学技術によって人間そのものを改造して新しい生物を創造する発想は、58 年 7 月に連載し始めた『第四間氷期』から 5 年前に既に構想されていたのである[21]。

「水棲人間」について、これまでの研究では、その象徴性が当時の社会状況を如何に反映しているか、という点から論じられてきた。例えば、鳥羽耕史は「水棲人間」の特徴に視点を置き、「水棲人間」が日本人の顔をして、日本語の文法を使っていることで、彼らが日本人を象徴し、作品が日本の革命を描いていると述べている[22]。また、杣谷英紀は「水棲人間」の出産に焦点をあて、「水棲人間」のイメージは、日本の 50 年代から 60 年代にかけて、堕胎が多発している社会状況を示唆している、と指摘している[23]。

こうした先行論を踏まえて、筆者はこの「水棲人間」に含まれている他の現実的な意味合いを考察したい。まず、「水棲人間」を作っている山本氏の話を以下に引用する。

---

[20] 鳥羽耕史は、「水棲人間」が作れる基礎となっているのは、遺伝子ではなく、ソ連の生物学者ルイセンコが提唱した唯物論的弁証法をそのまま生物学に応用したミチューリン生物学であると論じている(「安部公房『第四間氷期』――水の中の革命」『国文学研究』第 123 号、1997 年 10 月、p.107)。

[21] 1952 年 6 月に刊行された『水中都市』には、人間が魚に変形して水中で活動するプロットが描かれているが、魚への変形には技術的加工が施されておらず、また、人間は能動的に、自発的に魚に変形したために、「草食人間」や「水棲人間」とは発想が異なる。

[22] 前掲、鳥羽耕史(1997 年)、p.114−115。

[23] 杣谷英紀「安部公房『第四間氷期』論：SF・仮説・グロテスク」『日本文藝研究』第 66 巻第 1 号、2014 年 10 月、p.142。

私たちの目標は、大きく言えば、生物の計画的改造ということでした。[…] 進化を人為的に、かつ飛躍的に、しかも定向的に行わせようという大それた計画ですな。[…] その発生的段階において、なんらかの手を加えてやれば、その生物を系統発生から引離し、まったく新しい種にしてやることもできるわけだ。[24]

山本氏の話によれば、研究所で行われている「計画的改造」とは、生物に対して「人為的」、「飛躍的」、「定向的」に「手を加え」ることによって「進化」させ、「新しい種」を作り出すことである。「予言機械」によれば、未来では大陸はすべて沈没するため、陸棲生物は全て水中での生活に適応できなければならないのである。従って、山本氏が述べている「新しい種」とは、陸棲生物から改造された水棲生物である。この陸棲生物を水棲生物に変える過程は、生物が自発的、能動的に外部の環境に適応するまでに、長い時間をかけて行われる進化ではない。その過程とは、人間の技術を強制的に施すことによって、短時間の中で、なおかつ、水中での生活に適応できることを唯一の目的とした進化である。この時点では、水棲生物における水棲できない方向に進化する可能性は全て排除されている。

また、このような「人為的」、「飛躍的」、「定向的」進化が、政府と財閥が主導している点を考慮すれば、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」の改造は、20 世紀初頭から科学界や政界で多くの支持を得てきた優生学を想起させる。優生学(eugenics)とはイギリスの科学者フランシス・ゴールトンが作り出した造語で、「人類の遺伝的資質を高めたり減退させたりする社会的要因や、人類の遺伝的資質を向上させる社会的方法を研究する遺伝学の一分野」[25]のことである。この優生学思想の影響で、世界各国では、「優れた」男女を結合させることで「有能」な子供を誕生させる一方で、女性の中絶を通して「優れていない」子供の出産を抑制することによって「劣る」人口を減らすといった運動が起こるようになる。しかし、ナチスドイツでは、優生学は民族政策と合体し、ホロコーストにまで至ったために、1930 年代以降、優生学は次第に批判されるようになり、第二次世界大戦後にはほぼ言及されなくなった。しかし、1950 年代から、遺伝学が更に発達し、民族や階層による偏見なしに人間の遺伝子を改善しようとする新しい優生学が生まれてきた[26]。『第四間氷期』が創作された時期では、ちょうどこの優生学が再び流行した時期でもある。「水棲人間」の改造過程が優生学を想起させたのは、優生学が普遍的な知識として日本においても知られているという背景があったからではないだろうか。例えば、杣谷英紀は本作と優生学との関係について、次のように述べている。

貞子は、中絶の決定権を夫、医者へと譲渡して行き、最終的にそれは「政府にまさる権限をもっている」という海底開発協会という権力に回収されてしまったのである。勝見の子どもが水棲人間へと生まれ変わるまでに母親から父親へ、父親から医師へ、医師から国家へと責任が移転して行くバースコントロールの戯画とも言える構図が描かれているのである。[27]

杣谷は、女性登場人物の中絶に焦点をあて、ここで描かれている女性の中絶は、戦後の優生保護法によってもたらされた 1950 年代後半に多発した「堕胎」という悪影響を示唆している、と指摘している。先述したように、優生学が否定的に評価されるようになったのはナチスドイツによる「人体実験」であっ

[24] 前掲、安部公房(1998 年)、p.95。
[25] 『科学大辞典』第二版、丸善株式会社、2005 年 2 月、p.1514。
[26] 『現代科学史大百科事典』朝倉書店、2014 年 5 月、pp.789−790。
[27] 前掲、杣谷英紀(2014 年)、p.145。

た。また、ナチスドイツの「人体実験」は主に「生殖実験」と「生体解剖」に分かれる[28]。「生殖実験」では、「優秀」なアーリア人の子孫を増やして、「劣等」なユダヤ人を絶滅させるような実験、すなわち、ユダヤ人女性の大量不妊実験が行われていた。『第四間氷期』における女性登場人物の中絶は、日本の 1950 年代の「堕胎」状態を反映しているという杣谷の論考の他に、この優生学に基づくナチスの「生殖実験」をも指し示しているのではないだろうか。『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」の改造は、遺伝学をもとにしている優生学を忠実には再現してはいないが、「水棲人間」が改造される理由や動機などからみて、作品に描かれている「水棲人間」に優生学の影響が隠されているということはあり得る。

前節では、勝見と頼木が予言対象を「実験材料」と称し、また、予言そのものを「人体実験」や「生体解剖」と語っている背後には、安部の満洲での植民地体験が関与している可能性について考察した。ここで留意しなくてはならないのは、「人体実験」と「生体解剖」の知的基盤を構築した一つの要素が優生学だという点である。ここから、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」のイメージにも、安部の過去の記憶、即ち、満洲での植民地体験と関連している可能性が隠されていると推測できるのではないだろうか。例えば、未来の「水棲人間」の乳児について、テクストでは次のように描写されている。

> カメラが仕切りの一つに接近する。合成樹脂の箱である。中に白っぽい皺だらけの水棲乳児が、大きな頭を下に、尻を浮せた奇妙な姿勢で、鰓をひくつかせながら眠っている。[29]

引用に描かれている「水棲人間」の乳児は決して美しいものではなく、むしろある種グロテスクな生物と言える。とりわけ、「白っぽい皺だらけの」「大きな頭」と言った描写は「水棲人間」の乳児に対する読者の嫌悪感を殊更煽ぐものだと言っても過言ではない。留意すべきは、安部が満洲で生活した際、『第四間氷期』に登場する「水棲人間」の乳児と似通った幼児と出会っていた点である。周知のように、東京で生まれた安部は 17 歳まで満洲で過ごしてきた。満洲での植民地体験が彼に多大な影響を与えたことは言うまでもない。彼には以下のような満洲での回想がある。

> <u>生まれたばかりの赤ん坊の死体は、よくあちこちにころがっていた。</u>[…] <u>鼻の先に腐敗してゴム風船のようにふくらんだ赤ん坊が静かにねむっているではないか。</u>[30]

安部の記述は、満洲の土地の風景を残酷に再現しているが、恐らく事実だと思われる。下線部の「腐敗してゴム風船のようにふくらんだ赤ん坊が静かにねむっている」という描写は、『第四間氷期』にある「白っぽい皺だらけの水棲乳児が、大きな頭を下に、尻を浮せた奇妙な姿勢で」「眠っている」ことを想起させるのではないだろうか。両者は共に幼児である上、その幼児には共にグロテスクなイメージが漂っている。

『第四間氷期』に描かれている科学的・未来的存在である「水棲人間」の幼児は、必ずしも安部が満洲で実際に見た幼児のイメージをモデルにしているとは断定できない。ただし、この「水棲人間」という設定の背後に、安部の過去の満洲での実体験が下敷きとなっている可能性も否定できない。例えば、「水棲人間」の生活空間としての海底に関して、テクストでは次のように描かれている。

---

[28] 小俣和一郎の『検証　人体実験　731 部隊・ナチ医学』(第三文明社、2003 年 8 月)を主に参照した。
[29] 前掲、安部公房(1998 年)、p.146。
[30] 安部公房「瀋陽十七年」『旅』第 28 巻第 2 号、日本交通公社、1954 年 2 月、p.23。

まあ、財界のお歴々にしてみれば、こうして人工植民地の開発でもしなければ、ちょっとこの頭打ちを乗り切るめどはつかないんじゃないんですか。[…] さっそくおえら方がとんで行って、水中植民地の未来を予言してもらっていたことでしょうよ。[…] モスクワの予言機は、未来は共産主義だと予言したそうですが、まさか、海底の植民地までは考えていなかったでしょうからね。[31]

水棲哺乳類が作り出されることに疑問を持つ勝見博士に対して、山本氏は上記のように返答している。下線部に注目すると、山本氏は「人工植民地」、「水中植民地」、「海底の植民地」などの言葉で水棲哺乳類の世界を比喩的に語っている。つまり、水棲哺乳類の世界とは「植民地」なのだ。山本氏が語っている時点は、水棲哺乳類から「水棲人間」への過度期であるため、「水棲人間」が暮らす世界は果たして「植民地」と言えるかどうかは断言できないはずである。しかし、「予言機械」が呈示している未来の世界において、この「植民地」はより残酷な現実味を帯びている。例えば、陸が沈没してから、日本政府は次の内容をアナウンスしている。

政府はその後の国際関係を有利に導くために、極秘のうちに、水棲人間を製造し、海底植民地の開発をすすめてまいりました。現在すでに、三十万以上の水中人を有する海底都市が、八つもあります。

[…]

彼等は幸福であり、従順であり、このたびの災害に対しては、あらゆる協力をちかってくれました。間もなく皆さんのお手もとにも、救援物質がとどくはずですが、そのほとんどが、この海底から送られたものであります。[32]

この引用に示されるように、「水棲人間」は陸生人間が災害を受けた際に援助する仕事を主にしている作業者である。下線の「従順」であることは、まさに「水棲人間」が陸生人間に抑圧されている証拠であり、「あらゆる協力をちかって」いるよりも、「政府」からこうした労働を強いられたと言ったほうが妥当だろう。山本氏によれば、「水棲人間」の主な労働は「海底工場を建設中ですし、海底鉱山や海底油田に働きに行く者もいるでしょう。また海底牧場も人手不足で困っているんですから」[33]である。その内容からも重労働が大きな割合を占めているため、「水棲人間」が陸生人間に使われていることは確かである。つまり、水棲哺乳類から「水棲人間」まで、すべてが陸生人間の生活をよりよくするために開発された生物にしか過ぎないのである。もともと「水棲人間」の生活空間であるはずの海底は、陸生人間の植民地として開発され、また、「水棲人間」自身も陸生人間に抑圧され、支配統治されていたのだ。『第四間氷期』に登場する「水棲人間」と陸生人間は、おそらく被植民者と植民者をそれぞれ指し示し、「水棲人間」の境遇は、かつて帝国主義によって支配統治されていた植民地及びその土地で生活する人間の歴史を示唆していると思われる。

安部公房の場合、青少年期を日本の植民地である満洲で暮らしてきたために、「水棲人間」と陸生人間に示唆されている植民地と帝国は、それぞれ満洲と日本を具体的に指し示していると考えられる。例えば、海底に位置する陸生人間の住宅地が特別扱いされていることは注目に値する。

[31] 前掲、安部公房(1998 年)、p.109。
[32] 同上、p.166。
[33] 同上、p.156。

政府の建物の裏手には、同じような型だが、それよりすこし小さめなビルが、さらに三つばかり並んでいた。これは一般住宅用で、屋上には専用のヘリコプターがあったりして、なかなか便利に出来ている。それに、水棲人立入り禁止の、有刺鉄線でかこまれた広い庭には、谷間もあり、暗礁もあり、色とりどりの海藻の林もあり……［…］あるいは銛銃を手に、家族づれのピクニックでもしてみたくなる。[34]

ここにあるように、陸生人間の住宅は「水棲人間立入り禁止の、有刺鉄線で」囲まれた場所であり、海底だけが「水棲人間」の世界であるにも関わらず、この住宅は「水棲人間」の生存空間を奪っている。また、「銛銃を手に」しているのは、おそらく、「水棲人間」から命を守るためだが、それは同時に陸生人間が「水棲人間」の命を脅かしていることを象徴している。こうした描写は、帝国とその植民地からなる一般的な抑圧関係との類似性を示していると言えるのではないだろうか。

木村陽子は満洲での詳細な現地調査を行い、安部公房が過ごした満洲での環境は極めて恵まれた生活環境であったことを確認している。木村の調査によれば、安部公房が生活していた奉天は〈都市型・中上流階層〉社会であり、その生活水準は群を抜いていた[35]。満洲国において、日本人は他民族とは異なる存在であり、指導民族と位置づけられたために、制度的に特別な配慮が加えられていた。そうしたことによって、他民族の生存空間は奪われ、彼らの生活が深刻であったことは事実である[36]。『第四間氷期』において、陸生人間の生存空間は、「水棲人間」の生存空間を占拠した上にその生活自体も「水棲人間」を抑圧することによって、高い水準を維持できたのである。テクストに描かれている陸生人間と「水棲人間」との抑圧的な関係は、そのまま満洲における植民者としての日本人と、被植民者としての他民族との関係を仄かしていると言えるのではないだろうか。また、「水棲人間」の幼児の教育場面では、次のように描かれている。

その下が各年別の普通教室……教課はわれわれの場合と同様、読み書き算数からはじめますが、その後を、どういうふうに持っていったらいいものか……［…］けっきょく私どもの臆測を出るものではない……［…］むろん、歴史だとか、地理だとか、社会科だとかいうものはありません。人間と、彼等との関係を、一体どんなふうに教えたらいいものやら、私らにはちょっと判断がつきかねるのです。[37]

引用部に示されているように、「水棲人間」への教育は陸生人間によるものであり、その教育内容も、「私どもの臆測を出るものではない」に描かれているように、あらかじめ陸生人間が決めていたのだ。とりわけ、「歴史」や「地理」といった項目が設けられていないことは注目に値する。確かに「水棲人間」は陸生人間によって作られた生物であるために、「彼等」には歴史がないので、「歴史」を教える必要はないのかもしれない。前文でも言及しているように、陸生人間にとって、「水棲人間」とはあくまで重労働を提供するものとして作られたために、「彼等」に「歴史」や「地理」といった科目を教える必要はもと

[34] 同上、p.166。
[35] 木村陽子「安部公房の「奉天」体験――満州教育専門学校付属小学校の英才教育を中心に」『東アジア研究』第 53 号、2010 年 3 月、p.40。
[36] 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004 年 3 月、pp.75-76。
[37] 前掲、安部公房(1998 年)、p.159。

からなかったのだ。陸生人間は表面上は「人間と、彼等との関係を、一体どんなふうに教えたらいいものやら」と悩みながら語っているが、実際には、陸生人間は「水棲人間」といった「彼等」を「人間」とは認めず、「水棲人間」と陸生人間を同一水準の「関係」で考えることがなかったのである。上記の引用は、植民地の原住民に対して、支配統治教育を強制的に行う帝国日本の植民地政策を想起させる。例えば、磯田一雄は帝国日本の植民地での教育政策について、次のようにまとめている。

> 実際、知識としての地理や歴史などは、およそ教育の対象とは考えられていなかったという歴然たる証拠がある。満州帝国の「国民学校規定」や「国民優級学校規定」を見ると、「学科目及其程度」では一応国史や地理を教えることになっているが、「学籍簿格式」の中では「国民科」で評価の対象となるのは「国民道徳」と言語(満語・日語または蒙古語)だけである。国史や地理の項目は見当たらないのである。つまり国史や地理の教材は「国民道徳」(建国精神)を培うための素材に過ぎず、その知識は評価の対象とはされていないのである。愚民政策と非難されるゆえんである。
> このように、植民地においては民族的自覚を促すおそれのある歴史や地理は極力教えないでおこう、という権力側の姿勢がまず目立つ。[38]

引用にあるように、被植民者の「民族的自覚を促すおそれ」があるために、満洲国で実施されている教育では、「地理」と「歴史」は含まれていなかった。『第四間氷期』における「水棲人間」の幼児に与えている教育方法は、植民者としての日本人が、被植民者である他民族の人間をコントロールするために行われた、帝国日本のこうした強制的な教育政策と酷似している。『第四間氷期』における「水棲人間」と陸生人間との関係が、植民地と帝国との抑圧的な関係を示唆している背後には、やはり安部公房の満洲での植民地体験の影響があったと言えるだろう。

4。安部公房の満洲での「記憶」と作品における「記憶の未来化」

『第四間氷期』で提示されている「予言機械」の予言内容とは、未来の予言よりも、過去の記憶の再現が主となっていることは既に前文で論じた。「予言機械」の作動原理とは、過去に発生したことを可能な限り収集し、こうしたデータをもとに未来の可能性を予測するという計算方法である。前節で考察したように、「予言機械」は未来という現段階では不在であるものに焦点をあてているのではなく、既に過ぎ去っていた記憶といった過去のものを優先している。言い換えれば、「予言機械」は記憶を絶対的な事実として扱い、この疑う余地のない事実としての記憶によって決定づけられる未来を提示する装置である。そして「予言機械」の「予言」は、「記憶」に権力と支配力を付与すると同時に、その一方で、未知の未来が持つ本来の不確定性を全て排除したのだ[39]。

安部が「記憶」自体を支配的・抑圧的な存在として示唆的に描いているのは、やはり彼の満洲での記憶と関係を帯びているのではないかと思われる。前節では、本作に登場する「水棲人間」と「海底植民地」の発想には、おそらく安部の満洲経験といった過去の植民地での記憶が関与している、という可能

---

[38] 磯田一雄「皇民化教育と植民地の国史教科書」『近代日本と植民地 4　統合と支配の論理』岩波書店、2001 年 4 月、pp.127−128。

[39] 中野和典は『第四間氷期』における記憶と権力との力関係について、「予測は誰かと結びつくことによって、初めて現実的な強制力を発揮するのである。[…] 予言＝権力とは、予測技術の主導権を握る者によって情報が選別させるために、予測を忠実には反映背せずに現れる強制力なのである。」(「予言＝権力：安部公房『第四間氷期』論」『近代文学論集』第 37 号、2011 年 11 月、pp.126−127)と述べている。

性について論じた。また、作中において示唆的に描かれている「人体実験」や「生体解剖」にも、安部の満洲での記憶が関連しているという可能性について述べてきた。しかし、そもそもこうした満洲での記憶に関して、安部自身は否定的に捉えていたのではないだろうか。

『第四間氷期』が執筆される一年前に、安部は自身の植民地経験をモデルに描いた『けものたちは故郷をめざす』(1957 年 1 月)を刊行した。『けものたちは故郷をめざす』は満洲での実体験が投影されていると安部が唯一公言している作品である。小林治が「この作品以降、小説において安部が満洲を直接に登場させることはなくなる」[40]と評しているように、本作以降、安部は小説作品において、満洲を直接描くことがほぼなかったのである。安部がなぜ満洲に言及しなくなったかは定かではないが、彼が満洲での実体験を否定的に捉えるようになったことが原因の一つではないかと考えられる。例えば、『けものたちは故郷をめざす』執筆前のエッセイで、安部は次のように述べている。

> 瀋陽を出身地だと割切ってしまえない理由であるが、簡単に言うと、われわれ日本人はそこで植民地の支配民族として暮らしていたのだということである。私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現実と意識とは別である。[…] 植民地を故郷だということは絶対できないことである。[41]

引用にあるように、安部が瀋陽を自身の出身地だと認識しようとしないのは、植民地都市・瀋陽を故郷と認識する行為は、日本人が「植民地の支配民族として暮らしていた」ことに繋がるからである。おそらく植民地での支配統治への嫌悪から、安部は「植民地を故郷だということは絶対できな」かったのである。故郷に関する安部の記述から、彼は自身の植民地体験が、植民者によるものであるために、その経歴を否定的に捉えていることがうかがえる。『けものたちは故郷をめざす』が刊行された際に、『第四間氷期』が構想されているのならば、作品に登場する「予言機械」と「水棲人間」といった科学的存在から導かれる安部の満洲での記憶も、同じく植民者という抑圧者による記憶であるために、安部がこのような記憶を否定的なものとして描くようになったのではないだろうか。

安部が自身の満洲での記憶を否定的に捉えていることは、テクストから示唆されている「記憶の未来化」という概念からも説明できる。例えば、勝見博士の現在は、殺害された「男」の記憶にとって未来である。同時に、「博物館の陸生人をみていれば、そんな気持もしないではない。だが、そう思うだけで、それが実際どんなものであったかは、想像してみることもできないのだ」[42]に記されているように、勝見博士の現在は、未来の「水棲人間」の世界から見れば過去の記憶となっているのだ。つまり、『第四間氷期』においては、過去の記憶がそのまま未来化し、「記憶の未来化」という概念が示唆されていると言える。

「記憶の未来化」とは、原爆被害者の証言について研究しているヨネヤマ・リサが「記憶の弁証法——広島」[43]という論文で使用した言葉である。この論文において、ヨネヤマは次のように述べている。

---

[40] 小林治「安部公房『けものたちは故郷をめざす』について：満州体験の対象化をめぐって」『駒沢短大国文』第 25 号、1995 年 3 月、p.54。
[41] 前掲、安部公房(1954 年)、p.22。
[42] 前掲、安部公房(1998 年)、p.170。
[43] ヨネヤマ・リサ「記憶の弁証法——広島」『思想』第 866 号、1996 年 8 月。

松田(原爆被害者、筆者)の態度からわかることは、人々を証言活動にむかわせる強力な衝動が、ひとつには、反史実的歴史(counter-factual history)の想像力を、もうひとつには、語り手が目撃した事件が将来ふたたび起こりうるかもしれないという警告を、聞き手に伝えたいという抑えがたい欲求に由来しているということである。前者のばあい、松田の語りは実際にあった過去を証言することによって、ありえたかも知れない「別の過去」もしくは「仮定法の歴史」を想像させている。いっぽう、後者の同じ体験を人にくりかえさせたくないから語る、という態度は逆に、松田の証言を現在さらには未来へと向かわせている。そこにはネバー・アゲイン、つまり起こりうると予測される事態をあらかじめ牽制する、「記憶の未来化」とでもいうべき時間軸上の介入が起きているのである。[44]

上記の下線部に示されているように、ヨネヤマが述べている「記憶の未来化」という言葉には、戦争や原爆といった過去の悲惨な出来事が二度と繰り返されないようにという証言者の考えが隠されている。

これまでの推論から、『第四間氷期』にも、このような「記憶の未来化」といった過去の悲惨な出来事を未来に反復させないようにする、という思想が設定されているという仮説が成立するならば、その悲惨な出来事とは、おそらく帝国主義的拡張によって作られた植民地・満洲での安部の記憶ではないだろうか。この記憶が帝国主義によって作られた抑圧者の記憶であったがために、安部は満洲での自身の記憶を否定的に捉えていたと思われる。

おわりに

本稿では、安部公房の長編小説『第四間氷期』を対象に、テクストに登場する「予言機械」と「水棲人間」といった科学的・未来的存在と、安部の過去の「記憶」との関連性を考察し、とりわけ、安部公房の満洲での植民地体験と関連している可能性について論じた。

1958 年 7 月から連載されるようになった『第四間氷期』は日本最初の本格的 SF 小説と呼ばれている。本作に描かれている「水棲人間」や「予言機械」などの設定は、重要な意義を持つ。『第四間氷期』に登場する日本の「予言機械」は、実際には未来を予言することよりも、過去の記憶を再現するところに力を入れている。そのため、この「予言機械」が反復する記憶の一つは、おそらく安部公房の過去の満洲での植民地体験だと思われる。そして、作品に描かれている「水棲人間」の背後には、おそらく優生学が知的基盤として存在し、この「水棲人間」の改造は、「生体解剖」のイメージを想起させる。また、作品に描かれている「生体解剖」の過程が、満洲医科大学で行われた現実の「生体解剖」と酷似していることから、『第四間氷期』に登場する「水棲人間」は、安部の満洲での植民地体験を下敷きにして作られた可能性を孕んでいる。ただし、『第四間氷期』を執筆する前後において、安部は自身の満洲での記憶について否定的に捉えるようになってしまっていたために、このテクストから反映されている植民地の表象が、否定的な意味合いを帯びている点を看過してはならないのだ。

本論文は、『第四間氷期』のテクストに描かれている「予言機械」と「水棲人間」の意味合いを分析することによって、この時期の安部の作品には、彼の満洲での負の記憶を下敷きにしている、という可能性を提示したものである。

---

[44] 同上、p.23。

解 放(かい ほう、ＸＩＥ　ＦＡＮＧ)
東京外国語大学大学院博士後期課程

[付記]　本稿は 2018 年 12 月 9 日に Hong Kong Polytechnic University で行われた The 12th International Symposium for Japanese Language Education and Japanese Studies で発表した報告“The Cold War and Memory in Abe Kōbō’s Works”を加筆修正したものである。

参考文献

上野俊哉『思想の不良たち　1950 年代　もう一つの精神史』岩波書店、2013 年
クリストファー・ボルトン「科学とフィクション、そしてポストモダン―安部公房『第四間氷期』論―」『昭和文学研究』第 34 号、1997 年
植民地文化学会『〈日中共同研究〉「満洲国」とは何だったのか』小学館、2008 年
武田徹『偽満州国論』河出書房新社、1995 年
田中裕之『安部公房文学の研究』和泉書院、2012 年
田中隆一『満洲国と日本の帝国支配』有志舎、2007 年
塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』吉川弘文館、2000 年
土屋貴志「15 年戦争期における日本の医学犯罪」『日本の科学』第 43 号、2008 年
鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、2007 年
永野宏志「安部公房『第四間氷期』覚書―マンマシン・システムに関する三つの「論理」的態度―」『工学院大学研究論叢』第 55 巻第 1 号、2017 年
山室信一『キメラ――満洲国の肖像』中央公論社、1993 年

『複合動詞の構文データベース』の構築

Development of the "Compound Verb Construction Database"

YI Yeong-il

This paper confirms the effectiveness of an approach to the acquisition of Japanese compound verbs focusing on grammatical cases, and introduces the "Compound Verb Construction Database" constructed with the aim of supporting their education and acquisition.

Previous research has frequently highlighted the difficulties faced by non-native speakers in mastering Japanese compound verbs. Various attempts have been made to improve dictionaries in order to support their acquisition, and this kind of "dictionary-based" approach is particularly effective in supporting receptive knowledge of compound verbs. At the same time, "corpus-based" approaches have also been suggested. These ways, providing the large number of examples essential for improving productive knowledge, facilitate understanding of compound verbs.

One helpful method of the lexical acquisition is the use of verb classification, and grammatical cases can be used to define such classes. This method can also be utilized in regard to compound verbs, but presently there are insufficient methods of specifying such information when searching for examples.

The "Compound Verb Construction Database" has been constructed and made publicly available in order to meet this kind of search. Approximately 500,000 examples were extracted from the "Aozora Bunko" digital library. Examples were analyzed syntactically and provided with a log-likelihood ratio score as a measure of co-occurrence. The major characteristic of the database is the feature of searching for examples by case-marking particles or case-bearing elements. Unlike existing online dictionaries and databases, it accepts multiple selection of grammatical case elements.

Going forward, it will be necessary to improve search methods based on trials of actual use, as well as further consideration of the sources of examples. In addition, tagging elements with categorical data will increase the site's effectiveness.

【キーワード】複合動詞、格、共起情報、青空文庫、ユーザインターフェース
Compound verb, Grammatical case, Co-occurrence, Aozora Bunko, User interface

1. はじめに

日本語の複合動詞(compound verb)[1]の多様性は現在まで多くの研究者が指摘しているところであり、日本語学習者にとってその習得が難しいという報告も各所でなされてきた。例えば松田(2004)は「～こむ」の複合動詞について「受容(reception)」と「産出(production)」の 2 側面から調査を行い、「『～こむ』に対する学習者の意味知識は上級者になっても母語話者とは異なるものであり、その理解は極めて不安定なものである」(松田 2004:139)と述べている。

[1] 本稿における「複合動詞」は、特に断りがない限り「日本語複合動詞」のことを指す。

このような現状において「辞書の改善」が多く試みられてきたが、本研究では「コーパスによる支援」の可能性を探る。その際に格(case)を用いた複合動詞のカテゴライズについても確認したい。複合動詞の理解には格の情報が重要だと考えるからである。その考察に基づき、格助詞・格要素を手がかりに複合動詞の構文・用例を検索できるオンラインデータベース『複合動詞の構文データベース』の開発を試みた。本データベースは複合動詞の学習・教育の際に活用できるよう、誰でも使用制限なく利用できる形で公開している。

本稿では、複合動詞を扱う Web 辞書やデータベースについての検討も行い、本データベースが既存のものとどのように異なるか明確にする。後半は具体的な使い方に触れながら検索仕様について解説し、最後に今後の課題と展望を述べたい。

2. 複合動詞の語彙習得の困難性

松田(2004:2)は留学生へのアンケートをもとに、複合動詞の習得において留学生がどのような点を困難に感じているかについてわかりやすくまとめている。やや長くなるが以下に引用する[2]。

(1)「結合条件」に関するもの
- a) どんな動詞と結びつくのか分からない。そのため勝手に単語を作り出す危険性がある。(⇒過剰般化につながる)

(2)「単純動詞」と「複合動詞」の使い分けに関するもの
- a)「書きこむ」という言葉を知っていても「書く」と「書きこむ」をどう使い分けてよいかわからない。そのため「書きこむ」の方が適切な場合であっても「書く」で間に合わせてしまう。(⇒使用の回避につながる)
- b)「〜こむ」の意味は「飛びこむ」のような事例から「中に入る」ことだと思っている。しかし「入りこむ」や「埋めこむ」は「入る」や「埋める」自体がすでに「中に入る」ことなのに、なぜ「〜こむ」をつけるのか分からない。(⇒意味構造に関する理解の混乱)

(3)「習得の方法」に関するもの
- a)「〜きる」や「〜こむ」などと結合する複合動詞の数は非常に多く、その意味は単に「V1 の意味＋V2 の意味」[3]だけでは理解することができない。(⇒「V1＋V2」ストラテジーの限界)
- b)「座る」(単純動詞)と「座りこむ」(複合動詞)の意味の違いを知りたい時、辞典を引くが、説明が十分ではない。(⇒入手できる辞典の限界)
- c) V1 の意味と V2 の意味を足してもその意味がわからない時、それぞれを母語に対訳して理解しようとするが、あまり効果がない。(⇒対訳ストラテジーの限界)

上記の習得困難性について、(1)と(2a)は「産出」における問題、(2b)と(3)は「受容」における問題と大まかにカテゴライズすることができる。学習者の語彙習得について考える際、両者の問題に対して「辞書による支援」と「コーパスによる支援」の 2 通りのアプローチがありうるが、前者は「受容」学

[2] 箇条書きの番号・記号については一部変更している。以下本稿では「習得困難性(1a)」のように参照する。
[3] V1 は前項動詞、V2 は後項動詞を指す。

習において不可欠なものであり、後者は「産出」学習において特に有用である。

複合動詞の習得を支援するために現在まで多く採られてきたアプローチは「辞書の改善」である。例えば松田(2004)は認知意味論の観点から従来の辞書の記述を批判的に検証し、「コア図式」という概念を導入した「～こむ辞典」のような意味提示方法を提案している。また、『複合動詞レキシコン』[4](以下『レキシコン』)は「外国人日本語学習者を含む一般の利用者にも役立つことを意図したオンラインのデータベース」(神崎 2013)であり、複合動詞に特化した Web 辞書として語彙習得の場面においても活用可能である。

他方で辞書からの接近とは異なるアプローチとしてコーパスを用いた学習も提唱されている。陳(2007:101)は「複合動詞の微妙なニュアンスは生の実例に大量に触れることが重要」であり、「コーパスを利用した効率的な用例の検索と KWIC(keyword in context)形式のような前後の共起環境の提示も有効」だと述べている。例えば先に取り上げた『レキシコン』でも、各語彙項目に『NINJAL-LWP for BCCWJ』[5](以下『NLB』)へのリンクが提供されているので、この両者を活用することで「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」[6]から複合動詞の用例を参照するような学習が可能である。

3. 格情報を手がかりとした用例提示

ところで、動詞一般の語彙習得において動詞のカテゴリに着目することは一つの有効な手段である。日本語の多様な動詞のカテゴライズについては現在まで様々な手法が試みられてきたが、その中に大石・松本(1995)が提示した「格パターン分析法」というものがある。動詞の項構造(格パターン)が動詞の語彙的意味と密接な関わりを持つことに注目し、格パターンの違いを基準として動詞(主に単純動詞)の分類を試みている。

複合動詞においても、早くから山本(1984)が「格支配」[7]から複合動詞の分類を行っている。すなわち単純動詞だけではなく複合動詞の意味分析においても格からの接近がすでに試みられてきたということだが、このアプローチは非母語話者による複合動詞の語彙習得にも活用できると思われる。例えば山口(2012、2013)は複合動詞とその構成要素の動詞について、それぞれが取りうる格要素の重複率という観点から対照しているが、このような研究は先に取り上げた複合動詞の習得困難性(2)のような課題を解決する有力な手立てとなりうるであろう。

格情報を活用した用例検索は、既存の各ウェブサイトでも実現可能ではある。先に取り上げた『NLB』では、複合動詞の「文法パターン」から調べたい格助詞を選択すると BCCWJ に実際に出現した格要素の一覧が「コロケーション」パネルにリスト化され、そこからさらに目的の格要素をクリックすると用例が表示される。また『Web データに基づく複合動詞用例データベース』[8](以下『Web 用例 DB』)では格要素が格助詞ごとに表形式で一覧になっており、目的の格要素をクリックすると Web コーパスの用例を確認することができる。

しかしながら語彙習得支援の目線から見れば、どちらのウェブサイトも用例提示の方法に若干の改善

---

[4] https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/［2019 年 9 月 30 日アクセス］
[5] http://nlb.ninjal.ac.jp/［2019 年 9 月 30 日アクセス］
[6] https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/［2019 年 9 月 30 日アクセス］
[7] 山本(1984:34)は「＜格支配＞とは、動詞の名詞句との共起制限」だと定義している。
[8] https://csd.ninjal.ac.jp/comp/［2019 年 9 月 30 日アクセス］

の余地があろう。『NLB』では格助詞・格要素はそれぞれ 1 つずつしか選択ができないため、複数の格助詞や格要素を比較することが難しい。このことについて、例として山本(1984:39)から以下の用例を引用して考えてみたい。

(4) 売り歩く
a) 金魚屋ガ金魚ヲ売リ歩ク。
b) 金魚屋ガ金魚ヲ売ル。
c) 金魚屋ガ歩ク。

用例からわかるように、「売り歩く」を構成する「売る」と「歩く」の項数は異なっており、2 つが複合した「売り歩く」が取る項数は構成要素動詞からの推測が難しい。このような複合動詞は非母語話者の「産出」過程における障害となりうる。ところが、『NLB』では「～が売り歩く」「～を売り歩く」という情報は提示されるが、「～が～を売り歩く」という形で記述がなされていない。すなわち、検索した動詞に対して項を 1 つのみ提供する『NLB』形式の結果表示では、検索した動詞が一項動詞なのか二項動詞なのかという情報がひと目で判断できず、検索者は用例を一つひとつ確認して項がいくつ含まれているのかを確認しなければならない。

『Web 用例 DB』は『NLB』と異なり、複合動詞を検索した後に「格パターン」のリンクをクリックすることで「格要素ペア」として 2 項まで同時に表示することができる[9]。しかしながら、この「格要素ペア」は共起頻度の確認はできるものの、用例の表示機能とは連携していない。用例はあくまで「複合動詞の検索→格要素の選択」というステップを踏むことでしか辿り着けず、そこから格助詞や格要素の情報を得るためには、KWIC 形式で表示された用例の前後文脈の中から検索者自身が見つけ出さなければならない。

4. 『複合動詞の構文データベース』の構築

以上の考察から、格情報を複合動詞の語彙習得に活用するためには、従来の各 Web 辞書・データベースよりも柔軟な用例検索・提示方法が要求されることがわかる。そこで筆者は、格情報を手がかりに複合動詞の用例検索ができる『複合動詞の構文データベース』(以下『構文 DB』)を構築した。本データベースは複合動詞の学習・教育の際に活用できるよう使用制限なく一般公開しており、パソコンを始めとする各種情報端末でウェブブラウザ[10]を用いて https://nlp201.gitlab.io/jcv_online にアクセスすることで誰でも自由に利用が可能である。

[9] 「格助詞/格要素」の形でセットになったものが表形式で表示される。
[10] 推奨ウェブブラウザは Google Chrome 最新版である。macOS 環境では Safari での動作も確認している。Windows 環境においては Microsoft Edge でも確認しているが、Internet Explorer での動作はサポートしておらず、非推奨である。

図 1『構文 DB』のトップページ

『構文 DB』の構築手順を簡潔にまとめると以下のとおりである。

① 『青空文庫』から作品を選定し、計 50 万文を抽出
② JUMAN++と KNP を用いて用例を解析 [11]
③ 用例に出現した動詞について複合動詞か単純動詞かを判別
④ 50 万文の共起強度を計算して集計するプログラムを実行 [12]
⑤ 手順②の解析スコアを参照しつつウェブサイトに引用する用例を選定
⑥ 格助詞・格要素、共起強度、用例の情報を動詞ごとに分割して JSON ファイルに記述
⑦ ウェブアプリケーションを作成し、GitLab Pages を利用して公開

上記の手順のうち特に解説が必要と思われるものについて、具体的な使用方法にも触れつつ、以下の各節で詳述していく [13]。

4.1. 『青空文庫』からの用例収集

用例の収集にあたっては以下の 4 点に留意して様々なテキスト資源を比較検討し、最終的には『青空

[11] JUMAN++のバージョンは 1.0.2、KNP のバージョンは 4.19 のものを用いた。
[12] 統計ライブラリはプログラミング言語 Python で使用できる Pandas を用いた。
[13] データベースサーバ不要の設計、静的ファイルのみの構築、高速な検索機能、CI（continuous integration、継続的インテグレーション）を利用した自動ビルド・ホスティングなどのような技術的な特徴もあるが、本稿では複合動詞の検索・用例提示に特に関わりがある側面についてのみ触れる。

文庫』[14]を活用して作品を選定することとした。

- 作例でなく実例であること
- 電子化されたテキストデータであること
- 一定程度以上のまとまったデータ量を確保できること
- 著作権の問題に対処しやすいこと

『青空文庫』は著作権の保護期間を過ぎた作品を電子化してオンラインで公開している[15]。また収録数は本稿執筆時点で 15,000 作品を超えており、十分なデータ量を確保できると判断した。

上記の各条件を満たす別のテキスト資源としてウェブページのテキストも挙げられる。人手によるデータ入力がベースの『青空文庫』を利用するよりも遥かに膨大なデータ量を期待できる一方で、取得したテキストが日本語母語話者によるものかどうかの判断が難しく、取り上げる用例として適切かについての検証が別途必要になろう。また出典元のウェブページの存在期間が流動的であるという理由からも今回は採用を見送った[16]。

『青空文庫』を用例出典として利用するにあたって気をつけなければならない点がある。著作権保護期間は作者の死後 70 年のため[17]、古い作品が多く収録されていることである。非母語話者の語彙習得を支援するというデータベースの性格上、用例の初出が古いことは好ましくない。そこで本研究では『青空文庫』の「図書カード」から作品情報を取得し、現代仮名遣い[18]のもののみを収集の対象とすることでこの問題に対応した[19]。

テキストデータの抽出においては、1 作品につき 100 文を上限として、計 50 万文を選出している[20]。1 作品ごとの上限を設定した理由は、『青空文庫』には短詩から長編小説まで収録されているため、文章量の多い特定作品からの抽出に偏ってしまうことを防ぐためである。

4.2. 複合動詞の構文解析

収集したテキストデータは作品情報（メタデータ）・ルビ・引用者注などを除去した上で一行一文の形式に変換してから構文を解析する。本研究では形態素解析に JUMAN++[21]を用いた。形態素解析器としては MeCab[22]の方が解析速度に優れるが、後述するように複合動詞の分析に適した機能を有するという判断から JUMAN++を採用している。

一般に、複合動詞は表記の揺れが大きいことが知られている。小椋（2012：327、2014：113）は、和語の中でも動詞に表記の揺れが多く、さらに動詞の中でも単純動詞より複合動詞の方が高い割合だということを BCCWJ のデータから計量的に示した。MeCab を用いる場合はこの表記揺れへの対応が難しいが、

[14] https://www.aozora.gr.jp/［2019 年 9 月 30 日アクセス］
[15] 著作権が消滅していない作品も存在するが、それらは作者から公開の許諾が得られているものに限る。
[16] 実際、大量のウェブページをコーパスとして構築した『Web 用例 DB』を使ってみると、用例の出典元にアクセスしても既にウェブページが削除されていたり移転によりアクセスできないことがある。
[17] 著作権法第 51 条に基づく。環太平洋パートナーシップ協定締結に伴い、2017 年の著作権法改正によって従来の 50 年から 70 年に保護期間が延長された。
[18] 図書カード上は「新字新仮名」と記述されている。
[19] より根本的に対処するためには作品の初出年度の活用も必要であり、今後の課題としたい。
[20] 形態素解析を行って動詞が含まれていると判断された文のみを利用している。
[21] http://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/index.php?JUMAN++［2019 年 9 月 30 日アクセス］
[22] https://taku910.github.io/mecab/［2019 年 9 月 30 日アクセス］

JUMAN++では解析結果に付与される「意味情報」の中の「代表表記」[23]の情報を用いることで対応が可能である[24]。

日本語の複合動詞は種類が多く、姫野(1999:245-260)は計 2,379 語の複合動詞をリストとして書き出している[25]。しかしながら、形態素解析器が用いる辞書にこれらのすべてが 1 つの形態素として登録されているわけではない。そのため、形態素解析によって複合動詞が 1 つの形態素として分析されることもあれば、複数の形態素として分析されることもある。

この問題に対処する方策は大きく分けて 2 通りが考えられる。一つは複合動詞を 1 つの形態素として可能な限り多く辞書に追加登録する方法であり、今一つは解析結果から動詞の連続出現を見つけて処理する方法である。ユーザ辞書を追加できる JUMAN++は前者でも対応可能ではあるが、辞書に登録した形態素が解析結果に大きく影響する場合はモデルの再訓練が必要となる。また、訓練したモデルを用いた形態素解析で複合動詞が意図したとおりに 1 つの形態素として分析されるかどうかは実際にテストしてみるまでは不確かである。

本研究では後者の方法を用いることにしたが、動詞の連続があるからといってそれが必ずしも複合動詞だとは限らないことに留意する必要がある。そこで、形態素解析した結果を用い、連続している動詞の前項側を連用形、後項側を終止形にして接続した上で、それが自作の「複合動詞リスト」に存在する場合は複合動詞と認定することとした。この「複合動詞リスト」は『Web 用例 DB』が提供している複合動詞リスト[26]をベースにし、表記揺れにも対応できるように加工したものである。

格解析においては、形態素解析の結果を元に KNP[27]を用いた。KNP が分析対象とする格助詞は「ガ、ヲ、ニ、カラ、ト、デ、ヘ、マデ、ヨリ、ノ」であるので、『構文 DB』もこれに従う。収集した計 50 万文の全文を格解析し、出現したすべての格要素と格助詞を動詞ごとに集計している。

4.3. 対数尤度比による共起強度の集計

構文を把握するにあたって、共起強度を測る指標としてどのような尺度(共起尺度)を用いるかを選定する必要がある。『Web 用例 DB』は共起頻度(frequency)、『NLB』は共起頻度と MI スコア(mutual information score)と LD(log dice)が利用可能だが、『構文 DB』ではコーパス言語学でよく用いられる尺度である対数尤度比(log-likelihood ratio)を用いることにした[28]。対数尤度比は、以下の式で求めることができる。

$$LLR = 2 \times \Sigma\, \textit{実測値}\left(\log_e \textit{実測値} - \log_e \textit{期待値}\right)$$

この対数尤度比の値を、すべての動詞と格助詞・格要素の出現パターンについて計算し、各動詞ごとに統計データを分割し、ウェブアプリケーションからの利用が容易になるように JSON(JavaScript Object

[23] 代表表記の詳細は京都大学大学院情報学研究科黒橋・河原研究室(2016:28)を参照。
[24] 複合動詞の後項動詞は稀に連濁が起きる場合があるが、これについても代表表記で対応が可能である。複合動詞の連濁の詳細については佐藤(1989)を参照されたい。
[25] 姫野(1999)では「～こむ」のように生産性の高い後項動詞の複合動詞は代表的なものに限定して取り上げているので、実際にはさらに多くの複合動詞が存在する。例えば『Web 用例 DB』には 3,757 語の複合動詞が登録されており、コーパスを通して多様な使用実態を窺い知ることができる。
[26] https://csd.ninjal.ac.jp/archives/japanese_compound_verb_list_1_3.zip [2019 年 9 月 30 日アクセス]
[27] http://nlp.ist.i.kyoto-u.ac.jp/index.php?KNP [2019 年 9 月 30 日アクセス]
[28] 例えば BNCweb(http://bncweb.lancs.ac.uk)においてもデフォルトの共起尺度は対数尤度比になっている。

Notation）フォーマットで記述をした[29]。

4.4. 複数の格助詞・格要素の検索

複合動詞関係の従来の Web 辞書・データベースでは複数の格助詞・格要素の検索が難しいことは既に述べたが、『構文 DB』では以下のような検索仕様を実現している。

- 複合動詞を選択した後、表示する格助詞・格要素の数を検索者が選択できる
- 調べたい格助詞を選んで用例を絞り込める
- 表示された結果を格要素でさらに絞り込むことが可能である

格助詞・格要素については既述の通り『NLB』ではそれぞれ 1 つずつ、『Web 用例 DB』ではそれぞれ 2 つずつのみ対応しているが、『構文 DB』では表示数を検索者が自由に設定することが可能である。複合動詞を入力したあとで格助詞・格要素の数を選択すると、その数に対応した構文・用例が表示される。例えば、「複合動詞」欄に「思い出す」を入力し、「格助詞・格要素の数」欄から「2」を選択すると図 2 のような検索結果になる。

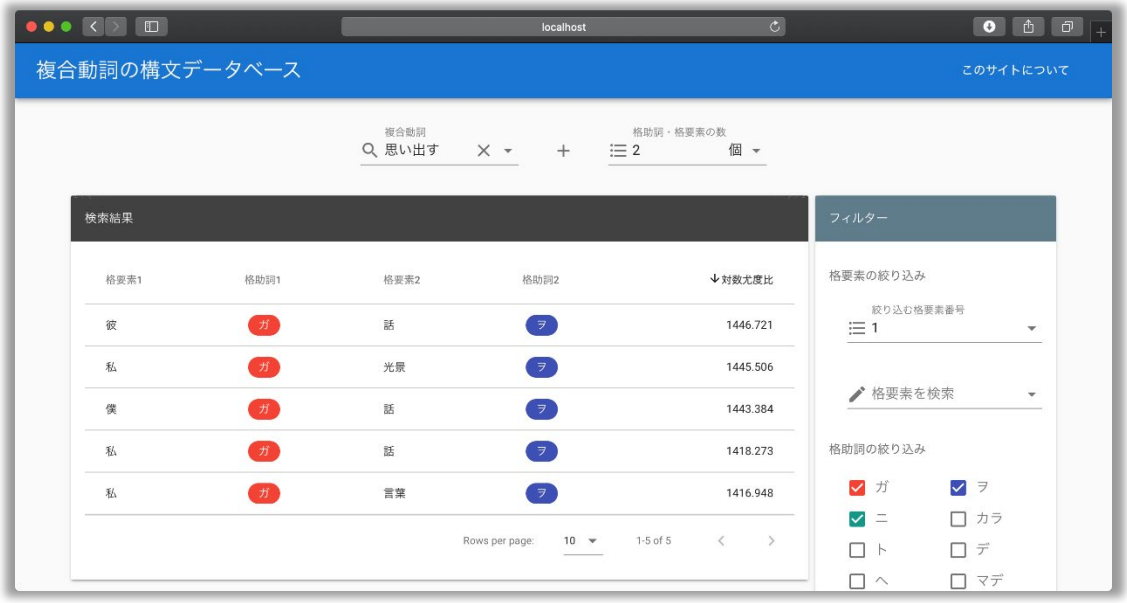


図 2「思い出す」「格助詞・格要素 2 つ」の検索

調べたい格助詞を絞り込むためには、右側の「フィルター」機能を用いる。複数の格助詞をあわせて検索した結果を表示させることもできるし、1 つの格助詞のみを検索対象にすることも可能である。例えばヲ格のみを表示させたい場合は、「複合動詞＝思い出す」かつ「格助詞・格要素＝1」とし、「フィルター」の「格助詞の絞り込み」で「ヲ」のみにチェックを入れればよい(図 3 を参照)。

[29] 比較対象として共起頻度も利用可能にしているが、初期設定では対数尤度比によるソートが有効になっている。

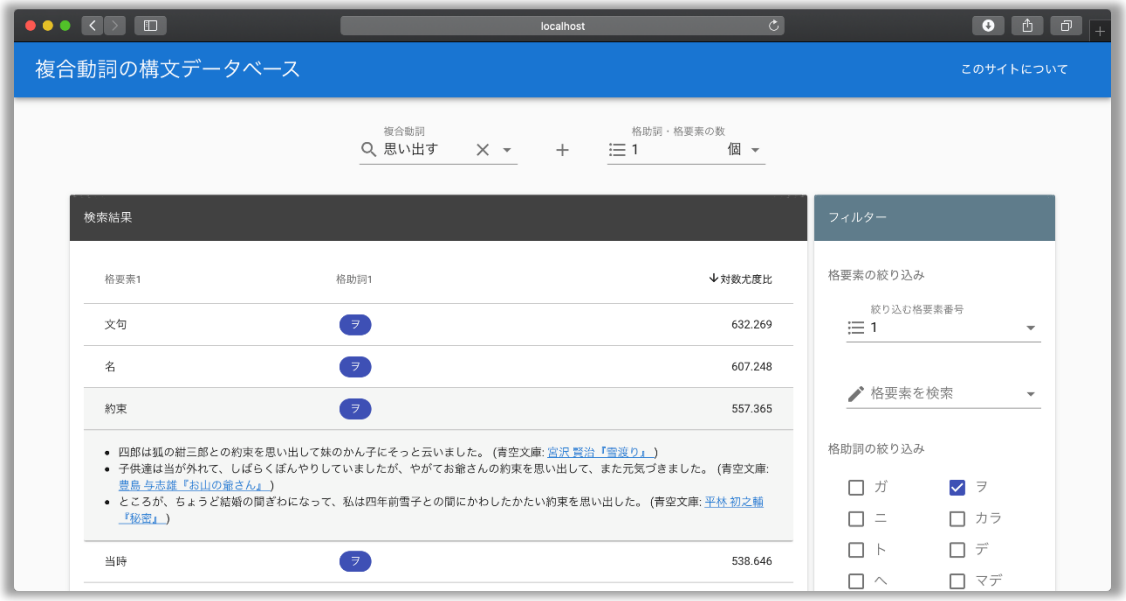


図 3「～ヲ　思い出す」の検索結果

さらに『構文 DB』は格助詞だけでなく格要素の絞り込みにも対応する。まず何番目の項を検索対象とするかを決めるために「フィルター」の「絞り込む格要素番号」から番号を選択する。次に、「格要素を検索」の欄をクリックすると実際に用例に出現した格要素の一覧が選択肢として表示されるので、調べたい格要素を選んで構文を絞り込むことができる。例えば、「複合動詞＝見下ろす」かつ「格助詞・格要素の数＝3」かつ「格助詞の絞り込み＝ガ・ヲ・カラ」と設定した上で、「絞り込む格要素の番号＝3」かつ「格要素を検索＝上」とフィルタリングすると、「～ガ　～ヲ　上カラ　見下ろす」という構文・用例が取得できる(図 4 を参照)。

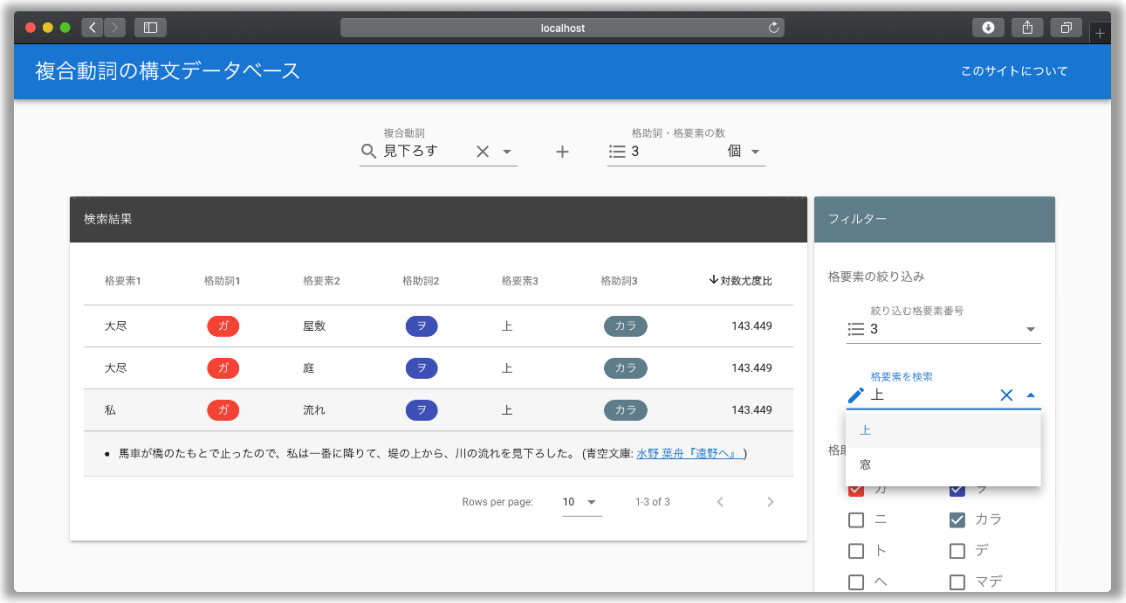


図 4「～ガ　～ヲ　上カラ　見下ろす」の検索結果

4.5.　検索対象選択の自動化と入力補完機能

調べたい複合動詞の項目に辿り着くための検索手順はウェブサイトごとに違いがある。『レキシコン』

は入力欄をそれぞれ複合動詞・前項動詞・後項動詞と切り替えることで各対象を検索する形式になっており、また入力補完機能[30]が有効になっている点に特徴がある。『Web 用例 DB』は切り替え操作が不要で、1 つの入力欄で複合動詞・前項動詞・後項動詞のすべてを対象とした検索を実行できるが、入力補完機能はなく、検索候補のリストの中から調べたい項目をクリックして複合動詞を選ぶ形式である。『NLB』は前項動詞および後項動詞による検索には対応しておらず、入力補完機能もないため、複合動詞を完全一致する形で検索しなくてはならない。そのため『NLB』の検索機能を用いるよりは、『レキシコン』から『NLB』にリンクが張られていることを利用し、『レキシコン』の検索機能を援用するほうが利便性が高いだろう。

以上の各ウェブサイトの検索仕様を参考にし、『構文 DB』では 1 つの入力欄において複合動詞・前項動詞・後項動詞のすべてを対象とした入力補完を実装した。『レキシコン』の入力補完機能と『Web 用例 DB』の検索対象選択の自動化を組み合わせたような仕様がユーザにとって最も使いやすいと考えたからである。例えば入力欄に「出」と入力すると、「出る」が後項動詞として使われる「思い出す」や前項動詞として使われる「出会う」のどちらも検索候補としてサジェストされるようになっている(図 5 を参照)。

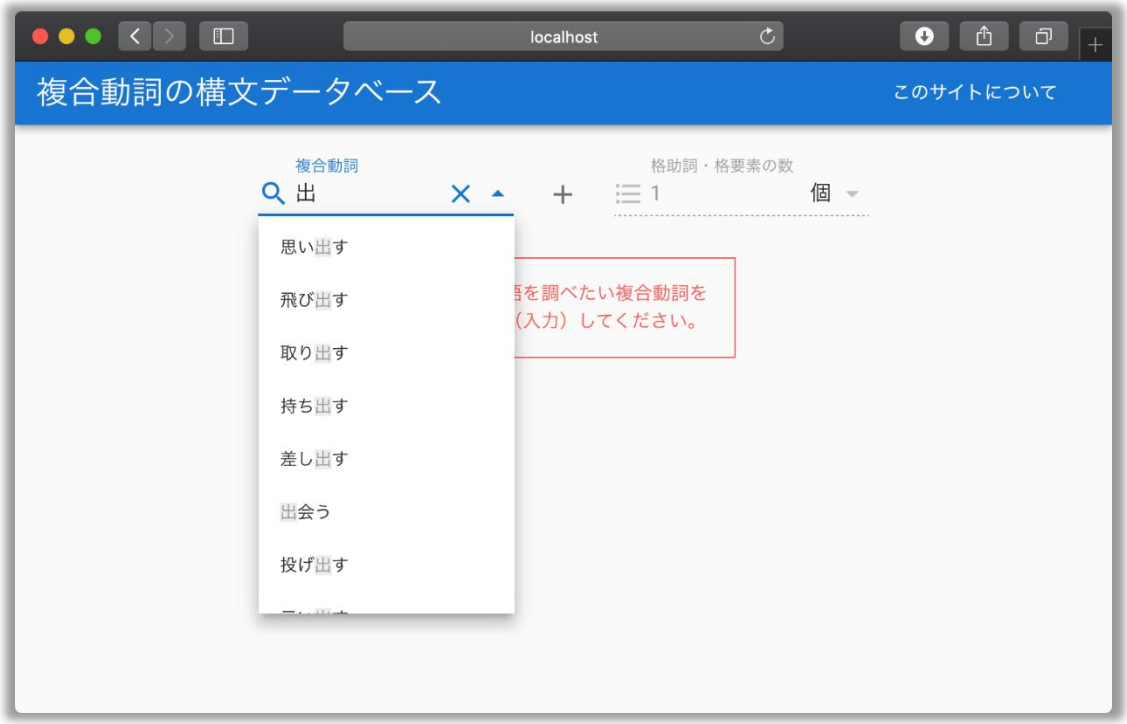


図 5 入力補完機能

4.6. 多様なデバイスへの対応

情報機器の発達により、ウェブサイトにアクセスする端末は多様化している。そのため開発者は、ユーザが使用しているハードウェアやソフトウェアの差異[31]にどこまで配慮してウェブサイトを作るか判断しなければならない。特に、Web 辞書を含む「検索サイト」は、手軽に利用できる携帯端末で閲覧す

[30] 文字列に部分一致する候補が選択肢としてポップアップする機能を指す。
[31] ハードウェア面では、ディスプレイ(解像度)の大きさ、文字入力のデバイス(画面のタッチ操作・キーボードの使用の有無)などが挙げられる。ソフトウェア面では、オペレーティング・システム(パソコン OS・携帯端末 OS)、ウェブブラウザの違いなどが代表的である。

ることもあれば、レポート作成時に参照する場合などにパソコンから利用することも多く、多様なデバイスからのアクセスが想定される。

アクセス端末の多様化への対応を容易にする手段として、クロスブラウザ対応をしたウェブアプリケーションのフレームワークを利用する方法があり、『構文 DB』もこの方法を活用することにした。具体的には Vue.js という JavaScript のフレームワークを主軸にし、さらに Vuetify というマテリアルデザイン(material design)のフレームワークを組み合わせることで、柔軟なウェブデザインを実現している[32]。例えば、タブレットやスマートフォンで『構文 DB』を閲覧すると、それぞれの画面のサイズに合わせてコンテンツの順番や横幅を自動で変更して表示するようになっている[33](図 6 を参照)。

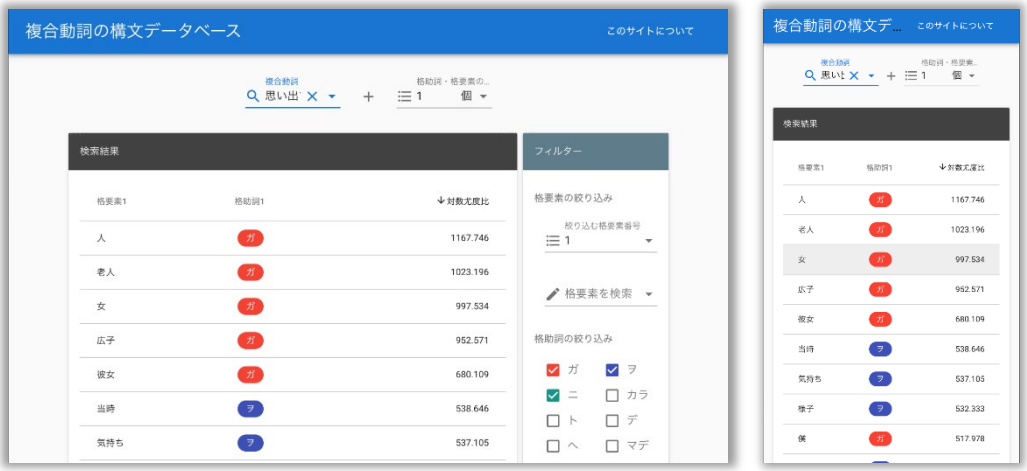


図 6 タブレット(左)とスマートフォン(右)での表示例

5. まとめ

本稿では、語彙習得の観点から複合動詞と格の関係に着目し、複数の格助詞・格要素を比較して見ていくことの必要性を確認した。そして従来の複合動詞関係の Web 辞書・データベースでは実現が難しかった検索仕様を実装した『構文 DB』について紹介し、その特徴と使い方を解説した。本データベースが実際に複合動詞の学習・教育の現場で使用に耐えうるものであるかは、使用者からのフィードバックをもとに今後検証していく必要がある。

また、用例の出典として利用した『青空文庫』は文学作品が多くを占めるが、技術的な制約により、今回のテキスト処理では地の文と会話文の区別を行わなかった。いわば書き言葉と話し言葉が混在した状態で用例を提供している状況であり、この両者をどのように分離するか、あるいは用例の出典としてより適当な別のテキスト資源を探すことも視野に入れて検討していかなければなるまい。

以上の課題を踏まえた上で、今後のさらなる展望として、『構文 DB』は格要素のカテゴリ情報を提供することで学習者にとって一層有用な用例検索サイトになると見込んでいる。例えば現時点では「佐太郎ガ苦労ヲ思い出す」という構文を表示するに留まっているが、学習者・教育者が欲するのは「佐太郎

[32] Vue.js はバージョン 2.5.22、Vuetify はバージョン 1.3.0 を用いている。
[33] ウェブブラウザのサイズに合わせて表示コンテンツを可変的に適応させるデザインをレスポンシブウェブデザイン(responsive web design)という。

ガ」という個人名ではなく、「人(あるいは人名)ガ」というカテゴリ情報ではないだろうか。そのような抽象化を経た情報に触れることで特に「産出」の学習が促進されると思われる。その実装のためにはテキストの分析からやり直し、ユーザインターフェースも一から再設計を要するが、さらなる考察・試行錯誤を積み重ねてデータベースの改善に結びつけていきたい[34]。

YI Yeong-il
東京大学・日本学術振興会特別研究員

参考文献

大石亨・松本裕治(1995)「格パターン分析に基づく動詞の語彙知識獲得」『情報処理学会論文誌』36(11):2597-2610

小椋秀樹(2012)「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査:BCCWJ コアデータを資料として」『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』321-328

小椋秀樹(2014)「BCCWJ における複合動詞後項の表記の実態」『第 6 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』113-120

神崎享子(2013)「国立国語研究所 オンラインデータベース『複合動詞レキシコン』」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端:謎の解明に向けて』437-446、ひつじ書房

京都大学大学院情報学研究科黒橋・河原研究室(2016)「日本語形態素解析システム JUMAN++ version 1.01」、http://lotus.kuee.kyoto-u.ac.jp/nl-resource/jumanpp/jumanpp-manual-1.01.pdf［2019 年 9 月 30 日アクセス］

佐藤大和(1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育』233-265、明治書院

陳曦(2007)「日本語複合動詞の習得状況と指導への問題提起:中国西安外国語大学における『～あう』『～こむ』の調査を中心に」『国際開発研究フォーラム』35:93-102

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』、ひつじ書房

松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究:認知意味論による意味分析を通して』、ひつじ書房

山口昌也(2012)「複合動詞と構成要素動詞の格要素の対応関係分析」『言語処理学会 第 18 回年次大会発表論文集』1081-1084

山口昌也(2013)「複合動詞『～込む』と前項動詞の格関係:『複合動詞用例データベース』を用いた分析」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端:謎の解明に向けて』185-212、ひつじ書房

山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21:32-49

[34] 本稿執筆時点でも、格要素の上にマウスポインタを乗せる(マウスオーバーする)とカテゴリ情報が提示されるようになっているが、あくまで試験的に実装してみたものであり、『構文 DB』の特徴とまで呼べるものではないので本論では触れなかった。

石田梅岩の思想と宋明心学

The thought of Ishida Baigan and the studies about “Xin” of Soong and Ming era in China

船戸 雅也

A merchant of Kyoto, Ishida Baigan (1685−1744), preached practical ethics in the 18th century. Baigan preached filial devotion, harmony, diligence, thrift, and honesty as moral virtues of the merchant class and emphasized the role of “kokoro”, deep essence or heart, in the attainment of nirvana. To supplement his thought based upon the life experiences of merchants, Baigan incorporated aspects of Shinto, Confucianism, Buddhism, and the philosophy of Laozi and Zhuangzi. He argued that the samurai, farmers, and merchants each had their own significant role in society. In an early modern period in which merchants were thought to be cunning, his thought justified the profits of merchants and advocated a proper way of life for them. The grounds of the justification is that merchants let people feel relieved by distributing products and let people live from generation to generation. The general rule of the circulation continuation that the creatures including people grew was the absolute in the sense of values of Confucianism. The thought of Baigan depends on studies of the Rationalistic School of Neo-Confucianism and the doctrines of Wang Yang-ming. Through the concept of "Tenjin-goitsu", which means linkage between space and the person, Baigan emphasized the worldview of Confucianism. "Tenjin-goitsu" implies that all people are part of the inner and outer space that enables the propagation of life. Baigan’s writings also showed similarities to studies of the Rationalistic School of Neo-Confucianism and the doctrines of Wang Yang-ming. They were the studies about “Xin”, deep essence or heart, of Soong era and Ming era in China. As a result, through Baigan’s thought they would have a great influence on the thought of the people in the early modern Japan.

【キーワード】石田梅岩、宋学、陽明学、天人合一、継承連続
Ishida Baigan, studies of the Rationalistic School of Neo-Confucianism,
the doctrines of Wang Yang-ming, Tenjin-goitsu, the circulation continuation

はじめに

丹波の農家の家に生まれた石田梅岩(1685−1744)が説いた教学は、江戸後期をとおして全国規模で普及し、身分を超えて庶民の成人教育を担った。梅岩は京都の商家における、町人生活の体験を基礎にして、神道、儒教、仏教、老荘思想を平易に解釈し、人間の本性を探求することで、武士、農民、町人それぞれの社会的役割と存在意義を唱えた。商人が利益を得ることは、武士が俸禄を得ることと同じであり、正当な利益を得ることは自らを利するだけでなく、社会を利する、と説いた。そして、公共心を重視して、商業道徳の自覚を強調し、正直、倹約、和合、孝行の徳目を中心に、商人の立場を積極的に主張した。当初は、神道の教えを広めることを目指した梅岩であったが、門弟たちと編纂した『都鄙問答』においては、神儒仏、老荘を包摂する、柔軟で強靭な思想を展開した。梅岩が京都の烏丸御池に講席を開き、『都鄙問答』を上梓したのは 18 世紀前半のことだった。

藤原惺窩(1561−1619)、林羅山(1583−1657)、山崎闇斎(1618−1682)らは、禅に対抗することで、儒教を

解釈した。江戸期の朱子学はこの三人の思想から発展し、中江藤樹(1608-1648)、熊沢蕃山(1619-1691)らは、朱子学を経由しつつ、陽明学を解釈した。また、伊藤仁斎(1627-1705)、荻生徂徠(1666-1728)は、朱子学を批判し日本独自の儒学を産み出した。このような時代に、梅岩はそれまで認識されていなかった商人、町人の社会的役割を主唱し、武士、農民、町人それぞれの存在意義を唱えた。梅岩の思想には、儒教に基づく倫理道徳と世界観がその中軸を占める [1]。とりわけ、天地人を包含する、その世界観の根幹には、程伊川(1033-1107)、朱熹(1130-1200)らによる宋学、いわゆる朱子学と、それを踏まえて、陸象山(1139-1192)、王陽明(1472-1528)らによって展開された陽明学の影響が色濃く見受けられる。

尾藤正英は、「梅岩が説こうとした道徳的教説の源流は、孟子の思想や朱子学に求められ、すなわち本質においては儒教の道徳思想であるが、その儒教思想の普及が、中国では知識人の範囲にほぼ限定されていたのに対し、日本では、梅岩による心学の講釈などの方法を通じ、また内容上も、庶民らの生活の実際に即した平明な道徳の教えとなって、広く普及するに至った点が注目される」[2]としている。一方で、片岡龍は朱子学、陽明学という言葉は、明らかに近代以降に成立したものであり、梅岩の思想をそのようなラベルを貼って見てしまうと、むしろ近世の人たちが実際にもっていた認識を捉え損ねる可能性があると指摘する [3]。そのうえで、梅岩自身は「すでに諸思想の区別を重視せずに、むしろそういう区別を乗り越えたところで、自己の思想を展開した」[4]のであり、現代の問題関心から梅岩を活かしなおすという立場からは、「朱子学とか、陽明学とかという言葉で梅岩を語ることが、あまり生産的に感じられない」[5]としている。

しかし、「世俗ニ商人ト屏風トハ直ニテハ不立」[6]といって、賤商観が蔓延っていた時代に、梅岩は商人の社会的役割を主唱し、その利益は武士の俸禄と同等である、として正当化した。そして、「天下ノ財寶ヲ通用シテ、萬民ノ心ヲヤスムルナレバ、天地四時流行シ、萬物育ハルルト同ク相合ン」[7]といって、世の中に商品を循環させ、人々を安心させることは、天地自然において、四季が滞りなく行き過ぎ、万物が生育することと同等であることを、その根拠に挙げている。そこにみられるのは、天人合一や継承連続を善とする、儒教的世界認識だ。梅岩の思想に通底する儒教的世界認識は、宋学から陽明学に連なる、宋明時代の「心学」から吸収したものであるように思われ、これを検証することで、その思想を再構成してみようと思う。源了圓は、梅岩の思想は「生々主義」と「唯心主義」との二つの柱から成り立っていると指摘している [8]。この視点は示唆的であり、梅岩の思想を再構成する際に、きわめて有効だと考える。本稿においては、源のいう「唯心主義」を、〈心〉と〈性〉に関する心性論として、「生々主義」を、世界認識論として腑分けしつつ、梅岩の思想と宋明心学との近接を論じることを試みたい。

梅岩の思想における思想的根拠については、これまで多くの先行研究が蓄積されてきた。石川謙は、陽明学に基づくとする説、朱子学に基づくとする説、仏教説、神道説、そして三教一致を主張する、五つの類型について詳細に検討し、そのいずれもが石門心学の全体像を説明するのには不十分だとした [9]。これについて、吉田公平は、「石門心学の性格規定を試みた際に、石門心学の思想的淵源を既成の朱子

[1]『石田先生事蹟』には、梅岩が「常に説きたまいし書」として、「四書、孝經、小學、易經、詩經、太極圖説、近思録、性理字義、老子、荘子、和論語、徒然草等」とある。柴田実『石田梅岩全集』清文堂、1956 年、下巻 625 頁。
[2] 尾藤正英『江戸時代とはなにか』岩波書店、1992 年、117-118 頁。
[3] 片岡龍・金泰昌編『公共する人間 2　石田梅岩』東京大学出版会、2011 年、158 頁。
[4] 同上、159 頁。
[5] 同上、159 頁。
[6] 石田梅岩『都鄙問答』平安書林、1739 年、巻之二 24 頁。
[7] 同上、巻之一 17 頁。
[8] 源了圓「石田梅岩論」古田紹欽・今井淳編『石田梅岩の思想』ぺりかん社、1979 年、104 頁。
[9] 石川謙『石門心学史の研究』岩波書店、1938 年、46-55 頁。

学・陽明学・老荘思想・仏教思想などに求めることを、ことさらに拒否していることについて、一つの疑義を覚えた」[10]として、石川が判断を留保したことを批判した。そのうえで、石門心学にもっとも近親性を持つのは、王陽明の良知心学であるとしている[11]。吉田は、石川が陽明学説を断言しなかったのは、「石門心学」を独立的に浮かび上がらせる意図があったからだとして、「石門心学」は果たして既成の教学にはみられない「独自」のものなのか、という問題を提起した[12]。たしかに、石川が梅岩教学の思想的淵源を特定しなかったことが、近世思想史において、梅岩を儒学者の系譜から除外し、町民の実学または、民衆思想における通俗道徳という属性のみにおいて、位置付ける傾向を規定したことは否定できない。

一方で、大川周明は、「彼れの学は決して王陽明に基いたのではなく、実に程朱より入りて王陽明と同一の思想に到達せるものである」[13]と指摘した。そして、吉田は「石門心学の誕生を基底から促したのは、藤樹後学なり、三輪執斎などのいわゆる陽明学派の活躍とその成果ではなかったか。そして、当代の心学運動の潮流全体を醸成する刺激ともなり素材ともなったのは、明代末期の心学の遺産であり、それは良知心学に開拓されたものであった」[14]とする。さらに韓立紅は、陽明学との近接という立場から一歩踏み込んで、「梅岩の思想が、中国南宋時代の陸象山の思想に非常に類似している点が多い」[15]として、梅岩と象山との異同について比較分析を行っている。

玉懸博之は、「江戸時代の日本において、中国の宋～清代とは異なる時と所の規定を受けつつ、儒教思想がどのような形姿をとって生み出され、どのような社会的機能を果たしたのか。このことが日本思想史の研究上、きわめて重要な問題である」[16]という。近世の社会思想史において、梅岩の思想的位置を考える際に、この視点はきわめて示唆的だと思われる。ゆえに本稿は、梅岩の思想について、思想的淵源を特定せずに、儒学の系譜から独立したもの、という論点からは距離を置き、儒教思想の一系譜として位置づけることを試みようとするものである。宋代「心学」であった宋学および、宋学から発展した明代「心学」であった陽明学との近接を焦点としながら、梅岩が、心性論において、宋明「心学」からキー概念を取り込みつつ、世界認識論において、継承連続を善とする儒教的世界観を展開したことを検証したい。

1. 心性論

梅岩は『都鄙問答』で、「性ヲ知ルハ學問ノ綱領ナリ」[17]といい、「我因所ハ孟子ノ盡心知性則知天説玉フ。我心ニ合ヒ疑ナキヲ以テ。教ヲ立モトトス」[18]という。また、「学問ノ至極トイフハ。心ヲ盡クシ性ヲ知リ。性ヲ知レバ天ヲ知ル。天ヲ知レバ。天即孔孟ノ心ナリ。孔孟ノ心ヲ知レバ。宋儒ノ心モ一ナリ」[19]といって、学問の到達点は「〈心〉を尽くし〈性〉を知る」ことであることを強調している。「〈心〉を尽くし〈性〉を知る」の原典は、『孟子』尽心章句上である。

---

[10] 吉田公平「石門心学と陽明学」今井淳・山本眞功編『石門心学の思想』ぺりかん社、2006 年、382−383 頁。
[11] 同上、388 頁。
[12] 同上、386 頁。
[13] 大川周明『平民の教師　石田梅岩』社会教育研究所、1924 年、132 頁。
[14] 前掲、吉田公平(2006)、391 頁。
[15] 韓立紅「中国における石問心学思想研究の現状とその展望」『季刊日本思想史 65 号』ぺりかん社、2004 年、101 頁。
[16] 玉懸博之『日本近世思想史研究』ぺりかん社、2008 年、1 頁。
[17] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之一 2 頁。
[18] 同上、8 頁。
[19] 同上、巻之二 16 頁。

> 孟子曰く、其の心を盡す者は、其の性を知るなり。其の性を知れば、則ち天を知る。其の心を存し、其の性を養ふは、天に事ふる所以なり。殀壽貳はず、身を修めて以て之を俟つは、命を立つる所以なり、と。[20]

孟子が言うに、「人間の心、すなわち惻隠・醜悪・辞譲・是非の心、すなわち仁・義・礼・智の四端を、拡充し存養しつくす者は、人間の本性がどんなものであるか、即ち本性は善であり、それは天から与えられることを知ることができる。人間の本性がどんなものであるか、そしてどこから出たものか(即ち善で、天から出たものであること)を知れば、その本性を与えた天の心がいかなるものであるかが分かる。人間にそなわるままの心の芽生えである惻隠・醜悪・辞譲・是非の心を失わないように努め、このような人間の善なる本性を養い育てていくのは、天の意思にかなったことで、つまり天に事えるということになるのである。ところで、人間には、寿命が短く若死にの人もあれば、長生きする人もあるが、そんなことには疑いをもたず、ただ一すじに我が身の修養に努め、そのあとは、殀壽どちらであろうとも、ひたすら天命をまつ、それが天命を十分に全うする所以である」[21]と。

宋学の『四書集註』においては、『孟子』公孫丑章句上の「敢て問ふ、夫子悪にか長ぜる、と。曰く、我言を知る。我善く浩然の気を養ふ、と」[22]の注釈で、「言を知るとは、心を尽くし性を知り、凡(すべ)て天下の言において、その理を究極(きわ)めて、その是非得失がこのようだというゆゑんを識らないことがないのである」[23]と説かれている。これを踏まえ、梅岩は「〈心〉を尽くし〈性〉を知る」を次のように説く。

> 学者タル者心ヲ知ルヲ先トスベシ。心ヲ知レバ身ヲ慎ム。身ヲ敬ムユヘニ禮ニ合フ。故ニ心安シ。心安キハ是仁ナリ。仁ハ一元氣ナリ。天ノ一元氣ハ萬物ヲ生ジ育フ。此心ヲ得ルヲ學問ノ始トシ終トス。呼吸存スル間ハ。心ヲ以テ性ヲ養フヲ我任トスルコトナリ。[24]

学者たる者は〈心〉を知ることを先とするべきだ。〈心〉を知れば自らの行いを慎み、礼に適うから、心が安らかになる。心が安らかになることが仁であり、仁は天に備わる根本の気であって、この気が万物を生み育てる。そのような〈心〉を会得することが、学問の始まりであり、終わりでもある。呼吸をしている間は、〈心〉をもって〈性〉を養うことを、自分の役目とする。梅岩はこのようにいって、自らの教学における〈心〉と〈性〉を位置づけた。

1-1　〈心〉

梅岩は〈心〉について、「孟子曰人々己貴者アリ。己ニ貴ハ心ナリ。心ヲ得テ満足シ。身ヲ濡者ハ儒者ナリ」[25]という。『孟子』告子上の、「人々は皆自分自身にその貴いもの、即ち天爵を持っている」[26]を引いて、自身の貴いものとは〈心〉である。〈心〉を理解して満足し、身をうるおすものが儒者だ、

---

[20] 内野熊一郎『新釈漢文大系 4 孟子』明治書院、1962 年、442 頁。
[21] 同上。
[22]「公孫丑がいう『しいてたずねますが、先生は告子に比べて、どういう点がまさっていますか』と。孟子がいうに、『私は善く他人の言葉を理解するし、又私は善く吾が浩然の気を養うものである』と」同上、95-96 頁。
[23] 鈴木由次郎『四書集註』明徳出版社、1974 年、135 頁。
[24] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 14 頁。
[25] 同上、13 頁。
[26] 前掲、内野熊一郎(1962)、406 頁。

という。ところで、梅岩の〈心〉とはなにか。

> 聖人馬ヲ見テ後ニ羈ヲ作テ。馬ニハマセテ使ヒ玉フ。此母ノ胎内ヨリ知テ。生レ玉フニハ非ズ。向ヒ視物ヲ則心ト為玉フ。是レ聖知ノ勝レタル所ナリ。向フ物ヲ移シ曲ザルハ。明鏡止水ノ如シ。人タル者元来心ハ替ラザレドモ七情ニ蔽昧サレテ。聖人ノ知ヲ外ニ替リタルコトアルヤウニ思フヨリ。昧クナツテ種々ニ疑ヒ發ルナリ。元來形アル者ハ形ヲ直ニ心トモ可知。[27]

聖人は、馬を見た後にくつわを作り、それを馬にかませて使う。それは生まれながら知っているわけではない。向かい視たものの〈心〉をそのまま理解する。それが聖知のすぐれたところだ。向かい視たものを写し曲げないのは、明鏡止水のようだ。人であれば〈心〉は違わないが、喜・怒・哀・憚・愛・悪・欲の七情で覆い隠され、聖人の知とは違ったものであるかのように思うから、分からなくなって種々の疑いが起こるのだ。元来、形あるものは形がそのまま〈心〉であると理解すべきだ。

このようにいう梅岩の〈心〉とは、「人を含む万物が、天地から生み出された際に授かった本来の性質」と解釈できる。そして、梅岩は〈心〉を次のようにも説いている。

> 天地ハ物ヲ生ルヲ以テ心トス。其生ル所ノ物各天地物ヲ生ル心ヲ得テ心トナス然レドモ人欲ニ俺レテ此心ヲ失ス。故ニ心ヲ盡シテ。天地ノ心ニ還ル所ニテイフ時ハ。放心ヲ求ルト説。又求メウレバ天地ノ心トナル。天地ノ心ニナル所ニテ説トキハ無心ト云天地ハ無心ナレドモ四季行レテ萬物生。聖人モ天地ノ心ヲ得テ。私心ナク無心ノ如クナレドモ。仁義禮智。行ハル。一旦豁然トシテ貫通スル時ハ。疑ヒハ晴ルモノナリ。聖學ヲ論ズルトイフハ此心ヲ知テ後ノコトト思ハルベシ。[28]

梅岩は、天地は物を生み出すときに本質として〈心〉を授けるが、人は欲心によって生まれつきに天から授かったその〈心〉を失っている、という。欲心を持たぬ人以外のものは、〈心〉を失わずにそのまま持っており、その状態を「無心」という。ゆえに、天地は「無心」であり、無意識に〈心〉を理解している聖人も「無心」である。人間以外の馬、蚊、鳥、家畜、蛙なども、形がそのまま〈心〉であり「無心」だ。ただ、人のみが失った〈心〉を探し求めるのであり、その〈心〉を取り戻せば「無心」だという。梅岩における「無心」とは、このように欲心が無い状態のことを指す。このように、梅岩のいう人の〈心〉には、欲心という悪が含まれる。

『近思録』には、「人有りて無心を説く。伊川曰く、無心は便ち是ならず。只當に私心無しと云ふべしと」[29]とあり、「ある人が無心の話をした。すると伊川は『心がないというのは、間違いである。私心がないとのみいうべきである』と申された」[30]という。伊川のいう意味は、「心がすべて否定さるべきではなく、心のうちで私心だけが否定されなければならない。それで私心なしというべきだと言う」[31]のであるから、宋学において〈心〉には私心という悪が含まれる、と考えられていたことが分かる。

1-2　〈性〉〈理〉と〈行〉

梅岩は自らの教学を「性理の学」といい、四巻から構成される『都鄙問答』において、巻之三は全編

[27] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 15 頁。
[28] 同上、25 頁。
[29] 市川安司『新釈漢文大系 37 近思録』明治書院、1975 年、124 頁。
[30] 同上。
[31] 同上。

が「性理問答の段」として独立しており、梅岩はそこで心性論を展開している。「性善説を誤解している者が多いといいますが、その大きな誤解が生じる事例を、お聞かせ願えませんか」と問われた梅岩は、次のように答えている。

> 土ニ替リナク同ジ土ナレドモ。上田下田ノ替リアルナリ。是地ニ肥タルト磽タルトアリトイヘドモ。土ノ理ニ替ルコトナシ。然レバ土ハ同ジ土ニテアリナガラ。上田ト下田トアリ。然リトイヘドモ。土ニ具ル所ノ理ハ同ジ。同キユヘニ漸々ニ糞ヲ入土ヲ入レバ。下田ハ中田トナル中田ハ上田トナル。是ヲ人ニ喩テイハバ。下田ハ小人ナリ中田ハ賢人ナリ。上田ハ聖人ナリ。聖人ト賢人ト小人ト替リアレドモ。元性善ハ同キユヘニ學バ漸々ヲ以テ。小人ハ賢人トナリ賢人ハ聖人トナル。是性ハ一ナル證ナリ。[32]

梅岩は、田地の土が本来持っている性質を〈理〉とし、人の本質、本心を〈性〉として、対比的に明示し、〈理〉が〈性〉を含む、という。また、『石田梅岩語録』においては、「或人性ノ字ヲ問。文字未不知人ニヲシユルナリ。」[33]として、〈性〉と〈理〉について次のようにいう。

> 儒ニテハ性ト云ハ、即チ天ニ有ル所ノ理ナリ。何ヲ以テコレヲ理ト云ハズシテ性ト云ナレバ、理ハ是レ汎ク天地ノ間、人ヤ畜類艸木ヤ石カワラ等マデニ有ル上ニテハ理ト云、性ト云ハ是レ我ニ在ルノ理、只々コノ道理ヲ天ヨリ受ケ我ニ有所トナス故ニ、コレヲ性ト云フ。[34]

〈性〉とは、人間が生まれもった本質とし、〈理〉は人間を含む万物の本質、と定義している。この梅岩の解釈は、強いていうならば、〈心〉を〈情〉と分けずに心即理とした陽明学よりも、〈心〉を、悪を含む〈情〉と〈性〉とに弁別して性即理とした宋学に近接していたことになるだろう。

また、義と到知格物について問われた梅岩は、次のように答えている。

> 行藤氏曰、義ト致知格物ト一ナリトハ會得シガタシ。致知ハ一物々々ノ理ヲ盡スコトナリ。義ハ行ノ上ニテ用ナリ。　致知ト行ヒノコトハ筋合違フト思エリ。如此モノト思フト云テ圖セリ。
>
> 行　　性
> ＼　　／　　致知格物ヲ勤性エカヘルナリ。
> 心　　行ハ心ヨリ出ル物ナリ。
>
> 先生曰、左ニアラズ
>
> 性
> ／｜　　心ヲ盡シ性ヲ知リ、性ニ至リ、其性ニ従所ヲ行フナリ。心ヨリ行ニ至ル
> 行　心　　ニアラズ。性ニ従フ心ヲ以テ行ヒユクナリ。
>
> 如斯ナレバ心ヲ盡シ性ヲ知リ、性ヲ師匠トシテ行フ。此道ナリ。性ト行ト體用ニシテ一ナリ。知リエシ上ハ行ヒ甚重シ。譬バ幼少ノウチハ親ヲ重ジテ事エ、壮ニシテ君ニ仕テハ君ヲ重ジ事フ。親ニ事フハ致知格物ノコト、君ニ事フハ致知シテ行フガ如シ。[35]

---

[32] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 5-6 頁。
[33] 前掲、柴田実(1956)、下巻 301 頁。
[34] 同上。
[35] 同上、上巻 532 頁。

義とは行いのうえにて用いるもので、格物致知と行うことは筋合いが違うことだ。格物致知を勤めて、〈性〉に至り、〈行〉も〈心〉から出るものなのではないか、といって行藤氏が示した図を、梅岩は否定している。[36]そのうえで〈心〉を尽くして〈性〉を知り、本来的に具わった〈性〉に従うところを行い、〈性〉に従う〈心〉をもって行うものであるという。

格物致知は、もと『礼記』大学篇の語で、治国・平天下に至る儒学の進学過程の第一段階に置かれ、原文の「致知は格物に在り」は、「知識を得るには物事を正しく把握することが必要だ」という意味だという[37]。南宋の朱熹は、北宋の程伊川をうけて「格」を「いたる」と読み、格物は物に即してその理に窮めいたること、すなわち〈窮理〉と同義であるとし、諸現象の理を究明することによってわが知を完全なものにするのが致知であると主張した[38]。これに対して明の王陽明は「格」を「ただす」と読み、「物」を「意の在る所」すなわち意念が発動する場と理解して、事象に向かう心のはたらきを是正することとし、致知とは先験的道徳知たる〈良知〉を実現することだという[39]。

梅岩の〈性〉は人が本来的に持つ〈理〉であるから、「〈性〉に従う」は、物に即してその〈理〉を窮めいたる宋学における格物「いたる」に近接する。さらに、「理解した上行いは甚だ重い」として、実践倫理を現実に行うことに重きを置き、知的追究を経た実践を強調する陽明学の知行合一にも近接しており、梅岩の折衷性を見出すことができる。

1-3　梅岩の〈心〉〈性〉と、宋学の〈心〉における未発の〈性〉

梅岩が〈心〉、〈性〉をめぐる核心的命題において参照する「心は一身の主」は、近世儒教の不動の命題だった。儒教において、「一身の主」としての〈心〉を確立させる工夫は「敬」である。「敬」は朱子学では「動静」を貫く工夫として重んじられた。〈心〉が緊張と熱量を湛えながら静かに止まっている次元（未発）と、〈心〉の発現・躍動の次元（已発）と、その二つを一貫して、〈心〉をあるべきものに保つのが「敬」の工夫である[40]。

源了圓は、梅岩における「心ヲ知ル」と「性ヲ知ル」の差異がほとんど問題にならず、両者がほとんど同じ意味で使用されていることを指摘する[41]。「厳密な朱子学者からすればこのルーズな『性』と『心』との使用法は非常に気になる問題」[42]であり、また、『石田先生事蹟』において、梅岩が門人に以下のように説く「性」と「心」は、「朱子学に従った「性」と「心」との理解であるといえよう」[43]という。

> 行藤氏問ふ。心と性と異りや。
> 先生答へて曰、心といへば性情を兼ね、動静體用あり。性といへば體にて静なり。心は動いて用なり。心の體を以ていはば性に似たる所あり。心の體はうつるまでにて無心なり。性もまた無心なり。心は氣に屬し、性は理に屬す。理は萬物のうちにこもりあらはるる事なし。心はあらはれて物をうつす。[44]

---

[36]「石田梅岩年譜」に、「寛保二(1742)年二月、熊本行藤志摩守と問答す」とある。前掲、柴田実(1956)、下巻 650 頁。
[37]『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998 年、231 頁。
[38] 同上。
[39] 同上。
[40] 田尻祐一郎『江戸の思想史』中公新書、2011 年、55-56 頁。
[41] 前掲、源了圓(1979)、99 頁。
[42] 同上。
[43] 同上、107 頁の注(1)参照。
[44] 前掲、柴田実(1956)、下巻 637 頁。

〈心〉は〈性〉と〈情〉を兼ね、動静體用との対応関係にある。〈性〉は體であり静であり、〈心〉は動いて用である。この対応関係を図に示すと次のようになる。〈心〉は、〈性〉と〈情〉を兼ねるものであるから、それらの中間に位置付けることができる。

〈心〉

情 — 性
動 — 静
用 — 體
気 — 理

梅岩の「心が性情を兼ねる」は、張横渠の「心は性情を統ぶる者なり」[45]に近接する。〈性〉とは人が天から受けたもので動きがなく、これに動きが加わると〈情〉となる。〈性〉體〈情〉用の関係にあって、全くの別物ではないが、形として区別される。〈心〉の中に〈性〉と〈情〉があるというこの解釈は、朱子によって受け継がれた。朱子は心即理の立場を取らずに、性即理の立場を取る。それは〈情〉の中に悪の要因を認めるからである。心即理とすれば、悪を含んだものを〈理〉とすることになって、〈理〉の性格が失われる。朱子は〈心〉について常に横渠のこの説に従っていた。朱子における〈心〉について、安田二郎は次のようにいう。

> 心は「全人格の中心となるもの」であった。ということは「認識も運動もすべて心のはたらきである」という意味であるが、その認識も運動も共に「情」として捉えられる。中庸の未発已発説と楽記の寂感説との綜合であるこの心説に於いては、心の体は寂然不動なるものであるが、外界の事物に触発されて思慮が萌すと、「七情」の何れかが事態の如何に応じて用いられる。これが心の用であり、已発であるといわれる。「心は性情を統ぶるものである」という横渠の古典的な表現も、これに結びつけて理解される。ここに於て用いられる範疇も亦体と用、未発と已発とのそれである。性は心の体、未発であり、情は心の用、已発であるとされる。[46]

このように、宋学において〈心〉は状態によって、未発の〈性〉と已発の〈情〉に分類され、「性(理)は直接に把捉され得るものでなく、唯だそれに対応する情(気)の存在から推論して始めてその存在が確認される」[47]という。この安田による朱子の存在論解釈を図で示せば以下のようになる。

用（作用） 体（実体）
〈心〉
情（已然） 性（未発）
気 理

梅岩の「心を尽くして性を知る」における〈心〉と〈性〉の定義は、〈心〉が未発の〈性〉と已発の

[45] 前掲、市川按司(1975)、55 頁。
[46] 安田二郎『中国近世思想研究』筑摩書房、1976 年、109 頁。
[47] 同上、68 頁。

〈情〉に分けて措定する宋学に近接している。そして、先に触れたように、梅岩の「無心」と、『近思録』の「無心」との比較においても、いずれも〈心〉には欲心、私心が含まれる、とする点で近接している。

2. 世界認識論

梅岩は「心ヲ得ルヲ学問ノ始トシ終トス」といって、宋学の心性論に依拠して自らの教学を構築した。人の内側にある〈心〉とは万物に与えられた本質であり、その〈心〉を授けるのは、万物を生み出す「天」である。梅岩の天地人による世界認識において、人の内面である〈心〉も、人をとりまく天地も一体であり、連動する。

忽然と〈心〉を知る開悟を前提として、認識する世界は、人が天地の一部であるという、天人合一に支えられる。その天地人は「継者ハ善」という、継承連続の天理によって循環している。そして、その世界を認識するために、心を磨く磨草として、儒教のみならず、仏教、神道、老荘思想のいずれをも受容した。

2-1 開悟

梅岩は、天地の〈心〉を手に入れている聖人が説く学問を論ずるのは、その〈心〉を悟ってからするべきだとして、開悟の必然性を説いた。その悟りとは、「豁然として疑いが晴れるもの」だという。梅岩自身は、20 代半ばから人に教えを説くことを志し、43 歳から 45 歳までの間に、二度の開悟を経験し、のちに講席を開いて人々に教えることを決心している。開悟は自己意識における精神的内面の葛藤においてのみ説明しうるものだが、梅岩は門弟たちに、自らの精神性の変遷について、次のように回想している。

> われ生質理屈者にて、幼年の頃より友にも嫌はれ、只意地の悪き事有りしが、十四五歳の頃ふと心付て、是を悲しく思ふより、三十歳の頃は大概なほりたりと思へど、猶言の端にあらはれしが、四十歳のころは、梅の黒焼のごとくにて、少し酸があるやうにおぼえしが、五十歳の頃に至りては、意地悪き事は大概なきやうにおもへり。[48]

安丸良夫は、梅岩の「開悟の体験は、理論的に言えば、朱子学の教える「性」に到達したことを意味していた。」[49]といい、その開悟の前提に「不安」の要素を指摘する。商家に 2 度目の奉公を始めた梅岩が、人の人たる道を教えようとするも、「偏屈な道徳主義者として孤立する不安な梅岩を容易に想像できるのであって、(中略)再度の上京の翌年あたりから「気ヲ煩」ったというのは、ほとんど必然的なありゆきでさえあった」[50]としている。20 代の前半から、梅岩は自らの教義に深い説得力を欠いたまま、不安な状況に陥りつつも、様々な書を読み、数多の講席に出席して、研鑽を続けた。30 代半ば頃まで、〈性〉を理解したと思っていたが、その〈性〉を疑うようになる。これを正そうと、尋ね歩き、隠遁の老僧小栗了雲に出会う。了雲が指摘したのは、「梅岩はまだ五倫五常を人間主体にとって外的な規範として受け取っている」[51]ことであった。「自分の「心」こそすべての根源であり、すべての道徳もその

---

[48] 前掲、柴田実(1956)、下巻 634 頁。
[49] 安丸良夫『文明化の経験』岩波書店、2007 年、49 頁。
[50] 同上、45 頁。
[51] 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974 年、53 頁。

「心」の実現でなければならぬのに、梅岩は外的規範を追及するばかりで、自分の「心」を養うことを忘れ、その結果、自分の本心と外的規範とのあいだに乖離を生じ、そこに不安がうまれた」[52]。梅岩は了雲に〈性〉について、自らの見識を言い出すことすらできずに、自問を繰り返す日々を過ごした。そして、40 歳で病に伏していた母を看病するために郷里に戻っていたときに最初の開悟を経験する。しかし、了雲から「目が残っている」、すなわち「自性」が残っているとして、その開悟が不完全なものであることを指摘される。それから、1 年余り後に、遂に最終的な開悟を体験する。

> 其時忽然トシテ疑晴。煙ヲ風ノ散ヨリモ早シ。堯舜ノ道ハ孝弟而已。魚ハ水ヲ泳。鳥ハ空ヲ飛。詩云。鳶飛戻天。魚躍干淵ト云リ。道ハ上下ニ察ナリ。何ヲカ疑ハン。人ハ孝悌忠信。此外子細ナキコトヲ會得シテ。二十年来ノ疑ヲ解。コレ文字ノスル所ニアラズ。修行ノスル所ナリ。[53]

「忽然シテト開タル」、「忽然トシテ疑ヒ晴ル」[54]と表現される、梅岩の開悟とは、長い修行の後に、忽然と〈心〉、〈性〉を理解することだ。開悟、悟りとは、サンスクリット原語の語根 budh に由来し、仏教において「菩提」と音写し「目覚め」を意味する[55]。順を追って次第に悟りに近づくことを漸悟といい、ただちに悟りの境地に達することを頓悟というが、梅岩のそれは「忽然トシテ」疑いが晴れる、頓悟だった。中国の禅宗において、神秀(606−706)による北宋禅が漸悟を、慧能(638−713)の南宋禅が頓悟を説いた[56]。王陽明が説いた「無善無悪」の原典は、慧能の伝記と思想が収録された『六祖壇経』であり、陽明を継いだ王学左派の周海門(1547−1629)とその門弟たちはこれを必読書とした[57]。梅岩が師事した小栗了雲は、黄檗派の禅学を修めたという[58]。黄檗派の教学は、頓悟を目指した南宋禅の系譜を持つ。梅岩の思想において展開された開悟が頓悟であったという点において、陽明学左派との近接性を指摘することができる。

2−2　梅岩の「人ハ一箇ノ小天地」と宋明心学における「天人合一」

梅岩において、〈心〉を理解する開悟とは、自らの存在が天地の一部であること、を体感することだった。梅岩は、「人ハ全體一箇ノ小天地ナリ。我モ一箇ノ天地ト知ラバ何ニ不足ノ有ベキヤ」[59]といい、また「天より生民を降すなれば、万民はことごとく天の子なり。故に人は一箇の小天地なり。小天地ゆへ本私欲なきもの也」[60]という。梅岩は孟子の性善説を、天人合一の観点から解釈している。

> 孟子ノ性善ハ直ニ天地ナリ如何トナレバ人ノ寝入タル時ニテモ無心ニシテ動クハ呼吸ノ息ナリ。其呼吸ハ我息ニハ非ズ。天地ノ陰陽ガ我體ニ出入シ形ノ動クハ天地浩然ノ氣ナリ。我ト天地ト渾然タル一物ナリト貫通スル所ヨリ。人ノ性ハ善ナリト説玉フ。[61]

---

[52] 同上。
[53] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之一 5 頁。
[54] 同上、巻之三 9 頁。
[55] 前掲、『岩波哲学・思想辞典』574 頁。
[56] 林田明大『真説「陽明学」入門』三五館、1994 年、414 頁。
[57] 同上、412 頁。
[58] 岩内誠一『教育家としての石田梅岩』立命館出版部、1934 年、59 頁。
[59] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 8 頁。
[60] 前掲、柴田実(1956)、上巻 217 頁。
[61] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 6 頁。

孟子ノ性善モ天ナリ。孔子ノ易ノ性善モ天ナリ。天地ト人ト別々トイハバ。汝ロト鼻ヲ塞活テ見ヨ。天地ノ陰陽ヲ受ズシテ。活ラレナバ孟子ハ非ナリ。死スベシトイハバ。孟子ハ是ニシテ天地ノ性善ト一致ナルコト決セリ。[62]

韓立紅は、「『天人合一』は孟子以来の儒者達が追求してきた最高の理想境地であり、儒家文化の根本精神でもあった。宋明理学家達は、『天人一体』の観念の上に『天人合一』の思惟模式を構築した」[63]という。また、「『天人合一』の境地は梅岩の理想でもあった。梅岩は、『天人合一』の状態に到達できるのはまず『聖人』であると思った」[64]としている。そして、陸象山と梅岩の認識論において、「二者はともに人間の本来の『心』の追求を学問の目的にし、ともに『天』との『合一』を人生の最高境地にした」と指摘している[65]。

宋から明末に至る天人合一について、参照してみよう。北宋の謝上蔡(1050-1120)は、「天は理なり。人も亦理なり。理に循えば即ち天と一たり。天と一たれば、我は我に非ず、理なり。理は理に非ず、天なり」[66]という。天人合一とは、要するに我が我における天理に生きるということにほかならない[67]。そして、宋代の天人合一は人の天への帰一というかたちをとる[68]。二程子に師事した上蔡は、〈心〉をもって仁の本体とし、窮理による〈心〉を重んじて知行合一を唱え、天人合一とともにその理念は陸象山に継承された。

明代に入り、王陽明は、「夫れ人は天地の心にして、天地萬物は本吾が一體の者なり」[69]といい、陽明門下の聶豹(1487-1523)は「天地万物は本と吾と一体、(中略)禽獣草木の一物として所を失し、匹夫匹婦の堯舜の沢を被らざる者あれば、皆、我の責なり」[70]という。禽獣草木から匹夫匹婦にいたるどの一物どの一人も天の覆育のもとにあるという万物一体観は陽明において一つの昂揚を示した[71]。明末の呂坤(1536-1618)も、万物一体観の流れをくむが、「朱子云はく、天は理なりと。余は曰はく、理は天なりと」[72]という。ここでは、天の人への包摂という方向性がみられ、宋代における人の天への帰一から、180 度の転換をみせたが、これは明末段階では社会的欲望の調和こそが主要な課題となっていたのだった[73]。それゆえ、呂坤は、天理自然を天理とは二律背反であるはずの人欲の語と結びつけている[74]。

物理人情は、自然なるのみ。聖人は、其の自然なる者を得て、以て天下を観、而して天下の人、聖人の洞察を逃るる能はず。其の自然なるものを握りて、以て天下を運らし、而して天下の人の、聖人の斡旋する所と為るを覚えず。もし其軌物のただす所、矯拂に近くとも、然も其の人欲自然の私にもとり、而して其の天理自然の公に順ふ。[75]

[62] 同上、7 頁。
[63] 韓立紅「石田梅岩と陸象山との認識論に関する比較」『國學院雑誌』107 巻 2 号、2006 年、37 頁。
[64] 同上、40 頁。
[65] 同上、41 頁。
[66]『上蔡語録』巻中、和刻影印思想初編 6、中文出版社、1985 年、52 頁。
[67] 溝口雄三「天人合一における中国的独自性」『日本思想体系 65 佐藤一斎　大塩中斎』岩波書店、1980 年、740 頁。
[68] 同上、741 頁。
[69] 近藤康信『新釈漢文大系 13 伝習録』明治書院、1959 年、360-361 頁。
[70]『雙江聶先生文集』巻之十四巻、聶豹(明)撰、雲丘書院蔵、明嘉靖間刻本、56 頁。
[71] 前掲、溝口雄三(1980)、746 頁。
[72] 公田連太郎『呻吟語』明徳出版社、1956 年、503 頁。
[73] 前掲、溝口雄三(1980)、746-748 頁。
[74] 同上、742 頁。
[75] 前掲、公田連太郎(1956)、763-764 頁。(註)に、軌物は「法度をいふ」、矯拂は「人の情をため、人の意にたがふ」とある。

梅岩は人の呼吸は陰陽であり、「天地ノ性善ト一致ナル」としているから、宋学における、人が天へ帰一する天人合一、そして、陽明門下の万物一体観とに近接する。そして、梅岩は「小天地ゆへ本私欲なきもの」としているから、明末の人欲を包摂する天とは近接しない。

万物一体について、熊沢蕃山は「宋明の書、周子・程子・朱子・王子などの註解発明の、日本に渡り、人の見候事は、わづかに五六十年ばかりなり。しかれども、市井の中にとどまりて士の学とならず。十年このかた、武士の中にも、志ある人はしばし見え候間、後世には好人余多出来候べし」[76]として、次のようにいう。

> 来書略。万物一体といひ、草木国土悉皆成仏と云ときは、同じ道理の様に聞え候。
> 返書略。万物一体とは、天地万物みな太虚の一気より生じたものなるゆへに、仁者は、一草一木をも、其時なく其理なくてはきらず候。況や飛潜動走のものをや。草木にても、つよき日でりなどに、しぼむを見ては、我心もしほるるごとし。雨露のめぐみを得て青やかさにさかへぬるを見ては、我心もよろこばし。是一体のしるしなり。しかれども、人は天地の徳・万物の霊といひて、すぐれたる所あり。たとへば、庭前の梅の根の土中にかくれたるは太虚のごとく、一本の木は天地のごとく、枝は国々のごとく、葉は万物のごとく、花実は人のごとし。葉も花実も一本の木より生ずといへ共、葉には全体の木の用なし。数有て朽ぬるばかりなり。花実はすこしきなりといへども、一本の木の全体を備へし故、地には植ぬれば又大木となりぬ。かくのごとく、万物も同じく太虚の一気より生ずといへども、太虚天地の全体を備ることなし。人は其形すこしきなれ共、太虚の全体ある故に、人の性にのみ明徳の尊号あり。故に、人は小体の天にして、天は大体の人といへり。人の一身を天地に合せて、少しもたがふ事なし。呼吸の息は運行に合す。[77]

人は小体の天であり、天は大体の人という。人の一身を天地に合せて、少しもたがうことがない、という、この万物一体観に、梅岩の「人は一箇の小天地」は近接しているように思う。そして、ここには万物一体という陽明学におけるキー概念と、小体の天、呼吸の息は運行に合す、という梅岩の思想におけるキー概念の双方を見出すことが出来る。

2-3　「継者ハ善」と「自然ノ次第」

梅岩の世界認識論において、「継ぐものは善」という、継承連続の循環を善とする世界観がある。梅岩は『都鄙問答』の「性理問答の段」において、「継ぐものは善」という表現を繰り返し用いている。

> 孔子易一陰一陽之謂道継之者善也成之者性也トノ玉フ。[78]

孔子は『易経』で、「一陰一陽する之を道と謂ふ。之を継ぐ者は善なり、之を成す者は性なり」[79]という。

---

[76] 熊沢蕃山『集義和書』巻第一、後藤陽一・友枝龍太郎編『日本思想大系 30 熊沢蕃山』岩波書店、1971 年、13 頁。
[77] 同上、13-14 頁。
[78] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 4 頁。
[79] 「一陰一陽して、交互に往来流行して変化の窮まらないはたらき、これを易の理、即ち天地の道という。この道のはたらきを、よく継承して発展せしめるのが、人としての至純の善であり、更によく成就して完成するのが、人としての本然の性である。」今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一編『新釈漢文大系 63 易経下』明治書院、2018 年、1422 頁。

呼吸ハ天地ノ陰陽ニシテ。因テ汝ガ息ニハ非ズ。汝モ天地ノ陰陽ト一致ニナラザレバ。忽ニ死スルナリ。陰陽ノ外ニ汝ガ命ナキコト明白ナリ。吸息ハ陰ナリ吐息ハ陽ナリ。継之者ハ善ナリ。[80]

呼吸は天地の陰陽であり、おまえの息ではない。よっておまえも天地の陰陽と一致しなければ、たちまち死んでしまう。陰陽の外ではおまえの命はないことは明白だ。吸う息は陰である。吐く息は陽である。これを継ぐものは善である。

天地ハ見ヘタル通ニ清ト濁ト有テ天ハ清リ地ハ濁レリ。清ル天モ濁レル地モ。何方ヲ見レバトテ。物ヲ生ジ育フベキトモ不見。無心ナレドモ萬物生々シテ古今違ハズ。其生々ヲ継物ヲ善ト云。[81]

天地は見てのとおり清と濁があって、天は澄み、地は濁っている。澄んだ天も濁った地も、どちらを見ても物を生み育むようには見えない。(欲心のない)無心だが、万物は生々して古今違いはない。その、生々を継ぐものを善という。

このようにして、梅岩は、陰陽、天地の陰陽としての呼吸、清濁という、いずれも対概念の循環運動を継続することが、善きことであるとしている。そして、この継承連続を善とする世界認識は、梅岩の思想全般に通底しており、先に参照した天人合一の世界認識に統合される。

天地ヲ人ノ上ニテイハバ。心ハ虚ニシテ天ナリ形ハフサガツテ地ナリ。呼吸ハ陰陽ナリ。コレヲ継者ハ善ナリ。用ヲ為所ヲ主ル體ハ性ナリ。是ヲ以テ見ヨ。人ハ全體一箇ノ小天地ナリ。我モ一箇ノ天地ト知ラバ何ニ不足ノ有ベキヤ。[82]

梅岩の思想にみる、「人ハ全體一箇ノ小天地ナリ」、「生々ヲ継グモノヲ善ト云」は、儒教的世界観との本質的な親和性をもつ。儒教の根本理念は、「全存在世界は永遠不変の宇宙的理法に従って存立し、機能しており、そういう意味での『聖なる空間』、秩序体である」[83]という。梅岩の思想における、天地人によって構成される儒教的世界観の原典は、『易経』であり、梅岩はその著者が孔子であると解釈し、絶対視した。

聖人ノ心ハ天道ニ至リ玉ヒ。天地アラン限リハ在シ玉フ。聖人没シ玉フニ心バカリ残レルコト。如

[80] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 4 頁。
[81] 同上、7 頁。
[82] 同上、8 頁。
[83] 井筒俊彦は、諸々の東洋思想を、「コスモス」と「アンチコスモス」の立場に分類する。「東洋哲学の主流は、伝統的にアンチコスモスの立場を取って来た。『空』あるいは『無』を存在空間の原点に据えることによって、存在の秩序構造を根底から揺るがそうと、それはする。」という。大乗および小乗仏教、イスラム教、インド哲学は、その「アンチコスモス」の立場を取るという。しかし、「伝統的に儒教の精神は『徹底したコスモス肯定』であり、「ほとんどコスモス信仰といってもいいようなもの」だという。儒教の根本理念は、「全存在世界は永遠不変の宇宙的理法に従って存立し、機能しており、そういう意味での『聖なる空間』、秩序体である」という。「コスモス」とは、「天体宇宙」の意味で使われるが、井筒は近代宗教学における、「有意味的に秩序づけられた存在空間」と規定する。井筒はコスモスが存在秩序であることを、次のように説明する。「人間は錯綜する意味連関の網を織り出し(『エクリチュール』)、それを自分の存在テクストとして、その中に生存の場を見出す。無数の意味単位(いわゆるものとこと)が、一つの調和である、完結した全体の中に配置され構造的に組み込まれることによって成立する存在秩序、それを『コスモス』と呼ぶのである。コスモスの圏外に取り残された、まだ意味づけされていない、まだ秩序づけられていない、存在の領域が『カオス』である。」「コスモスとアンチコスモス」『井筒俊彦全集 9 巻』中央公論社、1992 年、264-266 頁。

何ト可思ガ。世ニ在ス時モ心ハ天道ナリ。[84]

聖人の〈心〉は天道に到達するものであり、天地がある限りは存在し続ける。聖人が亡くなっても、〈心〉だけが残るのは、どうしてなのかと思うかもしれぬが、この世に生きているときから、聖人の〈心〉は天道に一致している、と梅岩はいう。〈心〉は、天地がある限りは存在し、聖人である孔子の〈心〉は、天道に一致しているから永遠に残る、という梅岩の〈道〉と〈命〉は、天から与えられる天道や天命である。

そして、その天地は、永遠不変の宇宙的理法に従って存立し、機能している空間、秩序体であり、有意味的に秩序づけられた存在空間である。自分の存在が宇宙の一部であることを悟る「人ハ全體一箇ノ小天地ナリ」、人は欲心から、その宇宙から生み出されたときに授かった「形ニ由ノ心」、自分の職分を天命として理解し、全うする「天ノ命コレヲ性ト云。性ニ率ハ人ノ道ナリ」[85]、そして、「家」の永続を願って、正直と倹約を実践する「継グモノハ善」。こうしたキー概念を展開する梅岩の思想は儒教的世界観に立脚する思想であったということができる。

梅岩は天地人によって構成される世界について、次のようにいう。

易ノ畫八卦伏羲ヨリ始ル。彖ノ辞ハ周ニ至テ文王始テ繫玉フ。爻ノ辞ハ周公旦ニ始リ。傳ハ孔子天地人ヲ交テ釋玉フ。易ハ變易ニシテ古今不變モノハ理ナリ。理ヲ以テイヘバ天人一致ニシテ。今日ニ至リ人間畜類マデ。銘々継來ル者ハ理ナリ。其継グ者ヲ知リ得レバ。忽ニ疑ヒハ晴ル者ナリ。(中略)天地未闢ノ説、又天ハ子ニ闢クルノ説。是皆天地ハ自然ノ次第ナルコトヲ。知ラシメン為ナリト知ラルベシ。我性ヲ知テ萬事ノ説ヲ見バ。掌ヲ見ル如ク昭然トシテ疑ナカルベシ。[86]

天地人、すなわち、宇宙と世界と人によって構成されたこの世、天下において、天地自然の理による造化のはたらき、すなわち天道流行を繰り返すことを、「自然ノ次第」という。ここには、有意味的に秩序づけられた存在空間としての、儒教的宇宙論が語られる。この天地人に構成され、「自然ノ次第」において天道流行を繰り返す儒教的宇宙論は、『都鄙問答』の冒頭において、『易経』からの引用と、それに続く梅岩の「天が与える楽しみ」として語られる。

大哉乾元萬物資始。乃統天。雲行雨施。品物流形。乾道變化各正性命也。天ノ與ル樂ハ。實面白キアリサマ哉。何ヲ以テカコレニ加ヘン。[87]

『易経』には、「なんと偉大なるかな、乾元のはたらきは。万物はこの乾元に気の初めを取る。元こそは天道を統領するものである。その気は蒸して雲となって天に行き、雨となって地に施して、百果草木はその形を現し流布するのである。天道は陰陽の変化に従って変化して、万物はそれぞれ天賦の性命を正しく実現し、一大調和を保って分散することがない。これが利貞の徳である」[88]とある。天が与える楽しみはなんと面白いものだろう。これ以上何を望むことがあるだろう。といって、梅岩は『都鄙問答』を書き出し、これを受けて、結びを次のように締めくくる。

[84] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 18 頁。
[85] 同上、21 頁。『中庸』(第一段第一節)からの引用。
[86] 同上、巻之四 29−30 頁。
[87] 同上、巻之一 1 頁。
[88] 今井宇三郎『新釈漢文大系 23 易経上』明治書院、1987 年、103 頁。

聖學天下遍カラン。此故ニ博學豪傑ノ士。性理明ナル者アランコトヲ幾フ　汝モ一理ヲ明シ得ナラバ其時ニコソ神聖生其中國常立尊ト號トノ玉フコト知覺シ。天ノ與ル樂ヲ得テ。實ノ道ニ入ラルベシ。[89]

聖人の学問はまきおこり天下に広まるだろう。それゆえ、博学豪傑の者たちから、〈性〉〈理〉に明らかな者が現れることを切望する。おまえもただひとつの〈理〉を明らかにすることができれば、そのときにこそ、その中に神が生まれクニタチノミコトといわれた、ということの意味を理解し、天が与える楽しみを得て、まことの道に入るであろう。

このように、梅岩は『都鄙問答』の冒頭において、『易経』の天が与える継承連続の循環を善とする世界観を参照し、結びにおいては、その継承連続の〈性〉〈理〉を理解する後継者を希求した。

2-4　梅岩思想の神儒仏と、陽明学左派の三教一致

道教と仏教の排撃、異端と正統との厳正な弁別、が宋学の出発点だった[90]。この立場とは異なり、梅岩は〈心〉を磨く砥種となるのであれば、神儒仏、どれでも援用すればいいのであり、どれか一つに拘るべきではない、という。儒教が仏教を異端として嫌う理由を問われた梅岩は次のように答えている。

異端トハ端ヲ異ストイフコトナリ。儒ニハ仁義禮智信ノ五常。君臣父子夫婦兄弟朋友ノ五倫トヲ天ノ道トシ天人一致トス。佛家ニハ五常五倫ノ道ヲ不立。此儒ト歸ヲ不同。因テ異端ト云。假令儒者ニテ儒經ヲ説トモ我心ヲ不知。聖人ノ心不通我私心ヲ以テ教ヲ立レバ。私心ハ直ニ異端ナリ。然レドモ聖人ノ弟子ニ似タレバ押出シ異端トハイハズ。不言トモ異端ノ方ニ近キ者ナリ。時節至テ心ヲ知レバ。我儒ト一致トナル。扨儒佛ノ二道ヲ枝葉ニカカリ論ゼバ事多クシテ分レ難シ。互ニ根本ノ所ハ性理ヲ會得スルヲ要トス。(中略)扨儒佛共ニ理ノ所ハ近フシテ分レガタシ。又行ヒノ上ハ見ヘタル通リニ雲泥ノ違アリ。出家ハ五戒ヲ有。俗ハ五倫ノ道ヲ行フ。是又マギルルコトハナシ。[91]

異端とはいとぐちが異なることであり、儒教には仁義礼知信の五常と、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の五倫とを、天の道として、天と人とが一致する。仏教では五常五倫の道を説かずに、儒教と趣が異なるから、異端だという。儒者が儒教の経典を説いても、自分の心を理解していなければ、聖人の心に通じることはないし、自分の私心において教えを立てるのであれば、むしろ、その私心こそが異端である、という梅岩の立場は、仏教を異端として排斥する朱子学の立場と異なっている。〈心〉を理解する、性理を会得することは、儒仏いずれもが最も重要だとしている。しかし、仏教における殺生、偸盗、邪淫、妄語、飲酒の禁ずる五戒と、儒教の五倫の道では、雲泥の差がある。〈行〉すなわち実践を強調する梅岩は、これが紛れることはないとして、その峻別には決然とする。そのうえで、儒教、仏教、神道であっても悟る〈心〉はおなじもの、として、三教一致の立場をとる。

「〈心〉を得るためには、仏教を用いるのが然るべきだと仰るが、私は儒教を学んでいるのだから、儒教によって〈心〉を知りたい。仏教を除くということはできないものか。」という問いに、梅岩は以下のように答える。

[89] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之四 32-33 頁。
[90] 島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、1967 年、153 頁。
[91] 前掲、石田梅岩(1739)、巻之三 17-19 頁。

我心ヲ得レバ儒佛ノ名ヲ離レタルモノナリ。譬バ此ニ一人ノ鏡磨者アラン。上手ナラバ鏡ヲ磨ニ可遣。磨種ニナイヲ用ユト可問ヤ。儒佛ノ法ヲ用ユルモ如斯。我心ヲ琢磨種ナリ。琢テ後ニ磨種ニ泥コソヲカシケレ假令儒家ニテ學ブトイフトモ。學ビ得ザレバ益ナシ。佛家ヲ學ブトモ。我心ヲ正ク得ルナラバ善カルベシ心ニ二ツノ替アランヤ。佛家ニ習バ。心ガ外ニ替ル者ト思フ者ハ笑フニモ又絶タリ。佛家モ最初ハ儒學ヨリ入僧多シ。儒書ガ妨ニナリテ。佛意ヲ得ルコト成難キコトヲ聞ズ儒者モ其如クニ佛法ヲ以テ心ノ磨種ニシテ。心ヲ得テ。何ゾ儒家ノ妨トナルベキヤ。既ニ佛氏儒者ノ方ニテ發明シテモ用ユル所ハ佛法ニ用ユルナリ。又經論ニ因テ見レバ佛ハ覺ナリ。覺ハ一切衆生ノ迷ヒ解ルナリトアリ。迷ヒ解レバ本ニ歸ルユヘニ。三界唯一心ト云。迷ヒノ解タル體ヲ名付テ佛性ト云。佛性ト云ハ天地人ノ體ナリ。至極ノ所ハ性ヲ知ル外ニ佛法アランヤ。佛ヨリ二十八世。達磨大師見性成佛ト説リ。又儒ニハ道ノ大原ハ天ニ出。依テ天ノ命コレヲ性ト云。性ニ率ハ人ノ道ナリト説玉フ。性ト云モ天地ノ體ナリ。神儒佛トモニ悟ル心ハ一ナリ。何レノ法ニテ得ルトモ。皆我心ヲ得ルナリ。[92]

中国禅宗の祖、達磨大師の見性成仏と、儒教における天命、性に従い行う道を、同質なものと解釈し、神道、儒教、仏教ともに、自分の〈心〉を悟る点で同じだとして、三教一致の立場を、梅岩は明確に説いている。これは「良知コソ三教ノ霊柩」として、儒仏道の三教一致を主張した陽明学左派の立場に近接する。

宋学の定型性を拒否して成立した陽明学は、陽明没後すぐに後継者の信ずる処に従って多様に展開し、明代思想を豊饒なものにした[93]。士大夫、読書人として伝統的な「矩」をこえない良知帰寂派(右派)は「至善を心の本体」とし、宋学への回帰を志向した。陽明の正統を継承する良知修証派(中道派)は「無冉無悪と至善の一体化」を説いた。そして、「無冉無悪を根本」とする良知現成派(左派)は、明代思想の主流となり、奔流の如き活力をもって良知心学を先鋭化した。中道、右派は左派の暴走を抑制する側に回り、特に右派は宋学への回帰を孕むものであったから、本流とはなり得なかった[94]。

陽明は、「大抵二氏の学は、其の妙聖人と只だ毫釐の間有り」[95]という。大体道・仏の二家の学問は、その深遠な点においては、聖人の学問と隔たることごく僅かである、と説いた。王心斎(1483−1541)とともに陽明学左派を率いた王龍渓(1498−1583)は、『三山麓澤録』において「(老荘の学は)もとより吾が儒の宗派」と説き、儒仏道の「三教帰儒」、三教一致を主張した。他方、陽明学右派はこの三教一致を批判する。たとえば、佐藤一斎(1772−1859)は朱子学と陽明学とは帰一するとの立場から、個人としては陽明学を奉じながらも、幕府儒官として昌平黌等の公的な場所では専ら宋学に準じた思想家教育家である[96]。

世に、一種の心学と称するものあり、女子・小人においては、寸益なきしも非ず。然るに、要するに郷愿の類を為すのみ。士君子、これを学べば、則ち流俗に汨み、義気を失ふ、尤も武弁の宜しきとする所に非ず。人主、誤ってこれを用ふれば、士気をして怯懦ならしめん。殆ど不可なり。

明季、林兆恩は三教を合して一と為す。蓋し心斎・竜渓を学びて失せしものなり。この間、一種の

[92] 同上、21−22 頁。
[93] 荻生茂博『近代・アジア・陽明学』ぺりかん社、2008 年、200 頁。
[94] 同上。
[95] 前掲、近藤康信(1959)、192 頁。
[96] 前掲、荻生茂博(2008)、146 頁。

心学の、愚夫愚婦を誘ふものと相類す。要するに歯牙に足らざるのみ。
王竜渓は、余姚晩年の弟子たり。教を受くるの日浅く、その説は高妙に過ぎ、遂に陽儒陰釈の謗を来せり。猶ほ宋代に楊慈湖ありて、累を金渓に貽ぼすと同一類なり。その他門人の、鄒東廓、欧陽南野、聶双江の如きは、並に彬彬たる有用の人物たり。宜しく混看することなかるべし。[97]

一斎は、三教一致を議論するに及ばないものと一蹴した。そして、王陽明に学んだ日が浅く、儒教を学びながらその実は仏教を学んでいたというべき王竜渓、また王心斎に連なる左派の教学は、女子や小人が学ぶ似非学問であり、石門心学が民衆を誘導するのと同類だとして切り捨てる。朱子学への回帰を志向する右派は、三教一致を否定し、また、その非難の対象となった梅岩の教学と、王学左派における三教一致の方向性が近似するものと捉えていたことが分かる。

おわりに

梅岩の教学とは、梅岩独自の〈心〉の思想と、〈行〉の実践倫理、という二つの側面を持つ「実学」だった。その梅岩独自の〈心〉の思想を、心性論と世界認識論に腑分けして、宋明心学における思想概念との近接を検証することを試みた。

梅岩は、『都鄙問答』の「或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段」において、商人が正直を実行せず、邪なことをするのは、「主人ノ思ヒ寄ナキ悪ヲ迎へ。主人ニ甘キ毒ヲ喰テ家ヲ絶ス者ニ同ジ」[98]だという。また、「子孫ノ亾ビ往コトヲ知ラザル者多シ」[99]、「可愛子孫ノ絶へ亾ルコトヲ知ラザルハ哀キコトニアラズヤ」[100]といって、家業が絶えること、子孫が絶えることは避けるべきことだと説いたから、日常生活の実践道徳の先にあるものは「家」の永続であった。尾藤正英は、梅岩の教学を通じて儒教思想が広く普及した要因のひとつとして、聴講者としての民衆の側の精神的な要請があったことを指摘する[101]。そして、そのような積極的な精神態度に支えられてこそ、宗教を含めての、この時代の諸分野における平等性や普遍性が実現されていたと考えられ、そうした平等性の意識を支える条件としての社会的基盤が「家」の一般的形成だとしている[102]。

梅岩における、天地との一体感を得る〈心〉とは、天から与えられた「職分」、「社会的使命」であった。〈行〉の実践倫理とは、「職分」を実践し、和合し、「家」の永続を可能にする。〈心〉の思想と、〈行〉の実践倫理による両義性をもつ柔軟な儒教的世界観に支えられた梅岩の「心学」は、貨幣経済が発達するなか、どう生きるべきかの指針を示されていなかった町人、そして身分を超えた人々の心を捉えたのだろう。近世の民衆社会には「天地ハ自然ノ次第ナル」、儒教的世界観を受容する素地があったとすれば、この世界観に基づく、倹約、正直、和合、孝行などの徳目は、町人にとって親しみやすい実践倫理であり、当時を生きる彼らにとっての切実な課題であった「家」の永続を実現する、卑近な「実学」だったといえる。

---

97 相良亨・溝口雄三編『日本思想体系 46 佐藤一斎、大塩中斎』岩波書店、1980 年、119−120 頁。
98 前掲、石田梅岩(1739)、巻之二 29 頁。
99 同上、32 頁。
100 同上。
101 前掲、尾藤正英(1992)、118 頁。
102 同上、118−119 頁。「近世の社会が、武士も町民も農民も、それぞれに「家」を単位として構成されていたことは、周知の事実であるが、そのような社会的状況は、さきに述べた 14 世紀から 16 世紀のころにわたる社会変動の時期を通じて、はじめて実現されたものであったと考えられる。それ以前には、貴族や上層の武士など、特権ある社会階層においては、既に早くから「家」の形成がみられたが、一般の庶民までが、何らかの家業や家産(「家」の財産)を持つことにより、生活の拠点としての「家」を形成するようになったのは、それほど古い時代のことではないと思われる。」

梅岩は、晩年に著した『斉家論』において、次のようにいった。

> 倹約をいふは他の儀にあらず、生まれながらの正直にかへし度為なり。天より生民を降すなれば、万民はことごとく天の子なり。故に人は一箇の小天地なり。小天地ゆへ本私欲なきもの也。このゆへに我物は我物、人の物は人の物。貸たる物はうけとり、借たる物は返し、毛すじほども私なく、ありべかかりにするは正直なる所也。此正直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし。我願ふ所は、人々ここに至らしめんため也。[103]

人間は天地の子であるから、人は一箇の小天地なのであり、私欲なるものはないはずだという。私欲がないということは、生まれながらに正直だということであり、それを体現実行することが、ほかならぬ倹約であるという。梅岩における、正直と倹約とは、継承連続の循環としての自然法則に従うことであった。これを実践すれば、世間はみな和合し、仲良く暮らしていけるのであって、人々をそのような境地に導くことが、梅岩の願いだった。

倹約、正直、和合、孝行などの徳目は、「通俗道徳」としてその後の日本社会に引き継がれているとみることができる。梅岩が儒教的価値観を自らの思想の軸となる世界観として構築し、そのなかで強調した「天人合一」や「継ぐものは善」も、「社会的通念」として継承されたと、捉えることができるだろう。例えば、明和 3 年(1767)に談義本作家の伊藤単朴は、子孫代々の「家」の永続を願い、教訓書『不断用心記』を刊行している。その内容は「地域共同体における生活の仕方から、災害時の教訓、日常生活の工夫と極めて実際的」[104]である。

> 世の中に、己が身の欲より、先祖の千苦万苦して、取立たる家を失い、妻子を流浪させ、終に己が身もたもたず、甚だしきは、屍をだに埋隠さざるようの人、かずかず有、あはれ古人のおしへにしたがひ、慎まもらば、などか身を亡す迄には至べき、皆これ我を賢ちのみ思ひ、先祖の法をいやしめ、嘲り、奢ほしゐままにする故なり、我後たらん者、かならずしも、分際に過ぎたる事なるらんやうにと、昼夜こころを付、我身すこしも奢、気侭なる行跡や有と、したしき友にも、時々尋とふ程にすべし、左もなくては、覚をしらず、奢に成行もの也、かへすかへす我身の癖事を、あからさまに告、はづかしむる、真実なる友をほしき物也、しかれども是は金銀より求得がたし、若さようの友あらば、大切にして親しく厚く敬ひ、久敷付合やうにすべし。[105]

自分の欲心から、家を没落させるのは、先祖のしきたりに従わずに立場をこえた贅沢するからだ。求むべきは自分の癖事をずけずけと指摘する友であるが、これは金銀よりも得難い。もしそのような友がいるのなら、大切にして長く付き合うべきだ。といい、「家」の永続のための卓越した教訓を残している。

また、幕末の心学者、磯間良甫[106]による教訓書『国恩教諭実能名留樹』[107]には、「天人合一」と「継

---

[103] 柴田実『日本思想体系 42 石門心学』岩波書店、1971 年、27−28 頁。
[104] 横山學編『江戸時代女性文庫 63』大空社、1997 年、解題 6 頁。
[105] 伊藤単朴『不断用心記』巻の下、東都書院、1767 年、14−16 頁。
[106] 寛政 3 年(1791)に武蔵国多摩郡小比企村(現在の東京都八王子市)に生まれる。「小比企村では磯間良甫という心学者が生まれた。磯間は後年江戸で医者となる」(八王子市史編集委員会『新八王子市史　通史編・近世』2017 年、456 頁)。
[107] 「『節倹』、『和合』、『忠恕』、『公私』について説く内容で武州通機堂から刊行された。『公私』について述べた部分では、褒美がなくとも怠ることなく人に敬い仕えることは、天道に仕えることと心得て、できるかぎりの誠意を尽くせば、信頼を守ることができると記されている。この一文は、新渡戸稲造の著作『修養』の中で引用されたことでも知

グモノハ善」が、受け継がれ、それに加えて、無益な殺生はしないこと、穀物の一粒一粒を大切にすること、資源を無駄にしないことが説かれている。

> 凡そ人間吾れひとなく、天地の間に生物するは、天地の間に生物するは、陰陽比和の恵を受けざる者なく、万物乾坤に生じ、普天の下、卒土の浜天光地育にあらざるはなし。
> 鳥獣魚虫草木といえども皆これ天地同一体の生物、有情、非情、賢愚の差別あれども、倶に一器中に並生なり。かるがゆへに無益の殺生をすまじきものなり。
> 殊更に五穀は人命を補助し、上下となく生涯を保養す。故に一粒一粒も粗略にすべからず。人は万物の長、天地の霊にして、活物の冠たり。故に万の得失を知つて用捨の理をわきまえ日用を達す。一木一草の塵芥たりとも心を用い、成るべき用にたて、草木の藁屑も無益に捨てず竈に焚きていささかの用に足るもその功を全うしなば、その物の本懐なるべし。如斯するは是天地同一体の物を空にせず、国土の費をなからしむるは、天地に対する信冥理とおもえばなり。[108]

梅岩が町人に向けて編み出した実学は、宋明心学の〈心〉〈性〉をキー概念として援用しつつも、神道の天地開闢説と仏教の禅的開悟を包摂した実践を重視した。宋学における、〈心〉を未発の〈性〉と已発の〈情〉を援用し、〈行〉を重視する方向性は知行合一を説く陽明学と軌を一にする。同時に、梅岩は三教一致として、「天地開闢」説の根拠として神道を、禅的開悟の理論的根拠として仏教を併用した。そもそも、日本における神道、儒教、仏教は、歴史的にそれぞれが互いに影響を及ぼしあい三教を厳密に区別することは困難であり、中国における儒教、仏教、道教の三教も同様だ。しかし、多くの場合、宗教またはその宗派においては、原則的に自らの立場の正統性を主張し、それ以外を異端として排除する傾向が強く、儒者や道士は外来の宗教である仏教を敵対視するのが一般的だった。朱熹は禅仏教を学んだが、後に仏教を批判し、定型性を重視したその門弟たちは、禅仏教を併用する陽明学派を異端として論難した。梅岩の教学は、異端という概念を否定し、王陽明と後の良知現成、左派が共有した三教一致と同様の立場をとった。そして、〈心〉と〈行〉を強調する点においても、梅岩は知行合一を唱えた陽明学左派と軌を一にする。さらに、梅岩が宋学を含む儒教が重視した書物の素読による学問よりも、講義と門人との対話による「講学」を重視したことも、陽明学の特徴に近接する。

「心学」という呼び名は、近世の初頭から台頭し、次第に広まったとされている[109]。元禄二年に『藤樹蕃山心学文集』が出版され、山鹿素行と伊藤東涯は陽明学を「心学」といい、太宰春台と山縣周南は朱子学を「心学」といった[110]。心学という名称は、江戸時代の思想界において、異常な魅力を以て寵児であり、「学は畢竟心学であらねばならぬという信念もまた、名称も普及と共に普及していた」[111]という。朱子学または、陽明学を指す「心学」と区別するために、石田梅岩門流の心学として「石門心学」が使われたのであり、この「石門心学」は、手島堵庵(1718-1786)が〈性〉を「本心」と読み替えてから

られ、広く一般に用いられた著作であった可能性が高い」(同書、456 頁)。そして、新渡戸が引用した原文は、『国恩教諭実能名留樹』における、「上につかうる身はその役を守り、たとい我に仰せはなくとも、その上のためになるべきことは是れをつとめ賞なしと怠らざるは上を敬い仕うるの礼なり。これは人にのみ仕うるにあらず。我が天道に仕うる冥理と心得、なるたけの実意を尽くすは信を守るの至りなるべし」(磯沼昭男編『国恩教諭実能名留樹』地域文化研究会、1954 年、40 頁)。

[108] 同上、49 頁。

[109] 前掲、石川健(1938)、24 頁。

[110] 同上、33 頁。

[111] 同上。

後に、使われた呼び名とされている[112]。

> 我が師、都鄙問答に孟子尽心者知性の説に従ひ用ゆる事をいへり。知本心は則知性と同じ。性は理にして諭しがたし。故に知本心と説のみ。中庸は性によって説き、大学は心によって説く。心は体用をかねて説くゆへ、人達するにちかし。[113]

> 本心を知るは外の事にあらず。此無我無知の本体を知る事なり。[114]

> 本心を知れば我なし、我なければ天地万物を吾とす。[115]

> 我が師弟子に示すに此養育を肝要とせり。養育とは所謂省察・存養也。[116]

「本心を知る」というのは、「性を知る」と同じことだ。性は理であるからこれを諭すのは難しく、「本心を知る」と説く。『中庸』は性によって説き、『大学』は心によって説く。心は体用を兼ねて説くから、人はこれに到達しやすい。本心を知るとは、自分の欲心を超越することであり、自分が天地万物の一部であることを理解することだ。我が師は弟子たちに省察と存養が肝要であることを説いた、と堵庵はいう。省察とは心の発動態において自らをかえりみることであり、尊養は心の未発態において自らの本性、精神を養うことであって、堵庵も「心は性情を具する」とする宋学における、未発と已発の対概念を継承した。

梅岩の遺志を継いだ門弟たちは、人々に「語る」ことでその教学を全国規模に布教することに成功した。中沢道二(1725-1803)は、梅岩の教学を分かり易く説く「道話」を各地の講席に出向いて語った。「道話」において、梅岩の天人合一、三教一致そして、自然の次第、が引き継がれた。

> 近思録、「夫天地之常、其心普万物而以無心也」ト。天地の常とは、即ち道の事でござります。天の心といふは、一切万物、人間・禽獣・草木に至るまで、皆天の心なるゆへ、夜が明けるとちうちうかうかう、梅の木に梅の花が咲き、柿の木に柿の出来るも、皆天の功用じや。けれど天は目に見えぬ、影形もなく無心なれど、平等一枚、万物に普くして、此やうにうごき詰じやによって、一切万物の造化するは、悉く天の働き、天と万物と一躰なるゆへ、釈迦如来も孔子様も、千石万石の殿様も、賤しい銘々どもも、蚤も鯨も、犬も猫も、雁も鴨も、皆天の生じた土じゃ。(中略)去によって人は一固の小天地、天地の外に道はない。人は天を心として、形は土じゃ。[117]

近世日本の思想状況において、宋明「心学」は、苗床または母胎ともいうべきものであったといえる。東アジア「心学」の一形態である梅岩の教学は、町人層のみならず、農民層、支配層へと広く普及していった。ゆえに、一般民衆レベルといえる幅広い社会の階層において、その思想と実践道徳が、宋明「心学」を経由した日本的「心学」によって基礎づけられたと捉えることが出来る。

---

[112] 同上、35 頁
[113] 手島堵庵『知心弁疑』前掲、柴田実(1971)、131 頁。
[114] 同上、136 頁。
[115] 同上、137 頁。
[116] 同上。
[117] 同上、210-211 頁

人間の精神活動の根本であり、知、情、意の本体となる、梅岩の〈心〉とは、「本質」、「芯」、「重心」、さらに、「本質を捉え直感するはたらき、平衡感覚」であった。梅岩の思想には、「天地が万物を生み出し、人間もまたその天地に生み出される存在である」という、継承連続を善きものとする儒教的価値観を基盤とした世界観がその中心にある。梅岩における、人の〈心〉とは、「天地から生み出された際に授かった本来の性質」であり、「欲心」が含まれる。そして、〈性〉とは「人を含む万物が、天地から授かった本来の性質」であり、「欲心」は含まれず「無心」であって、「生々を継ぐ善なる」ものであった。

梅岩の思想は、宋明の「心学」から包摂した、継承連続を善とする世界観を思想的基盤に据え、それまで正しい身分として認識されていなかった商人、町人の社会的意義を認知させる役割を果たした、近世日本における「心学」であったといえる。

船戸雅也(ふなと まさや、Masaya FUNATO)
東京外国語大学大学院 博士後期課程

<参考文献>

石川謙『石門心学史の研究』岩波書店、1938 年
石田梅岩『都鄙問答』平安書林、1788 年
磯沼昭男編『国恩教諭実能名留樹』地域文化研究会、1954 年
井筒俊彦「コスモスとアンチコスモス」『井筒俊彦全集』9 巻、中央公論社、1992 年
Izutsu Toshihiko, The Structure of Oriental Philosophy, Vol, 1. Keio University, 2008
今井淳・山本眞功編『石門心学の思想』ぺりかん社、2006 年
今井宇三郎『新釈漢文大系 23 易経上』明治書院、1987 年
今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一編『新釈漢文大系 63 易経下』明治書院、2018 年
市川安司『新釈漢文大系 37 近思録』明治書院、1975 年
内野熊一郎『新釈漢文大系 4 孟子』明治書院、1962 年
大川周明『平民の教師　石田梅岩』社会教育研究所、1924 年
小高敏郎・清水茂編『日本古典文学大系 97　近世思想家文集』岩波書店、1966 年
荻生茂博『近代・アジア・陽明学』ぺりかん社、2008 年
片岡龍・金泰昌編『公共する人間 2　石田梅岩』東京大学出版会、2011 年
加藤周一編『日本の名著 18 富永仲基・石田梅岩』中央公論社、1972 年
公田連太郎『呻吟語』明徳出版社、1956 年
後藤陽一『日本思想大系 30 熊沢番山』岩波書店、1971 年
近藤康信『新釈漢文大系 13 伝習録』明治書院、1959 年
佐久間正「石田梅岩の思想」『季刊日本思想史』65 号、2004 年
相良亨・溝口雄三編『日本思想大系 66 佐藤一斎　大塩中斎』岩波書店、1980 年
柴田実『石田梅岩全集』清文堂、1956 年
柴田実『日本思想大系 42　石門心学』岩波書店、1971 年
島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、1967 年
鈴木由次郎『四書集註』明徳出版社、1974 年

田尻祐一郎『江戸の思想史』中公新書、2011 年
竹中靖一『石門心学の経済思想』ミネルヴァ書房、1962 年
玉懸博之『日本近世思想史研究』ぺりかん社、2008 年
テツオナジタ『懐徳堂』岩波書店、1992 年
八王子市史編集委員会『新八王子市史　通史編・近世』2017 年
林田明大『真説「陽明学」入門』三五館、1994 年
韓立紅「中国における石門心学思想研究の現状とその展望」『季刊日本思想史』65 号、2004 年
韓立紅「石田梅岩と陸象山の世界本体論及び心性思想」『國學院大學紀要』44 巻、2006 年
韓立紅「石田梅岩と陸象山との認識論に関する比較」『國學院雑誌』107 巻 2 号、2006 年
尾藤正英『江戸時代とはなにか』岩波書店、1992 年
古田紹欽・今井淳編『石田梅岩の思想』ぺりかん社、1979 年
安田二郎『中国近世思想研究』筑摩書房、1976 年
安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974 年
安丸良夫『文明化の経験』岩波書店、2007 年
横山學編『江戸時代女性文庫 63』大空社、1997 年

日本語・英語・中国語双方向学習者コーパスにみられる
テンス・アスペクトの習得

Acquisition of Tense and Aspect in Cross-Referential Learners' Corpora of English, Chinese and Japanese

望月圭子・申亜敏・小柳昇

This paper focuses on L1 transfer in the acquisition of tense and aspect by Japanese and Chinese learners in the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS) and TUFS International Learners' Corpora of English, Chinese and Japanese.

First, we introduce the benefit of using Cross-Referential Learners' Corpora of English, Chinese and Japanese to reveal various types of L1 transfer. For example, L1 Japanese and L1 English learners of Chinese show a difference in the acquisition of the Chinese determiner "One + Classifier + Noun Phrase" which is obligatory in a telic sentence. L1 English learners acquire "One + Classifier + Noun Phrase" correctly while L1 Japanese advanced learners show difficulty in acquiring the determiner usage of "One + Classifier + Noun Phrase". We suggest that the linguistic cognitive typology in L1 affects the second language acquisition of the aspectual system in the target language; both English and Chinese are "Bounded"- oriented languages while Japanese is an "Unbounded" type language in terms of aspectual boundedness.

Second, we compare Chinese/English L1 learners' story-telling in I-JAS with the same story-telling by Japanese native speakers in I-JAS. Our findings are that Chinese/English L1 learners have difficulty acquiring both the durative "-te iru" form and conjunction forms in complex sentences. In addition, Chinese/English L1 learners have difficulty acquiring "-te shimau", a sentence-final modal expression for an unfortunate situation. We assume that these expressions are of high difficulty by analyzing the same story-telling task written in Chinese and English; nether Chinese nor English have these expressions.

【キーワード】アスペクトの第二言語習得、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)、
日本語・中国語・英語双方向学習者誤用コーパス、
複文におけるテンス・アスペクトの習得、
学習者の母語と日本語習得における母語転移
Second Language Acquisition of Tense and Aspect, International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS), Cross-Referential Learners' Corpora of English / Chinese/ Japanese, Linguistic Typology and L1 transfer, Acquisition of Tense, Aspect and Modality in Japanese complex sentences

1. 学習者コーパスと第二言語習得研究

2020 年 3 月 25 日『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(International Corpus of Japanese as a Second Language；以下 I-JAS と略称)が完成し、一般公開された。http://lsaj.ninjal.ac.jp/

I-JAS では、日本を含む 20 の国と地域で、異なる 12 言語を母語とする日本語学習者 1000 人の話し言葉および書き言葉が公開され、日本語のレベル別、母語別、技能別、学習環境別にデータの比較が可能である。さらに、日本語母語話者が同じタスクを行った日本語データも収録され、日本語母語話者と学習者の産出がどのように異なるかをも調査分析することが可能で、非常に画期的である。

本稿の目的は、日本語学習者コーパス・中国語学習者コーパス・英語学習者コーパスにおいて、異なる言語を母語とする学習者の産出を比較することによって、学習者の母語の相違が、第二言語習得にどのように影響しているかを論考することにある。なかでも、アスペクト表現の習得は、日本語のみならず、中国語の第二言語習得のなかでも、最も難易度が高い文法項目である。また、失語症患者による母語の言語回復においても、アスペクト表現の回復は最も遅く、難易度が高いということである [1]。そこで、本稿では、主に日本語・中国語のアスペクト表現の第二言語習得に焦点をあてて、考察することにする。

本稿で研究対象とする学習者コーパスは、I-JAS 以外に、東京外国語大学国際日本研究センターにおいて公開されている、以下のような誤用タグ付き日本語・英語・中国語学習者コーパスである。

(1) 東京外国語大学国際日本研究センター「日本語・英語・中国語学習者コーパス・誤用検索」システム　http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus/

この三言語(日本語・英語・中国語)の誤用タグ付き学習者コーパスは、東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門「日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究」(2010-2012)[2] 及び「日本語学習者の母語 ・ 地域性をふまえた 日本語教育研究とウェブ辞典構築―国内外の日本語教育研究機関との協働的研究―」(2013-2015)[3]プロジェクトにおいて、海外の大学との連携で、構築・研究が進められ、論文を収録した報告集として公開されている。また、この誤用タグ付き学習者コーパスは、科学研究費基盤研究 B(25284101)「英日中国語ウェブ誤用コーパス構築と母語をふまえた英語・日本語・中国語教授法開発(2013 年度-2015 年度)」の研究としても構築された。

(1)の学習者コーパスは、以下の(2) (3) (4)の三種類の学習者コーパスからなる。作文の内容は、大学の授業の課題作文等、統制されていない作文も収録されているが、主に、本稿の付録に収録されている統一翻訳課題「上海留学の思い出」(日本語・中国語・英語版)[4]に基づく学習者コーパスが収録されている。また、母語・学習歴・検定試験の点数等の学習者情報も付されている。

(2) 東京外国語大学「日本語学習者作文コーパス及び誤用辞典」
http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus_ja/

英国リーズ大学・北京大学・上海外国語大学・国際教養大学と連携した、各大学の英語・中国語母語日本語学習者による日本語学習者コーパス。129 作文が、本稿の第三著者小柳昇により、添削情報・誤

[1] 玉岡賀津雄教授の研究報告(2019 年 5 月 18 日「学習者コーパス研究会」東京工業大学キャンパス イノベーションセンター)及び言語聴覚士関恵子博士(元神戸大学教授)からの個人的談話による。
[2] 研究成果論文を収録した報告集が以下のサイトで公開されている。
http://www.tufs.ac.jp/icjs/images/publications/project_001.pdf
[3] 研究成果論文を収録した報告集が以下のサイトで公開されている。
http://www.tufs.ac.jp/icjs/images/publications/project_002.pdf
[4] 一般公開する学習者コーパスのため、著作権の関係で筆者が執筆し、研究チームの日本語・英語・中国語の三言語使用者が日本語から英語・中国語に翻訳した。

用タグが付されて、収録されている。主に北京大学の第二外国語としての日本語履修者・上海外国語大学の日本専攻の学生が、辞書を使用して [5]、中国語から日本語へ翻訳した学習者データが収録されている。

(3) 東京外国語大学「英語学習者作文コーパス及び誤用辞典」
http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus_eng/index.php

日本語母語話者及び中国語母語話者による英語学習者コーパス。284 作文が、学習者情報・添削情報・誤用タグ付きで収録されている。日本語母語話者英語学習者コーパスは、東京外国語大学英語専攻 1 年生の授業の課題として、授業外に辞書を用いて執筆された英作文のほか、翻訳課題「上海留学の思い出」の英語翻訳(辞書使用)が収録されている。

添削はアメリカ・イギリス・オートラリア・シンガポール英語母語話者のべ 24 名が行い、毎週会議を開催して、統一の方法で添削し、誤用タグ付けを行った。

中国語母語話者英語学習者コーパスは、上海外国語大学及び國立台灣師範大學と連携して、翻訳課題「上海留学の思い出」の英語翻訳も収録されている。

(4) 東京外国語大学「中国語学習者作文コーパス及び誤用辞典」
http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus_ch/

東京外国語大学中国語専攻日本語母語話者による中国語学習者コーパス。369 作文が学習者情報・添削情報・誤用タグ付きで収録されている。

初中級の 2 年生から、中国・台湾からの 1 年の留学を経た 4 年生 5 回生まで、幅広い学習レベルの中国語作文を誤用情報・学習者情報付きで公開している。授業の課題作文(辞書使用)のほか、翻訳課題「上海留学の思い出」(辞書使用)の中国語翻訳が収録されている。

本稿の第二著者申亜敏が統括して、通算 25 名の中国語母語話大学教員・大学院生がチームを作り、毎週会議で討論して、添削・誤用タグ付け・相互チェックを行い、公開した学習者コーパスである。

このほか、学習者の承諾書がないために、非公開ではあるが、國立台灣師範大學から提供された、台湾の中国語検定試験 TOCFL(Test of Chinese as Foreign Language)の試行試験において収集された英語母語話者による中国語学習者コーパスも、同様に、添削・誤用タグをつけ、研究資料として整備し、研究対象データとしている。

2. 多言語学習者コーパスにおける相互参照性

上記の日本語・英語・中国語学習者コーパスは、「学習言語」×「学習者の母語」の組み合わせとして、以下の図 1 のような 6 種類の対照パターンが可能であり、各言語の文法習得において、学習者の母語が

[5] 辞書使用の有無は、語彙の産出の分析には大きな影響があるが、文法の産出の分析においては、影響度は大きくない、という印象を、プロジェクトを通して得た。

異なれば、どのような異なる第二言語習得をみせるか、という第二言語習得研究に役立つ。

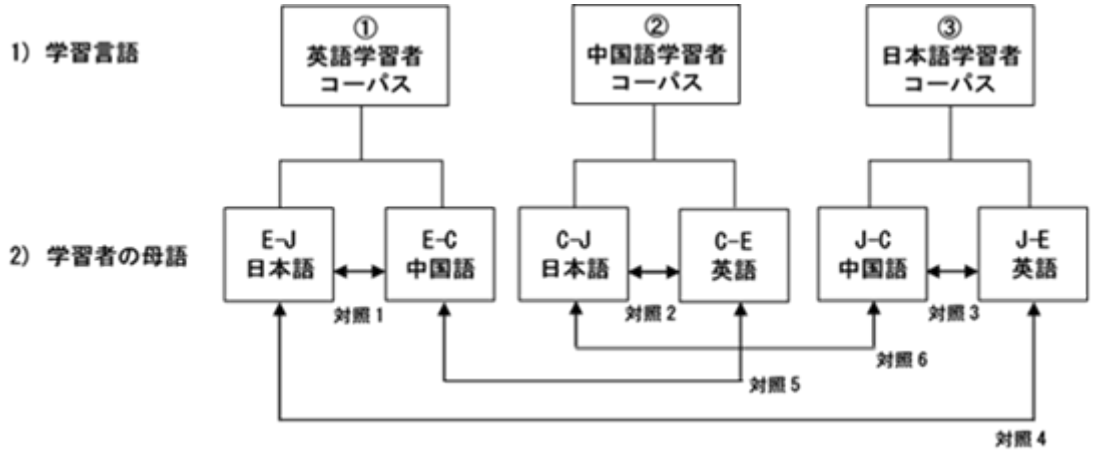


図 1　「学習言語」×「学習者の母語」の組み合わせと対照パターン

研究の一例として、「日本語母語話者は、中国語を習得する際に、どのような日本語の特性の影響を受け、誤用を産出するのか。」を観察するために、図 1 の「対照 2」(中国語学習者コーパスにおける日本語母語 vs.英語母語話者の産出の対照)を例に、次の第 3 節で考察しよう。

3.　中国語学習者誤用コーパスにおける完結性の誤用:「日本語母語」対「英語母語」

3.1　名詞句における「有界性」:“一＋類別詞”の習得

池上(1981, 2007)では、英語が「個体化指向」「有界的」(bounded)な事態把握であるのに対して、日本語は、個体を全体に融合させ、明確な輪郭をもたない「連続体指向」「無界」(unbounded)的事態把握であることが述べられている。この主張を支持する現象として、中国語学習者コーパスにみられる「“一个 yige”の欠如」による誤用が挙げられる。“一个 yige”とは、名詞の前につく“一＋類別詞”構造で、常に義務的に名詞につくわけではなく、沈家煊(1995)によれば、「有界的」(bounded)な事態把握の場合にのみにつく。“一＋類別詞”は、英語の a/the と同様、統語的には名詞の前につく「限定詞」(determiner)の性質を一部もつと考えられるが、その生起条件は、英語の“a/the”とは異なり、事象構造の「有界性」(boundedness)という、叙述内容が、ひとまとまりの事象として認知されるかという基準で規定される。

日本語母語話者中国語学習者コーパスでは、脱落現象が顕著である一方、国立國立台灣師範大學国語教学中心より提供された CEFR で B2 レベルの英語母語話者中国語学習者コーパス(非公開)では、脱落現象は顕著ではない。これは、英語の名詞句の構造において、不定限定詞 “a/an”が存在することが、中国語の“一＋類別詞”の習得を容易にしていると推測される。

次に、日本語母語話者は、中国語の習得において、数量詞の過少使用が顕著である例を挙げる。

(5) a. 那时发生了*(一件)不幸的事。
　　その時、<u>不幸な出来事</u>がおこった。
　b. 东大和有*(一个)很大的公园，东大和南公园，附近也有*(一条)小河。
　　東大和には<u>とても大きな公園</u>がある、即ち東大和南公園である。そして、その付近には<u>小川</u>も

ある。

一方、英語母語話者の場合、「“一个”=英語の不定冠詞 “a”」という過度般化により、「無界」(unbounded)的な未完了の事態においても、“一个”をつけるという過剰使用もみられる。以下は、國立國立台灣師範大學より提供された英語母語話者コーパス中にみられた“一个”の過剰使用例であるが、いずれも、予定・可能・蓋然性・否定等の「無界」(unbounded)的な未完了の事態に“一个”をつけた誤用例である。

(6) a. 我計畫我們去電影院看(*一部)電影。
私は, 映画館に行って、一作の映画を見る計画をしている。
b. 我記得你說過你喜歡丟飛盤，所以我會把(*一張)飛盤帶來。
君はフリスピーが好きだときいたから、私はフリスピーを一つ持ってくるよ。
c. 我在台北沒有發生(*一個)大問題，……
私は台北では、まだ大きな一つの問題にあったことがない。
d. 今天他不但忘了帶手機，也忘了帶(*一瓶)水。
今日彼は携帯電話を忘れたばかりではなく、水一本持ってくるのも忘れた。

また、本稿の最後に付録として収録されている「上海留学の思い出」の日本語原文と中国語翻訳を比較してみても、中国語翻訳には、9 例の“一＋類別詞”[6]が使われている。中国語母語話者によれば、こうした“一＋類別詞”は、すでに起こった出来事、という有界的事象文の名詞句には、義務的に付加されなければならないということである。

(7) a. 上海留学时的一段回忆。(上海留学中の思い出)
b. 虽然是一个物资不是很丰裕的时代，但是胡老师以及他家人对我的热情款待的回忆，
始终就像一个宝藏一样。
(物質的に豊かとはいえない時代でしたが、胡先生と先生のご家族が私をご親切にもてなしてくださった思い出は、宝物のように今も胸に刻まれています。)

日本語教育の現場において、中国語母語学習者が、「ひとつの」「一人の」「一個の」といった表現を多用する現象もみられる。第一筆者が、東京外国語大学日本専攻で「文章表現超級」クラスを 32 年間担当してきた経験では、中国語母語話者の日本語作文には、「ひとつの」「一人の」「一個の」という表現が多く、不思議に思っていた。中国語母語学習者には、「こうした表現は誤りではないが、冗長」として指導してきたが、対応する中国語においては、有界事象を表す文で統語的必須成分の可能性が高い。どのような日本語文に「ひとつの」「一人の」「一個の」が出現するかを調査することも興味深い。

上の論考を要約すると、中国語には、文法範疇としての「数」はないが、類別詞が非常に発達し、数量詞が「有界的」(bounded)な事態把握の場合に目的語名詞の前につく。この点で、中国語は、以下の表 1 のように、英語ほど「個体化指向」ではないにしても、日本語よりは、「個体化指向」が強い言語といえる。

[6] 付録の「上海留学の思い出」の中国語訳中の、9 例の“一＋類別詞”は、下線が引かれている。9 例いずれも、実現された有界的事象として中国語母語話者が認知する文における目的語相当成分についている。

表 1　英語・中国語・日本語の「数」「類別詞」「個体化機能」の類型

	①　文法範疇「数」	②　類別詞	③　個体化
英語	+	－	＋＋＋
中国語	－	＋＋＋	＋＋
日本語	－	＋	－

3.2　動詞句における「有界性」: 日本語母語話者のテンス・アスペクト表現の過少使用

次に、日本語母語中国語学習者誤用コーパスで観察される、完結事象を表す動詞句に関わる誤用も、英語母語話者と比較してみよう。

「有界性」という概念は、「時間の有界性」、即ち「完結性」(telicity)とも関連する。日本語においては、「動詞の自他対応における自動詞」(e.g. 植える-植わる、切る-切れる、直す/直る)や、「アスペクト複合動詞」(e.g. 読みこむ、書き出す、書き上げる)が、完結性を表す表現である。中国語には、テンスが存在しないという説も強いが、中国語は「完結性をもつか否か」を明確に言語化し、豊富なアスペクト体系をもつ。

中国語産出における、日本語母語 vs.英語母語話者の対比は、日本語母語話者の場合、「完了アスペクト接尾辞である<-了 le>」「動詞に後置され完結性を表す結果補語」「事象の未実現を表す助動詞<会 hui>」の過少使用が顕著である点にある。張正(2019:54)によれば、表２が示すように、例えば、完結性を表す結果補語 “～到”の産出において、英語母語話者は、10,000 語あたりの調整頻度が 138.5 と、日本語母語話者による調整頻度 1.0 に比較して、138 倍も高い。

表 2　結果補語<-到 dao > <-成 cheng> <-完 wan>の産出の比較

		日本語母語	英語母語	中国語母語話者
頻度数	～到 –dao	338	464	25,070
	～成 -cheng	55	27	23,359
	～完 -wan	19	27	12,380
調整頻度 /10,000 語	～到 -dao	1.0	138.5	12.5
	～成 -cheng	3.0	8.0	11.6
	～完 -wan	1.0	21.8	6.1

中国語母語話者の頻度数については、中国教育部语言文字应用研究所で公開している現代汉语语料库検索で検索を行っている。 http://www.cncorpus.org/index.aspx

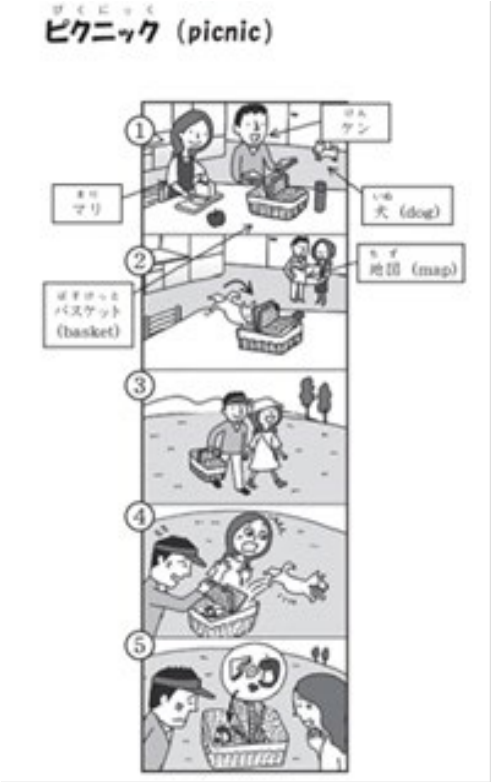
日本語母語話者における「完結/非完結性」表現の欠如の要因は、さらなる分析が必要であると思われるが、<-了 le>の欠如と、中国語母語話者における「～た」の誤用には、表裏一体の関係があると思われる。また、日本語学習者コーパス全体における「複合動詞の非用」、中国語母語話者にみられる「自他対応のうち、完結性を表す自動詞を誤って多用する傾向」も、中国語が完結性を重視する表現形式が卓越

し、完結性という認知体系が卓越していることと関係がある。

以上、東京外国語大学多言語学習者コーパスを、「学習者の母語と学習言語」という視点から、双方向に比較することによって、母語の認知システムがどのように学習言語に影響するかを論じた。

次の第 4 節からは、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス I-JAS」を用いたテンス・アスペクトの習得について論考する。

4. I-JAS における複文中アスペクト・接続表現の習得と母語の影響



第 4 節以降は、I-JAS における、日本語の「複文におけるアスペクト」及び「複文における接続辞」の習得と、学習者の母語の影響の可能性について、中国語・英語との比較を通して論じる。

まず、「テイ(ル)」の習得と母語の影響に関する先行研究として、Sugaya and Shirai(2007)は、動詞の語彙的アスペクト・学習者の母語のアスペクト体系という要因が、日本語の進行相と結果相両方の機能をもつ“-te i(ru)”の習得と関わっていることを論じている。

さらに、峯(2015), 峯(2019)では、複文・文脈処理が必要な文脈「テイ(ル)」の習得は超級になっても誤用が残りやすく、文脈「テイ(ル)」の習得と、複文処理が必要な接続辞「ト、バ、タラ、ナラ、ノデ、ノニ、テモ、トキ」等は、共に上級・超級レベルで習得可能であることを示唆している。

同様の現象は、上級・超級レベルの英語学習者・中国語学習者にも観察される。英語学習者については、Newbery-Payton and Mochizuki(2020)は、上述の東京外国語大学で公開している上述の「国際英語・中国語・日本語学習者コーパス誤用検索サイト」http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus/における上級・超級の英語学習者コーパスを分析し、中国語母語話者と日本語母語話者では、複文のテンス・アスペクト産出について、異なる誤用類型がみられることを論じている。

中国語学習者についても、Mochizuki et.al, (2015), 望月(2018)では、上記東外大「国際中国語学習者誤用検索サイト」に基づき、中国語の結果アスペクトの習得が、日本語母語学習者は上級でも脱落が顕著であるのに対し、英語母語話者には脱落現象がないという現象と学習者の母語の類型を論じている。

以下、本稿では、I-JAS に収録されているストーリーライティングを対象として、日本語母語話者の「語り」と、中国語・ベトナム語・英語の母語話者日本語学習者による「語り」を比較する。まず、ストーリーライティングの対象となる 5 コマ漫画は、右上にあげる「ピクニック」というタイトルの漫画である。本稿では、以下の三つの視点から比較分析を行う。

第一の視点は、日本語母語話者は、漫画①から②への展開の語りにおいて、どのような「2 つの出来事を関係づける文法形式」を用いているか、という視点である。特に、「接続表現」及び「進行相・結果相を表す“-te i(ru)”」に着目し、日本語母語話者と上記三言語の学習者の産出を比較する。

第二の視点は、漫画⑤における語りの落ちの表現について、残念な結果に「能動態・受動態」のどちらが用いられるか、どのような「文末表現」が用いられているかという視点である。

第三の視点として、同じ漫画を中国語及び英語でストーリーライティングしたデータと比較し、日本語の語りの特質とその習得について考察する。

本稿の分析対象は、I-JAS に収録されている、「ピクニック」のストーリーライティングのうち、日本語母語話者、中国語・ベトナム語・英語母語話者各 50 名、計 200 名によるデータである。さらに、独自に収集したデータとして、中国語母語話者 10 名及び英語母語話者 2 名が、それぞれの母語で同じ「ピクニック」のストーリーライティングを行ったデータ[7]を分析する。

5. 語りのアスペクトと「接続表現」

漫画①②は、①の「Ken と Mari がピクニックにいくために、サンドイッチを作っている」という出来事と、②の「Ken と Mari が地図を見ている隙に、犬がピクニックバスケットに入り込んだ。」という二つの出来事を描写している。2 つの出来事を関係づける文法形式として、“-te i(ru)”形と接続辞の二点に焦点をあてて考察しよう。まず、漫画①②の語りにおける、“-te i(ru)”形と接続辞の使用状況について、日本語母語話者と学習者を比較すると、以下の表 3 及び表 4 のような対比がみられる。

表 3　”-te i(ru)”形の使用状況　各母語話者 50 名

日本語母語話者	中国語母語話者	ベトナム語母語話者	英語母語話者
88%	52%	48%	22%

表 4　複文における接続辞の母語別使用状況

	接 続 辞	日本語母語話者	中国語母語話者	ベトナム語母語話者	英語母語話者
1	～間に	42%(21 例)	2%(1 例)	2%(1 例)	10%(5 例)
2	～隙に	28%(14 例)	0%(0 例)	0%(0 例)	0%(0 例)
3	～と	14% (7 例)	0%(0 例)	0%(0 例)	0%(0 例)
4	～とき	0% (0 例)	42% (21 例)	44%(22 例)	18%(9 例)
5	～ながら	0% (0 例)	2%(1 例)	2%(1 例)	24% (12 例)

表 4 から読み取れることは、以下の三点である。

Ⅰ. 日本語母語話者の 84%は、「～間に」(42%)、「～隙に」(28%)、「～と」(14%)を使用。

(8) 出かける前に二人が地図を見ている間に、サンドイッチを入れたバスケットに犬が入ってしまい

[7] 中国語母語話者 10 名は、日本語を理解しない、中国山東省の大学の医学部学生 9 名と、日本語が堪能な台湾出身研究者 1 名で、ウェブ入力方法により、東京外国語大学大学院生ファン・インルイさんの協力を得て収集された。英語母語話者 2 名は、それぞれイギリス・アメリカ出身の東京外国語大学の英語母語大学院生及び学部研究生で、ともに日本語能力試験 1 級保持者によるデータである。

ました。(JJJ01-SW1-00010-K)

(9) けんとまりが地図を見てどこに行こうかと話している隙に子犬がバスケットの中に入り込んでしまいました。(JJJ12-SW1-00010-K)

(10) ケンとマリは昼に食べるサンドイッチをバスケットに詰め、今日の行き先を確認するために地図を広げていると、二人が飼っている犬のリサ(犬の名前)ちゃんがバスケットの中に入り込んでしまいました。(JJJ05-SW1-00020-K)

Ⅱ. 中国語・ベトナム母語話者は、「～とき」の使用がそれぞれ 42%, 44%を占め、英語母語話者の使用率も 18%と観察されるのに対し、日本語母語話者の使用例はゼロである。

(11) ケンとマリが地図を読んいる(読んでいる)時、その食べ物が入ったバスケットに飛び込みました(CCH19-SW1-00030-K)

(12) 二人と一緒に地図を見る時、ある犬はバスケットを入りました。(VVN20-SW1-00010-K)

(13) ケンとマリは地図を見たとき、ケンとマリの犬はピクニックのバスケットを入れました。(EAU09-SW1-00010-K)

Ⅲ 英語母語話者で最も多いのは、「～ながら」[8](24%)であるが、中国語母語話者・ベトナム語母語話者ともに、１例のみであり、日本語母語話者は、使用例はゼロである。

(14) でも、マリとケンは地図を見ながら、犬はバスケットに入ってしまった。(EUS01-SW1-00020-K)

峯(2019:66)は、“日本語母語話者が「～と」の使用が多いのに対して、「～とき」の使用が多いのは、接続辞表現の習得過程に沿う結果であり、「～と」は仮定的表現で、認知的負荷が高い。さらに、機能的に重なる「～とき」の使用が先行するために習得が遅れるが、習得が進めば、母語話者と同じように「～と」の使用が増えていく”と述べている。

6. 中国語・英語による語りのテンス・アスペクトと「接続表現」

次に、母語の影響の可能性について考察しよう。中国語(10 名)・英語母語話者(2 名)が、同じ漫画を、それぞれの母語で語ったライティングデータのうち、代表例一例ずつを以下に挙げる。

Ⅰ 漫画① ②

(15) a. 今日は二人でピクニックに行く予定です。(JJJ05-SW1-00010-K)

b. 星期天阿健和玛丽打算去公园野餐。

c. One day, Ken and Mari decided to go on a picnic.

[8] 後述のように、対応する英語表現が While 節であるため、While=“～ながら”という英語母語学習者の類推によるものと思われる。

(16) a. ケンとマリは昼に食べるサンドイッチをバスケットに詰め、(JJJ05-SW1-00010-K)

b. 他们愉快地一起做**了 $_1$(-le,完了相)**很多好吃的三明治，**并(順接接続詞)**将做好的三明治和其他一些食物放进**了 $_1$(-le,完了相)**一个篮子里。

c. Mari made sandwiches and Ken packed them in the hamper.

(17) a. 今日の行き先を確認するために地図を広げていると、二人が飼っている犬のリサ(犬の名前)ちゃんがバスケットの中に入り込んでしまいました。(JJJ05-SW1-00020-K)

b. 他们家的狗狗在旁边很羡慕地看**着(zhe 進行相)**。准备好野餐篮之后，他们看**着(zhe 進行相)**地图，开始研究**要(yao 将然相)**怎么去公园。**而(Er 接続詞)**此时狗狗趁着他们不注意，一溜烟钻进**了 $_1$(-le, 完了相)** 野餐篮里**了 $_2$(-le,パーフェクト相)**。

c. They were so busy they didn't notice their dog Rover sneak into the kitchen. **While** Ken and Mari were looking at a map deciding where to go, Rover jumped into the open hamper.

(17a)では、日本語母語話者は、二つの出来事をつなぐ複文の接続辞として、「～と」を用いていること、残念な出来事の描写に使われる「～てしまう」を用いている。

一方、中国語(17b)では、文の最後につく接続辞が存在せず、次の文の最初に「そして」に相当する接続詞"而"(Er 接続詞)が来ている。残念な出来事の描写に使われる「～てしまう」は、中国語では、文末に着く"了 $_2$(-le,パーフェクト相) "[9]で表され、残念な出来事に対する共感性を表している。

英語では、二文をつなぐ接続詞として"While" (二つの同時進行の出来事のうち、背景となる出来事の節につく)が用いられている。上掲の表 4 で、英語母語話者で最も多い誤用タイプ「～ながら」は、"while＋節"＝"節＋ながら"という類推によるという可能性が高い。

Ⅱ　漫画③

(18) a.二人はそのままバスケットを抱えピクニックに出かけました。(JJJ05-SW1-00040-K)

b. 阿健提着野餐篮和玛丽兴高采烈地来到**了(-le,完了相)**野餐的目的地。

c. Ken and Mari set off on their picnic.

(19) a. お昼の時間になり、朝二人で準備したサンドイッチを食べようと、バスケットを開けたところ、(JJJ05-SW1-00040-K)

b. **当**[10](dang: When)他们找好了野餐的地点，打开野餐篮，正准备好好享受美味的野餐**时**(~時),

c. They walked across the grass to a nice spot and Ken put down the hamper.

---

[9] 中国語における動詞につく"了 $_1$" (-le, 完了相)と文末語気助詞"了 $_2$" (-le, パーフェクト相)の用法については、望月(1997)を参照いただきたい。

[10] "当(文)时"で、"～のとき"節を形成する。

日本語では、「～ところ」という接続辞が使われているのに対して、中国語は「～時」に相当する表現、英語では、二文として and で接続されているのみで、日本語の複雑な接続辞の多様性は、中国語・英語には存在しない。

Ⅲ 漫画④

(20) a. なんと犬のリサ(犬の名前)が中から飛び出てきました。(JJJ05-SW1-00040-K)

b. 狗狗突然跳**了(-le,完了相)**出来，吓**了(-le,完了相)**他们一大跳。

c. At that moment, to their surprise, Rover jumped out of the hamper and ran off down the field.

日本語においては、驚きの展開に、「なんと」が接続表現として使われているが、中国語・英語では接続表現はなく、英語では、副詞節として“to their surprise”が使われるのみで、日本語の接続表現の多様性は、学習者にとって習得がむずかしいことが予測される。

Ⅳ 漫画⑤

(21) a. 二人は驚き、あわてて中身を確認すると、腕によりをかけたサンドィッチ(サンドイッチ)はみごとに 食べられて(受動態) しまっ ていました。(JJJ33-SW1-00040-K)

b.**更糟糕的是(モダリティ副詞：残念なことに)**，打开篮子**一看**(見てみると)，原本准备大快朵颐的美食都**被(bei 受動態標識）狗狗糟蹋得(de 結果補語）一塌糊涂**，他们也只能望篮兴叹**了(-le$_1$ 完了相＋-le$_2$ 文末パーフェクト語気助詞)**。(サンドイッチが食べられてしまったという受身表現＋パーフェクト語気助詞で感情移入を示している)

c. Ken and Mari looked into the hamper in despair. Rover had eaten the picnic food they had lovingly prepared! (主語の転換，視点が Ken and Mari から犬 Rover に移り能動文。感情移入の表現はなく、文末の!が驚き・残念を表している程度である)

物語の最後の残念な結果表現として、日本語では、「受動態」「結果相“-te i(ru)”」が用いられ、「読み手と残念な感情を共有する共感性」が表現されている。中国語においても、中国語母語話者 10 名による語りでは、9 名が被害の意味を表す受動態を使っている。さらに、文末語気助詞として、“了(-le$_1$ 完了相＋-le$_2$ 文末パーフェクト語気助詞)”という、「完了＋パーフェクト」の複合的意味を表す文末表現が用いられている。

最後に、ベトナム語は、中国語と類似する言語であり、表 3 および表 4 で示したように、日本語習得状況も、中国語母語話者とかなり類似していることも、重要な結果である。

７． 結び: コミュニティで文化的に好まれる表現を選択する能力の養成

南(2018)によれば、I-JAS「ピクニック」ストーリーライティングにおける日本語話者・中国語話者・英語話者による態の使用率は、以下の(22)のとおりで、日本語話者は、主人公に感情移入して、主人公

に視点を置くため、受動態が多いのに対して、英語話者は、動作主に視点を置く能動態が多い。中国語話者は、日英語話者の中間に位置しているようである。

(22)「ピクニック」のストーリーライティングの態　(南 2018 による)

a. 日本語母語話者(JJJ) 50 名　：視点が主人公に固定される傾向

受動態使用者 40 名 $\chi2(1, N = 50) = 18.00, p < .0001$

b. 中国語話者(CCM 50 名): 視点の移動は日英語の中間程度の傾向

受動態使用者 31 名 $\chi2 (1, N = 50)= 2.88, p < .10$

c. 英語母語話者：能動態の頻度が高い。動作主に視点の傾向。

EAU(オーストラリア)能動態使用者 14 名 $\chi2(1, N = 23)= 1.09, p = .30$

EUS(アメリカ)能動態使用者 24 名 $\chi2 (1, N = 27)= 16.33, p < .0001$

南(2018)の研究は、本稿で比較した日本語・中国語・英語母語話者による母語による「語り」の類型を反映したものであり、日本語・中国語・英語の「態・時制・アスペクト・モダリティ」の体系が、第二言語の語りに影響していることを示している。

南(2018)が指摘するように、「当該スピーチ・コミュニティで文化的に好まれる表現を選択する能力の養成」も外国語教育の役割であり、I-JAS データを学習者の母語と対照して研究することの価値も、共感性をはぐくむ外国語教育へ貢献するはずである。

望月圭子(もちづき　けいこ、Keiko Mochizuki)
東京外国語大学　総合国際学研究院　教授

申　亜敏(YaMing Shen)
早稲田大学　非常勤講師
東京外国語大学国際日本研究センター 特任研究員

小柳　昇(おやなぎ　のぼる、Noboru Oyanagi)
東京外国語大学非常勤講師
東京外国語大学国際日本研究センター 特任研究員

【参考文献】

池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学－言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店.

池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』筑摩書房.

南雅彦(2018)「日本語学習者の「語り」から見えてくる習熟度―語彙・時制・視点―」『I-JAS 第四回学習者コーパス・ワークショップ＆シンポジウム－第二言語習得における語彙の役割－予稿集』国立国語研究所主催. 2018 年 12 月 22 日(土) 東京工業大学キャンパス・イノベーション・センター.
http://lsaj.ninjal.ac.jp/wpcontent/uploads/2015/07/3d2764b1e75158b885d10c7e6590857c.pdf

峯布由紀(2015) 『第二言語としての日本語の発達過程-言語と思考の Processability』ココ出版.

峯布由紀(2019)「文脈の時間の流れを表すテイルの習得について—日本語の発達段階における位置づけ—」『日本語教育』173 号. pp:61-68.　公益社団法人日本語教育学会.

望月圭子(1997)「中国語のパーフェクト相」『東京外国語大学論集』55 号. pp:55-71.
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/23655

望月圭子(2018) 「中国語と日本語におけるアスペクト複合動詞の習得—「有界的」認知からみた中国語・日本語双方向学習者コーパスの分析—」『日語偏誤与日語教育研究』3 号. pp: 83-100. 浙江工商大学出版社.

望月圭子・キャロライン狩野(2012)「英語・日本語における空間・時間に関わる格標識：日本語母語話者による英作文学習者コーパスにみられる誤用類型」『東京外国語大学論集』第 85 号. pp: 219-236.
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/72380

望月圭子・申亜敏(2016)「英語・中国語からみた日本語の無界性：複合動詞と空間認知」『日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築－国内外の日本語教育研究機関との協働的研究(2013-2015)』pp:43-66. 東京外国語大学国際日本研究センター.
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/88247

Mochizuki, K. Hiroshi SANO, Ya-Ming SHEN and Chia-Hou, WU(2015) "Cross-Linguistic Error Types of Misused Chinese Based on Learners' Corpora". Computational Linguistics and Chinese Language Processing 20(1). pp. 97-113. The Association for Computational Linguistics and Chinese Language Processing.
http://www.aclclp.org.tw/clclp/v20n1/v20n1a6.pdf

Mochizuki, K. and Laurence Newbery-Payton(2016) "A Contrastive Study of Prepositional Errors in TUFS Sunrise Advanced Learners' Corpora of English by Native Speakers of Japanese and Chinese" 『日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築－国内外の日本語教育研究機関との協働的研究(2013-2015)』pp:25-41. 東京外国語大学国際日本研究センター.
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/88242

Newbery-Payton, L. & Keiko Mochizuki(2020) "L1 Influence on Use of Tense/Aspect by Chinese and Japanese Learners of English" pp: 67-93. *Learner Corpus Studies in Asia and the World4*, Kobe University.
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81011994

Sugaya, N.& Shirai,Y(2007) "The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 Learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors?" *Studies in Second Language Acquisition*, 29(1), 1-38.

沈家煊(1995) <"有界"与"无界"> 《中国语文》第 5 期、pp:97-110.

申亜敏(2005)「中国語の自他と結果表現類型」影山太郎編『レキシコンフォーラム』No.1. pp: 231-266. ひつじ書房.

申亜敏(2007)「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」影山太郎編『レキシコンフォーラム』No.3. pp:195-229. ひつじ書房.

張　正(2019) 「日本語母語学習者による中国語の結果補語の習得と母語の影響—学習者コーパスに基づく分析—」『言語・地域文化研究』25 号. pp:51-60. 東京外国語大学。
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/92691

【謝辞】
本研究は、以下の四種類の研究費を用いた研究成果である。

[1] 科研基盤 A「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」(16H01934:2016-2019 年度, 研究代表者:迫田久美子)
[2] 科研基盤 B「国際連携・高大連携による双方向英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究」(17H02357：2017-2019 年度, 研究代表者:望月圭子)
[3] 東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門「日本語学習者コーパスプロジェクト」(研究推進者：望月圭子・小柳昇)
[4] 東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門「多言語複合動詞プロジェクト」(研究推進者：佐野洋・望月圭子・申亜敏)

【付録】

日本語・英語・中国語学習者コーパスに収録されている翻訳課題文「上海留学の思い出」

[A] 日本語母語話者(東京外国語大学英語専攻・中国語専攻)への翻訳課題
→英語・中国語へ翻訳

Original Japanese Text (望月圭子 Keiko MOCHIZUKI)

私は、20 代から 30 代にかけて、北京、上海、ロンドン、台湾に留学したことがあります。留学時代の思い出として、今、懐かしく思い出すのは、先生方のお宅に招かれ、おもてなしを受けた思い出です。

まず、最初に、上海留学中の思い出[1]についてお話します。

東京外国語大学で中国語学の修士号を得た私は、中国政府公費留学生として、1986 年から 1988 年にかけて、復旦大学(Fudan University)に留学しました。指導教授は、著名な中国語学者であった胡裕樹教授(Prof. HuYushu)でした。その頃は、復旦大学の先生方には、研究室がなく、論文指導は、大学に隣接する宿舎に住んでいらっしゃるご自宅の書斎兼寝室で行われました。先生方のご自宅には電話もなく、突然訪ねていくことが多かったのですが、突然お伺いしても、必ずドアを開けてくださった、そんな牧歌的時代[2]でした。

ある日、予約なしに胡先生のおうちを訪ねた[3]私に、ご一家は、「ちょうど八宝飯(Babaofan;もち米で作った 8 つのドライフルーツが飾られたデコレーションケーキ)が蒸しあがったから、食べなさい」と、ふるまってくださったのです。蒸したての八宝飯の「やさしく、柔らかく、幸福な甘さ」は、忘れることができません。その後、中国料理店で、八宝飯をみつけると、必ず注文し、胡先生のおもてなしを思い出すのです。

論文の個人指導は、蒲団がロールケーキのように巻かれ、整えられて長椅子と化した胡先生のベッド[4]に座って行われました。私がベッドに座ると、胡先生はまず、龍井茶(LongJing Green Tea)を蓋

付きの中国式マグカップ 5 にひとつまみ入れて、魔法瓶からお湯をいれ、お茶 6 を淹れてくださいました。そして、結婚式の引き出物のような、赤いキャンディーボックス 7 の蓋をとって、「キャンディーをどうぞ」と優しく微笑みながらすすめてくださったのでした。

とても質素な時代 8 でしたが、胡先生ご一家のおもてなしは、いまも宝物のような思い出 9 として、胸に刻まれています。

[B] 中国語母語話者(上海外国語大学・國立台灣師範大學)への翻訳課題→日本語・英語

Original Chinese Text（Translated by 申 亜敏 Shen YaMing）

在我二三十岁的时候也曾经到北京、上海、伦敦以及台湾留学过。如今每当我回想起当时的留学生活时，总是会想起每回到老师家里做客时的情景。首先，就让我谈谈在上海留学时的一段**回忆** 1。

从 1986 年到 1988 年，在修完东京外国语大学的硕士课程之后，我以中国政府公费留学生的身份到上海复旦大学留学了两年，我的指导教授是著名的汉语语言学家胡裕树教授。当时复旦大学的老师们并没有个人的研究室，每次的论文指导课都是在紧邻大学的老师宿舍里的书房兼寝室里进行的。也由于当时老师宿舍里还没有安装电话，所以常常都是无事先告知的突然造访，但是尽管如此，老师及其家人每次也都一定欣然开门迎客，我也从未尝过闭门之羹。那是一个如此纯朴的**时代** 2!

有一天，又是一个突然的**造访** 3。胡老师一家人对突然出现的我说道："正好有蒸好的八宝饭，吃了再走吧！"，一边拿出八宝饭招待我这个不速之客。刚蒸好的八宝饭所带有的那种"软软、热热、甜甜"的幸福滋味，到现在仍然记忆犹新。从那以后，每当在中国餐馆里看到八宝饭，我一定会点来品尝，不为别的，就只为想再回味一次胡老师和他家人的待客之道。

每次上课时，老师都会将棉被卷成像西式卷心蛋糕似的长条状，然后将床铺整理得如同一条**长凳子** 4，要我坐在上面上课。我一坐定后，老师会先在一个传统中国式的、带盖子的**茶杯** 5 里放入一小撮的龙井茶叶，然后从热水瓶里倒出热开水，为我沏上一杯**热茶** 6。之后，再拿出一个好象装喜糖用的大红色的**糖果盒** 7，打开盒子，亲切地微笑着要我吃糖。

虽然是一个物资不是很丰裕的**时代** 8，但是胡老师以及他家人对我的热情款待的回忆，始终就像一个宝藏一样 9，永远地深深地埋藏在我的心中。

[C] 翻訳例としての英語母語話者による翻訳

English Text (Translated by Caroline Kano)

①When I was in my twenties and early thirties, I myself had the opportunity of studying in Beijing, Shanghai, London and Taiwan. ②Of all my memories of studying abroad, what I still now remember most fondly, are the occasions when I was invited to the homes of my professors, and the warm hospitality I received. ③In this connection, I would first like to talk about my memories of studying in Shanghai.

④After receiving my M.A. in Chinese from Tokyo University of Foreign Studies, I went as a Chinese government-sponsored exchange student to Fudan University, where I studied from 1986 to 1988. ⑤My academic supervisor was the eminent Sinologist, Professor Hu Yushu. ⑥In those days, professors at Fudan University did not have their own room, and supervision of students' theses would be conducted in their private bedroom-cum-study in the university lodgings adjoining the university building, where they lived. ⑦As the professors' lodgings were not equipped with a telephone, students would often call on them unexpectedly. ⑧But however sudden a student's visit might be, in those idyllic times, their professor would always invite them in.

⑨One day, when I arrived at Professor Hu's home without an appointment, he and his family welcomed me with a "We've just steamed a *babaofan* (a cake made with glutinous rice, decorated with eight kinds of dried fruit), so do have some!" ⑩I will never forget the 'gentle, delicate, blissful sweetness' of that freshly steamed *babaofan*. ⑪Thereafter, whenever I go to a Chinese restaurant and find *babaofan* on the menu, I always make a point of ordering it, and recall the kind hospitality which Professor Hu extended to me.

⑫An individual guidance session on a student's thesis would be conducted seated on Professor Hu's bed, which, with the bed cover rolled up like a Swiss roll, was turned into a sofa. ⑬As soon as I had sat down on Professor Hu's bed, Professor Hu would place a few leaves of Longjing green tea in a Chinese-style mug with a lid, add some hot water from a thermos, and serve it to me. ⑭He would then take the lid off a red sweet box which looked as though it might have been a gift he had received as a guest at a wedding, and, smiling kindly, and with a "Do have a sweet!", offer me one. ⑮They were very modest times, but the warm hospitality which I received from Professor Hu and his family still remains like a treasure engraved in my memory.

The Group of the Roaring Waterfall:
Researching the Narutaki gumi filmmaking collaborations (1934–1937)

Iris Haukamp

「鳴滝組」は、京都の鳴滝地区を拠点とし、活動した、8 人の若手監督と脚本家から成る脚本家集団である。1934 年の設立から 1938 年の解散まで、22 本の時代劇脚本を書いたり、撮影したりした。多くのメンバーは、戦後も映画を作り続け、日本の映画界の重鎮となった。本プロジェクトは、今後の段階で検討するように、鳴滝組によるジャンルの革新は、今日に至るまで日本映画の制作におけるテーマの関心、スタイル、美学に影響を与え続けている。

本稿は、日本の文化遺産と世界映画史の一部として鳴滝組の活動の再発見を目的とした長期研究プロジェクトの最初の成果を含まれている。現在までの研究状況、グループの歴史的および議論的な文脈化、ならびに共同映画制作の概念の枠組みを提示する。こうした背景において、すべての「鳴滝組映画」への注釈付きフィルモグラフィーと、映画製作者と俳優の間の重要な相互作用についての考察を続ける。

【Keywords】 Narutaki gumi, scriptwriting, film, collaboration, jidaigeki, chanbara
鳴滝組、脚本、映画、合作、時代劇、チャンバラ

This long-term research project aims at recovering the activities of the 'Narutaki gumi' (鳴滝組) scriptwriting collective as a part of Japan's cultural history and heritage.[1] Based in and named after Kyoto's Narutaki neighbourhood (Ukyō-ku ward, Narutaki Doyama-chō), the Narutaki gumi was active between 1934 and 1938, and consisted of eight screenwriters and directors with affiliations to different studios: Inagaki Hiroshi, Yamanaka Sadao, Takizawa Eisuke, Fujii Shigeji, Hagiwara Ryō, Yahiro Fuji (Shinkō), Mimura Shintarō, and Suzuki Momosaku.[2] Under the nom de plume 'Kajiwara Kinpachi'(梶原金八), they redefined the extremely popular genre of *jidaigeki* (period films) and brought contemporary aesthetic sensibilities, representational styles, and concerns into their representations of the past. Various of their twenty-two screenplays were very successful at the time; Yamanaka's humanist masterpiece *Humanity and Paper Balloons* (Ninjō kami fusen, 1937) has since moved to canonical status. Kajiwara disappeared from the scenes and screens in 1938, coinciding with the outbreak of war in China, the clampdown on artistic production in accordance with wartime requirements, and key member Yamanaka's untimely death in a Chinese field hospital.

However, rather than foreclosing the discussion with the foreseeable demise of Taishō democracy and flourishing art in the darkness of early Shōwa's 'Dark Valley' (*kuro tani*), the very energy and spirit the group displayed in their reformation of the jidaigeki genre deserves attention. Straddling not only a threshold between two political systems, but also the ground-breaking transition from silents to talkies that shook the industry in many parts of the world, the group were part of a crucial piece of Japanese and global (film) history. Their scripts, partly written for the Zenshin-za progressive theatre troupe's naturalistic acting and introducing modern language and dialects into period settings, broke with traditional representations of — and ideas about — the past. Most of the members continued making films after 1938, and their influence can possibly be seen in Mifune Toshirō's realistic style of samurai-acting, the prosaic realism inherent in Yamada Yōji's 'everyday-man samurai series', beginning with his 2002 *Twilight Samurai* (Tasogare

[1] I am grateful for the support of this work provided by JSPS KAKENHI Grant Number 18H05628 and 19K2082 (Any opinions, findings, and conclusions or recommendations expressed in this material are those of the author(s) and do not necessarily reflect the views of the author(s)'organization, JSPS or MEXT).
I would also like to thank my research assistant, Zheng Ying, for her excellent, meticulous work.
[2] For Japanese personal names, I have used the Japanese order of surname and given name. I have excluded the macrons, indicating long vowels, from well-known place-names such as Kyoto, Osaka and Tokyo. Translations are my own unless otherwise stated.

Seibei), or even the tongue-in cheek, humorous approach to past events and people seen for instance in *Samurai Shifters* (Hikkoshi daimyō, 2019), which also clearly deals with the very contemporary concern of relocating for work in Japan's salaryman work culture.

Filmmaking collectives are neither exclusive to Japan nor to the period under scrutiny (e.g. the Proletarian Film Movement, the Dziga Vertov Group or the Ogawa Pro collective in the 1960s), and they are often connected to political or aesthetic movements, such as Pro Kino, or New Realism in Japan and beyond, Cine-Liberté in France, or the Chinese Left-Wing Film Movement. Collaborative filmmaking as a global phenomenon, often has a political objective. Focussing on the specific local inflection of this trend, the research applies film-historical methods as well as film and discourse analysis to ask what the Narutaki group's concerns were and to thereby contextualise the members and their output within the fluctuating cultural discourse of their time. Furthermore, the impact of their work on subsequent permutations of the genre and Japanese film culture will be elucidated. Finally, the research will expand beyond the immediate members of the group and towards other persons, such as specific actors or affiliates participating in the films or discussions, keeping in mind that collaborative filmmaking involves all parts of the process.

Over the past two decades, research on Japanese film — domestic and overseas — has been largely moving away from the previous mainly auteurist approaches or those centred around 'canonical films', and towards a more comprehensive, contextual understanding of the work, their authors, and the location of both within the discourse of their time. At the same time, an increasing interest in so far underexplored filmmakers becomes evident. The proposed research contributes to this more general trend, but differentiates itself by taking into consideration the specificity of the collective, the important role of intellectual exchange within and beyond the film world, and tracing the group's influence on (Japanese) film beyond the narrow timeframe of their existence. As the Narutaki group was also dedicated to the study of film as an object, the members commented on the matter in more general, film theoretical terms. Until recently, domestic as well as international publications on Japanese film that incorporate film theory into their argument, as well as curated film theory readers, very rarely mention Japanese film theorists. The very existence of early film theory in Japan was a matter of debate, also because the dividing lines between practitioner, critic, and theorist are intriguingly far from clear-cut. The prolificacy of pre-war film theory has very recently been demonstrated by Gerow, Nornes and Iwasaki's long-anticipated *Nihon senzen eigaronshū: eigariron no saihakken* (Yumani, 2018.) This research project contributes to the book's exploding of Westerncentric conceptions about film theory and provides a connection between theory and practice by examining the mutual influences of theoretical ideas and the films and scripts created within the Narutaki group.

With Japanese film being increasingly recognised as a cultural asset and heritage, as most recently seen with the establishment of the National Film Archive Japan (NFAJ) in April 2018, the Japanese film industry's output over the past one-hundred and twenty years has once more come into the spotlight. Moving away from the previous fixation on 'classical' works and their directors, as recognised by the West, such as Kurosawa's *Rashōmon* (1950), or *Tokyo Story* (Ozu, 1953), scholarly work increasingly has come to consider films within their historical context, and also to include lesser-known and pre-war works. However, possibly also due to many historical films being lost — it is assumed that less than twenty percent of Japanese films made prior to 1946 are lost — there is still a tendency to focus on individual, and more prominent filmmakers. As of today, there is no dedicated work on the Narutaki gumi in English or Japanese. Various works mention it in passing with regard to the stylistic innovations within jidaigeki (e.g. Aoki 1999: 131−132; Richie 2005: 71; Thornton 2008: 45, 115, 185, Yoshimoto 2000: 392). However, these references are sparse and overwhelmingly in context with two of their most prominent members, Inagaki Hiroshi and Yamanaka Sadao (see Inagaki 1983; Sugibayashi 2003: 17−39; Yamamoto 1980: 33−40). It is noteworthy in this respect that the group is ignored in Sharp's otherwise exhaustive *Historical Dictionary of Japanese Cinema* (2011). This oversight is significant precisely because the Narutaki gumi provided a nodal point in which the talents and idiosyncrasies of some of the most prominent film people of their time converged across industrial lines, interacted, and influenced each other. Interestingly, in 2014, the Period Drama Special Channel (*Jidai geki senmon channeru*) produced a sixty-minute drama, which demonstrates renewed interest in the group and its time. This research projects hopes to bring into scholarly and public consciousness the hitherto neglected work of this prolific group of filmmakers, not only locating it within cultural, industrial, and socio-political history, but also paying due attention to the cross-fertilisation of artistic and intellectual

styles and concerns possible within a professional filmmaking cooperative. In order to understand the Narutaki gumi's specificity and constitutive role in Japanese film history, this research project asks the following questions:

1. How can the Narutaki gumi and their work be categorised?
2. What was the group's objective with regard to their collective?
3. What effect in terms of group synergy can be seen in their work?
4. Which aesthetic, intellectual, political movements did they interact with and how?
5. What is their legacy to film and film discourse in Japan and ,possibly, abroad?

Finally, the project locates and assembles sources and ephemera related to the Narutaki-gumi (so far, over 350 articles and books as well as twenty screenplays and fifteen films have been collected) and aims at establishing a Narutaki-gumi digital archive.

Establishing contexts

The 1930s were a tumultuous time in Japan as in many other parts of the world. Times were changing, and they had been changing for a while. The early Shōwa Period saw the pendulum of discursive and 'real world' trends — cultural, social, political, economic — swinging once more towards the sombre, nationalist spectrum. On the other hand, especially the first half of the decade still provided the space and the energy for experiments in cultural expression originating in the previous — more liberal — Taishō Period and coming to fruition shortly before the increasing conservative-militarist backlash following the annexation of Manchuria (1931/1932) began dictating content and form and suffocating aberrant utterances. When General Araki Sadao appeared as a talking head in the Army-sponsored part-documentary, part narrative film *Crisis Time Japan* (Hijōji Nippon, 1933 Kondō Iyokichi), he justified the 'Imperial Way' (*kodo-ha*) of his eponymous section within the Imperial Army through the crisis Japan was facing at home and abroad (High 2003: 47−8). Supposed to garner support and funding for the military, the film was later used as evidence at the Tokyo War Crimes Trials. In 1933, it not only spawned a catchy song (in line with Japan's very early media mix culture), but also instances of resistance displayed through one of the popular "What time is it" (*ima nanji*) jokes: "What time is it? Crisis time" (*Ima nanji*? *hijōji*).[3]

The sarcasm in this response is a common reaction to times getting darker (similar reactions can be observed in the context of Germany's 'Third Reich', for instance), not only with regard to war, but also concerning the very real economic downturn within the maelstrom of the world economic crisis, manifesting in the Shōwa Depression of 1930-1932. And indeed, returning to the realm of film, various directors and scriptwriters represent this mood in their works, in a significant shift from their earlier offerings. These people, as well as their films, were coming of the age in the 1930s, and their work reflects the conditions under which this change occurred. This environment and the filmmakers' engagement with it fostered the nuanced approaches to lived reality in many films produced at the time, and together with technological advancements and stylistic experimentation explains why, despite the increasing state control, this time is considered to be the first golden age of Japanese cinema.

One such, and likely to most famous, instance of a director's thematic and stylistic maturing during the time under consideration is Ozu Yasujirō (1903−1963), whose student comedies, such as *Dreams of Youth* (Wakado no Yume, 1931) or *Days of Youth* (Gakusei romansu: wakaki hi, 1929), turned sombre with the change of the decade, depicting the new middle class (the students of his former film) struggling to make ends meet despite their university degrees. Ozu's work for the Shōchiku Kamata Studio's trademark film genre about this very new middle-class, *shoshimin geki*, initiated by studio head Kido Shirō, from *Tokyo Chorus* (Tokyo no kōrasu, 1931) to *University is a Nice Place* (Daigaku yoi toko, 1936), all used the aesthetics of modern Tokyo to express the new times, but 'Tokyo - City of the Unemployed' (an intertitle from *Tokyo Chorus*) looks decidedly less shiny and hopeful than a few years earlier. According to Standish, in these films the metropole had become the 'mise-en-scène of modernity in all its negative aspects' (2005: 42), but they did keep some of the more light-hearted touches of their predecessors. *I Was Born But…* (Umarete wa mita keredo)

[3] See also Wilson's section on crisis-time as a "buzz word" from 1932 (2002: 62−7).

(1932), *Dragnet Girl* (Hijōsen no onna) (1933), or *Passing Fancy* (Dekigokoro) (1933), as Satō Tadao observed, were produced with the aim of showcasing a 'new sophisticated "modern" style of filmmaking" (Satō; cited in Standish 2005: 43), but Standish among others analyses them with regard to their common 'social realist questioning of 1930s Japan' (ibid.). Apart from this thematic coherence, their other commonality was the somewhat unusual sounding name of the scriptwriter, James Maki (ジェームス槇, ゼームス槇, etc.). Maki's films were successful, because he 'combined the smartness of his American father and the delicacy of his Japanese mother' (Ozu, cited in Rayns 2010), which seems to explain both the modern and aesthetic appeal of the works. Maki, however, consisted of three people, Ozu himself,[4] Fushimi Akira (1900−1970) and Ikeda Tadao (1905−1964).

The 'James Maki script writing collaborations' (Standish 2005: 43) are interesting to me with regard to their collective nature and political outlook. Collaboration denotes a certain synergy that transcends individual expression and often the use of a penname allows this expression to go beyond specific star personas and styles and into new, even contradictory areas. The Maki film's relative social realist character fits the genre of films about 'normal people' (*shoshimin geki*), the lower urban middle-class and expressed contemporary concerns at a time when a feeling of 'crisis' could be evoked easily. The Japanese cinema, however, displays a peculiar specificity: Since its inception it had been split (thematically and industrially in terms of dedicated studios, crew and often cast) between films depicting the present (*gendai geki* - derived from the *shinpa* theatrical tradition) and films dealing with the pre-Meji past (*jidai geki,* previously *kyūha* tradition). *Jidai geki* also inherited the function to use past settings to comment critically on present issues from the theatrical convention of *mitate*, an allusive layering of past and present, under pre- and early modern censorship conditions that forbade the open depiction of certain, contemporaneous events, people, or scandals. If the 'James Maki' *gendai geki* were able to shine a critical spotlight on the present through their stylistic relation to contemporary life in the suburbs and derive their style from the collaborative nature of their genesis, how did such a tendency — if at all — manifest in *jidai geki?* Again, Ozu provides a link here. He was good friends — in a mentor-style relationship — with one of the foremost directors of the genre, Yamanaka Sadao (1909−1938). At the time, it is fair to say, Yamanaka, together with Inagaki Hiroshi (1905−1980) and Itami Mansaku (1900−1946) was at the forefront of a reformation of the genre, just like *shoshimin eiga* had changed stylistic and thematic sensibilities within the realm of *gendaigeki*. And like Ozu, Yamanaka was part of a filmmaking collective, that operated across the generally strict studio lines of the time.

The 'Narutaki gumi' operated in the mid-1930s, and consisted of a varying number of scriptwriters and directors. The Nikkatsu Studios, where Yamanaka was employed, moving to the Tokyo suburb of Chōfu in 1933 and Yamanaka therefore changing to Kataoka Chiezō Production,s where he met Inagaki seems to have been the spark that resulted in the energetic scriptwriting collaborations of the Kyoto group. At the most, eight people were involved, and this is when the original work, the script or its revision of the respective film is attributed to Kajiwara Kinpachi 梶原金八 — please note the character 'eight' in Kajiwara's first name. According to founding member Inagaki Hiroshi's recollections (1981: 174), the young filmmakers chose the name Kajiwara because they particularly liked 'Kajiwara kun', likely Kajiwara Hideo, 1911−1943, the then star-hitter of the intercollegiate Tokyo Big6 Baseball League (*Tōkyō roku daigaku yakyū renmei*). These young directors and scriptwriters, according to Inagaki, met more or less every evening to 'eat, drink, and talk about nothing but film' (ibid.). It was then that they came up with the idea to 'make interesting (*omoshiroi*) *jidai geki*. The aim that all were enthusiastic about was to produce scripts with a success rate of at least seven out of ten. These 'interesting *jidai* geki' were written collaboratively under the pen name Kajiwara. The eight people constituting Kajiwara Kinpachi at various times and in changing constellations hailed from various studios, but all lived (or even cohabitated) in the Narutaki area:

Scriptwriter Yahiro Fuji (八尋不二, 18 July 1904−9 November 1986; Shinkō Kinema), scriptwriter Mimura Shintarō (三村伸太郎, 1 October 1897−29 April 1970; freelance, previously Takarazuka Kinema and Hayama Eiga

[4] James Maki for instance was the writer of *I Was Born But* (Umarete was mita keredo, 1932), but the 'rhetorical flourishes' (*junjoku*), that is the script revision, was done by Ibushiya Geibei (燻屋鯨兵衛), yet another penname of Ozu.

Renmei[5]), scriptwriter Fujii Shigeshi (藤井滋司, 1908−1970; Shōchiku Shimogamo), director Takizawa Eisuke (滝沢英輔, 6 September 1902−29 January 1965), director Inagaki Hiroshi (稲垣浩 30 December 1905−21 May 1980; Kataoka Chiezō Production), director Yamanaka Sadao (山中貞雄 8 November 1909−17 September 1938; Nikkatsu Kyoto, after being head-hunted (*hiki nuki*) from Arashi Kanjurō Production [Kan Pro]) , director Suzuki Momosaku (鈴木桃作 1901 ?−14 January 1941 [also as Doi Seikan 土肥 正幹]; Shinkō Kinema), and assistant director Hagiwara Ryō (萩原遼 1910 ?−3 April 1976; Nikkatsu Kyoto, formerly Makino Production). The first film crediting Kajiwara was released in July 1934: Namiki Kyōtarō's *The Detective Records of Umon: 210 days* (Umon torimonochō nihyakujūnichi). Here, his first name is 'Kinshirō' (金四郎); he still carries the character "four" in his name, and was also sometimes named 'Kinroku' (金六, the last character means 'six'), depending on how many members collaborated in the respective script and film.

Kajiwara 'wrote' or 'refined' twenty-two screenplays and/or originals, which were directed by Narutaki members or directors from the respective production studio, such as Nikkatsu's Arai Ryōhei 荒井良平 (1901−1980). Many films are based on the popular historical novels or plays by Hasegawa Shin 長谷川 (1884−1963) or Shimozawa Kan 子母澤寛 (1892−1968), many featuring wandering gamblers or fighters (*matatabi mono*). These originals already contained within their seemingly romanticist depiction of Edo-period life aspects of modern sentiments and sensibilities, as well as the gritty realism that would also distinguish the Narutaki-films, written and 'polished' by Kajiwara. Before embarking on considerations about the nature of collective or collaborative filmmaking in global and local terms, it is helpful to obtain an impression of the Narutaki gumi's output during the four years of its existence.

Annotated list of 'Kajiwara films'

1934

1. *The Detective Records of Umon: 210 days*;[6] *Umon torimonochō: nihyakujūnichi*; 右門捕物帖 二百十日
   script: Kajiwara Kinshirō 梶原金四郎
   director: Namiki Kyōtarō 並木鏡太郎
   original work: Sasaki Mitsuzō 佐々木味津三
   cinematography: Yoshimi Shigeo 吉見滋男
   cast: Arashi Kanjūrō 嵐寛寿郎 (lead); Atamayama Keinosuke 頭山桂之助; Onoe Monya 尾上紋弥; Arashi Tokusaburō 嵐徳三郎
   Arashi Kanjūrō Purodakushon 嵐寛寿郎プロダクション (Kan Puro 寛プロ)
   silent (*museihan*; 無声版) (rel.) 12 July 1934

2. *Cry of Victory*; *Kachidoki*; 勝鬨
   script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
   director: Koishi Eīchi Koishi 小石栄一
   original work: Hata Fuyukichi旗冬吉
   cinematography: Ishimoto Hideo石本秀雄
   cast: Kataoka Chiezō 片岡千恵蔵 (lead); Hanai Ranko 花井蘭子; Hayashi Seinosuke林誠之助; Onoe Kajō 尾上華丈

[5] Actor Hayama Shunsuke's (1902−?) short-lived independent company (1933−1934).

[6] When available, English titles have been taken from Jacoby (2008), otherwise these are my own translations. 'Detective Umon' was a highly popular *jidaigeki* character, with no less than twenty-nine films produced between 1929 to 1943 (Shutsū and Nagata 2008: 142−4) and later revived several times. Based on Sazaki Mitsuzō's 1929 novel *Umon Torimonochō*, Yamanda Sadao wrote the first eight screenplays about the "Japanese Sherlock Holmes", mostly embodied by Arashi Kanjirō. "210 Days" was the twelfth instalment.

Kataoka Chiezō Purodakushon 片岡千恵蔵プロダクション (Chie Puro 千恵プロ)
silent; (rel.) 13 September 1934

3. *Gantarō's Travel*;[7] *Gantarō kaidō*; 雁太郎街道
script: Mimura Shintarō 三村伸太郎
director: Yamanaka Sadao 山中貞雄
original work: Kajiwara Kinroku 梶原金六
cinematography: Ishimoto Hideo 石本秀雄
cast: Kataoka Chiezō 片岡千恵蔵 (lead); Fushimi Naoe 伏見直江; Segawa Michisaburō 瀬川路三郎; Takizawa Shizuko 滝沢静子
Kataoka Chiezō Purodakushon 片岡千恵蔵プロダクション
talkie (*tōki*; トーキー); (rel.) 29 November 1934[8]

1935

4. *Sunny Kiso Road*; *Hareru Kisoji*; 晴れる木曽路
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Takizawa Eisuke 滝沢英輔
original work: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Yo Atsuo (?) 与篤夫
cast: Ichikawa Utaemon 市川右太衛門 (lead); Himori Shinichi日守新一; Shinobu Setsuko 忍節子; Takuo Ōnishi T大西卓夫
Ichikawa Utaemon Production 市川右太衛門プロダクション (Uta Puro 右太プロ)
sound version (*saundo han* サウンド版); (rel.) 12 April 1935

5. *White Snow of Mt Fuji*; *Fuji no shiroyuki*; 富士の白雪
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Inagaki Hiroshi 稲垣浩
original work: Inagaki Hiroshi (Draft) 稲垣浩 (原案)
revision: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Takemura Yasukazu 竹村康和
cast: Ōkōchi Denjirō大河内傳次郎 (lead); Toba Yōnosuke 鳥羽陽之助; Takase Minoru 高勢実乗; Shirō Ōsaki 大崎史郎
Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
sound version; (rel.) 15 October 1935

6. *Yatappe of Seki*;[9] *Seki no Yatappe*; 関の弥太っぺ

---

[7] Yamanaka's first talkie, a *matatabi mono* (a subgenre of *jidaigeki*, depicting wandering gamblers or yakuza) based on Frank Capra's It *Happened One Night* (1934) won the *Kinema Junpō*'s Tenth Best Film of 1934 (Shutsū and Nagata 2008: 323)

[8] The variety of terms related to sound in this filmography displays the transitional nature of the film world at the time. 'Talkie', or rather 'all talkie' (*ōru tōkī*) are full-blown sound films, with the dialogue, music, and background sound audible on the soundtrack. Although experiments with sound had begun earlier, Japan's first, feature-length 'all talkie', famously, is Gosho Heinosuke's The Neighbor's Wife and Mine (*Madamu to nyōbō*, 1931), which successfully used Shōchiku's own Tsuchihashi sound system (*Tsuchihashi shiki Shōchiku fōn*). 'Sound version' (*saundo ban*) is one of the transitional permutations of not-quite sound film, with music and sound effects; 'part talkie' (*pāto tōkī*) had parts of the dialogue on the soundtrack. Silent movies continued to be made in Japan until 1937.

[9] Various Kajiwara films are based on the popular plays or novels written by Hasegawa Shin (1884−1963). 'Kid' Yata of Seki is one of his rough but longing-for-love wanderers (*matatabi*), well-beloved by readers and audiences, he reappeared various times in *chanbara* films, as well as in manga and anime.

script: Mimura Shintarō 三村伸太郎
directors: Inagaki Hiroshi 稲垣浩, Yamanaka Sadao 山中貞雄
original work: Hasegawa Shin 長谷川伸
revision: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Matsumura Teizō 松村禎三; Takemura Yasukazu 竹村康和
cast: Ōkōchi Denjirō 大河内傳次郎 (lead); Toba Yōnosuke 鳥羽陽之助; Yamamoto Reizaburō 山本礼三郎; Fukamizu Fujiko 深水藤子
Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
talkie (rel.) 14 July 1935

7. *The Chronicles of Toyotomi Hideyoshi: The Story of Lowly Tōkichirō*;[10] *Taikōki: Tōkichirō sōsotsu no maki*; 太閤記 藤吉郎走卒の巻
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Takizawa Eisuke 滝沢英輔
original work: Yada Sōun 矢田挿雲
cinematography: Fujī Harumi 藤井春美
cast: Onoe Eigorō 尾上栄五郎 (lead); Nītsuma Shirō 新妻四郎; Sugiyama Shōsaku 杉山昌三九; Taisuke Matsumoto 松本泰輔
Shinkō Kinema Kyōto Satsueijō 新興キネマ京都撮影所
sound version (rel.) 15 August 1935

8. *Slipper Samurai*;*Tsukkake samurai*; 突っかけ侍[11]
script: Jikushita Ihatsu 舳下逸発
director: Arai Ryōhei 荒井良平
original work: Shimozawa Kan 子母澤寛
revision: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Tanimoto Seishi 谷本精史
cast: Onoe Kikutarō 尾上菊太郎 (lead); Sawamura Kunitarō 沢村国太郎; Katsuragi Kōichi 葛木香一; Kitō Zenichirō 鬼頭善一郎
Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
talkie, (rel.) 25 August 1935

9. *Ketaguri Ondo Part 1*;[12] *Ketaguri ondo zenpen*; 蹴手繰り音頭 前篇
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Kintarō Inoue 井上金太郎
original work: Hasegawa Shin 長谷川
cinematography: Itō Takeo 伊藤武夫
cast: Bandō Kōtarō 坂東好太郎 (lead); Tsukigata Ryūnosuke 月形龍之介 Īzuka Toshiko 飯塚敏子 Ōuchi Hiroshi 大内弘
Shōchiku Shitakamo Satsueijō 松竹下加茂撮影所

[10] The sequel *Taitōki Tokichirō shusse hiyaku no maki* (太閤記 藤吉郎出世飛躍の巻, Shinkō) was released on 5 January 1936, albeit with a different crew (Shutsū and Nagata 2008: 323).
[11] Adaptation of Shimozawa Kan's (1892–1968) eponymous novel (1934).
[12] Adaptation of an *Ōsaka Mainichi Shinbun* serialized novel (Shutsū and Nagata 2008: 416).

talkie, (rel.) 31 October 1935

10. *Ketaguri Ondo Part 2*; *Ketaguri ondo kōhen*; 蹴手繰り音頭 後篇
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Kintarō Inoue 井上金太郎
original work: Hasegawa Shin 長谷川
cinematography: Itō Takeo 伊藤武夫
cast: Bandō Kōtarō 坂東好太郎 (lead); Tsukigata Ryūnosuke 月形龍之介; Īzuka Toshiko 飯塚敏子; Ōuchi Hiroshi 大内弘
Shōchiku Shitakamo Satsueijō 松竹下加茂撮影所
talkie; (rel.) 15 November 1935

11. *The Burglar's White Mask, Part 1*; *Kaitō shirozukin zenpen*; 怪盗白頭巾 前篇
script: Mimura Shintarō 三村伸太郎
director: Yamanaka Sadao 山中貞雄; assistant director: Ishibashi Seiichi 石橋清一[13]
original work: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Matsumura Teizō 松村禎三
cast: Ōkōchi Denjirō 大河内傳次郎 (lead); KurokawaYatarō 黒川弥太郎; Takase Minoru 高勢実乗; Toba Yōnosuke 鳥羽陽之助
Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
talkie, (rel.) 31 December 1935

1936

12. *The Unparalleled Miyamoto Musashi*; *Kaidai Musō*; 海内無双
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Takizawa Eisuke 滝沢英輔
original work: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Tamai Masao 玉井正夫
cast: Ichikawa Utaemon 市川右太衛門 (lead); Sakuma Taeko 佐久間妙子; Takei Ryūzō 武井龍三; Tamura Kunio 田村邦男
Ichikawa Utaemon Production 市川右太衛門プロダクショ
sound version; (rel.) 5 January 1936

13. *The Burglar's White Mask, Part 2*; *Kaitō shirozukin kōhen*; 怪盗白頭巾 後篇
script: Mimura Shintarō 三村伸太郎
director: Yamanaka Sadao 山中貞雄; assistant director: Ishibashi Seiichi 石橋清一
original work: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Matsumura Teizō 松村禎三
cast: Ōkōchi Denjirō 大河内傳次郎 (lead); KurokawaYatarō 黒川弥太郎; Takase Minoru高勢実乗; Toba Yōnosuke 鳥羽陽之助
Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
talkie; (rel.) 15 January 1936

[13] Ishibashi had trained under Inagaki Hiroshi (Shutsū and Nagata 2008: 265).

14. *Spring in Edo: Kin-san of Tōyama*; *Edo no haru: Tōyama zakura*; 江戸の春遠山桜[14]
    script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
    director: Arai Ryōhei 荒井良平
    original work: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
    cinematography: Tanimoto Seishi 谷本精史
    cast: Onoe Kikutarō 尾上菊太郎 (lead); Takatsu Aiko 高津愛子; Fukamizu Fujiko 深水藤子; Suzumura Kyōko鈴村京子
    Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
    talkie; (rel.) 23 January 1936

15. *Miyamoto Musashi: The Earth Chapter*; *Miyamoto Musashi: chi no maki*; 宮本武蔵 地の巻
    script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
    director: Takizawa Eisuke 滝沢英輔
    original work: Yoshikawa Eiji 吉川英治
    cinematography: Yoshimi Shigeo吉見滋男
    cast: Arashi Kanjūrō 嵐寛寿郎 (lead); Sugiyama Shōsaku 杉山昌三九; Mori Shizuko 森静子; Mōri Mineko 毛利峰子
    Arashi Kanjūrō Purodakushon 嵐寛寿郎プロダクション
    talkie; (rel.) 16 May 1936

16. *The Oil-Hell Murder; Onna koroshi: abura no jigoku*; 女殺油地獄
    script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
    director: Fujita Junichi 藤田潤一
    original work: Chikamatsu Monzaemon 近松門左衞門
    cinematography: Ishimoto Hideo 石本秀雄
    cast: Kataoka Chiezō 片岡千恵蔵 (lead); Tsukigata Ryūnosuke 月形龍之介; Shibata Arata 芝田新; Fujio Jun 藤尾純
    Kataoka Chiezō Purodakushon 片岡千恵蔵プロダクション
    talkie; (rel.) 31 July 1936

17. *Seacoast Highway*; *Umi nari kaidō*; 海鳴り街道
    script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
    director: Yamanaka Sadao 山中貞雄
    original work: Mimura Shintarō 三村伸太郎
    cinematography: Mitsui Rokusaburō 三井六三郎
    cast: Ōkōchi Denjirō 大河内傳次郎 (lead); Takase Minoru 高勢実乗; Toba Yōnosuke 鳥羽陽之助; Yokoyama Unpei 横山運平
    Nikkatsu Kyōto Satsueijō日活京都撮影所
    talkie, (rel.) 14 August 1936

18. *Araki Mataemon*; *Araki Mataemon*; 荒木又右衛門

[14] Tōyama no Kin san is a 'Robin Hood' character in Japanese folklore. Based on Edo magistrate Tōyama Kagemoto (遠山景元, 1793−1855), he is recognizable by a *sakura* tattoo on his shoulder, and appeared in numerous tales and kabuki plays, fighting for the ordinary people. Jinde Tatsurō's (陣出 達朗, 1907−1986) postwar series of novels (1955−1974) on Tōyama inspired several Tōhō films with Kataoka Chiezō in the lead, as well as numerous TV adaptations etc.

script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Hagiwara Ryō 萩原遼
original work: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
cinematography: Ishimoto Hideo 石本秀雄
cast: Kataoka Chiezō 片岡千恵蔵 (lead); Segawa Michisaburō 瀬川路三郎; Hayashi Seinosuke 林誠之助; Hara Kensaku 原健策
Kataoka Chiezō Purodakushon片岡千恵蔵プロダクション
talkie; (rel.) 15 October 1936

1937

19. *The Legend of the Sengoku Band of Robbers Part 1: Wild Beasts*; *Sengoku guntō den zenpen: korō*; 戦国群盗伝 前篇 虎狼[15]
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Takizawa Eisuke 滝沢英輔
original work: Miyoshi Jūrō 三好十郎
cinematography: Katazawa Hiromitsu 唐沢弘光
cast: Kawarasaki Chōjūrō 河原崎長十郎 (lead); Nakamura Kanemon 中村翫右衛門; Ichikawa Eimitarō 市川笑太郎; Ichikawa Mushiroshi 市川莚司
P.C.L Eiga Seisakujo Zenshin-za P.C.L映画製作所 前進座
talkie (rel.) 11 February 1937

20. *The Legend of the Sengoku Band of Robbers Part 2: Advance at Dawn*; *Sengoku guntō den kōhen: akatsuki no zenshi*n; 戦国群盗伝 後篇 暁の前進
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Takizawa Eisuke 滝沢英輔
original work: Miyoshi Jūrō 三好十郎
cinematography: Katazawa Hiromitsu 唐沢弘光
cast: Kawarasaki Chōjūrō河原崎長十郎 (lead); Nakamura Kanemon中村翫右衛門; Ichikawa Eimitarō市川笑太郎; Ichikawa Mushiroshi市川莚司
P.C.L Eiga Seisakujo Zenshin-za P.C.L映画製作所 前進座
talkie; (rel.) 20 February 1937

21. *Shamisen of the Floating World: The First String*; *Ukiyo shamisen daiichigen*; 浮世三味線 第一絃
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Arai Ryōhe i荒井良平
original work: Kunieda Kanji 邦枝完二
cinematography: Araki Asajirō 荒木朝二郎
cast: Kurokawa Yatarō 黒川彌太郎 (lead); Hanai Ranko花井蘭子; Kiyokawa Sōji 清川荘司; Ichikawa Momonosuke 市川百之助
Nikkatsu Kyōto Satsueijō 日活京都撮影所
talkie; (rel.) 1 December 1937

[15] The first PCL-Zenshin-za collaboration, drawing Miyoshi Jūrō's play *Yoshino no tōzoku* (吉野の盗賊), written for the Zenshin-za and based on Schiller's play *Die Räuber* (The Robbers 1781) (Shutsū and Nagata 2008: 691).

1939

22. *The Night Before*; *Sono zenya*; その前夜[16]
script: Kajiwara Kinpachi 梶原金八
director: Hagiwara Ryō 萩原遼
original work: Yamanaka Sadao (draft) 山中貞雄（原案）
cinematography: Kawasaki Kikuzō 河崎喜久三
cast: Kawarasaki Chōjūrō 河原崎長十郎 (lead); Suketaka Yasukezō 助高屋助蔵; Kiyokawa Tamae 清川玉枝; Nakamura Kanemon 中村翫右衛門; Chiba Sachiko 千葉早智子; Takamine Hideko 高峰秀子; Kiyokawa Tamae 清川玉枝; Yamada Isuzu 山田 五十鈴
Tōhō Eiga Kyōto Satsueijō 東宝映画京都撮影所
talkie; (rel.) 21 October 1939

Making films together

Filmmaking collectives or collaborative filmmaking — the distinction between those two concepts will play a role further on — are an interesting, but still underexplored mode of film production. When we think about filmmaking collectives, the two prime examples that spring to mind in the Japanese context are the Proletarian Film League of Japan (Prokino, 1929) and Ogawa Productions (Ogawa Pro), founded in the late 1960s and exerting a large degree of incluence on Japanese documentary filmmaking (Nornes 2003 and 2007). As seen for instance in the 'United We Stand, Divided We Fall' programme, curated by Federico Rossin at the 2012 Doclisboa documentary film festival in Lisbon, the focus is often on documentary films for their political and social-critical, radical, or anarchist concern and on the era from the 1960s to the 1980s, that is characterized by radical movements in many parts of the world. Rossin chose documentary film produced between 1968 and 1987 by collectives such as the Group Dziga Vertov, The Newsreel Collective, or Cinema Action[17]. Yet, he also points out the 'hidden history' of what he calls 'collective cinema': In fact, this mode of filmmaking began at the latest with Armand Guerra's (born as Jose Estivalis Cabo at Liria, 1886−1939) short-lived, Paris-based Cinéma du Peuple (The People's Cinema, 1913−14): 'a novel propaganda weapon for libertarians, the very first militant use of the new-born medium of film' (Jarry 2009: 1−2). The endeavour's collective nature is explained by Guerra as follows:

> Bidamant, the then secretary of the Union des Syndicats de France … spoke to me about making movies on social themes as a means of countering the inane bourgeois nonsense that all the studios were serving up to the public. Seeing this as a chance of breathing fresh life into the movies — even then! — I put it to him that

[16] A 'memorial film' with a high-profile cast by his 'disciple' Hagiwara for Yamanaka, who had passed away on 17 September 1938 (Shutsū and Nagata 2008: 708). The remaining seven Narutaki-gumi members turned Yamanaka's draft *Kiyamachi Sanjō* (木屋町三条) into the screenplay.

[17] *La Reprise du Travail aux Usines Wonder* (Jacques Villemont, 1968), *Classe de Lutte* (Groupe Medvedkine de Besançon, 1969), *À pas lentes* (Collectif Cinélutte, 1979), *Vladimir et Rosa* (Groupe Dziga Vertov, 1970), *Winter Soldier* (Winterfilm Collective, 1972), *Off the Pig* (San Francisco Newsreel, 1968), *Finally Got the News* (Stewart Bird, Peter Gessner, Rene Lichtman and John Louis Jr., 1970), *El pueblo se levanta* (The Newsreel Collective, 1971), *Red Squad* (Howard Blatt, Steven Fischler, Joel Sucher, 1972), *Un peuple en marche* (Colectivo cinematográfico de alumnos argelinos, 1963), *Caminhos da Liberdade* (Cinequipa, 1974), *L'Aggettivo Donna* (Collettivo Femminista di Cinema di Roma, 1971), *Women of the Rhondda* (London Women's Film Group, 1973), *Maso et Miso vont en Bateau* (Nadja Ringart, Carole Roussopoulos, Delphine Seyrig and Ioana Wieder,1976), *Night Cleaners Part 1* (Berwick Street Collective, 1972-1975), *So That You Can Live* (Cinema Action, 1982), *The Year of the Beaver: A Film Aout the Modern 'Civilised' State* (Poster Film Collective, 1982), *Territoires* (Isaac Julien, 1984), *Handsworth Songs* (John Akomfrah, 1986), *Vai Viegli Būt Jaunam?* (Juris Podnieks, 1987).

> we should launch a Cooperative among the working class by offering shares at 25 francs apiece … two months after our conversation, I was installed in the Paris studios of Lux Film in the Boulevard Jourdan, shooting my first movie for the Cinéma du Peuple Cooperative, with a budget of 500,000 francs (raised through 20,000 shares at 25 francs apiece) (Guerra 2009: 10).

As a limited liability cooperative company, the Cinéma du Peuple utilized the new technology of cinema for worker's liberation, class-struggle, and social transformation. Its foundation charter clearly expresses this calls to arms and to solidarity: 'The company would strive to improve the intellectual levels of the people. It would remain in ongoing like-minded communion with whatever sections of the proletariat that made their stand on the basis of class struggle and whose aim was to do away with wage slavery by means of an economic transformation of society (Jarry 2009: 2−3). To this means, precisely because they were intended as 'antidotes' to what the steering committee identified 'the trashy cinemas which … foster with their unwholesome productions a propaganda that stultifies the worker and peasant class' (ibid: 5), the Cinéma du Peuple's films were dramas as well, rather than the documentary style usually connoted with politically motivated, collaborative filmmaking.

Rossin points out the global proliferation of collectivist cinema in the 1920s and 1930s, such as Prokino in Japan (1929−34), and Aleksandr Medvedkin's Film-Train in the Soviet Union (1933−4) , and in the United States the Workers Film and Photo League (1930−4), Nykino (1935−7) and Frontier Film Group (1936−42) (in Phelps 2012: 101). Looking at the time of their activity, it is clear to see that, like their more prominent postwar counterparts, 'these collectives were born during an economic and social crisis' (ibid.). And they were, indeed, in many ways a reaction to this crisis, which is why Rossin urges us to consider them 'both as aesthetic objects and political tools' (ibid.). Political documentaries thus lead us 'back to a strong and deep belief in the real, in the world, in the people. Cinema is not just a dream machine: it can be a strong mean to understand, analyze and change reality' (ibid.: 102) . And 'cinema' as the terminus operandi provides the connection to the Narutaki gumi. In taking on and transforming a popular and time-honoured genre to respond to current sensibilities and concerns, despite the doubtlessly often plainly enjoyable work and entertaining product, they nevertheless changed aesthetics sensibilities and thus, on a small scale, the world. Having high-class samurai suddenly speak the upper-class style of speech of the high-brow dwellers of the Yamanote area in Tokyo, and peasants use the Shitamachi (Downtown) dialect, clearly brought the past into the present and the current class system into the light. By depicting legendary heroes or the descendants of respectable nobility as humane, lazy, lustful, or greedy, they participated in debates about social hierarchies. Although, clearly, the James Maki as well as the Kajiwara Kinpachi collaborations were far less overtly political, nor 'collectives' in the more narrow sense as for instance with Guerra or Ogawa's groups, they and their collaborative work nevertheless originates in similar external circumstances, and, following Standish's argument (2005: 43), in observing and commenting on contemporary events and situations, they must be seen as political as well, albeit on a different spectrum.

Having thus established a historically sensitive contextual framework in which to locate the Narutaki gumi, we can go on to examine the way that their collaboration impacted on their films. How was a 'Kajiwara' film directed by Yamanaka for instance, different to a films scripted by somebody else? This question will be tackled in the research project's second stage, but as a preliminary observation, Phelps's typology of collectivist film — adjusted to the less consciously or overtly political Narutaki group — can help to shed a light on the matter. He proposes two types of collectivist film: '1) one that seeks to erase the differences between its members in favor of a propagandistic position and pitch, and 2) one that seeks to promote differences by facilitating discussion and debate among members' (2012: 105). This concept points towards the important question of authorship. While, in its ideal permutation, the collective seems to promise a way to erase the problematic concept, human nature to always come back to the notions of power and hierarchy. This has been pointed out, for instance, by Nornes with regard to Ogawa Productions, which, after all, even bore Ogawa Shinsuke's name (2007: 181). 'In every collective the question of power was the core' (Rossin, in Phelps 2012: 101), but the issue is, perhaps, how this question was answered, the use this 'power' was put to. The Narutaki group clearly had some core-members, the most prominent one being Yamanaka Sadao, and it is perhaps telling that his death was one of the reasons for the group to dissolve. As another core member, Inagaki Hiroshi points

out, Kinpachi's scripts had a distinct Yamanaka-like flavour to them (1983: 174). On the other hand, the use of a pen name, as pointed out before, did not erase the question of the author, but posited an author who was a simulacrum and therefore could neither be pinned down entirely nor exert the discursive power usually connoted to this construct. Hence, despite their collaborative nature, Kajiwara as well as Maki here differ from the framework of collectivist cinema established above. Yet, and also with regard to the question of political concerns and objectives, another of Rossin's classifications of collectivist cinema is of importance: The special relationship between the filmmakers and the actors. Rossin observed that in many 'collectivist films' the 'actors seem to take over the movie not only by determining how they act, but often by being the filmmakers themselves' (Rossin, cited in Phelps 2012: 101). Many of the Narutaki members, as not unusual in the film world, had experience as actors, but they did not act in Kajiwara films. However, there clearly was a significant, symbiotic and fruitful exchange between actors and filmmakers, and the issue of which kind of actors Kajiwara Kinpachi collaborated with is an important one: 'The burning life of both [actors and filmmakers] is the very core of collectivist cinema: they wanted to change their life, the present, the cinema itself' (ibid.).

Filmmakers and actors

To put Rossin's remark about the strong connection between actors and filmmakers in collectivist cinema into local perspective, it is important to keep in mind that, also due to its strong studio system, Japanese filmmaking displays a high degree of personal continuities (think Kurosawa's work with Mifune Toshiro and Hashimoto Shinobu, or Ozu Yasujirō and his 'muse' Hara Setsuko, for instance). In the case of prewar *jidaigeki*, this tendency is also based in the specialized studio structure, with production companies dividing cast, crew, and locations along the *jidai geki*/*gendai geki* generic line. Particularly after the devastation caused by the Great Kanto earthquake of 25 September 1923, which largely destroyed the film production facilities in Tokyo — apart from the Shōchiku Kamata Studios — the big studios entertained production facilities for *jidai geki* in Kyoto, and shot their *gendai geki* in newly erected Tokyo, and many smaller studios specialized in either genre. Therefore, the very physical divide caused a 'stable' formation of cast and crew for each genre within each studio. While this lead to a high degree of specialization, in 1933, prominent writer and director of *jida geki* Itami Mansaku strongly criticized the division: Wondering about the high percentage of *jidai geki* produced and the attraction of the genre, he considered the preference for period films as indicative of a mindset peculiar to the Japanese. He observed that no other nation divides film into 'contemporary' and 'non-contemporary' (*higendai*) films or keeps up such strict divisions between genres in terms of production, personnel and studios. Itami was critical of the obstructions this caused to a 'sound' development of the domestic film industry, since these structures were inefficient economically, and considered at the most one or two specialist advisors on the depiction of past life styles (*seikatsu yōshiki*) per studio as necessary (1961 [1933]: 25).

From the above description, the strict studio structures become obvious, a tendency which — despite several attempts by filmmakers to overcome the studios' power— would only increase in the following years with the increased competition following the rise of Tōhō as a film producer and the governmental measures to streamline production. Hence, Kajiwara crossing studio lines is noteworthy, but also — with regard to the Narutaki gumi advancing the genre of *jidaigeki* — it is significant that they partnered up with the Zenshin-za (前進座, 'forward advance'; progressive) theatre troupe, which had been founded on 22 May 1931 with the explicit aim of disrupting the 'feudal', unequal hierarchical structures of kabuki and the theatre world. Just like the Narutaki-gumi innovated the *jidai geki* genre (as to be examined in detail in this research project's next stage), the Zenshin-za greatly contributed to the development of the modern Japanese theatre (Powell 2002: 167), and they were the 'acknowledged stage experts in modern language in period settings' (Thornton 2008:113).

In 1929, several kabuki actors formed the Taishū-za (Theatre of the Masses). Closely connected to the Marxist movement, the young Taishū-za members mostly came from low-status kabuki families, and in the wake of the economic depression and the downturn in the entertainment business, had experienceds salary cuts and redundancies

(Powell 2002: 173).[18] The new troupe was eventually founded as a way of self-protection. They were joined in their efforts by members of another, disbanded kabuki troupe, the Kokoro-za that performed both *shin geki* and kabuki plays and had close connections to the proletarian drama movement. Eventually, these two troupes and some members of another acting family set up the Zenshin-za. Their aim was to establish a working environment based on equality and cooperation, and merit rather than lineage. While they had their star actors, they placed emphasis on ensemble plays and, in the beginning, on credits in alphabetic, rather than order of prestige. Upon their foundation on 22 May, 1931, the Zenshin-za consisted of thirty-two members, who continued performing *shin geki* and kabuki as well as their links to the proletarian movement.[19] At the time, the three leader figures in the troupe were Kawarazaki Chōjūrō IV (河原崎長十郎1902−1981), Nakamura Kanemon III (中村翫右衛門1901−1982), and Kawarazaki Kunitarō V (河原崎国太郎 1909−1990), other influential members included Arashi Yoshizaburō V (嵐芳三郎, 1907−1977) , Fujikawa Hachizō VII (藤川 八蔵, 1906−1974), Segawa Kikunojō VI (瀬川 菊之丞, 1907−1976), and Bandō Chōemon (坂東 調右衛門, 1896−1982). Although the group had to face the harsh real-life conditions and compromise some of their principles — such as alphabetic cast list — early on,[20] they did establish other aims with regard to work as a collective. In 1937, they set up a 'study centre' in Tokyo's western Kichijōji area, in which the members worked, practiced, and lived together (Nakamura 2013: 13); the 'establishment of communal life [being] the most significant reform of Zenshin-za' (ibid.: 183) and communal living being one of the prime aspects of collective work, as also for instance with Ogawa Pro.

This centre became possible financially also because of the eventual commercial success of the group's participation in film productions. Starting in 1933 with *Danshichi in the Rain* (Danchichi shigure, Koishi),[21] Zenshin-za's film operations were very profitable for the company (Powell 2002: 176). *Danshichi*, like many of the later Kajiwara films, is based on an eponymous novel by Hasegawa Shin (1933, note the quick turn-over into a film adaptation), which later Narutaki key member Inagaki Hiroshi turned into a screenplay.[22] In an interview with Sybil Thornton, Inagaki disclosed that Zenshin-za 'bad boy' Nakamura Kanemon was his favourite actor (as well as Hasegawa's), and not only did he write the screenplay for the Zenshin-za's first film venture, but also assisted in directing their second film, another Hasegawa adaptation, *Jirocho of Shimizu* (Shimizu Jirōchō, 1935, Ikeda)[23] (2008: 113). In the same year, Yamanaka Sadao also collaborated with the troupe for his *Village Tattooed Man* (Machi no irezumi mono) heralding the start of the Zanshin-za's profitable collaborations with Nikkatsu (and later Tōhō) as well as the Narutaki gumi, although, as seen before, the connection between the members predates the scriptwriting collaboration's foundation. It was the commercial success of the Kajiwara Kinpachi two-parter *The Legend of the Sengoku Band of Robbers* (Sengoku guntō den, Takizawa) in 1937 that enabled the Zenshin-za to set up their research center (Nakamura 2013:13).

Filmmaking collaborations' often 'burning' incentive to 'change their life, the present, the cinema itself' (Rossin, cited in Phelps 2012: 101) can be observed in the activities of the Zenshin-za, the Nartuaki gumi's innovations that made the genre responsive and relevant to contemporary concerns and their crossing of studio lines, specifically within the industrial context of the Japanese film industry that increasingly saw a monopolizing of the business and a stifling of

[18] On the development of 'communist' kabuki see Powell (2002).
[19] After the war, almost all members joined the Japanese Communist Party (see Powell 2002).
[20] See also Brandon on their wartime work (2003).
[21] The production company for *Danchichi in the Rain* was Dai nippon jiyū eiga purodakushon (大日本自由映画プロダクション) . This was the second incarnation of early film superstar Bandō Tsumasaburō's (阪東 妻三郎, 1901−1953) production company. Bandō set up his Tsumasaburō Purodakushon in Uzumasa in 1925, at the height of his fame, producing over 130 films and even setting up a short-lived joint production company with American Universal. In 1931, the company moved to Chiba and rebranded as Dai nippon jiyū eiga purodakushon. This first independent company by a Japanese actor eventually was dissolved in 1936 and Bandō joined Nikkatsu one year later (www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/makino/aruke/aruke10.html; accessed 22 January 2020).
[22] *Homeless Danchichi and the Rainy Day Umbrella* (Yadonashi Danshichi shigure no karakasa) is a 1767 kabuki play by Namiki Shōzō (1730−1773).
[23] Based on real-life Yamamoto Chogoro (1820−1893), Shimizu no Jirōchō is one of Japan's Robin Hood-style gangster/folk heroes. Ikeda's is the seventeenth of eighteen Jirōchō-themed films produced between 1912 and 1953 (the eighteenth was directed by Namiki in 1952) (jmdb.com).

competition.

The film industry experienced tumultuous times: On the one hand, the state on the way towards more control increasingly interfered, on the other hand there were movements towards free competition and greater autonomy of individuals versus oppressive studio contracts, On 26 February 1936, these contradictory currents met in Tokyo: with the attempted coup d'état that aimed at increasing military control over the government and set Japan on the path to total war, and the inaugural meeting of the Directors Guild of Japan (Nihon Eiga Kantoku Kyōkai). Narutaki members Inagaki and Yamanaka were part of the union — initially for fiction film directors, but later opening to documentary film makers as well — that aimed at increasing their member's rights and their independence from the business and the big studios (www.dgj.or.jp/about/; accessed 02 March 2020). In retrospect, this move towards independence and free competition in connection with the looming subsumption of the film industry under state control with the aim of wartime mass mobilization evokes the image of a discursive threshold.

The film world, still in 1936, saw the opportunity to change their circumstances, as seen for instance with the establishment of the independent Film Association 'Rengō Eigasha' (R.E.S.) in Kyoto in late April 1936 by Inagaki's friend and mentor Itami Mansaku, director Nobuchi Akira, prominent *jidai geki* actor Tsukigata Ryūnosuke and producer Morita Nobuyoshi (*Yomiuri Shinbun* 1936a).[24] Yet, R.E.S. failed almost immediately because Morita joined the newly-emerging 'Tōhō Block' in July 1936 (Shutsū and Nagata 2008: 1086). Tōhō's meteoric rise, following Kobayashi Ichizō's gaining control of P.C.L. and J.O. in 1935 and the formation of the Tōhō Motion Picture Distribution Corporation in the following year provoked countermeasures: Shōchiku, its subsidiary Shinkō, Nikkatsu, and Daito Eiga had formed the so-called Yonsha Renmei (Y.S.R.), 'a four-company agreement which had as its unwritten aim a complete boycott of Toho' (Anderson and Richie 1982: 85).[25] The means employed by Y.S.R. resulted in a decline of Tōhō theatres, in turn evoking retaliation by Tōhō (Nakayama 2011: 33). A contemporary newspaper article captures the general atmosphere, using martial terms like 'enemy number one for Nikkatsu and Shōchiku' and 'financial war' (*Yomiuri Shibun* 1936b). Eventually, this development led to the formation of two, almost equally powerful blocks, as many of the small, independent companies concluded contracts with Tōhō, out of fear of a 'dictatorship' by the trust (Körber-Abe 2010: 24).

These are the conditions the Narutaki gumi operated under and, strikingly, transversed studio lines. But these are also the conditions that led to the famous star-stealing (*hiki nuki*, lit. 'pulling out') episodes, a related anecdote of which shall conclude this research note: When Hayashi Chōjirō (aka Hasegawa Kazuo, 1908−1984) was lured away by rather dubious methods from Shōchiku to Tōhō in September 1937: 'even amongst the rising clamor of the China incident, the newspapers found space to howl at his ingratitude and perfidy' (High 2003: 154). Two months later, Hayashi became victim of a knife attack that left his left cheek permanently scarred. The suspicion that Shōchiku was involved in this attack on the highly popular actor shifted public sympathy to Tōhō's side (Anderson and Richie 1982: 86−88). The matter at hand, for Itami Mansaku commenting on the practice of star-stealing and the blaming of the actors, is that the companies are in the positions of power, not the actors and directors (Itami, 1961 [1936]). Hence, the blame for unscrupulous methods should go to them, rather than to the 'passive' partners in these transactions, who ultimately depended on the companies either reaching out for or rejecting a person:

> 'Thinking about the origin of the word *hiki nuki* … namely the nominative case of the transitive verb *hiki nuku*, the subject is always the company; the actors and directors are only ever the objects … Long story short, the law punishes the man who pulls out a radish in some field, it never punishes the pulled-out radish' (Ibid.).

On a less somber note, Inagaki remembers that, due to the high popularity of Kajiwara Kinpachi films (and if course within the competitive atmosphere in the film world described above), Shōchiku Head Kido Shirō (1894−1977)

[24] In this context, Shutsū and Nagata refer to Morita establishing the 'Film People's New Village' (*Eigajin atarashiki mura*) (2008: 1086). I found no further reference to this group but, subject to evidence indicating otherwise, assume it to be identical to the Rengō Eigasha.
[25] The Y.R.S. was, of course, not the first trust to be formed in Japan in order to hold competition at bay, the earliest one being established in 1910 and resulting it the formation of Nikkatsu in 1912.

— the initiator of the Narutaki *jidai geki* contemporary *shoshimin eiga* counterpart — ordered his Head of Production Ōkubo Tadamoto (1894−?) to '*hikinuku*' Kajiwara (Inagaki 1981: 176). Apparently, Ōkubo was one step ahead of Kido with regard to insider information, and replied that this plan would likely be very costly, as it concerned eight people after all (ibid.).

Clearly, in terms of authorship, Kajiwara presented a coherent, desirable image. Inagaki even drew a 'composite image' of Kajiwara for a magazine, 'morphing' all eight members into one bespectacled, strong-jawed man with a moustache. Because of Yamanaka Sadao's strong impact on the scripts, nobody did object to the fact that Kajiwara looked a lot like Yamanaka (ibid.).

Groups, however, 'communist', 'collective, 'equal' etc. they might be, seem to rely on key members. Yamanaka clearly was one of those, and his untimely death contributed to the end of the Narutaki gumi, just like Ogawa Pro dissolved soon after Ogawa's Shinsuke's early death at the age of fifty-five, on 7 February 1992 (Nornes 2007: xv). Famously and tragically, Yamanaka received his 'read note' (*aka gami,* draft card) after the premiere of his *Humanity and Paper Balloons* on 25 August 1937. Like his friend and mentor Ozu Yasujirō, he was sent to the front in China, where he passed away of a bowel infection on 17 September 1938. However, it was also the move of various group members from Kyoto to several Tokyo Studios (Yamanaka and Takizawa had changed to P.C.L.) and the problems encountered by their idiosyncratic take on the nation's past in the context of increasing wartime propaganda that changed the conditions under which their collaboration had thriven.

Compared to more obvious, 'classic' instances of collective filmmaking, the Narutaki group and their work appears far less educational or, indeed, radical. Their approach clearly centered on making entertaining films, but they also reflected and commented on contemporary conditions. Their very last film *The Night Before* (Sono zenya, 1939), already produced within the Tōhō Block, however, moves their work towards the more radical: The remaining seven members turned Yamanaka's final draft, titled *Kiyamachi Sanjō* into a Kajiwara screenplay. Their memorial film for Yamanaka, directed by his disciple Hagiwara, premiered on 21 October 1939, and is a 'forceful indictment of the devastating effects of war and nationalistic fanaticism on the average man, who, in the face of the absurdity of violence, is reduced to apathy or victimhood' (Jacoby and Nordström 2017). A reviewer for the *Kinema Junpō* wrote that 'the film's Yamanaka-like darkness left the viewer with nothing but despair'(cited in ibid.), reflecting the circumstances of the film's coming into being. It is in this way that the Narutaki films also spoke to the current conditions, eloquently in their taking up contemporary aesthetics and sensibilities in their layering of past and present. But they left us with much more than 'despair', and their legacy to the Japanese cinema must not be underestimated, as will be the focus of this project's further stages.

Iris Haukamp
Tokyo University of Foreign Studies

Works Cited

Anderson, Joseph L. and Donald Richie. 1982. *The Japanese Film: Art and Industry*. Princeton, N.J: Princeton University Press.

Aoki, Tamotsu. 1999. *Gendai nihon bunka ron (7): Taishū bunka to masumedia*. Tokyo. Iwanami Shobo.

Brandon, J. R. (2003). 'Kabuki and the War of Greater East Asia, 1931−1945. *Mime Journal*: 18−39.

Gerow, Nornes and Iwasaki. 2018. *Nihon senzen eigaronshū: eigariron no saihakken*. Tokyo: Yumani shobo.

Guerra, Armand. 'A note on the Ucce Cooperative', in Richard Porton (ed.), *Arena One: Anarchist Film & Video*, Oakland, CA: PM Press: 9−11.

Hasumi, Shigehiko 1985. *Eiga ha ikani shite shinu ka*. Tokyo: Firumu Āto sha.

High, Peter B. *The Imperial Screen: Japanese Film Culture in the Fifteen Years' War, 1931−1945*. Madison: University of Wisconsin Press, 2003.

Inagaki, Hiroshi. 1981. *Hige to chonmage: ikiteiru eigashi*. Tokyo: Chūō kōron sha.

Inagaki, Hiroshi. 1983. *Nihon eiga no wakaki hibi. Tokyo*: Chūō kōron sha.
Ishiwari, Osamu, Toshiro Maruo, and Yukinori Yokoyama. 2002. *Nikkatsu jidaigeki*. Tokyo: Waizu Shuppan.
Ishiwari, Osamu, Toshiro Maruo, and Hojji Tani, eds. 2005. *Hajime ni kigeki ariki : Shimizu Hiroshi, Ozu Yasujirō, Naruse Mikio, Yamanaka Sadao, Itami Mansaku soshite Saito Torajiro*. Tokyo: Waizu Shuppan.
Itami, Mansaku. 1961 [1933]. 'Jidai eiga no sonzairiyū ni tsuite.' in Shiga Naoya (ed.) *Itami Mansaku zenshū* Vol. 1: 25−31. Tokyo: Chikuma Shobō, 1961 (original publication: *Asahi Shinbun* serialised April 20−22 & 25−26,1933).
Itami, Mansaku. 1961 [1936]. 'Eiga kai tejika no mondai.' in Shiga Naoya (ed.) *Itami Mansaku zenshū* Vol. 1: 72−83. Tokyo: Chikuma Shobō, 1961 (original publication: Kaizō, August 1936).
Iwasaki, Akira. 1961. *Eigashi*. Tokyo: Tōkyō Keizai Shinpōsha.
Jacoby, Alexander. *A Critical Handbook of Japanese Film Directors: From the Silent Era to the Present Day*. Berkeley, Calif.: Stone Bridge Press, 2008.
Jacoby, Alexander and Johan Nordström. 2017. 'Sono zenya'. *Il Cinema Ritrovato*. Available online: https://festival.ilcinemaritrovato.it/en/proiezione/sono-zenya/ (accessed 29 February 2020).
Jarry, Eric. 2009. 'The Cinema Du People Cooperative Venture', in Richard Porton (ed.), *Arena One: Anarchist Film & Video*, Oakland, CA: PM Press: 1−7.
Katō, Tai. 2008. *Eiga kantoku Yamanaka Sadao*. Tokyo: Kinema Junpōsha.
Körber-Abe, Sven. 2010. 'Japans Filmanfänge - Teil 2: Industrie und staatlicher Einfluß.' *OAG Notizen* 6: 10−48.
Kuwabara, Yoshihiro. 2007. 'Itami Mansaku to Yamanaka Sadao no kigekikan.' *Aesthetics Review* 22 1−16.
Nakamura, Umenosuke. 2013. *Zenshin-za no hachijū nen*. Tokyo: Asahi Shinbun Shuppan.
Nakayama, Namida. 2011. *Asakusa geinin: Enoken, Roppa, Kinchan, Takeshi, Asakusa Eingei 150 nenshi*. Tokyo: Mynavi.
Nornes, Abé Markus. 2003. *Japanese Documentary Film: The Meiji Era Through Hiroshima*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
Nornes, Markus. 2007. *Forest of Pressure: Ogawa Shinsuke and Postwar Japanese Documentary*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
Phelps, David. 2012. 'A brief history of radical film collectives from the 1960s to the 80s: Interview with Federico Rossin on the retrospective 'United We Stand, Divided We Fall', *Cinema Comparat/ive Cinema* 1(1): 100−107
Phillips, Alastair and Julian Stringer (eds). 2007. *Japanese Cinema: Texts and Contexts*. New York: Routledge.
Powell, Brian. 2002. 'Communist kabuki: A contradiction in terms?', in Samuel Leiter (ed.) *A Kabuki Reader: History and Performance*, 167−85. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe, 2002.
Rayns, Tony. 2010. 'The Only Son: Japan, 1936', *Criterion Collections*, Available online https://www.criterion.com/current/posts/1511-the-only-son-japan-1936 (accessed 2 February 2020)
Richie, Donald. 2005. *A Hundred Years of Japanese Film*. New York: Kodansha, 2005.
Sazaki, Mitsuzō. 1929. *Umon torimonochō*. Tokyo: Dai nihon yūben kodansha.
Sharp, Jasper. 2011. *Historical Dictionary of Japanese Cinema*. Lanham: Scarecrow Press.
Schiller, Friedrich. 1781. *Die Räuber*. (First performance: 13 January 1782)
Shutsū, Akio and Tetsurō Nagata. 2008 *Nihon gekieiga somokuroku: Meiji 32-nen kara Shōwa 20-nen made*. Tokyo: Nichigai Asoshietsu, Hatsubaimoto Kinokuniya Shoten.
Spalding, Lisa. 1992. 'Period films in the prewar era.' in Arthur Nolletti, and David Desser (eds) *Reframing Japanese Cinema: Authorship, Genre, History*, 131−44. Bloomington: Indiana University Press.
Standish, Isolde. 2005. *A New History of Japanese Cinema*. London: Continuum.
Sugibayahi, Takashi. 2003. *Shōwa senjiki no nihon eiga kantoku to eizō hyōgen*. Tokyo: Chōei sha.
Thornton, Sybil Anne. 2008. *The Japanese Period Film: A Critical Analysis*. Jefferson, N.C.: McFarland.
Tomita, Mika, ed. 1997. *Chie Puro jidai: Kataoka Chiezō, Inagaki Hiroshi, Itami Mansaku: shadatsu ni, entāteinmento*. Tokyo: Firumu Ātosha.
Wilson, Sandra. 2002.*The Manchurian Crisis and Japanese Society, 1931−33*. New York: Routledge.
Yamada, Kōichi. 2005. *Nani ga eiga o hashiraseru no ka*. Tokyo: Sōshisha.

Yamamoto, Kikuo.1980. *Amerika eiga to jiyū shugi jidai: Yamamoto Sadao no matatabi mono o megutte*. Firumu sentā 59: 33−40.

Yomiuri Shinbun. 1936a. 'Rengō eiga sha'. 19 May 1936: 5.

Yomiuri Shinbun. 1936b. 'Sensen mata ijō: shihon hyakumanen no shineiga kaisha-Takarazuka no Kobayashi-shi ga shinShutsū'. 7 June 1936: 7.

Yoshimoto, Mitsuhiro. 2000. *Kurosawa: Film Studies and Japanese Cinema*. Durham: Duke University Press.

Zenshin-za. 2001. 'Zenshin-za no rekishi'. Available online: http://www.zenshinza.com/infomration/rekishi/history.html (accessed 25 December 2019) [citing Zenshin-za. 2001. *Gurafu zenshin-za: sōritsu nanajū shūnen kinen*].

Films

Crisis Time Japan (Hijōji Nippon). 1933. Kondō Iyokichi. Mainichi.

Danshichi in the Rain (Danchichi shigure). 1931. Koshi Eiichi. Dai nippon jiyū eiga purodakushon.

Days of Youth (Gakusei romansu: wakaki hi). 1929. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

Dreams of Youth (Wakado no Yume). 1931. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

Dragnet Girl (Hijōsen no onna). 1933. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

Genius Scriptwriter Kajiwara Kinpachi (Tensai kyakuhonka Kajiwara Kinpachi). 2014. Ukita Nao. Jidai geki senmon channeru.

Humanity and Paper Balloons (Ninjō kami fusen). 1937. Yamanaka Sadao. Shōchiku?

I Was Born But (Umarete was mita keredo) 1932. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

It Happened One Night. 1934. Frank Capra. Columbia Pictures.

Jirocho of Shimizu (Shimizu Jirōchō). 1935. Ikeda Tomiyasu. Uzumasa Hassei Eiga.

Passing Fancy (Dekigokoro). 1933. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

The Neighbor's Wife and Mine (Madamu to nyōbō). 1931. Gosho Heinosuke. Shōchiku.

The Night Before (Sono zenya). 1938. Hagiwara Ryō. Tōhō.

Priest of Darkness (Kōchiyama Sōshun). 1936. Yamanaka Sadao. Nikkatsu (Uzumasa hassei eiga).

Rashomon (Rashōmon). 1950. Kurosawa Akira. Daiei.

Samurai Shifters (Hikkoshi Daimyō!). 2019. Inudō Isshin. Shōchiku.

Tokyo Chorus (Tokyo no kōrasu). 1931. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

Tokyo Story (Tokyo monogatari). 1953. Ozu Yasujirō, Shōchiku.

Twilight Samurai (Tasogare Seibei). 2002. Yamada Yōji. Shōchiku.

University is a Nice Place (Daigaku yoi toko). 1936. Ozu Yasujirō. Shōchiku Kamata.

Village Tattooed Man (Machi no irezumi mono). 1935. Yamanaka Sadao. Nikkatsu Kyoto.

寄せ場／東アジア／被抑圧人民のシュタイ

――日雇全協結成前夜の山岡強一

Yoseba, East Asia, and Oppressed *shutai* (subject)：
Examining Texts of Kyoichi Yamaoka on the Eve of Establishing The National Council of Workers' Unions of Japan

友常 勉

This paper aims to deal with documents written by Kyoichi Yamaoka (1940-1986), one of the leading activists in *Yoseba* (street day laborer market) in the 1980s, in which Yamaoka focused on the policies regarding day laborers' movement and class struggles, and the formation of subjectivity in *Yoseba* around 1980-81. In *Yoseba* labor movement, day laborers were defined as *Ryudo-teki Kaso-roudosha* (unstable underclass laborers) in the texts of Shuji Funamoto (1945-1975), a representative activist in *Yoseba* class struggle and the revolutionary movement of the 1970s. The labor formation of day laborers' market in *Yoseba* has been characterized as a racialized structure based on the historical trajectory of the construction industry in Japan, especially the multilayered subcontracting system of the labor market determined by Japan's imperialism, colonialism in the pre-and during war time, and the postcolonial situation after the Asia-Pacific war. The conventional discourse of the revolutionary movement in *Yoseba* emphasized that the liberation for the day laborers would be realized only through the solidarity between formerly colonized ethnic minorities such as Koreans, Okinawans, indigenous Ainu and Buraku, and the Japanese as former colonizers. In terms of the subjectivity of day laborers, although the discourse was clear for activists of the 1970s such as Funamoto, the occurrence of a change in *Yoseba* in the late 1970s and the early 1980 became obvious. After the end of economic growth in the mid1970s, the population of day laborers in *Yoseba* hollowed out and were instead peripheralized and dotted as temporary workers those who did not necessarily concentrate in *Yoseba*. It meant that the place where the possibility of a revolutionary movement, shouldered by formerly colonized or stigmatized victims, dissolved. It is the change that Yamaoka had to struggle with and faced the theoretical and practical question of how to organize identity of subjectivity of *Yoseba* day laborers under the situation of hollowing-out of the place. This paper demonstrates Yamaoka's struggles to organize the *Yoseba* labor and the revolutionary movement in crisis by referring to the epistemological and theoretical apparatus of Naoki Sakai of *shutai,* and tries to articulate the political conditions on the eve of establishing The National Council of Workers' Unions of Japan as a breakthrough moment in the *Yoseba* movement in the early 1980s.

【キーワード】寄せ場、山谷、山岡強一、船本洲治、山村建設会社労働争議、済州 4・3 事件
Yoseba, Sanya, Kyoichi Yamaoka, Shuji Funamoto,
Labor dispute with Yamamura Construction Company, Jeju Uprising in April 3rd

はじめに

本稿は、寄せ場の労働運動のリーダーであった山岡強一の 1980-81 年のテキストを中心に、寄せ場に

おける流動的下層労働者の労働運動と階級闘争の方針およびその主体をめぐる山岡強一の省察を取り扱う。1980 年代の寄せ場の言説とはいえ、本稿が検討する山岡のテキストは、1970 年代の寄せ場の活動家であった船本洲治のテキストの読み込みを通して書かれており、その意味で 1970 年代の寄せ場の言説も同時に扱うことになる。当然ながら活動家たちのテキストは、彼ら・彼女らが活動する政治闘争・労働運動の場の語彙に規定されている。それゆえまずこれらのテキストを構成している言説の歴史的なシンギュラリティを示しておく必要があろう。

まず留意する必要があるのは、寄せ場の日雇労働者―船本らはそれを「流動的下層労働者」と定義した―の階級闘争の発展のために、山岡は〈東アジア〉および東アジアの〈被抑圧人民〉という枠組みを常に参照していることである(友常、2019 : 46-60)。建設下請け労働に従事する下層労働市場の日雇労働者＝流動的下層労働者は、下請け業者や手配師・建設資本による日常的な搾取と支配に対抗して、労働争議に訴え、あるいは時に暴動に参加する。マルクス主義的な政治闘争の枠組みにもとづいて、彼ら・彼女らには、その政治経済的な支配から自らが解放されるために、プロレタリア階級としての普遍的な認識と立場を獲得することが期待されるが、その際に必要とされる政治的経済的な図式 scheme が、ここでは〈東アジア〉であった。1980 年代までは少なくともリアリティのあったこの〈東アジア〉という図式は、戦後および冷戦期を通じて、アメリカによる政治的軍事的支配が及んだ太平洋地域までを考慮すれば、時代的制約を帯びた図式である(Shigematsu・Kamacho 2010)。ただし日米安保体制のもとでの当該地域の軍事化、さらに天皇・天皇制を旗印とした戦前日本帝国主義の「大東亜共栄圏」の範囲で植民地化された歴史的経験と、その戦後責任を告発する政治的意味もまたここには含意されていた。それゆえ本稿でもこうした歴史的制約を帯びた〈東アジア〉という枠組みを、山岡のテキストの用法にしたがって参照する。

ただし、〈東アジア〉という枠組みには、1980 年代に比して、ポスト植民地主義状況という観点から、今日では新たな政治的課題が問われるようになったことも指摘しておきたい。それは図式としての東アジアとでもいうべき視角である。

27 万人の島民のうち約 3 万人が虐殺された 1948 年の済州島 4・3 事件において、南朝鮮労働党の指導のもと、ハルラ山にたてこもってゲリラ闘争をつづけた「武装隊」は、今日でも追悼の対象になっておらず、依然として正当な扱いが宙づりにされたままである(文京洙、2018)。これにかかわって、2019 年 12 月 19 日・20 日に東京外国語大学で開催されたワークショップで、金東炫は、「犠牲者の選別」をめぐるこの争点を含めて、4・3 事件の解明のためには、「地域の言葉によって、地域の歴史を語る」ことが必要だと語った [1]。継続する植民地主義とその抑圧を意味するポスト植民地主義状況を乗り越え、歴史的経験を明るみに出すためには何よりも地域の言語で語ることが必要だというのである。ポスト植民地主義的状況において、当該地域の人々にとっての解放とは何か、それはどのように可能かという課題に照らして、金東炫の提起はもっとも困難であり、それゆえすぐれて実践的である。具体的には、南朝鮮労働党の蜂起を、済州島民の大衆運動とその気運と不可分なものとして理解すること、それによって済州島蜂起を빨갱이(パルゲンイ、アカという意味)の陰謀論だとする、ひとつの通説を覆すこと、それは南朝鮮労働党の批判と評価も伴うこと、そして無垢の犠牲者も「武装隊」も等しく歴史の主体として位置づけること――そのためには、当事者たちや事件の遺族たちの記憶をたたき起こすことが必須である。

しかも、この提起と、済州島をめぐる現在の政治的状況が交差している。済州島は軍港・軍用空港と

[1] 東京外国語大学国際日本研究センター主催「済州島 4・3 事件と沖縄をつなぐ」国際ワークショップ＆講演会(2019 年 12 月 19 日・20 日)における金東炫(済州大学校)の発言にもとづく。

して活用されようとしており、海洋帝国をめざす現代の韓国資本主義国家との闘いの最前線でもある。済州島は日本帝国主義統治時代に要塞化され、4・3 事件の戦場となり軍事的虐殺を経験し、今また再び軍事化されようとしている。済州島は軍事的要衝でありつづけている。実際、1968 年には、アメリカの極東戦略にもとづいて、沖縄の米軍基地の済州島移転が取りざたされることがあった(村上 1968、久住 1968)。こうした済州島の来歴と現在が、沈黙を強いられてきた住民たちを覆っている。この重層的に更新される軍事化が、沈黙に沈黙を重ねることにつながっているのである。したがって金東炫らの闘いは、沈黙の歴史を打開する解放の主体を形成することを目的とする。

軍事化されるアジア太平洋地域において、当該地域の軍事化・ポスト植民地主義化が国際労働移動をうながし、それが各国における移民労働の労務管理体制―日本における入管体制の改悪など―につながっている。そして下層労働社会を中心とした労働再編は常に人種主義的である――レイシズムと民族差別のコードを伴っている。今日においては、済州島、韓国、そして沖縄におけるポスト植民地主義との闘いと批判的研究は、他のアジア太平洋地域と接続している。したがって〈東アジア〉の地政学は常に相対化されている。だが、連帯も批判的研究も、図式主義的な枠組みから出発するわけではない。それは、経験主義的で遂行的な取り組みの積み重ねからしか始まらない。〈東アジア〉の図式を共有することに意味があるのはそのためであり、そしてここに金東炫の提起の意義がある。金東炫の提起が、暗黙裡に、大所高所からの政治の図式主義の拒否から出発していることに、注意を促しておきたい。カントにしたがっていえば、私たちの認識は地政学的な時間と空間の図式に規定されているが、それは図式主義的な枠組みとは根本的に異なる。実践的な連帯は、経験主義的かつ遂行的にしか形成できないのである。こうした政治の認識論においては、異なるレジームあるいは体制(apparatuses)を越境／共役する翻訳の実践のポリティクスが必要であることを指摘するにとどめたい(Sakai 2018、Solomon 2019)。

金東炫の提起には、もう一つの重要な争点があることを指摘しておこう。サンドロ・メッザードラの〈逃走の権利〉や今日の移民研究における「移動論的転回」は、主体の過渡的・越境的性格に存在論的な意義―移民の存在論―を見出している(Mezzadra 2006、Mezzadra/Neilson 2013、伊豫谷 2019)。この移民の存在論は、従来の意味での当事者性の付与から自由である。というよりも、当事者性はあくまで選択的かつ遂行的に獲得されるものとして、批判的に再定義される。この点に照らして、山岡の階級闘争論では、寄せ場の主体―酒井直樹にしたがって、本稿ではシュタイー主体という二つの位相を区別するが―は、選択的かつ遂行的に〈主体〉となる(酒井、2002：101−105)。下層労働者であること、あるいは済州島住民であることは、図式においてシュタイとして規定される。だが、それはまだ地政学的および歴史的言説のレジームが生み出す〈主体〉ではない。そして〈主体〉生成の条件に、実践の経験に対する批判的省察の関与が求められるのである。本稿が対象とする山岡のテキストは、シュタイと主体とのあいだの内的な攻防と批判的省察の記録でもある。

1980 年代を前にして、山岡強一に求められていたのは、第一に、寄せ場の暴動に促されて形成される活動家と、その活動家が暴動と日雇い労働者の日常のなかに合流していくような組織論であった。そして第二に、寄せ場の労働者たちの主体をたちあげるための、疎外された経験をつなぐ図式であった。しかし、山岡の眼前にあったのは、70 年代とは異なる現実に直面していた 80 年代の寄せ場の変化であった。日本の寄せ場は、冷戦構造がもたらした「平和」あるいは「ブルジョア市民主義」的現実のなかで変貌していた。その寄せ場を、冷戦下でポスト植民地状況にある東アジア地域―とりわけ沖縄・韓国・朝鮮―に接続する必要があった。しかもそれらの接続や連帯という課題を、山岡は、あくまで闘争の現場の言葉で表現しなければならなかった。例えば 80 年 5 月光州蜂起は山岡にとっては決定的な政治的

経験であったが、それは植民地主義の遺産に規定された下層労働者群が、エスニック・マイノリティを抱え込んでいたからであり、さらにこの人種的編成は、当面の敵である下層下請け業者たちやヤクザたちにも該当していたからである。そこで、ポスト植民地主義のもとで切断されている東アジアの経験を接続できる主体をつくりだすために、山岡は寄せ場の労働者の経験に即して言語化し、ただちに運動の組織化のための実践方針に仕上げなければならなかった。そのようにして、山岡はシュタイが〈主体〉へと形成されることを期待したのである。

1「建党・建軍」あるいは「階級」の形成

山岡強一の寄せ場の運動に対するもっとも重要な理論的貢献は、船本洲治とその焼身決起(1975 年 6 月 25 日、沖縄嘉手納基地前第 2 ゲート前)を思想的な原点として、磯江洋一のマンモス交番警官刺殺(1979 年 6 月 9 日、山谷地区派出所)、そして 60 年代からの寄せ場暴動を、ひとつながりの下層労働者解放運動論として表現した点にある。

船本は、60 年安保闘争以来の山谷暴動と寄せ場の運動を三つに時代区分していた。第一期は大衆の暴動という自然発生性に対する活動家の意識の立ち遅れ、第二期は活動家による改良主義、第三期は山谷暴動の対行政圧力闘争へのすり替え、である。以上の整理を踏まえて、船本が下した総括を引用しながら、山岡はその読み直しを求める。

> 船本は、「意識分子の大衆運動が大衆暴動と合体しさらに大衆暴動が都市人民戦争として拡大・深化する建党・建軍の運動」(…)として前進させられねばならないと提起した。この彼の提起は、下層主義だとして批判されてきた。しかし、我々は彼の総括と提起を次の点において見直すべきではないか。(山岡、1996 (執筆は 1985、表記は以下同) : 38–39)

船本のテキストに対して、山岡が強調するのは次の三点である。まず、大衆の自然発生性と意識性との関係を、緊張をもって把握している点。次に、山谷－釜ヶ崎暴動の時期区分の方法である。船本は敗戦からではなく、60 年を敗戦期から戦後期への転換点として位置づけ、そこに暴動の激発期があったことに注目し、今日まで続く差別と抑圧が構造化されたのだと考える。そして第三に、革命闘争の中に自らを位置づけようとする志向である。第三の視点、すなわちテキストの書き手である船本が自らを寄せ場の革命運動の主体の一人として位置付けているこの視点を、山岡は階級論として言い換えている。「階級とは自らの根拠の対象化のもとに、他の階層の利害との緊張関係のなかに獲得される全体である」(同上 : 39)。船本、そして山岡の主張を読み込んでみれば、こういうことになる。すなわち、「意識分子」活動家は、寄せ場の大衆＝日雇い労働者と同様に革命運動の主体としての「階級」である。ただし「階級」となるということは、自らの立場を、他の(寄せ場の)階級の利害との緊張関係のなかで獲得する「全体」になるということである。すべての被抑圧階級の利害を代表する全的類的解放の主体として、プロレタリアートを位置づけた初期マルクスや、毛沢東主義的な語彙によって語られたこの言葉は、実際のところは、寄せ場の暴動や悪徳手配師や人夫出し業者、下請け業者との現場闘争、労働争議のなかで、自らを「前衛」とするのではなく、寄せ場大衆の一部として位置づけ、大衆の中に融合していった、しかしまた常に異なる利害のなかにあって異和を抱えている「意識分子」としての自分たち活動家集団を、「階級」として語っていることがわかる。この「階級」は遂行的かつ選択的に選び取られた立場である。

そこからすなわち、「建党建軍」という毛沢東主義的あるいは新左翼的な語彙も、寄せ場の現場闘争の文脈で読み替える必要があることがわかる。「建党建軍」運動においては、前衛が大衆を領導するというイメージではなく、活動家集団が遂行的に暴動する寄せ場大衆の一部となり、同時に、日常的にも、非日常においても、自然発生性と意識性を身に着け、身体的理論的に武装した大衆が生み出されることを期待しているのである。以下にみるように、山岡のこの立論には多くの内省が踏まえられている。山岡が、船本を手元に置いてたどり着いたその思想を読み解いてみよう。

階級利害の異和について、1981 年 3 月に書かれた獄中書簡のなかで、山岡は寄せ場に行き着いた自らの立場を次のような仕方で表現している(山岡、1981(1996)：190−191)。マルクス『資本論』における、相対的過剰人口が、資本の蓄積に対応する、貧困の蓄積を必ず生む、という記述を参照しながら、「貧しさ」の意味内容を検討している。

> 例えば〈貧しさ〉〈無知〉という点を見ると、今の寄せ場の日雇は相対的に貧しくもなければ、無知でもありません。私は磯江氏や南氏や私自身が、何故居るのだろうと、よく考えます。俺たちは、正に貧しくもなければ、無知でもない(…)。とすると、俺たちは下層ではないのだろうか？(…)。ところで、磯江氏や南氏のような階層下降したものが、今日の寄せ場には非常に多いのではないかと思う。この場合の階層下降は没落といったようなものとしてではなく、極く自然に「自由」な労働力として下降させられているということだと思うのです。これは下層の拡大を意味するのではないか。この階層下降に際して、労働力商品としての「自由」の幻想が、戦後民主主義の個人主義と一体となって果たした役割は測り知れないのではなかろうか。(同上)

資本蓄積は剰余労働の搾取を意味し、蓄積された剰余による資本展開は、他方で、相対的過剰人口としての失業者予備軍を創り出す。それは社会の貧困化を拡大していく。しかし、マルクスは、その貧困を当事者がそれとして認識しているかどうかを語ってはいない。山岡が注目したのはその点である。すなわち、今日の貧困化あるいは下層化とは、そのようなものとして意識されずに進展している。その経験は、したがって、ポスト植民地状況の労働者やアンダークラスとは異なる。後者はエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』に比較することができる。しかし、先進資本主義国、たとえば日本ではそうではない。「今日、この産業資本主義段階の悲惨さに比べられるのは、韓国など被植民地の労働者においてであろうと考える」(同上)。そして、自らの「貧しさ」の内実を次のように語る。「私は、我々にとって下層、貧しいと言う時の基準は、市民社会というモデルにあって、それからの欠落、欠損を多くの場合言うのではないか」「俺たちを下層として特徴付ける貧しさとは、関係の貧しさのことであり、それは市民的レベル・モデルからの欠落・欠損感の裏返しのコンプレックスのことだ」(同上)。

山岡がいう「関係」とは、自らの「貧しさ」の経験としての「下層の系譜」を歴史化できず、皮相にとらえるしかできないありようのことである。「下層の系譜」は、「擬制民主主義」のもとで、あっけなくも解消され忘却されてしまう(同上)。だが、「階層下降」は主観的には自由意志にもとづいた過程だが、しかしまた「下層は社会経済的に生み出され、政治的に支配されている」(同上)。とはいえ、だれもが「貧しさ」の社会経済的構造に一足飛びに到達できるわけではない。

> (…)その階級支配によって隠蔽された下層の系譜＝根拠を、自分らの手に取り戻すことによって欠落や欠損を補う関係ではなく、被支配‐抑圧の共同性に根ざした関係を創り出していくことが

> 出来るのではないか、そのためには俺たち自身の貧しさの本質、実態を、まずしっかりと把握、認識する必要がある(…)。(山岡、同上、192)

下層労働者の「貧しさ」を深化させた船本は、盟友であり、1972 年に相次いで結成された釜共闘（暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議）と現闘委（悪質業者追放・現場闘争委員会）をともに担った鈴木国男(デカパン)―1976 年 2 月 16 日に大阪拘置所保護房で体温を下げる注射によって虐殺された―との関係を問い、共通の言葉を見出す作業を続けていた（友常、2019：46‐60)。山岡が評価するのは、そうした船本の寄せ場での人間関係のつくり方である。アル中患者が多い寄せ場労働者は常に精神「障害」者差別や保安処分攻撃にさらされているが、それは「S 闘争支援共闘」としても闘争方針化されていた。それは船本が実践した「関係」のつくり方に起因するものだ。それゆえ船本にならって、「関係」を深化させることで、その存在の根拠と来歴を失った下層労働者に、主体の根拠を設定することができるはずだと。その意味で、山岡によれば、1979 年 6 月 9 日に山谷“マンモス交番”の巡査部長を刺殺した磯江洋一も、満たされぬ飢えと渇きの中をさまよい、「関係」を求めていた一人だと理解される(山岡、同上：191)。磯江洋一の単身決起は、その意味で孤立させられた単独者としての寄せ場労働者を、集団で迎えることができなかったことに起因すると、批判的に総括される。

本稿の関心からいえば、ここで即時的に「貧しさ」のなかでさまよっているのは、シュタイの位相にある個人である。だがシュタイは、制度化された言説やテキスト化された発話に一義的に規定されない位相にある。その意味で〈自由〉である(酒井、前掲)。しかし、階層下降の経験や、現実の政治社会的な関係性は、彼・彼女に下層労働者としてのアイデンティティを要求する。そこで制度的言説によって要請されるのは、彼・彼女に受け身的でトラウマ化されスティグマ化されたアイデンティティである。山岡がいう「関係の深化」とは、このトラウマ化・スティグマ化されたアイデンティティの転回の動作を意味している。それによって、下層労働者が、単独者としての立場から脱出することを期待したのである。

2「被植民地人民との闘いの水路構築」

先に引用した獄中書簡に続いて、やはり 1981 年 3 月に山岡は、1979 年 6 月 9 日の磯江洋一の警官刺殺‐「マンモスポリ殲滅」から 1980 年 10 月 2 日までの闘いを、次のように自己批判的に振り返っている。

> 手探りであったけど、72−74 年総括、F6・25−6・9 を「流動的下層労働者と被植民地人民との闘いの水路構築」というスローガンに結実させたことは、すばらしい成果であると確信している。問題はこのスローガンに煮詰められた思想は路線であり、その路線を運動化し、その運動論を活動方針へと実践化する努力を怠り、混乱していたことにあったと考えます。(山岡、同上：196)

山岡は、これらのスローガンが空文化していたこと、さらに「人民戦争」という言葉を多用したことを自己批判している。それらのスローガンが、寄せ場の労働者の日常闘争のなかで具体化されているとはいえなかったからである。だが、この自己批判は何によって導かれたのだろうか。

先の引用でいう「10・2」とは、人夫出し業者である山村組が経営する「半タコ暴力飯場」(戦前のタコ部屋ほどではないが、用心棒＝「棒心」による暴力支配が行われる飯場)に対する団体交渉と示談が、「恐喝」「脅迫」へと変えられ、他のメンバーとともに山岡が逮捕された事件を意味する（その後山岡は起訴され、1981 年 7 月に保釈を勝ち取るまで長期拘留に付された）。

山村組とは、山村組・山村建設として、山村グループの一つであったが、山村組と山村建設は名目的に建設業を事業内容とするも、実際におこなっていたのは労働者供給事業であった。労働者供給事業のためには建設業の認可が必要であるが、山村組は親会社としての山三建設の名義を利用することで、当局からの追求を免れていた。したがって山村組の労働者供給事業(人夫出し業)は違法であり、さらにはそれに従事する手配師たちも資格を有していなかった。手配師たちは日常的に労働者に対する暴力事件や強盗事件を繰り返し、さらに地元のヤクザに所場代を支払うなど、従来からヤクザと癒着していた。山谷ではこの時点で、山谷統一労働組合、山谷日雇労働組合、そして山岡らの「6・9 闘争の会」の三者共闘が成立していたが、飯場での暴力と強奪を受けた労働者の訴えにより、この三者によって、山村組に対する団交が開始されたのである(「山村組闘争公判調書・刑事訴訟記録」、山谷労働者福祉会館所蔵)。なおすでにこれに先立って、三者共闘は前田建設・最上鉄筋闘争を取り組んでいた。

建設産業における下層労働市場の労務支配は、戦前日本帝国主義による朝鮮人労働者の強制連行や労務管理という側面と、労務支配の前面に立つのがヤクザであり、そこに旧植民地出身者である在日朝鮮・韓国人も含まれるという、ポスト植民地状況を反映した下層社会の重層的差別構造の側面とがある。72 年‐74 年の現闘委による新井技建闘争はその典型であった。そして山村組闘争もそうした差別構造を抱え込んでいた。その意味で、寄せ場労働運動・解放運動における「被植民地人民との闘いの水路構築」というスローガンには、こうした下層労働市場の歴史性を背負いながら、寄せ場の労働争議における眼前の〈敵〉との回路形成が必要となるという、切迫した課題が含意されていたのである。そしてまた山岡は(あるいは船本も)、そうした下請け業者や暴力手配師との争議や暴動に際して、必ず長大な日本帝国主義の植民地主義と下層労働市場の形成史―そこでは常に近世の囚人労働から戦前の「タコ部屋」史、戦後の手配師制度、80 年代の労働者派遣事業までも加えられる―を振り返らなければならなかった。

これらの事情が、山岡の自己批判の背景を形成している。ただし、この自己批判の内容を理解するために、ここでもうひとつのテキストを置いてみたい。1980 年 6 月 25 日に、「6・9 の会」を主催者として、船本洲治焼身決起 5 周年を期した集会が開催されている。集会に際して山岡は基調文を起草している（山岡、1995（1980）：29‐33）。「世界反革命勢力の後方を世界革命戦争の前線へ転化せよ」と名付けられたこの基調文のタイトルは、船本が 1975 年 6 月 25 日に焼身自殺したその時に「イショではない」として書かれた遺言状のタイトルをそのまま用いている(友常、2019：84-101)。基調文は「南朝鮮革命闘争の前進」「沖縄解放‐反天皇・反基地・反 CTS」「船本洲治同志と下層プロレタリアート」の 3 章構成になっている。これは現闘委の活動を総括し、「6・9 闘争」を路線に位置付け、80 年代の寄せ場の運動方針を確立する必要があった山岡にとって、ひとつの思想的な決算である。先の引用でいわれている、「72-74 年総括、F6・25-6・9 を『流動的下層労働者と被植民地人民との闘いの水路構築』というスローガンに結実させたことは、すばらしい成果である」というのは、この集会をひとつの達成点として考えられている。しかし、現闘委以来の活動家メンバーであった N が、この基調に対して次のような

深刻な疑問を呈していた(「N 氏書簡」1980 年 6 月 30 日付)[2]。山岡の自己批判を理解するために置いてみたいテキストは、この N の書簡である。

N 書簡の趣旨は次のようなものであった。そもそも主催が公然団体である「6・9 の会」である以上は、公然登場する大衆的な結集のための方針提示となるはずであろう。しかしそうなっていない。N が疑問視したのは特に次の三点である。「プロレタリア国際主義と人民武装」「沖縄人の反大和−反天皇の革命的側面に学び、それを抵抗の源泉として展開される反軍事基地・反 CTS 基地の闘いに合流しなければならない」「今こそ地上−地下を貫く総力戦体制として獲得しなければならない」。まず、国家権力に手の内をさらしながら、「地上−地下を貫く総力戦体制」のような非合法闘争を提起していることである。それにもかかわらず、具体的な行動としては、沖縄現地闘争を方針提起しているが、それはいったいいかなる内容で沖縄人民と合流するつもりなのか [3]。さらに基調は、闘争主体についての表記の混乱が存在した。すなわち、「プロレタリア人民」「日本人民」「労務者」「下層プロレタリア」といった表記の並列である。さらに重要なのは基調文の次の論理展開であった。

> 75 年〈海洋博粉砕、皇太子上陸阻止〉闘争における、二つの決起――6・25 嘉手納第二ゲート前での船本洲治同志の焼身決起と 7・17〈姫百合・白金決死隊〉(沖縄青年と大和青年との共同)の決起、そして広範な沖縄人民の闘争、その内在的運動性を捉え返すことは、非常に重要な今日的課題であると考える。我々は。何よりもまず、沖縄人の反大和−反天皇の革命的側面に学び、それを抵抗の源基として展開されている反軍事基地・反 CTS 基地の闘いに合流しなければならない。(…)
>
> 5 年前の 75 年 6 月 25 日、船本同志の焼身決起のもう一つの背景としてあったものは、72−74 年と激烈に展開された釜ヶ崎−山谷の叛乱闘争であり、日帝本国内において展開されつつあった本格的な都市ゲリラ戦としての東アジア反日武装戦線の闘争であった。(山岡、前掲：31-32)

この山岡の基調文に対して、N の書簡はこう断ずる。「(…)山谷−釜の叛乱と東アの背景として船本の焼身決起があったのでは断じてない。彼は山谷 - 釜の叛乱と東アのたたかいを一身に統合して、それらのたたかいの継続として決起したのではなかったか。これに因って、流動的下層労働者と『沖縄』の内通性を欠落させているようにみえる」(「N 氏書簡」)。N の批判がいうように、基調では、船本洲治の決起やひめゆりの塔での皇太子(当時)に対する火炎瓶投擲などと広範な沖縄人民の闘争の「内在的運動性」を述べ、そのあとで「もう一つの背景として」と断ってから、寄せ場叛乱、東アジア反日武装戦線のゲリラ闘争と並列している。これによって、船本の闘争を、沖縄と寄せ場に分裂させてしまっている。しかし、船本は焼身決起によってこれらの課題を同時に体現し、そのことを「イショ」において明記していたのであり、運動のサイクルのひとつを確実に進めたのであって、いまさら読み解かれるような問題提起だったのではない。だから N は、山岡の基調文は寄せ場と沖縄の「内通性」を欠落させている、と批判したのである。すなわちこの基調文において、山岡に欠けていたのは、運動過程の内在的な当事者＝実践者として自らをそこに位置付ける視点であり、立場であり、常にそのように自己を位置付ける緊張感であった。他方で、「地上−地下を貫く総力戦体制」のように、自らの主体の立場を深化させること

[2] 以下、とくにことわりがないかぎり、同書簡からの引用。
[3] 当時の住民闘争・生存闘争としての反 CTS 金武湾闘争については、上原こずえ『共同の力――1970－80 年代の金武湾闘争とその生存思想』(世織書房、2019 年)を参照。

なく、華々しいスローガンだけが付け加えられている。その観念性と、まるで運動過程を他人ごとのように記述し、自らを指導部として距離を置く、前衛主義的な態度がここにはあると、N は暗に指摘しているのである。いわば、シュタイから政治的主体とのあいだの乖離を無視し、前衛党‐大衆のモデルにしたがった上からの情勢分析と方針提起に対する批判であった。それは、現闘委に参加していた経験からいっても、船本の組織論になじまない内容であったといえよう。

先に検討したように、山岡は 1981 年の獄中書簡のなかの「関係」をめぐる思索で、自らの「貧しさ」の経験を通して、「下層の系譜」を歴史化できず、皮相にとらえるしかできないありようについて自問自答していた。ただしそれを性急に政治化して飛躍させることも留保していた。ここで考えてみたいのは、80 年 6・25 集会の基調文執筆から、10 月 2 日の逮捕、そして翌年 7 月までの長期拘留のなかで、山岡は 1980 年 6 月 30 日付の N 書簡による批判を受け止め、その自己批判を深化させていったのではないかということである。そのような含意で、1981 年 3 月の山岡の書簡に書かれた言葉「問題はこのスローガンに煮詰められた思想は路線であり、その路線を運動化し、その運動論を活動方針へと実践化する努力を怠り、混乱していたことにあったと考えます」という自己批判を理解してはどうだろうか。すなわち、活動方針へと実践化する努力や経験のないままに、路線だけが基調文で踊ってしまったということの反省である。

次の山岡の獄中からの書簡（1981 年 3 月 15 日付）も、そうした内省を示すものとして読むことができるのではないだろうか。それは「労働者の武器は団結であり、組織である」という主張である。

> (…)「やられたら、やり返せ」について(…)。まずこれは「殺られたら殺り返せ」ではなく、やはり「やられたら、やり返せ」であるし、オトシマエをつけることの正当性です。(…)労働者が日常語として〈やられたから、やり返すんだ〉と発するのに対して、〈やり返す〉のは良くないとは、いくら左翼語をもってしても言わないでしょう。結局そこで出る話は、団結すること、即ちあなた一人の問題ではない、悪い奴の正体は本当はこうなんだ、だから一人で救われるのではなく、団結してみんなでやっつけようでじゃないか(…)。(山岡、1996 (1981)：208−206)

「団結」を強調することの根拠には、船本洲治も磯江洋一も単独者として決起したのであり、その孤立を解決できなかった運動の弱点を、運動方針へと転化しようとする意志がある。さらに続けて山岡は書いている。「労働者にとっての闘いは、“団結して組織的に反撃する”歴史よりも、“一人でオトシマエをつける”歴史のほうが長く深いのです」(同上：209)。山岡が果たそうとしたのは、「一人でオトシマエをつける」という単独者の歴史を逆転することにあったのである。

おわりにかえて

最後に二つのことを指摘しておきたい。

まず、山岡が 80−81 年の自己批判−内省の過程で得たのは、活動方針を立てるということが同時にすでに主体的な実践でもあるということと、それが内在的に自己の主体的根拠を深化し、他者を仲間として再組織化する作業であるということである。しかもそれらの作業は自らを事態の主体として遂行する緊張感を必要とする。繰り返すが、シュタイから主体になるこの転回が遂行的であるからこそ、逆に、支配的で制度的な言説と対峙する緊張感が必要なのである。純粋な意味での下層労働者が存在するかど

うかという問いに意味はないが、遂行的に形成される主体は、本質主義的な意味での当事者＝スティグマ化された犠牲者たちとの緊張関係から自由ではない。山岡の階級論はその意味でさまざまな制度的言説との対峙を必要とした。

とはいえその対峙もまた、経験主義的に、そして遂行的に進められなければならない。寄せ場は多様なエスニック・マイノリティや下層労働者が吹き寄せられる場であり、シュタイから主体への生成は、あくまでのその場における「出会い」によって決定される。山岡は、主体形成の条件と考えたこの場が有する特異性について、次のように述べている。

> 我々自身の解放という問題と国際主義ということ、あるいはプロレタリア国際主義と我々の任務ということに関して、私は下層労働者が、何故在日朝鮮人、ウチナンチューやシマンチューと同居して存在させられているのか、という現実へ常に迫れない運動論は一国主義に堕すると考えている。(…)大切なことは、寄せ場日雇労働者として、アンコとして、現に如何なる闘いをしているのか、ということであって、それなくして、その闘いを推し進めることでの“出会い”なくして、“出会い”はないと、話し合っている(…)。(山岡、同上：210)。

このことは、本稿冒頭に述べた図式としての東アジアという視角にかかわっている。東アジアの人民との〈出会い〉という課題もまた、ローカルな関係において、経験主義的に共通の言語を探ることによってすすめられなければならないのである。このことは、80 年‐81 年の自己批判と内省の深化を経て、山岡の思想においてどのように表現されることになったか。そのきわめて具体的な身振りを、殺された佐藤満男監督から受け継いで、山岡が完成させた映画『山谷　やられたらやりかえせ』（1985 年）に求めてみよう。映画の最後のパート「筑豊・古河鉱業大峰鉱のボタ山」から、豊州炭鉱、朝鮮人鉱夫の寮跡、そして大峰鉱・日向峠脇の「朝鮮人の墓」を想起しよう。「われらの故郷は慶尚北道なのに　私はどうして石炭掘りにきたのか／日本がいいとだれが言ったのか　日本にきてみればひもじくてたまらない」という朝鮮民謡「노래카라（ノレカラ）」をバックに流して写されるその映像言語は、1980 年 4・25 集会の基調文にみられる、政治的なスローガンの接ぎ木的な構成とは、大きく隔たっている（「山谷」制作上映委員会、1986：84‐85）。いみじくも山岡は映画の最後の編集作業のさなかに、「N 氏へ」の手紙を書き送っている（1985 年 11 月 22 日付）。山岡は書いている。

> 追い込みに入っています。この 9 日に東京分の最終撮影を終え、30 時間分のフィルムを 5 時間にひろう作業と、音の拾い出し、合わせをやっています。作業が進むにつれて、それらしい姿を表してきます。これは楽しいことです。同時に作品の成否を決定する段階にきているという緊張感も生まれてきます。こういう時、N さんと酒でも呑みながら話せたら、としみじみ思います。今、頭を悩ましているのは、筑豊の終りを朝鮮人墓にして、それから玄界灘へもっていくことまではうまくつながるのですが、その後どんな画をもってきてエンディングへもっていくか、という点です。（…）（同上、1986：5）

映画では、〈出会い〉というローカルな経験を歴史的経験へと深化させ、共通の言葉を探しながらシュタイから主体への転回を遂行していく組織＝主体形成論が、映像イメージという手段によって追求された。船本のテキストを読み込み、現場で格闘してきた山岡の到達点がこの映画であることは疑いない。

もうひとつ指摘したいことは、寄せ場の変化についてである。山岡が自らの「貧しさ」の根拠を遡及するなかで到達していた、ポスト植民地主義状況下の労働者人民たちと日本の寄せ場の変容についていえば、山岡たちはその変容を暴動で実感する機会があった。1982 年 4 月 25 日の山谷暴動は、1973 年以来、9 年ぶりの暴動であったが、山谷争議団メンバーが追求していたモガキ(酔った労働者から金品を奪う)の男が、交番に連行されたことが契機となって、午前中から人々が集まり始め、結局 1000 人以上の参加者が加わった。しかもそのなかには寄せ場労働者だけではなく、多くの近隣の若者たちが参加していた(山谷争議団 1982)。これによって、「今や、旧い、“冬の時代”の外套を脱ぎ捨てねばならない」とされたが、それは下層労働市場の主体の変化を先取りしていただろう。その先にあるのは「寄せ場なき寄せ場」であり、社会の「総寄せ場化」とされる、労働者数の過半数を超える非正規労働者の出現であった(西澤 1995)。それは寄せ場の運動に新たな課題を突き付けることになった。

さて、1981 年 7 月の保釈後、山岡らの運動は 1982 年 6 月に四大寄せ場（山谷、釜ヶ崎、寿、笹島）の運動体の統合組織である「日雇全協・山谷争議団」の結成に向けて進んでいく。ただし山谷では、そうした下層労働市場の主体の変化と、組織化という課題と並行して、ただちに国粋主義右翼の皇誠会との争闘が始まる。国粋会系右翼と山谷争議団との非妥協的な争闘のなかで、『山谷　やられたらやりかえせ』の監督・佐藤満男が刺殺され、そのあと映画製作を引き継いだ山岡強一もまたヤクザの凶弾に斃れることになる。皇誠会戦のなかの山谷と山岡強一については、稿を改めて検討したい。

友常勉(ともつね つとむ、Tsutomu TOMOTSUNE)
東京外国語大学

References

伊豫谷登士翁、テッサ・モーリス＝鈴木、吉原直樹編(2019)『応答する〈移動と場所〉――21 世紀の社会を読み解く』ハーベスト社
久住忠男(1968)「沖縄基地の済州島移転説――現状では実現は困難」『世界週報』1968 年 7 月 30 日.
酒井直樹(2002)酒井直樹監訳『過去の声　一八世紀日本の言説における言語の地位』以文社.
「山谷」制作上映委員会（編集・発行）（1986）「映画『山谷』ーやられたらやりかえせ」
山谷争議団(1982)「春雷は何を撃ったのか――4・25 暴動の意味したもの　5・9〈4・25 暴動弾圧粉砕〉総決起集会報告集」
友常勉(2019)『夢と爆弾　サバルタンの表現と闘争』航思社
船本洲治(2018)『新版　黙って野たれ死ぬな』共和国
西澤晃彦(1995)『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』彩流社
村上薫(1968)「次の展開――沖縄から済州島へ？――ベトナム戦後の米極東戦略」『朝日ジャーナル』1968 年 6 月 2 日
文京洙(2018)『済州島四・三事件　「島のくに」の死と再生の物語』岩波書店
山岡強一(1996)『山谷　やられたらやり返せ』現代企画室
山谷労働者福祉会館所蔵資料
「山村組闘争公判調書・刑事訴訟記録」
「N 氏書簡　1980．6．30 付」

Mezzadra, Sandro (2006) *Diritto de fuga: migrazioni, cittadinanza, globalizzazione, edizione nuova*, Verona:ombre corte.北川眞也訳.『逃走の権利――移民、シティズンシップ、グローバル化』人文書院、2015 年.

Mezzadra, Sandro. Brett, Neilson (2013) *Border as Method, or, the Multiplication of Labor*. Duke University Press Books

Sakai, Naoki (2018) 'The Modem Regime of Translation and its Politics." *In A History of Modern Translation Knowledge*, ed. by Lieven D'hulst and Yves Gambier, 61−74. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Shigematsu, Setsu. Keith L. Camacho(2010) *Militarized Currents: Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific.* University of Minnesota Press.

Solomon, Jon (2019) 'Discovering the Modern Regime of Translation in China: Liu Cixin's Remembrance of Earth's Past and Wuhe's Remains of Life.' *Journal of Translation Studies* 3(1) (2019, New Series), 139−183.

謝辞　本稿を成稿するにあたって、社会運動論研究会での議論が大変参考になった。とりわけ清家久美、樋口直人、稲葉奈々子、レシュケ綾香の各氏からは有意義なコメントをいただいた。また、上原こずえ氏には済州島と沖縄に関する資料を紹介していただいた。記して謝意を申し上げたい。

国際日本研究センター主催 夏季セミナー**2019**

（**2019** 年 **7** 月 **24** 日～**2019** 年 **7** 月 **26** 日、東京外国語大学にて）

サマースクール参加 大学院生

研究発表要旨

I 「言語」2019 年 7 月 24 日

周 源（シュウ ゲン、東京外国語大学）

話し言葉における受身文の日中対照研究

劉 泱伶（リュウ ヨウレイ、国立政治大学大学院）

台湾中国語における「吧」の確認要求用法

― 非下降イントネーションの例を中心に ―

泉 大輔（イズミ ダイスケ、東京外国語大学）

語が文を包摂する形式に関する考察

帰 翔（キ ショウ、東京外国語大学）

副詞「別に」の機能考察

成 恵英（ソン ヘヨン、韓国外国語大学校）

多義動詞「とる」の意味に関する一考察

張 舒鵬（チョウ ジョホウ、東京外国語大学）

日本語における形容詞一語文の考察

李 月明（リ ゲツメイ、北京外国語大学）

日中数量類別詞の範疇化機能の対照研究

話し言葉における受身文の日中対照研究

A contrastive study of passives in spoken Japanese and Chinese

周 源（シュウ ゲン、東京外国語大学）

【キーワード】日本語、中国語、話し言葉、受身文、対照研究
Japanese, Chinese, spoken language, passives, contrastive study

受身文は日本語においても中国語においても膨大な研究の蓄積があるが、書き言葉で使用される受身文に関しての研究がほとんどであり、話し言葉についての研究は管見の限り極めて少ない。本研究は、日本と中国のテレビドラマや映画のセリフやシナリオ（2007 年～2012 年に放送された日本のテレビドラマ 7 作品、1987 年～2008 年に放送された中国のテレビドラマ 21 作品、及び 1996 年～2005 年に出版された『夏衍映画文学賞受賞シナリオ集（第一集～第六集）』の中の 21 作品）を使い、日中両言語の話し言葉の使用実態を記述考察し、両者の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

台湾中国語における「吧」の確認要求用法
― 非下降イントネーションの例を中心に ―
The Confirmation Request Function of BA in Mandarin Chinese: Focus on the example of Not-fall intonation

劉 泱伶（リュウ ヨウレイ、国立政治大学大学院）

【キーワード】吧、ダロウ、確認要求、非下降イントネーション、若年層
BA, darou, Confirmation Request, Not-fall intonation, Young Generation

ダロウと「吧」には、ともに推量と確認要求の用法がある。両者の確認要求用法は、従来、概ね対応するものと考えられており、発表者も、栗田・劉・樊（2019）において、ダロウと、台湾における「吧」の確認要求用法に三つの類型【A.命題確認】【B.認識共有の確認】【C.認識欠如の是正】を認めた。さらに、栗田・劉・樊（2019）では、「吧」の確認要求用法には、ダロウとは異なり、一部、「二人称主語文化しなければならないという制約があることを指摘し、その理由についても考察している。

しかし、栗田・劉・樊（2019）の範囲で明らかにしきれていない論点として、【非下降イントネーションで発話される「吧」】の問題がある。一般に「吧」の確認要求用法は下降イントネーションで発話されるのだが、次の例 1、2 のように非下降調で発話されうる例が存在するのである。

（1）我家的小孩考試前還一直在玩遊戲。很誇張吧。（栗田・劉・樊 2019）

（うちの子テスト前にもずっとゲームばっかりしているんです。ありえないでしょ）

（2）你知道嗎 只要全家人都早睡一個小時 省下這些檯燈電腦電視的電… 一個就可以省下 24 度的電省下這些電則相當於減少 17 公斤的二氧化碳喔 你看減碳生活其實很簡單吧（COCT　2017 年版）

（知ってる？一世帯が全員一時間早く寝ると、電気スタンドやパソコン、テレビで使われる電気が減少され…、一時間で 24 キロワットの電気を節約することができるわけ。このように節約された電気は 17 キロの二酸化炭素に相当するよ。ほら、低炭素生活って意外と簡単でしょ）

栗田・劉・樊（2019）はこれらのような例を「言語主体が聞き手に新しい認識の成立を求めるもの」と規定した。しかし、このような例の使用には個人差があることが、既に発表者によるパイロット調査によって明らかになっている。即ち、非下降調の例は、基本的に若年層によって使用されているのである。このことをふまえて、発表者は、修士論文において、社会言語学的な手法を取り入れつつ、台湾中国語の母語話者を調査し、その結果を分析することにしている。最終的には、20 代の男女 30 人ずつに調査を実施する予定だが、まず本発表の範囲では、調査対象の人数を絞って使用傾向をつかみ、その分析を行って、結果を報告することにしたい。

語が文を包摂する形式に関する考察

An Analysis of Sentential Compounds

泉 大輔（イズミ ダイスケ、東京外国語大学）

【キーワード】文の包摂、臨時一語、複合名詞、引用、一単位性
Sentential Compound, Nonce Form, Compound Noun, Quotation, Unity

本研究の目的は、モダリティ形式を含む文が名詞に直接先行する形式（「母さん助けて詐欺」「マイルを貯めてハワイへ行こうキャンペーン」「早く帰れオーラ」「困ったな状態」など）について、実例に基づき形式的な特徴を明らかにすることである。先行研究では句を包摂する臨時一語について記述したものはあるが（「[世界の生け花] 展」「[楽しい雰囲気] 作り」など)、その前項が文にまで拡張した現象は取り上げられていない。当該の形式はブログや会話などに多く見られるため、ウェブコーパス・会話コーパスを用いて調査を行った。その結果、①当該の形式を形成しやすい名詞には内容節をとる抽象名詞（「発言」「程度」「感」など）や相対名詞（「以外」「以上」など）が多いこと、②文末のモダリティ形式によって後続しやすい名詞には差があること、③先行する文には個別の発話が引用された形式、ことわざ、作品名などが見られることが明らかとなった。

副詞「別に」の機能考察

Function of the Japanese Adverb“Betsuni”

帰 翔（キ ショウ、東京外国語大学）

【キーワード】「別に」、疑似陳述副詞、誘導
betsuni, pseudo sentence-modifying adverb, *induction*

「別に」は＜拒否＞の発話場面に用いられやすく、否定文に現れる場合が多い。辞書の記述も基本的に、＜特に言及するまでもない＞という意味特徴を取り上げ、打消しの述べ方との共起を強調しているようである。

しかし、実例を考察したところ、「別に」にはそれ以上の複雑さが見られる。

・「別に」は条件節、連体修飾節などにも現れる。
文の述べ方を修飾する典型的な陳述副詞と大きく異なる。

・「別に」は肯定文にも現れる。
肯定文に現れる一部の場合、情態修飾機能と接続詞的な機能が認められる。

・「別に」は述部からの独立度が高く、それ単独で発話を完結させる例が多い。
いわゆる感動詞のように、後続発話の内容を予告する特徴が見られる。

本稿は渡辺実氏が指摘した「誘導の職能」の観点から副詞「別に」を考察し、＜前提 P との対比に基づき、別内容 Q を誘導する＞ことを「別に」の基本職能とした。

多義動詞「とる」の意味に関する一考察

A study of semantic structure of a Japanese polysemous word "*toru*"

成 恵英（ソン ヘヨン、韓国外国語大学校）

【キーワード】多義語、多義構造、意味分析、一般化、とる
polysemic word, polysemicstructure, semantic factoring, generalization, toru

日本語の基礎語彙である「とる」は、意味が非常に多岐にわたる多義語動詞である。『大辞林』においては大区分 10 用法、小区分 73 区分、『日韓辞典』においても 30 項目に区分され、比較的新しいロコケーションや多義語の辞典においても、一般化されているとは言い難く日本語学習者にとっても使い分けが難しい語となっている。

「とる」は、先行研究において、現象素の認知、隣接語との差異、認知意味論の観点から研究されているが、本稿では、現実世界の動きに焦点を当て基本的な意味を捉え、従来提唱された「とりはずし」と「とりつけ」の二つの意味がどのように関係しているのか、また、組み合わされる名詞の種類や形式を分析することで、「とる」の意味・用法を一般化することを目的として考察する。

日本語における形容詞一語文の考察

Analysis on Adjective one-word sentences in Japanese

張 舒鵬（チョウ ジョホウ、東京外国語大学）

【キーワード】形容詞、一語文、評価形容詞、感情形容詞
adjective, one-word sentence, evaluative adjective, emotional adjective

会話の場面では、形容詞を一語だけ発して話し手の感情を表したり（「悲しい…」「嬉しい！」）、感覚を訴えたり（「痛っ！」「あったかーい」）、物事に対する評価を表したり（「面白い！」「素敵！」）、する表現がある。このように、形容詞一語を中心要素として構成された文を仮に形容詞一語文と呼ぶ。

本発表では、日本語の形容詞一語文について、『日本語書き言葉均衡コーパス』などの資料を用いて、使用場面のタイプや、形容詞の形態的特徴、構文特徴、及び形容詞の種類上の特徴などの側面から考察を行う。

日中数量類別詞の範疇化機能の対照研究

A comparative study on the categorization function of numeral classifiers in Chinese and Japanese

李 月明（リ ゲツメイ、北京外国語大学）

【キーワード】類別詞、範疇化、類型論、認知
Classifier, categorization, typology, cognition

類別詞とは、「名詞の意味的分類を表す言語手段」である。従来の研究では、日本語では「助数詞」、中国語では“量词”と呼ばれてきた。言語類型論的に見れば、日中両言語とも、「名詞の意味的分類を表す言語手段」である類別詞をもっている、言わば「類別詞言語」である。これはまた、「非類別詞言語」である英語など、印欧諸言語とは異なる重要な特徴でもある。日中両言語は共に類別詞言語ではあるものの、全く同じわけではない。日本語は類別詞の範疇化において「有生性」を重要視するのに対し、中国語は「形状性」を優先する。例えば、「平たいもの」を範疇化する際、日本語では、通常、類別詞「枚」一つで一般化しているが、中国語では、“张/片/块/件/个”等複数の類別詞を用いて細分化している。本稿では、日中両言語における「平たいもの」を表す類別詞の範疇化について対照考察を行い、両言語の共通点と相違点を明らかにする。

Ⅱ「日本語教育、談話分析」2019 年 7 月 24 日

岡田 素子（オカダ モトコ、東京外国語大学）

教師添削とピア・レスポンスの順番が作文推敲に与える影響

袁 姝（エン シュ、東京外国語大学）

中国人日本語上級学習者の自然談話における「フィラー」の使用実態について

胡 良娜（コ リョウナ、東京外国語大学）

発話内行為から見る“V（O）了”の教授法の提案― 談話分析の視点から ―

劉 鑫（リュウ キン、東京外国語大学）

日本語学習者のオートノミーの変容に関する事例研究

― 言語学習史インタビューを通して ―

シリワン ムニンタラウォン（タマサート大学 助教授）

企業インターンシップ参加に係る日本語講座学生の課題となる

社会人の基礎能力の把握

金 ダヒン（韓国・中央大学校）

現代日本のアニメにおけるメタ言語分析 ― 細田守と新海誠の作品を事例に ―

デ ナザレ フィゲイラ フラヴィオ（東京外国語大学）

日本語の「役割語」はどのようにブラジル・ポルトガル語に翻訳されるか

― 漫画と小説の翻訳に見られる「役割語」の対応手法の相違 ―

教師添削とピア・レスポンスの順番が作文推敲に与える影響

Influence of the Order of Teacher Correction and Peer Response on Composition Improvement

岡田 素子（オカダ モトコ、東京外国語大学）

【タイトル】ピア・レスポンス、作文推敲、教師添削、ベトナム
Peer response, Composition improvement, Teacher correction, Vietnam

学習者の作文に対する教師添削には限界もあり、近年ではピア・レスポンス（PR）が作文の内容の推敲に役立つとして注目を集めている。しかし、実践方法などによっては、学習者は文法など表層の欠点ばかりに目がいき、内容を深めるまでには至らないことも多い。また、学習者が教師の添削を求める意識はなくなることはないと考えられ、添削と PR 両方の効果を最大限に活かせる方法を探る必要がある。

特に、PR での話し合いを、内容を深めるための実質的な話し合いにするには、教師の添削をどのタイミングで入れたらいいのだろうか。実際に、添削と修正と PR の順番を変えて書かせ、どの順番で行えば、内容にもっとも大きな修正が出るのかを、筆者がベトナムの大学において行った実践の結果を通して考察したい。

中国人日本語上級学習者の自然談話における「フィラー」の使用実態について

An Analysis on the Use of Fillers by Advanced-level Chinese Learners of L2 Japanese

袁 姝（エン シュ、東京外国語大学）

【キーワード】第二言語習得、中国人上級日本語学習者、フィラー、自然談話、実態調査
Second Language Acquisition, Advanced-level Chinese Learners of L2 Japanese, Filler, Natural Conversation, Usage Research

本研究は、中国人上級日本語学習者（以下「学習者」とする）の自然談話におけるフィラーの使用実態について調査を行ったものである。フィラーの定義と分類を統一した上で、①学習者と母語話者の日本語フィラーの相違、②学習者の日本語フィラーと中国語フィラーの相違、③中国での日本語学習期間と日本での滞在期間の影響の有無という 3 つの研究課題を設定し、中国語母語・日本語母語・日中接触場面における大学生同士の対面会話を分析した。その結果、学習者の日本語フィラーの使用頻度は母語話者と相対的に類似した傾向が見られた一方、母語である中国語フィラーと明らかに相違し、9 種類中 8 種類の有意差が認められた。また、学習者の日本語フィラーの使用は中国での日本語学習期間、日本での滞在期間に影響されないことが分かった。本研究の限界にはフィラーの機能を掘り下げなかったことがあり、今後は会話分析の視点から研究を深めていく。

発話内行為から見る“V（O）了”の教授法の提案
― 談話分析の視点から ―

A proposal for teaching method of “V（O）le” seen from illocutionary
― From the point of view of Discourse analysis ―

胡 良娜 （コ リョウナ、東京外国語大学）

【キーワード】“了”、談話分析、発話行為、発話内行為、中国語教育
“le”, Discourse analysis, Locutionary act, Illocutionary act, Chinese teaching

雪が降っているのに気づいたとき、中国語は事態を突き放してとらえる「傍観者俯瞰型」視点に立つ、視野が遠視眼的・巨視的であるため、“啊，下雪了！[状況の変化]”という表現を用いる。一方、日本語は事態をわが身に引き寄せてとらえる「当事現場立脚型」視点に立つ、視野が近視眼的・局所的であるため、「あ、雪、降ってる！[発話場面における状態の存在] 」を用いる（木村 2014）。このように、言語によって、事態を語る視点が異なる為、日本人中国語学習者は、「新しい事態の出現・変化」を表す文末助詞“了”を学習しても、その使い方をなかなか把握できい。

従って、本発表は談話分析の視点から、具体的に話し手の発話内行為から、つまり話し手の聞き手に向けての働きかけから日常会話における“V（O）了”の使用を明らかにする。
更に、その分析結果に基づき、第二言語教育に於ける“了”のより効果的な教授法を提案する。

参考文献:
木村英樹（2014）「こと・こころ・ことば―現実をことばにする「視点」」『人文知 1 心と言葉の迷宮』東京大学出版会

日本語学習者のオートノミーの変容に関する事例研究
― 言語学習史インタビューを通して ―

A Case Study on the Transformation of Autonomy of Japanese language learner
― Through the language learning history interview ―

劉 鑫（リュウ キン、東京外国語大学）

【キーワード】学習者オートノミー、教室外学習、社会的文脈、言語学習史、日本語教育への支援
Learner autonomy, Out-of-class learning, Social context, Learning history,
Support for Japanese language education

本発表は、教室外学習という関心から、日常生活での言語学習の中、学習者オートノミーがどのように変容するかを明らかにする事例研究である。研究において、学習者オートノミーを社会的文脈の中で捉えた。そして、目的に応じて青木（2005）の定義を使用し、①それぞれの時期における学習者オートノミーはどこに現れ、どういう状態か、②学習者オートノミーの変容に影響する要素は何か、という二つのリサーチクエスチョンを立てた。研究は、一人の中国籍の日本語学習者に目を向け、言語学習史インタビューを用い、質的調査を行なった。学習の歴史をコーディング、カテゴリー化することによって、概念を生成し、言語学習史を再構成した。

結果、言語学習の意味が変化していくことにより、学習者オートノミーの状態が変容していくことが明らかになった。更に、「日本語との関係」「自身の理想像」「社会的価値」「主体性」「他者意識」「自身の文化性」の 6 つのオートノミーの影響要素が見られた。それらの結果から、近年注目になった複雑理論の考え方が見られ、学習者オートノミー育成への教育的な示唆も考えられるようになった。

企業インターンシップ参加に係る日本語講座学生の課題となる社会人の基礎能力の把握

Issues Related to Internship Practices among Students Majoring in Japanese Language

シリワン ムニンタラウォン（タマサート大学 助教授）

今日、世界中で進む社会、経済、文化におけるグローバル化の急速な進展により、国際的な流動性に対応した人材が望まれている。そのため、高等教育の現場においても、専門的能力に加えて、総合的知見及び社会的・実践的能力を備えた、優れた高度専門職業人を育成することが求められようになってきた。このような中、有効な手段として注目されるのが企業インターンシップであり、タマサート大学においても、2014 年からインターンシップを実施してきた。この成果として、インターンシッププログラムを通して学生たちは専門的な知識や技術を学ぶことができているが、社会人としての基礎能力の不足が課題であると分かってきた。

本研究では、2017 年度タマサート大学日本語講座のインターンシッププログラム等を通して把握したこの課題から、学生はどのような問題や不安を抱えているのか、社会人になるにはどのような能力が足りないのかを明らかにする。

本研究の研究方法は、実施したプログラム内容と流れ、インターンシップ中に学生が書いた報告書、インターン後のレポート及び報告会、企業側の評価を精査することにより行う。そこから見える教育上の課題を知り、今後の対応、能力育成、カリキュラム改善を考えていく。

現代日本のアニメにおけるメタ言語分析
― 細田守と新海誠の作品を事例に ―

The analysis on metalanguage presented in contemporary Japanese animation
― A case of Mamoru Hosoda and Makoto Shinkai ―

金 ダヒン（韓国・中央大学校）

【キーワード】アニメーション、コミュニケーション、メタ言語、ロマーン・ヤコブソン、
グレゴリー·ベイトソン
Animation, Communication, Metalanguage, Roman Jakobson, Gregory Bateson

アニメーションとは数多くの記号が重なっている、巨大な意味体系の集まりであると思う。そのため、アニメを分析するということは、その中にある意味（記号）とコミュニケーションをとる作業であるともいえる。それに加えて、現在はインターネットの普及や SNS の発達等により、監督（発信者）は受信者（観客）とより早く、直接的なコミュニケーションをとることが可能になった。そのため、作品を媒介にして監督（発信者）と観客（受信者）がどのように直接的、また間接的に相互作用するのかについての研究が重要な課題として立ち現われてくる。そこで、本発表ではコミュニケーション理論を基にして、細田守監督および新海誠監督の四つの作品を記号学的な観点から分析した。具体的には、ロマーン・ヤコブソンのコミュニケーション理論とグレゴリー・ベイトソンのメタコミュニケーション理論に基づき、彼らの作品の中に表れている記号分析を行った。

日本語の「役割語」はどのようにブラジル・ポルトガル語に翻訳されるか
― 漫画と小説の翻訳に見られる「役割語」の対応手法の相違 ―

How the Japanese Role Language is translated to Brazilian Portuguese?
― An examination of the difference between the translation of Japanese Role Language in comics and in novels ―

デ ナザレ フィゲイラ フラヴィオ（東京外国語大学）

【キーワード】役割語、翻訳、ブラジル・ポルトガル語、日本語、「おネエことば」
Japanese Role Language, Translation, Brazilian Portuguese, Japanese, “*Oneekotoba*”

本発表者の研究は、日本語の「役割語」がどのような手法によってブラジル・ポルトガル語に翻訳されているかの解明を目的としている。これまでに漫画作品を調査対象として、様々な種類の「役割語」の翻訳を確認することができた。しかし、日本語の「役割語」の翻訳手法をより体系的に分析するには、調査の範囲を広げ、小説などの資料も調査対象とする必要があると考えられる。本発表では、「おネエことば」を例として挙げながら、漫画作品の翻訳に見られる「役割語」への対応手法と小説の翻訳に見られるそれとを比較し、何らかの相違が見られるかどうかを考察する。今回の調査によって、「役割語」の研究において扱う資料の素質を考慮する必要性を理解し、「役割語」の翻訳の性質を明らかにする研究方針を考えていきたい。

Ⅲ「教育」2019 年 7 月 24 日

重松 香奈（シゲマツ カナ、東京外国語大学）

在外教育施設における日本文化教育のあり方を考える

ナンディン（東京外国語大学）

在日マイノリティの母語教育の研究動向

― アイデンティティ形成・言語学習との関係を中心に ―

カフィエロイレネ イサベル（国立ラプラタ大学）

日本文化の継続 ― アイデンティティの維持と個人・集団記憶 ―

朴 昭炫（パク ソヒョン、韓国外国語大学校）

韓国映画に見られる日本語由来の語について

白 双竜（ハク ソウリュウ、東京外国語大学）

内モンゴルの民族学校義務教育カリキュラム内容の改定に関する一考察

在外教育施設における日本文化教育のあり方を考える

Japanese culture education in Japanese Educational institution in overseas.

重松 香奈（シゲマツ カナ、東京外国語大学）

【キーワード】シンガポール、日本文化教育、補習校、海外子女教育、異文化間教育
Singapore, Japanese culture education, Japanese supplementary school,
Japanese educational institution in overseas, Cross-cultural education,

本発表では在外教育施設における日本文化教育のあり方について検討したい。在外教育施設とは、学校教育法に規定する学校における教育に準じた教育を実施することを主たる目的として海外に設置された教育施設である。また、在外教育施設の一つである補習校の設置目的は「現地校に通学する児童生徒が、再び日本国内の学校に編入した際にスムーズに適応できるよう、基幹教科の基礎的基本的知識・技能および日本の学校文化を、日本語によって学習する教育施設である」と文科省は定めている。

シンガポール日本語補習授業校は中学部まで設置されており、中学部の子どもたちは長期滞在者の割合が高く、日本に住んだことがなかったり、日本の文化や環境に慣れていなかったりする子どもが多い。こうした現状の中で、あくまでも日本の学校の規則やルール、文化に沿った形で教育していくべきなのか、補習校は日本の学校文化をそのまま現地に持ってくるのではなく、現地社会の文化も一部取り入れたり、認めたりしながら教育を行うべきなのか、日本文化の教育のあり方が問われている。

在日マイノリティの母語教育の研究動向
― アイデンティティ形成・言語学習との関係を中心に ―

A Review on Researches of Native language education for minorities in Japan
― Focusing on the relations with Identity and language learning ―

ナンディン（東京外国語大学）

【キーワード】母語教育、アイデンティティ、言語習得、言語的マイノリティ、多言語社会
Native language education, Identity, Language learning, Linguistic Minorities, Multilingual society

本稿では、日本における母語教育研究の全体的な流れを歴史的に見るとともに近年の研究がどのような形でなされているのかを概観する。その際、アイデンティティ形成や言語学習に焦点を絞り、対象者や調査方法、どんな分析や考察をしているのかなど具体的な内容について見ていきたい。また、ここでは、日本社会の国際化が進む中、直面する教育課題の一つとして母語教育の必要性と母語教育現状の問題点を考察し、またその解決法と母語教育の展望を今後の課題とする。

日本文化の継続
― アイデンティティの維持と個人・集団記憶 ―
Two ways of transmission
― to maintain the cultural identity and to rescue the individual and collective memory ―

カフィエロイレネ イサベル（国立ラプラタ大学）

【キーワード】日系人移民、日本文化、文化継続、個人記憶、集団記憶
Japanese Migrants, Japanese Culture, Cultural transmission, Individual memory, Collective memory

ラプラタ地区のウルキサ移住地の研究は、結果として幾つかの小論文が執筆されている。多くは花卉栽培に基づいて築き上げられた移住地の経済発展を基盤に日本文化が継承され、日本の伝統行事や習慣が定着したことと現地のアルゼンチンの習慣との融合過程の研究である。

特に、後者は最近取り上げられているテーマで、つまり、一世から二・三世への「日本文化」の継承である。その過程をみると、移住者の記憶は大事で、その内容すべてを伝えられている訳はない。敢えて伝えないことや黙していることも検討しなければならない。さらに日系二・三世の観点からみた家族の歴史を振り返ってみて自分にあうものを自己選択して受け継がれてきた日本人としての文化・習慣、具体的に日本語の勉強や習慣を身につけるとき浮かび上がってくるものである。それは家族だけに限らず、日系社会の文化遺産になる。今回の目的は、次世代に伝えていく「日本文化」について考察することにある。

韓国映画に見られる日本語由来の語について

A Study on the Expressions of Japanese Origin in Korean Films

朴 昭炫（パク ソヒョン、韓国外国語大学校）

【キーワード】韓国映画、日本式発音の借用語、漢字表記の借用語、混種借用語、意思疎通
Korean Films, Loan Words in Japanese, communication

本発表では 1 千万観客を動員した韓国映画 9 編に現れる日本語由来の表現を『日本語式用語醇化資料集』（パクヨンチャン、2005）に収録された 1171 語を対象に、韓国での使用様相と日本語の本来意味用法とを比較考察したものである。

調査結果は大きく三点に分けられる。第一、韓国映画 9 編に現れる日本語由来の語は合計 64 語である。そのうち日本式発音の借用語は 25 語であるが、これらは日本語本来の意味から脱皮し新しい意味を持つものが多い。特に韓国語に言い替え表現があるにもかかわらず、特定人が用いるぞんざいな言葉として使われる傾向が強く見られた。第二、漢字表記の借用語は 38 語である。これらは漢字を媒介としているため公的な感じが強く活用しやすいこともあって、名詞句の多い代替（醇化）語に比べて使用率が高い。したがって、既に定着した漢字表記の借用語を日本語由来という理由だけで言い替えの対象とするのは妥当でなく、実際生活の中で使用度と理解度の低い漢字語を整備する必要があると考えられる。これはより円滑的な意思疎通を行うためであり、醇化が目的ではない。第三、本考察での日本語由来の混種借用語は 1 語のみが現れたが、混種語に相当するものを全部考慮すると、そのほとんどは定着した一部の語彙を除き死滅していくものと推察される。

内モンゴルの民族学校義務教育カリキュラム内容の改定に関する一考察

A study on Curriculum Revision in Ethnographic Obligatory Education in Inner Mongolia

白 双竜（ハク ソウリュウ、東京外国語大学）

【キーワード】カリキュラム改訂、教育方法、能動的な学習、主体性、生きる力

本研究では、内モンゴルの民族学校教育義務教育カリキュラム内容の改訂または教育方法に関して比較教育の視点から調査し、または分析していく。

モンゴル民族学校の義務教育段階における、児童･生徒の「受動的な学習」から「能動的な学習」意欲や能力の育成を目指したカリキュラム「総合実践活動課程」と日本の「総合的な学習の時間」を比較教育の視点から調査の上分析していく。つまり、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、いわゆる「生きる力」の育成を目指しカリキュラム内容の改訂に関する比較調査と分析を行うことを試みる。

Ⅳ「文学」2019 年 7 月 25 日

黄 佳燕（ファン ジィア イェン、台湾大学）

勅撰三集における「桃」の詩―「桃蹊」と「成蹊」をめぐって―

李 佳（リ カ、北京大学）

社会派推理小説が日本で生まれた原因

張 作宇（チョウ サクウ、東京外国語大学）

《呼蘭河伝》における「子ども」という視点を持つ語り手の

三つのアイデンティティ

周 希瑜（シュウ キユ、千葉大学）

日本占領下における南京の都市空間―雑誌『黄鳥』を視座にして

吉良 佳奈江（キラ カナエ、東京外国語大学）

他者を呼ぶ名前

勅撰三集における「桃」の詩
―「桃蹊」と「成蹊」をめぐって ―
The three imperial commanded Chinese poems in Japan
― Poems relative to peach ―

黄 佳燕（ファン ジィア イェン、台湾大学）

【キーワード】漢詩、桃、桃蹊、成蹊、徳
Chinese poem, peach, toukei, ceikei, virtue

日本の「桃」は中国から伝来されてきた植物として認識されており、古典文学作品における「桃」を用いる比喩や象徴の手法も中国の影響を受けている。

中国文学作品に屡々見られる桃に関する表現の源流として、まず想起されるのは『詩経』「桃夭」に、嫁に行く若い女性の美しさと生命力を「桃」の果実と茂る葉で例えている。

次に『漢武帝内伝』に、漢の武帝が西王母に蟠桃を貰い、不老長寿の能力を得た神話的な記述より、桃の神性が構築された。また陶淵明の「桃花源詩併記」における桃源を塵外の理想の地とされる描写のように、桃源は世俗離れの理想地としての譬えも定着した。この三つの先行表現に基づき、平安詩壇における「桃」は美しい女性の比喩や、不老長寿に関わる神仙の桃、塵外の理想地の描写に用いられ、認識されてきた。

本報告では、勅撰三集の桃に関する漢詩を検討し、「桃蹊」「成蹊」という詩語を手掛かりに、嵯峨朝の漢詩に用いられる桃の形象を分析し、中国詩との関連を検討する。全詩の内容を通して表す感情を含め、従来の日本詩歌における「桃」の形象に対する認識との比較を行い、日本古典文学における「桃」の姿をさらに究明したい。

社会派推理小説が日本で生まれた原因

The reason why mystery novel of social sect born in Japan

李 佳（リ カ、北京大学）

【キーワード】推理小説、社会派、松本清張、戦後社会、国民性
Mystery novel, Social sect, Matsumoto Seichou, Postwar society, National character

社会派推理小説が日本で生まれた原因について、社会的要因と人的・文化的要因という二つの側面がある。社会的要因から見れば、まず日本第二次世界大戦前に探偵小説の流行がその基盤である。そして日本戦後社会の混乱、デカダンス、「羅生門」のような社会現状に対して、人々が関心を寄せていた。戦後の日本社会は社会派推理小説が生まれる土壌といえるだろう。また、松本清張の個人的体験と時代による傷跡は彼の社会派推理小説創作の原動力となった。最後に日本全体からみると、言葉遊びの歴史と伝統は日本人の思考方式に大きな影響をもたらし、今もなおテレビでクイズ番組などしばしば目にしているものである。外国でも稀なことである。そこには一種の歴史的必然性が潜んでいると思う。日本人の悲劇に対する繊細な感動や痛みという日本の美的愛好は推理小説が日本で流行る要因の一つであると考える。

《呼蘭河伝》における「子ども」という視点を持つ語り手の三つのアイデンティティ

Three identities of the narrator from the perspective of “child” in *The Tale of Hulan River*

張 作宇（チョウ サクウ、東京外国語大学）

私は中国の女性作家、蕭紅による長篇小説《呼蘭河伝》に独特な、「子ども」という視点で描かれる場面を読み解くことによって、物語に含まれる作者或いは語り手の思想を明らかにする修士論文を準備中である。子どもの視点を通して語っているため、語り手は「子ども」として比定されている。言語の形式・内容・模倣行為という三つの側面で小説を分析すると、語り手が三つのアイデンティティを持っていることが分かる。1）純粋な子どもとしての語り手、2）大人の作家としての語り手、3）その二つのアイデンティティの間で子どものふりをし、子どもの様子で大人の思想を語る語り手、である。本報告ではこの問題について具体例を挙げて報告する。もって、語り手の異なるアイデンティティから語られた異なる多様な声を検討し、この作品が持つ豊かな記憶の世界に迫るスタートとしたい。

日本占領下における南京の都市空間 ― 雑誌『黄鳥』を視座にして

Rediscovering the space of Nanking on the Japanese occupation period ― A View from the Magazine *Yellow Bird*

周 希瑜（シュウ キユ、千葉大学）

【キーワード】占領下、南京、都市空間、在支邦人、文化
Occupied Nanking, Urban space, Japanese people in China, Culture

雑誌『黄鳥』は 1942 年 11 月から 1944 年 4 月にかけて、中国の南京で発行された現地の日本語雑誌（全五号）である。1940 年 3 月 30 日日本軍占領下の南京に汪兆銘政権は成立した。同年日本占領地域の文化団体の統合、文化人の動員または日本との「文化提携」の達成という政治的企図を実現するために、7 月 28 日中日文化協会は発会を宣言し、南京を総会とし、上海や武漢、広州など華中、華南各地に分・支会を設置した。このような状況の中で雑誌『黄鳥』は 1942 年に創刊され、自ら「文化研究雑誌」と標榜した。本研究は、雑誌『黄鳥』の刊行の形態や誌面内容などを考察することによって、ローカリティに根差して、当時「外地」に滞在する日本人作家や文化人は、「内地」をどのように意識しながら、現地の文化や歴史を記憶し、発信したかを明らかにする。また、戦時下の南京という複層的な都市空間を読み解くことも目的とする。

他者を呼ぶ名前

The names how we call the others

吉良 佳奈江（キラ カナエ、東京外国語大学）

【キーワード】「多文化小説」、移住者、名前、社会的弱者、植民地主義
"Multicultural novel", migrant, name, disadvantaged people, colonialism

韓国に流入した移住者たちを主題として描く「多文化小説」は、新しい社会的弱者に対する韓国社会の植民地主義的態度を告発するものである。植民地主義的態度とは、支配する相手を自分たちとは違う他者として定義し、同等の人間と見なさないところから始まる。

本発表では、植民地時代の日本人と朝鮮人の関係と比較しながら、「多文化小説」において韓国人がどのように他者を呼んでいるか、その名前に注目して作品を分析、検討する。

他者を無名化する段階として、名前の変形、動物化の様相を検討し、これと合わせて名前を返す作品についても触れる。

V「社会、歴史」2019 年 7 月 25 日

エンフバヤル ソロンゴ（東京外国語大学）

日本における持続可能な開発のための教育（ESD）

内川 隆文（ウチカワ タカフミ、東京外国語大学）

1930 年代日本・東北における逓信省・配電設備助成政策の研究

趙 沼振（チョ ソジン、東京外国語大学）

日大全共闘を再記録する―「日大 930 の会」の活動を中心に

劉 映伶（リュウ エイレイ、東海大学）

日本の声優と台湾の「配音員」の比較研究

ラファエル ドス サントス ミゲレス ペレス（ユストゥス・リービッヒ大学）

国連安全保障理事会の改革に向けて：G4 の議論パターンの言語学的談話分析

小美濃 彰（オミノ アキラ、東京外国語大学）

1960 年代の東京・山谷における保育運動

日本における持続可能な開発のための教育（ESD）

Education for Sustainable Development in Japan

エンフバヤル ソロンゴ（東京外国語大学）

【キーワード】持続可能な開発のための教育、サステイナビリティ、ユネスコスクール、
総合的な学習時間、SDGs
Education for Sustainable Development, Sustainability, Unesco School,
Integrated Studies, SDGs

持続可能な開発のための教育（以下、ESD）は国の開発に資するための教育であり、環境・経済・社会のあらゆる問題を含めている。日本における ESD の特徴として、総合的な学習時間やユネスコスクールがあげられる。現在、日本全国では 1100 校超える加盟校が活動をしており、世界ではこの数は 1 万校を超えている。そのため、1 カ国あたりの加盟校数として、世界最大だというふうに言われている。その他にも、日本はあらゆる分野で ESD や SDGs の積極的な活動を進めている。

1930 年代日本・東北における逓信省・配電設備助成政策の研究

Studies of Ministry of Communications's promoting distribution line policy in 1930s era of JapanTohoku region

内川 隆文（ウチカワ タカフミ、東京外国語大学）

【キーワード】農村電化(Rural Electrification)、逓信省(Ministry of Communications)、東北振興策(The Development Plan of Tohoku region)

1920 年代日本において発電量および供給量は激増し、東京・大阪・名古屋といった諸都市では日露戦争と関東大震災を経て照明および動力の電化が急速に発展した。一方、農村では依然として石油ランプや石油発動機が主流であった。電力業に携わる技術者や経営者を中心に 1923 年に設立された農事電化協会は農村における照明や動力の電化を推進・提唱するものの、その殆どは現実の要請に基づかない技術的ユートピアの発露に過ぎなかった。ところが 1930 年代に入ると経済更正運動や東北振興策に組み込まれることで論としての農村電化は具体的な政策へと発展する。特に逓信省が 1935 年以降実施した配電設備助成政策はその画期となった。本報告ではこれまで注目されることのなかった同省の政策の具体的実体と、それが東北農村に対しどのような影響をもたらしたかを明らかにする。

日大全共闘を再記録する ―「日大 930 の会」の活動を中心に

The Study of Nichidaizenkyoutou in Rewriting Activities of <The Group of Nichidai 930>

趙 沼振（チョ ソジン、東京外国語大学）

【キーワード】日大全共闘、「日大 930 の会」、記録活動、記憶、1968 年

1968 年、日大生は、大学当局の不正事件（使途不明金の問題）をきっかけに、マスプロ教育の制度に反発し、日大全共闘を結成した。かれらの場合はそもそも運動経験に疎く、党派の政治性から離れて、「個人」を重要視する、それまでにない自己表現の形となることができたのである。

半世紀が経った現在にも、あいかわらず日大全共闘は「日大 930 の会」という名の下、個々人の思考を共有しながら深める空間を築いていた。また、日大全共闘への記憶を文章化するため、『日大闘争の記録―忘れざる日々』の記録本シリーズを刊行してきた。日大闘争という出来事は、ある者にはノスタルジーであり、他の者にはトラウマであるかもしれない「個人」の記憶そのものであるため、あえて書き残さない選択肢を選んできた場合もあるのだろう。ところが、「日大 930 の会」は、当事者の仲間たちを、日大闘争にたいする膨大な量のメモリーの檻から解放させるために、「個人」の記憶を聞かせてくれるよう呼びかけ続けているのである。

これをもって、本発表では「日大 930 の会」の記録本を第一次資料として扱いながら、それを基づいた「日大 930 の会」のメンバーへのインタビュー調査内容を用いて、日大全共闘がどのように再記録されるのかについて考察する。

日本の声優と台湾の「配音員」の比較研究

A Comparative Study of Japanese Seiyu and Taiwan voice actors

劉 映伶（リュウ エイレイ、東海大学）

【キーワード】声優、配音員、アニメ、吹き替え、アイドル声優
Seiyu, Voice actor, Animation, Dub, Idol seiyu.

「声優」とはアニメのキャラクターや映画の吹き替えなどに声だけで出演する俳優を指す。日本の声優と似た仕事をしている職人のことを、台湾では「配音員」と呼んでいる。日本の声優は出演作品にその名が載せられ、代表作ができると広く認知されることになる。ところが、台湾は一部のベテランはともかく、ほとんどの「配音員」はその名を知られることなく、その存在は重視されていないのである。同じく声の演出をし、作品の吹き替えを行っているのに、声優と「配音員」の社会的地位はなぜこうまで違うのか。

また 90 年代から、日本では「アイドル声優」が現れ、それまでしてこなかった音楽活動やイベントに出るようになったが、台湾の「配音員」はそのように「アイドル化」する現象が見られないのはなぜか。

本発表はこうした違いについて考察し、台湾の「配音員」の実態を報告すると共に、声優と「配音員」の置かれた環境、そして社会的認識の差などを比較したい。

国連安全保障理事会の改革に向けて：
G4 の議論パターンの言語学的談話分析

Reforming the United Nations Security Council:
a linguistic Discourse Analysis of G4's argumentation patterns

ラファエル ドス サントス ミゲレス ペレス（ユストゥス・リービッヒ大学）

G4 は、国連安全保障理事会の改革を目的として、ブラジル、ドイツ、日本、インドによって結成されたグループである。安保理は第二次世界大戦の終わり以来変わらずにいるという議論で、G4 の 4 ヵ国は現在の時代に対応して、安保理の常任理事国になれるということを提唱している。本研究では G4 の言語的および文化的な違いを考慮し、異文化間理論に基づき、ポルトガル語、ドイツ語、日本語の議論のパターンを調査することを目的とする。提案された安保理の改革に関する、ブラジル、ドイツ、日本政府の公式サイトにあるテキストと画像を分析する。そのために、マルチモーダル言語学的談話分析に提案される方法を主に用いる。本研究の結果が今まで示しているのは、各言語には各々の議論の方法があるということである。なお、英語はインドの公用語であるが、過半数のインド人の母語ではないため、インドが研究のコーパスの一部ではないことを強調しておかなければならない。

1960 年代の東京・山谷における保育運動

Child Care Movement in Tokyo's Sanya Day Labor District in1960s

小美濃 彰（オミノ アキラ、東京外国語大学）

【キーワード】山谷、寄せ場、ドヤ街、保育運動、再生産領域
Sanya, *yoseba* (a day labor market), *doyagai* (a quarter with many lodging houses), child care movement, reproductive sphere

本報告では、東京・山谷地域で 1960 年代に取り組まれていた保育運動に光をあてる。「日本三大寄せ場」のひとつに数えられてきた山谷では、1963 年に東京都が打ち出した「山谷対策」の実施を経て、家族世帯が大幅に減少した。山谷の簡易宿泊所に住む家族世帯に都営住宅の割り当てが優先的におこなわれたのである。たしかに、山谷では“ドヤ”（簡易宿泊所）で生活している“ドヤッ子”の存在や、その未就学・長欠状態などが問題視されていた。しかし、山谷の外へ家族世帯を移住させるという東京都の方策は、子育てを含む生活を可能にしていた地域社会内部の固有な諸関係を軽視し、寄せ場という具体的な条件のなかで積み重ねられた保育運動を押し流してしまうものであった。これはまた、寄せ場としての山谷の拡大と日本経済の成長が並走した時期に進行したものであり、山谷を改めて位置づけ直そうとする権力と、地域における生活者との相克的な関係まで考察を深めたい。

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語·日本学研究』第 10 号執筆者一覧

小美濃彰	東京外国語大学大学院博士後期課程
鈴木智美	東京外国語大学
清水由貴子	聖心女子大学
中村彰	東京外国語大学
渋谷博子	クリエイティブ日本語学校
張季媛	東京外国語大学大学院博士後期課程
内川隆文	東京外国語大学大学院博士後期課程
解放	東京外国語大学大学院博士後期課程
Yl Yeong-il	東京大学・日本学術振興会特別研究員
船戸雅也	東京外国語大学大学院博士後期課程
望月圭子	東京外国語大学
申亜敏	東京外国語大学国際日本研究センター特任研究員
小柳昇	東京外国語大学国際日本研究センター特任研究員
Iris Haukamp	東京外国語大学
友常勉	東京外国語大学

『日本語·日本学研究』国際編集顧問一覧（順不同）

孫建軍	北京大学	郭連友	北京外国語大学
蕭幸君	東海大学（台湾）	尹鎬淑	サイバー韓国外国語大学校
李吉鎔	中央大学校（韓国）	徐翔生	国立政治大学
金鍾德	韓国外国語大学校	朱秋而	国立台湾大学
リム・ベンチュー	シンガポール国立大学	タサニー・メーターピスィット	タマサート大学

編集後記

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第 10 号をお届けします。今後への投稿論文の総数は 14 本、そのうち 7 本が採択されました（歴史 3、日本語教育 2、言語研究 1、文学 1）。また、本センター主催の夏季セミナー「言語・文学・社会」（2019 年 7 月 24 日-26 日）に併せて開催された、サマースクールの発表者である学内外の大学院生の発表要旨も掲載されています。本号刊行にご協力いただいたすべての皆様に心から感謝申し上げます。（友常）

東京外国語大学国際日本研究センター
日本語·日本学研究 vol.10
Journal for Japanese Studies

発行：2020 年 3 月 31 日
編集者・発行者　東京外国語大学国際日本研究センター
代表者　友常勉
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F
Tel/Fax: 042-330-5794

Journal for Japanese Studies Vol.10 (2020)

Peer-Reviewed Articles

[Article]
Childcare Projects as a Means for Forging Communal Bonds:
A Study of Kaji Mariko's Childcare ativities in Sanya
Akira OMINO

[Research Note]
What Kinds of Learning Tools Japanese Language Learners in the Overseas Universities Are Using:
To Improve Teachers' Instructional Design Literacy in Highly Developed ICT Environments
Tomomi SUZUKI Yukiko SHIMIZU Akira NAKAMURA Hiroko SHIBUYA

[Peer-Reviewed Articles of Graduate Students]
Grammatical Characteristics and Meanings of "~te." Suspended Clauses:
Correspondence with -te Subordinate Clauses
Jiyuan ZHANG

A Study of Promoting Policy of Ministry of Communication on Distribution Line in Tohoku Region in 1930' s Japan
Takafumi UCHIKAWA

The Memory and Manchuria in Abe Kōbō's novel Inter Ice Age 4
Fang XIE

[Peer-Reviewed Research Note of Graduate Students]
Development of the "Compound Verb Construction Database"
Yeong-il YI

The thought of Ishida Baigan and the studies about "Xin" of Soong and Ming era in China
Masaya FUNATO

Articles

Acquisition of Tense and Aspect in Cross-Referential Learners' Corpora of English, Chinese and Japanese
Keiko MOCHIZUKI
YaMing SHEN
Noboru OYANAGI

The Group of the Roaring Waterfall:
Researching the Narutaki gumi filmmaking collaborations(1934-1937)
Iris Haukamp

Yoseba, East Asia, and Oppressed shutai (subject):
Examining Texts of Kyoichi Yamaoka on the Eve of Establishing The National Council of Workers' Unions of Japan
Tsutomu TOMOTSUNE

Abstracts of the Graduate Students' Session in Summer Seminar 2019

Contributors
International Editorial Committee Members
Postscript

International Center for Japanese Studies
Tokyo University of Foreign Studies